
理想のヒモ生活

ワタナベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想のヒモ生活

【Nコード】

N3406U

【作者名】

ワタナベ

【あらすじ】

月平均残業時間150時間オーバーの半ブラック企業に勤める山井善治郎は、気がつくとき異世界に召喚されていた。善治郎を召喚したのは、善治郎の好みストライクど真ん中な、褐色の爆乳美女。「ようこそ、媚殿」と、いきなり結婚を申し込む、異世界の女王様に善治郎の出した結論は……。

プロローグ1【半年ぶりの二連休は異世界で】

「ようこそ、婿殿。まずは断りもなく貴方をこの世界、我が宮殿に招いた無礼を謝罪したい。どうか許されよ」

赤い髪と小麦色の肌を持つ迫力のある美女が、こちらに向かってそう艶然と笑いかける。

「……………は？」

美女に微笑みかけられた男——山井善治郎やまいぜんじろうは、全く状況がわからないまま、間の抜けた声を上げた。

いったい何がどうなっているのだ？

善治郎の記憶が確かならば、今日は半年ぶりの休日出勤がない土曜日のはずである。

社会人になってから滅多に味わっていない二連休を満喫するため、わざわざ平日と同じ時間に目を醒ました善治郎は、朝食を取るため近くのコンビニまで自転車を飛ばした。そこまでは、しっかりと記憶がある。

事実、今も善治郎の尻は自転車のサドルの上に乗っているし、善治郎の両手は自転車のハンドルをしっかりと握っている。

前のカゴには、コンビニで暖めて貰った『鳥唐揚げ弁当』と、500?のお茶のペットボトルが収まっている。

「……………」

善治郎は、自分の正気を確かめるべく、自転車に跨ったまま、右

手でカゴの中の弁当とお茶を触ってみた。

弁当は暖かく、お茶は冷たい。このリアルな感触は、どうも夢ではなさそうな気がする。ついでに言えば、弁当は冷めておらず、お茶もぬるくなっていない。知らないうちに気を失わされて、どこか遠くに運び込まれたというわけでもなさそうだ。

だがそうだとすると、なぜ、ついさっきまで日本の関東圏で、自転車漕いでいたはずの自分が、このような薄暗い石作りの密室で、ど迫力の美女に微笑みかけられなければならないのだろうか？

善治郎は思わずマジマジと、目の前に立つ美女を凝視する。

年の頃は二十代の中盤くらいだろうか？ 二十代中盤にしては、異常なくらいの迫力と落ち着きを醸し出しているので、もしかするともう少し上かも知れない。少なくとも二十四歳の善治郎より年下ということにはなさそうだ。

胸元がV字に開いた扇情的な赤いドレスを身に纏っているが、そのスタイルは決してその派手なドレスに負けていない。

V字から覗かせる胸の谷間は、巨乳を通り越して爆乳と呼ぶに相応しい大きさを誇っており、それとは反比例するようにウエストは細い。腰から下のラインはロングスカートに覆われているため分からないが、この分ならば十分に期待が持てそうだ。

肩幅が広く、若干いかり肩のその体型は、好みによっては否という男もいるだろうが、少なくとも善治郎には、十分に女らしく魅力的に見える。

実際、現状が夢であるという確信さえもてれば「生まれたときから愛してました！」と、飛びつきたくなくなるくらい、善治郎のストライクゾーンど真ん中の美女である。

「陛下、あまり時間がありません。『召喚』に成功した以上、早めに説明を始めた方がよろしいかと」

善治郎が赤髪の美女に目を奪われていると、美女の右隣に立つ革鎧を着た若い男が、抑揚のない声で、美女にそう進言した。

その発言で、善治郎は初めて、この石作りの密室に、自分と美女以外の人間がいることに気づいた。

慌てて善治郎が周囲を見渡すと、今発言をした男と同じ、革鎧を着て槍を持った男が合計四名、自転車に乗る善治郎を取り囲むようにして前後左右を固めているのが見える。

さらに、美女の左隣には、紫色のローブを纏った年老いた男が、長い杖を突いて立っている。

これだけ周りに人間がいて、今の今までその存在に気づかなかったのは、善治郎がとりわけ鈍いというわけではない。

それだけ、正面に立つ赤髪の美女の存在感が大きいのだ。よく見れば、周囲を固める武装した男達は中々の体格をしているし、顔立ちもそれなりに整っているのだが、美女と並べばどうひいき目に見ても、『女王様とオマケ一同』にしか見えない。

「分かっている。さて、媚殿。恐らく媚殿は、何故今自分がこの様なところにいるのか、何も分かっておらぬであろう？ 一連の状況について、私に説明と弁明をさせてもらえぬだろうか？」

「え？ あ、は、はい」

善治郎は、言葉の意味を理解したというより、美女の迫力ある笑みに押されるようにして首を縦に振った。

善治郎の素直な答えに、美女は笑みを深める。

「よかった。では、媚殿。このような薄暗い場所で長話も何であろう。場所を変えたいので、ついてきて戴きたい」

美女はそう言うと、大きく波打った赤い髪を翻し、歩き出す。

「その乗り物はこちらでお預かりします」

「あ、う、うん。お願いします」

何かなにやら分からぬまま、自転車を降りた善治郎は、半ば無意識のうちに、自転車のスタンドをたて、ズボンのポケットから取り出した鍵を掛けると、入り口でこちらを振り返る美女の背中を、早足で追いかけていった。

プロローグ2『いきなり、結婚の申し込み』

壁も床も石作りの長い廊下を通り、善治郎が案内されたのは、明るい日差しの差し込む、広い部屋だった。大きな革張りのソファが二つ、長い石作りのテーブルをはさむ形で、向かい合わせに設置されている。

善治郎は美女に勧められるまま、そのソファに腰を下ろす。

善治郎が座ったのを確認した後、善治郎の正面に座った美女はおもむろに口を開く。

「まずは自己紹介から入ろうか。私は、アウラ・カープアという。貴方にはアウラと呼んでもらいたい」

「あ、はい、アウラさんですか。俺、いや、私は、山井・善治郎といます。山井が名字で、善治郎が名前です」

「ふむ。では、ゼンジロウ殿と呼びしてもよろしいか？」

「はい」

首肯する善治郎を見て、美女――アウラは、嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう、ゼンジロウ殿。では、これから私が、ゼンジロウ殿になにをやったのか。一連の行いを簡単にご説明させていただきます。おそらく、ゼンジロウ殿にとっては腹に据えかねる暴挙に聞こえるであろうが、現状は決して取り返しの付かない状況ではない。

ゼンジロウ殿の意にそぐわぬというのであれば、全てを元通りに戻すこと、これだけは私の名誉にかけてお約束する。だから、まずは、黙って私の話に耳を貸してもらえぬだろうか？」

打って変わって真剣な面持ちで、随分と物騒な前置きをするアウラに、少し嫌な予感を覚えた善治郎であったが、少し考えた後、結局は首を縦に振った。

どのみち、善治郎は今自分がどのような状況に置かれているのかも全く理解できていないのだ。アウラの言うとおり、怒りをあらわにするにもまずは、状況を理解しないことには、怒りのぶつけようもない。

取引先にクレームをつけるのは、まず相手側の言い分を全て聞いた後だ。

「分かりました。では、お話を聞かせてください」

善治郎に答えに、ホッと安堵の息をついたアウラは、一度大きく息を吸うと、話し始める。

「まずは、最初にここがどこであるかから、説明させていただく。ここは、ランドリオン大陸西方に位置する、カープア王国。その王都カープアの中心に存在する王宮の一室だ。恐らくこれらの名は、ゼンジロウ殿にとって全く聞き覚えのないものであろう。

それも当然。ここは、ゼンジロウ殿が生まれ育った世界とは、界を別とする世界。言うならば『異世界』なのだ」

「い、いせ、かい……?」

まだ状況が理解できず、首を傾げる善治郎を尻目に、アウラはとうとうと説明を続けた。

アウラによる説明は、長時間に亘って続けられた。正確なところはよく分からないが、途中で一度善治郎が腕時計の時刻を見た時には、七時三十分過ぎを示していたのに、全ての話が終わった今、時計の針は八時を回っている。

最低で三十分、おそらくは一時間に渡るアウラの説明をどうにか頭の中で纏めた善治郎は、呆然とした口調で言う。

「ええと、つまり、ここは異世界にあるカープア王国という国で、アウラ様はそのカープア王国の女王陛下なのですね？　そして、この世界には魔法が存在し、その中でもカープア王家の者にしか使えない『時空魔法』で、陛下は私を元の世界からこの世界へと召喚した、と」

「うむ、その認識で間違いない。やっと理解していただけたようだ。ああ、後、様はいらぬ。私の事はアウラ、と呼び捨てでよい。

確かに私はこの国の女王という立場にあるが、ゼンジロウ殿は我が国の臣民ではない。むしろ、私は貴方を断りもなくこの世界に引き込んだ、ただの加害者だ。ゼンジロウ殿が私に礼を尽くさねばならない理由はどこにもない」

アウラはそう言って、すまなそうに小さく頭を下げた。

「は、はあ。分かりました。アウラ……さん」

善治郎は、頭を下げた拍子に奥を覗かせるアウラの胸元から、露骨に目を逸らす。

たったこれだけの説明に、小一時間もかかったのは、善治郎が中々アウラの言葉を理解しようとしなかったからだ。まあ、無理もあ

るまい。『異世界に召喚される』などという珍事を、現代を生きる一般的な日本人が、現実のこととして受け止められるはずもない。なかなかここが異世界であると信じようとしないう善治郎に、アウラはかんしゃくを起こすこともなく、粘り強く説明を続けた。その結果、やっと善治郎は自分が今異世界にいるという事実を認めるに至ったのである。

決め手となったのは、アウラの命を受けて窓の外へやってきた、『騎士』が駆る『走竜』だった。

その馬を二回りほど大きくしたくらいの馬鹿でかいトカゲが、中庭からニユルリと長い首を窓に差し込み、善治郎の頬を舐めたのだ。その生暖かいリアルな触感が、善治郎にこれが夢である可能性も、大がかりなイタズラである可能性も消し去らせた。

善治郎は、まだ『走竜』の草臭い唾液で湿っている頬を、Tシャツの袖で拭いながら疑問を口にする。

「分からないのは、何で私なんかを召喚したのか、ということなのですが」

善治郎はこれといった特技もない、ごく一般的な日本人男性である。少なくとも、わざわざ異世界の女王様が魔法を駆使して招くほどの価値が自分にあるとは思えない。

「私に何をやれと言うのでしょうか？ 傲慢ではないですが、私は剣も振るえなければ魔法も使えないのですが」

そう言う善治郎の言葉に、アウラはにっこりと笑い、首を横に振る。

「いや、ゼンジロウ殿にそのような危険なまねをして戴くつもりは毛頭無い。確かに、ここランドリオン大陸西部は、長らく戦乱の世

が続いていたが、今は比較的落ち着いている。

私が、ゼンジロウ殿にお願いしたいことは、ただ一つ。ゼンジロウ殿に私の婿になって戴きたいのだ」

「むこ？」

とっさに、アウラの言った意味理解できなかった善治郎は、首を傾げてオウム返しに言葉を返す。

「そう、婿だ。夫と言っても良い。私と結婚して戴きたいということだ」

婿、夫、結婚。ここまで言われれば、頭のろくに働いていない今の善治郎にも理解できる。

「うええええ！？ け、け、け、結婚って、なんで！？」

アウラの申し出を理解した善治郎は、ソファアーの上で跳び上がった。

プロローグ3【発覚した事実、俺は異世界人？】

善治郎のその反応をある程度予測していたのか、アウラは小さく笑うと、落ち着いた声で説明を続ける。

「話せば長くなるが、まずは聞いて戴きたい。先ほども言ったとおり、我が国は長らく戦乱の世を生き抜いてきた。幸いにして、どうにか我が国はその戦乱における勝者の一人となることができたのだが、代償は大きかった。

国民は減少し、国土は荒れ、直系の王族は私を除き、皆死に絶えたのだ。

幸い国土と国民は、その後の国を挙げた努力によってどうにか回復の目処が立ったのだが、問題は王家だ。王族が私一人では、いつ血が絶えてもおかしくはない。

私の結婚は絶対的な義務と言える。

しかし、我が『カープア』王家は、『時空魔法』という特殊魔法をその血に宿す血筋。結婚相手は誰でも良いわけではない。魔法を次代に残すため、同じカープア王家の血を引く者が伴侶であることが望ましい」

「はあ、なるほど……」

善治郎は、今一理解していないまま、反射的に相づちを打った。

王家の血筋を純血に保つため、可能な限り近い血筋から伴侶を取るという風習は、地球でも昔はよく聞かれた話である。

まして、この世界には血筋によって継承される『特殊魔法』という、目に見える恩恵があるのだ。純血が尊ばれるのも、当然の話である。

「でも、だったら尚更、なぜ私なんでしょう？ 私は、魔法の魔の字も知らない地球人ですが」

善治郎のその疑問に、アウラは意味ありげに笑い、答える。

「その理由は至極簡単。ゼンジロウ殿が、我が『カープア』王家の血を色濃く受け継いでいるからだよ」

「……はあ？ いやいや、なんですか、それ！？ ないない、絶対無いですよ！」

突拍子もないアウラの答えに、驚いた善治郎が顔の前でしきりに手を振るが、アウラはそれに取り合うことなく話を続ける。

「ことは、私の五代前、約百五十年前まで遡る。王家の文献からも抹消されている話なので、はっきりとは分からないが、当時の第一王子が本来結ばれるはずのない女と恋に陥ったのだそうだ。

相手の女は、ただの平民だったとも、敵国の王族だったとも聞く。とにかく、次期国王として絶対に結ばれることが許されない人間を愛してしまったその王子は、両親である王や王妃の説得にも耳をかさなかった。

そして、『この世界』では結ばれることを許されない恋人同士が出した結論が、二人で『異世界』へ行き、そこで結ばれるという、なんともロマンチックなモノだったのだそうだ」

ここまで言われれば、善治郎にもアウラの言いたいことが理解できる。

「まさか……その子孫が私だと言いたいのですか？」

「その通り」

呆然と問い返す善治郎に、アウラは笑みを崩さずに首肯する。

「私は無造作に今回の召喚魔法を使ったわけではない。一定より濃く、カープア王家の血を引く男を召喚するように、設定した。その結果、現れたのはゼンジロウ殿、貴方だ。

よって、ゼンジロウ殿がその二人の子孫であることはまず間違いない
あるまい」

「そんなまさか。いや、もしそれが本当だとしても、五代前ですよ！？ 五代前って事は、私のええと……ひいひいひいじいさんとかでしょ？ 私が引いている血なんて、ほんの僅かなのでは？」

「ああ、正直私もそれは覚悟していた。しかし、意外な事に、ゼンジロウ殿はかなり色濃く王家の血を引いている。直系とまでは行かないものの、分家筆頭クラスだ」

「わ、わかるのですか？」

真面目な顔で断言するアウラに、善治郎はたじろぐように座り位置を後ろにずらしながら、尋ねる。

「分かる。『王家』の血を引いているかどうかは分からないが、訓練した魔術師ならば、人が潜在的に内包している魔力量は視認できる。ゼンジロウ殿の魔力量は明らかに、準王家クラスだ。

私の召喚魔法に反応したということは、ゼンジロウ殿が『カープア王家』の血筋であることは間違いなく、その魔力量から判断するに血の濃さも相当なモノであると推測される。こう言うのを嬉しい誤算、と言うのだろうか。

まるで、そちらの世界に渡った人間が、意図的に近親婚を繰り返して血筋を保っていたかのようだ」

アウラのその言葉に、善治郎はふとある事実に思いたる。

「あ、そうか！　そう考えれば、つじつまは合う、のか？」

「ゼンジロウ殿？　なにか、思い当たることがあるのだろうか？」

小首を傾げて問いかけるアウラに、善治郎は少し考えながら答える。

「あ。はい。実は私の実家は、かなり歴史のある閉鎖的な農村なんです。昔から、外からの嫁入り、婿入りは一世代に一人か二人といった具合の」

そんな閉鎖的で代わり映えのしない田舎に嫌気がさした善治郎は、関東圏の大学に進学し、そのまま就職を決めて、都会での生活をスタートさせたのだ。

言われてみれば、少し前に死んだ両親をはじめ、あの村の人間には、日本人にしてはやけに肌の色が濃く、髪の色が赤みがかっている人間が多かった気がする。

善治郎の言葉に、アウラは口元に手を当て、得心がいった言わんばかりに頷く。

「なるほど、その村の閉鎖性が結果として、異世界に流れた王家の血の拡散を押しとどめたと言うことか」

「はい、そう考えれば、つじつまは合いますね」

（マジ？ 実は俺、純粋な日本人じゃなくて、大半は異世界人？
聞いたことねえぞ、そんな話！？）

そう、つじつまはあう。あってしまう。善治郎は表面上は引きつ
った笑みを浮かべながら、内心では頭を抱えなくなるくらいのパニ
ックに襲われていた。

プロローグ4【あまりにうますぎる話】

思わぬご先祖様の秘密を知り、顔を引きつらせる善治郎に、アウラはニコニコとさも嬉しそうに笑いながら、詰め寄る。

「やはり、ゼンジロウ殿こそ、私の求める伴侶ということであるな。どうだろうか、ゼンジロウ殿。急な話で混乱しているだろうが、私と婚姻を結び、この世界で生きるという選択肢を、真剣に考えてはもらえないだろうか？」

一転、真面目な表情でそう切り出してくるアウラに、善治郎は少し冷静になった頭で考える。

目の前の美女と結婚をする。それ自体は、決して悪い話ではない。先にも行ったとおり、アウラの外見は、善治郎のストライクゾーンど真ん中だし、こうして話をしている感じでは、その人間性も悪くなさそうだ。

もっとも、女王などという腹芸を求められる職をこなしているのだから、これまでの態度だけでその人間性を推し量るのは危険だが、だが、それ以上に問題なのは、これはアウラの嫁入りではなく、善治郎の婿入りの要請であるということだ。

この提案に首を縦に振った瞬間、善治郎は地球とおさらばすることになる。いかに目の前の美女が好みのタイプだとは言っても、仕事や友人、地球でしか楽しめない娯楽や食文化とうった全ての引き替えに出来るかというと、流石にそこまでは踏ん切りが付かない。

まだ、頭の片隅で「これは夢じゃないのか？」と思っている善治郎の働かない脳みそでも、即答は出来かねる問題だ。

そこまで考えたところで、善治郎はふと一番大事な問題に触れていないことに気がついた。

「あ、あの。そもそも私はこうして、もうこの世界に来てしまっているのですが、もし、もしですよ。あくまで仮定の話ですけど、アウラさんとの結婚を拒んだら……どうなるのでしょうか？」

恐る恐る、尋ねてくる善治郎に、アウラは安心させるように努めて笑顔で答えた。

「その場合は無論、責任を持って私が『送還魔法』で善治郎殿を元に世界にお返しいたします。最初に申したであろう？ 『ゼンジロウ殿の意にそぐわぬというのであれば、全てを元通りに戻す』、と。

ただでさえ、こちらはゼンジロウ殿を断り無く、この世界に引きずり込んだ身。断られた場合、全てを白紙に戻す程度の分別はある。ゼンジロウ殿は安心して、己の心のおもむくまま、返答して下さればよい」

「あ、そ、そうなんですか……」

アウラの答えに、善治郎は拍子抜けしたように、安堵の溜息をついた。

漫画や小説での『異世界召喚』というのは、召喚は出来ても送還は出来ないケースが多く、呼ばれた人間は本人の意思に関係なく異世界で生きること強いられるものなのだが、善治郎を襲った現実には、そこまで滅茶苦茶ではないようだ。

何はともあれ、返してもらえんというのは、幸いである。その言葉に、頭の中が沸騰寸前の善治郎も、少し冷静さを取り戻した。

「逆に、この話を受けて頂けた場合も、一度は元の世界へとお返しするつもりだ。元の世界と決別するのであれば、ゼンジロウ殿にも別れを告げたい人もおられよう。召喚・送還の魔法は、星の並びに

左右される故、いつでも自由に使えるモノではないが、幸い今回の星の並びは明日の夜まで続く。

さらに、一月後にはもう一度、召喚に適した星の並びになる。

つまり、この話を断るというのであれば、明日お帰りいただきそれで終わり。受けていただけるのであれば、明日一時帰国し、一月後もう一度改めて、呼び出すという形になる」

「へー、召喚魔法ってそんなに頻繁に出来るんですか」

暢気な感想を述べる善治郎に、アウラは苦笑して首を横に振った。

「いや、これは今が特別星の並び恵まれていると言うだけだ。げんに、一月後を逃せば、次のチャンスは三十年後までない。無駄に怖れる必要はないが、あまり楽観的に構えていられる話でもない」

「げっ、三十年後かよ」

アウラの答えに、善治郎は思わず敬語を忘れ、素の声を上げた。流石に三十年は長すぎる。やはり、この結婚話を受け入れてしまったら、地球とおさらばすることになるのは間違いないようだ。

だが、結婚を断れば、明日にでも元の世界に返してもらえると分かった善治郎の精神状態は、さっきまでとは、比較にならないほど改善している。

人間の心理とは不思議なモノで、「絶対に帰れない」と言われれば、「何としても帰りたい」と思うのに、「その気になれば帰れる」と言われれば、「別に帰らなくても良いのではないか？」という思いもわいてくる。

（実際、アウラさんが言っていることが全部本当だとしてたら、かなり美味しい話だよな。元々俺、親もいないし、恋人もいないし。

仕事は……まあ、それなりにやってるけど、月平均百五十時間の残業の職場に未練はないしなあ)

思えば今日は、半年ぶりに土曜が休みの日だった。

平日の帰宅時間は深夜零時を越えるのが当たり前、土曜は原則出勤日。日曜も月に三回は出勤。残業手当は、ごまかさずに働いた分だけ出してくれるのがせめてもの救いだ、その金を使う暇もない日々。

家に帰っても自炊をするだけの気力もなく、平日の夕飯は決まってコンビニ弁当か外食。考えてみれば、仕事と買い物以外で女の人と会話を交わしたのは、半年ぶりではないだろうか？

(か、考えて見たら、マジで未練ないなあ、あっちの世界の生活……)

向こうの世界。恋人もいない、仕事仕事の毎日。

こっちの世界。爆乳美女と結婚。

改めて比べてみると、この提案はひょっとして善治郎にとっても「渡りに船」というヤツなのではないだろうか？

一瞬そんなことを考えた善治郎であったが、元来の臆病さが暴走しかける善治郎の心理にブレーキを掛ける。

(いやいや、まてまて。もし、これまでの話が全て本当だとしても、まだ聞いていない部分があるだろう。アウラさんは女王様だぞ？女王と結婚して、何の仕事もしないですむはずがないねえ)

王族というのは、生まれつきの政治家だ。よく、放蕩者の王子様が漫画や小説に出てくるが、それはごく一部の例外であり、王族としての義務を真面目に果たしているものは、同情したくなるくらいに忙しい日々を過ごしていると聞いたことがある。

そんな生活をするくらいなら、元の世界でブラックサラリーマンをやっていた方がいい。

善治郎は、気づかれないように細く何度も深呼吸をして、結論を急ぐ己の心を落ち着かせた。

プロローグ5【結婚しましょう！】

「ええと、じゃあ、逆にもし、そのお話を私が受けしたとして、私にはこの世界でどのような義務が生じるのでしょうか？　女王の婿も王族の一種ですよね？」

善治郎の質問に、前向きな意図を感じ取ったのか、アウラは嬉しげに笑い、答える。

「特に規定はない。なにせ、私は我が国における三十二代目の国王だが、カープア国の歴史上、女王は私でまだ四人目なのだ。」

しかも、前任の三人は生涯独身を通し、後継者には血の濃い分家から養子を取ったり、即位当時はまだ乳飲み子であった、年離れた弟に王位を譲ったりしている。

つまり、カープア王国の女王の婿となるのは、ゼンジロウ殿。あなたが初めてとなる」

なにげに、善治郎を「婿」と断定した形で言うアウラであったが、善治郎はそれに気づかず、もっと別な点で慌てた声を上げる。

「ちょ、ちょっと待って下さい！　それじゃ、この国には王配の権利や義務って全く明文化されていないって事ですか？」

王配とは、女王の伴侶のことだ。今まで結婚した女王がいなかったこの国には、存在しなかった言葉なのかも知れない。

「うむ。書面上は、そうなる。しかし、安心めされよ、ゼンジロウ殿。我が国は、三十二人中女王が四人という歴史からも分かるとおり、男性優位の社会だ。特に職場はともかく、家においては家長は

常に男で、妻は夫を立てるのが美德とされている。

どのような形であれ、婚姻を結べば私は可能な限り、貴方の希望に添うよう努力をしよう」

「は、はあ……」

予想を遙かに上回るうまい話が帰ってきた善治郎は、惚けたような声を出した。

アウラの言葉を全面的に信じて良いのだとすれば、アウラと結婚しても善治郎にはこれといって果たすべき義務はない上に、アウラは善治郎を立てて可能な限り便宜を図ってくるのだと言う。

……あまりに、話がうますぎる。

（駄目だ、よく考えろ。どう考えても裏がある話だろ、これ）

厳しく律していなければ、思わず飛びつきたくなくなるくらいに好条件のお話である。

善治郎は、必死に頭の中で考えを巡らす。

（そもそも、この結婚が成立したとして、アウラさん側のメリットはなんだ？ 王家の血筋の存続？ それだけか？）

アウラ以外の王族が死滅しているのだとすれば、王家の血を色濃く引く善治郎の存在は、非常に魅力的であることは確かである。

しかし、そのために、あそこまで美味しい条件を並べるものだろうか？ 子作り以外何もしない亭主。世間ではそう言う男を『ヒモ』という。

（わざわざ旦那をヒモ野郎にするだなんて、アウラさんてすごいハイレベルのダメンズウォーカー？ いや、そんなわけねえよなあ…

…)

そうではないのだとすれば、どこかにもっと大きなアウラ側のメリットがあるはずだ。そうでなければ、例え血筋的にどれだけ善治郎が婿に相応しいとは言っても、最初からあそこまで「美味しい条件」を並べるはずがない。

(駄目だ。情報が少なすぎるな)

『少ない情報で無理矢理商談を纏めようとすれば、必ず足下をすくわれる』。会社で先輩に口酸っぱく言われてきた言葉を思い出した善治郎は、立て続けてにアウラに質問を投げかける。

「すみません。また話が元に戻りますが、もし私がこのお話をお断りしたら、アウラさんはいったいどうなさるのですか？ ご結婚されないというわけには行かないのでしょうか？」

「ああ。その場合は、恐らく国内の比較的王家の血が濃い貴族を婿に迎えることになるだろう。もっとも濃いと言っても、たかが知れているが」

だからこそ、ご迷惑を掛けることを承知の上で、ゼンジロウ殿をお呼びしたのだ。と、アウラは自嘲気味に笑った。

(なるほど。一応国内にも婿候補はいるんだな。まあ、当たり前か。……ん？ まてよ？ ちょっとカマを掛けてみるか)

「その婿候補の方と言うのは、やはり曾祖父や曾祖母に王族を持つような方なのですか？」

善治郎のカマ駆けに気づかないアウラは、苦笑して首を横に振る。

「まさか、そんな血の濃い人間はもう残っておらぬよ。精々、曾祖父の祖父が王族とか、良くて曾祖父の母親が王族といった程度の間だ」

（やっぱり、ビンゴだ！）

アウラの返答に、善治郎は内心の驚きを隠し、どうにかポーカーフエイスを保つ。

会社の上司曰く。『営業にとって表情筋は、理性で動かすものであって、感情にまかせるものではない』。そんな上司の教えが、こんな異世界で生きている。

今のアウラの返答は明らかにおかしい。曾祖父の祖父というのは数で表せば五代前、曾祖父の母とは四代前に王族の血が入っていたということになる。

一方、地球に転移してきた善治郎のご先祖様というのは、五代前の人間だ。アウラの言うとおり、四代前の人間が生き残っているのだとすれば、そもそも五代前の血しか引いていない善四郎を召喚する理由がない。

善治郎が生まれ育った村が閉鎖的であったため、結果として善治郎が極めて濃い王家の血を持っていたが、そのことは召喚するまでアウラも知らなかったはず。現に彼女は「嬉しい誤算」と言っていた。

つまり、王家の血が濃い人間と次代の子をなすため、異世界から婿候補を召喚した、という説明自体が嘘と言うことになる。

（じゃあ、なんで俺を召喚した？ ひょっとして俺を婿にしたいって言う話自体が嘘なのか？ いや、駄目だ。そこから疑いだしたら、きりがない）

そもそも、善治郎には自力で元の世界に戻る手段は無いのだ。そう考えれば、アウラが上手いことを言って善治郎をだまくらかす必要はない。ただ、「元の世界に返す手段は無い」と嘘をつけば良いだけのだから。

恐らく、アウラは可能な限り、善治郎と誠実な交渉をしようとしている。

（だから、俺を婿にしたいって話も、異様なくらいの好条件も事実だと考えてもいいはずだ。そのほうが話のつじつまはあう。だとすれば、なぜだ？　なぜ、アウラさんはあえて、あんな好条件を示してまで、国内貴族より『血の薄い』異世界に逃げた王族の子孫を召喚した？）

「ゼンジロウ殿？　いかがされた？」

「あ、いえ。すみません、ちょっと考え事を。それで、もし私が、アウラさんと結婚することになれば、アウラさんとしては私がどうするのが理想ですか？　いえ、法律上どうしなければならぬとかじゃなく、あくまでアウラさんのご希望として」

善治郎の問いに、アウラは小さく肩をすくめると、気持ちよくらいはつきりと答える。

「特にない。この話を受けて下さるのということは、ゼンジロウ殿は私のために、故郷もご家族もそれまでの生活も、全て投げ打って下さるということ。そのような方に、さらに要望を突きつけるほど私は厚顔無恥な人間ではない。

ただ、王家存続のため、子をなすのにご協力頂ければ、それで結構」

どうやら本当に、生じる義務は、目の前の爆乳美女との子作りだけのようだ。少なくとも、善治郎の目には、アウラは本気でそういつているように見える。

「そう、ですか……」

アウラの返答は相変わらず、男を駄目にするくらいに甘い代物だった。だが、今回は善治郎も半ばその返答予測していた。

（これは、ひょっとしてマジで俺が立てた仮説が当たってるか？ さっきの条件は、『俺にとって』おいしい条件じゃない。最初からその条件が『アウラさんにとって』一番望ましい条件なのか？）

善治郎は頭の中で、これまで得た情報を整理する。

・国内には、異世界に逃げた王族の子孫よりは、血の濃い貴族がいる。

・それなのに、アウラはあえてかつて異世界に逃げた王族の子孫（善治郎）を、婿として召喚した。

・結果、善治郎はかなり濃い王家の血を持っているが、それはあくまで「嬉しい誤算」。

・善治郎に、アウラは「子作りさえしてくれれば、他は何もしなくていい」といった。

・この国は、原則男性優位社会で、女王という存在はまれ。

・この国の文化では、家の家長は絶対に夫。妻は夫を立てるのが美德。

・これまでの女王は全て生涯独身で、『王配』が存在するのは、この国の歴史上今回が初めて。

これまでの受け答えや、その全身から発する圧倒的なカリスマ性だけを見ても、アウラという女は王としての素質を十分に持っているように見える。

自分の仮説が正しいのか、それを立証するため善治郎は質問を続ける。

「後もう二つ質問させて下さい。私がこの国に留まったとしたら、どこで生活することになるのですか？」

「それは、恐らく後宮だ。元々我が国は、一人の王が王妃や側室といった複数の妻を娶るのが一般的だったからな。少々変則的だが、私達夫婦の生活空間は、後宮ということになる」

やはりだ。もう、ほぼ間違いない。

善治郎はゴクリと唾を飲み込むと、最後に決定的な質問を投げかける。

「では、最後の質問です。

もし私が、アウラさんと結婚した後、後宮に引き籠もり、可能限り外部との接触を断ち、アウラさん以外の王宮関係者とは一切関わ

りを持たず、ただひたすらダラダラと遊びほうける日々を過ごしたとしたら、アウラさんはどう思われますか？」

善治郎の仮定の話に、アウラは堪えきれなかったかのように、今日一番の笑顔で反射的に答える。

「大歓迎だとも！」

その一言で、善治郎は、自分の仮説が全面的に当たっていたことを確信した。

（オッケー、謎は全て解けた。間違いないわ。この人、「何もしなくていい」という条件を餌としてあげている訳じゃない。正真正銘「何もしないでいてくれる婿」が欲しいんだ）

文字通り、ヒモ男を第一希望として歓迎しているのだ。

ちよつと考えて見れば、実はそう不自然な話でもない。

半ブラック企業で、仕事に追われる日々を過ごしている善治郎の価値観で物事を計ろうとしたのが、そもそのまちがいののだ。

仕事に疲れている善治郎は、働かずに衣食住＋美人の嫁さんが与えられる生活というのに、魅力を感じているが、それはこの世界での一般的な価値観ではない。

『王配』となった人間が働くということは、権力を行使することに他ならない。

大きな権力を行使することに、魅力を感じない男というのはむしろ少数派だろう。

例え、この国では明文化された権限はなくとも、『王配』は歴とした権力者だ。

なにせ、王国の文化自体が男社会を中心に形成されているのだし、『家庭』の長である家長は、例え入り婿でも男がなると決まってい

るのだから。

そして、妻となった女は、可能な限り夫となった男を立てるのが美德であるとされているのならば、極端な話、『王配』は『家庭』を通して『女王』に『命令』することすら可能であるかも知れない。少なくとも、『王配』が公式な場でなにか意見を言えば、『女王』はそれを無視することは出来まい。

（そうだよな。貴族出身の婿さんなら大抵権力欲はあるだろうし、そんなヤツを『王配』に添えたりしたら、最悪アウラさんの権力が丸ごとそっくり横取りされる可能性もあるのか。まあ、そこまではいなくても、自分の実家に利益誘導するくらいは、まず絶対にやるだろうなあ）

女王と王配の二重権力構造。最悪の場合は、国を二つに割る内乱に発展してもおかしくはない。

（なるほどねー。そう考えれば、わざわざ異世界から婿さん候補呼びたくなるのも分かるわ。異世界の婿さんが、政治的野心を持っていない保証はないけれど、最低でも実家の紐付きにはならないもん。婿さんの実家が外戚として権力を振るったりしないだけでも、十分に意味あるよなあ）

古今東西の歴史をひもとけば、王の配偶者の親族——『外戚』が国を乱す原因となるケースは非常に多い。

色々と考えて、立て続けてに質問をしてくる善治郎を、興味深げに見守っていたアウラは、善治郎が落ち着いたのを見計らい、問う。

「この様な一生を左右する選択を即答しろというのが、無茶であることは承知している。しかし、先にも述べたとおり、召喚魔法は星

の並びに左右される故、時間があまりないのだ。

今すぐ答えを出してくれなくても良いが、最低でも明日の朝までには心を決めて戴きたい。

なにぶん全てはこちらの一方的な都合から生じた話だ。例え、断られたとしてもゼンジロウ殿には一切の危害は加えぬし、もし引き受けて頂けるのであれば、そなたの妻として可能な限り誠意を持って接することも約束しよう。

「どうであろうか、ゼンジロウ殿」

アウラは、柔らかい笑みに真剣な眼差しを乗せ、そう善治郎に説いた。

「はい、そうですね……」

善治郎は、軽く目を瞑り、考える。

善治郎が今立てた仮説が正しいのだとすれば、これはとても美味しい話だ。

しかし、何度も言うとおり、その代償として払うのは、今日まで過ごしてきた地球での生活丸ごとすべてなのである。

曲がりなりにも山井善治郎という男は、今日まで、一人の人間として自らを支え、自らを律し、自らを養って生きてきた。

確かに、仕事はきつかったし、職場ではいつも辞めることばかり考えていたが、自立した生活を営んでいたという、誇りが善治郎にはある。

それは、一人の男としての『矜持』とも言うべきものだ。

アウラの要請を受け入れるということは、その『矜持』を捨て去り、女に飼われる生活を受け入れることを意味する。

果たしてそれで良いのか？ 山井善治郎という男の『矜持』は、そんな簡単に捨て去ることが出来るほど軽い『へ』のようなものか？ というのか？

（少し、冷静に考えてみれば、悩むことなんか何もない問題だよな）

うだうだと、明日の朝まで返答を引き延ばすような代物ではない。既に、結論はとっくに出ているのだから。

己の心が定まった善治郎は目を開くと、アウラの赤茶色の双眼を正面から見据え、テーブルの上に身を乗り出すようにして、きっぱりと言う。

「結婚しましょう！ アウラさん！」

山井善治郎の、男としての『矜持』は、まさしく『へ』のようなものであった。

幕間【女王サイド】

山井善治郎が地球から召喚されたその日の夜、カープア王国女王アウラ一世は、私室に腹心の部下数名を集め、非公式の会合を開いていた。

テーブルの上に添えられた燭台の炎が、広い室内を薄暗く照らし出す。

アウラは、南国らしい蔓を編んで作られた椅子の上で足を組み、集まった腹心の部下達を見据える。

「で、婿殿のご様子は？」

最初に話を振られたのは、一番端に控えていた、長い金髪の若い侍女だった。

「はい。先ほどやっと眠られたようです」

「そうか、良かった。しかし、婿殿は随分と夜にお強いようだ。今後は後宮の照明代を別途用意しておいた方が良くかもしれんな」

アウラは考え込むように組んだ腕の上に顎をのせ、そう呟いた。

善治郎が聞けば、不本意に感じる評価だろう。現在の時刻は、精々夜の十時前後。平日の帰宅は深夜零時、一時が当たり前だった善治郎の感覚でいえば、恐ろしく早い就寝である。

善治郎としては、自分が寝るまで仕事から解放されないメイドさん達に気を遣い、たいして眠くもないのにあえて火を消してベッドに潜り込んだのだ。

それを、「遅い」「夜に強い」などといわれては、立つ瀬がない。

しかし、それも無理はない。その気になれば電気で二十四時間、いつでも十分な灯りが取れる現代日本人と、灯りといえば原則、松明、蝋燭、ランプといった『炎』その物しか存在しないこの世界とでは、夜という時間帯に対する認識が根本的に違う。

この世界では、夜開いている店舗というのはごく一部の職種に限られている。非常に忙しい王宮の中枢部でも『夜は寝るもの』という認識が、強く染みついているのである。

アウラの言葉を受け、正面に立っていた文官らしき細面の中年男が、発言する。

「なにはともあれ、ご婚約成立、おめでとうございます、陛下。して、陛下はゼンジロウ様の人となりを、どのように見られましたか？」

中年の男――ファビオ・デウバジェは、アウラの秘書官である。

秘書官とは、本来それほど高い権限を持つ役職ではないのだが、現在カープア王国は、女王であるアウラが宰相も元帥も置かず、政府と軍を直接指揮しているという関係もあり、『女王の右腕』と称される彼の権限は、その役職からは想像もつかないくらいに大きい。

女王は、信頼する腹心の言葉に、小さく肩をすくめると、

「予想していたより遙かに頭が切れる御仁だ。冷静な判断力もあるし、度胸もそれなりに据わっている。これは『悪い誤算』だな」

そう、言った。

褒め言葉にしか聞こえない評価を、『悪い誤算』と言い切るのは、女王が夫に有能さを求めている証拠である。

アウラにとって理想の夫とは、ふってわいた贅沢におぼれ、金や

女、美食といったもので満足し、政治権力には一切興味を示さない男である。

「特にあの、最後の質問。ゼンジロウ殿は、恐らく私の意図の気づいていた。その上で、此度の婚姻を受け入れてくれたのであろうよ」

アウラは、昼間のやり取り思いだし、クツクツと笑う。なにせ、わざわざ「もし私が、結婚した後、後宮に引き籠もり、可能な限り外部との接触を断ち、ただひたすらダラダラと遊びほうける日々を過ごしたとしたら、どう思うか？」などと、ダイレクトに聞いてくるくらいだ。

こちらが夫に何をして欲しいのか、より正確に言えば「何をして欲しくないのか」、十全に理解していると考えた方が良い。

「最初は平民の生まれ育ちだと思ったのが、あの聡明さからすると、婿殿は異世界の貴族階級なのかもしれん」

「確かに、ありえますね」

「立ち振る舞いやマナーなどには少々疑問が残りますが、無学な一般庶民としては少々不自然なことは、事実です」

アウラのかんり的を外した予想に、その場に集まった腹心達は首を縦に振り同意を示した。

この辺りは、アウラ達もつい異世界を自分たちの世界の常識に当てはめて考えてしまっている。この世界では、教育を受けるというのは、王族、貴族、一部の金持ちだけに許された特権である。

アウラ達に取って、大多数の平民は、良くも悪くも無学で無教養な存在に過ぎない。一応、世界全体を見渡せば、平民にも門戸を開

いている教育機関というものが全く存在していないわけではないのだが、現代日本のように、国民全員に九年間の義務教育を施している国は、完全にアウラ達の想像の外にある。

「しかし、そうなるゼンジロウ様がこたびのご結婚を受けいれたのにも、なんぞ裏があってもおかしくはないぞい。ゼンジロウ様との婚約を破棄されるのであれば、一ヶ月後再召喚の儀は取りやめにしますぞよ」

そう言ってきたのは、善治郎がこの世界に來た時にアウラの左隣に立っていた、紫のローブを纏った初老の男である。カープア王国宮廷魔術師団・筆頭魔術師・エスピリディオンの言葉に、アウラはフンと鼻を鳴らすと、ヒラヒラ手を振り答える。

「冗談を言うな、爺。そして、代わりに、ギジェン家の餓狼や、マルケス家の操り人形を私の婿にしろと言うのか？ そんなことをしたら、せっかく戦乱を生き延びた、カープア王国が内憂で滅ぶぞ」

にべもない女王の言葉に、苦笑を浮かべた老魔術師は、長い灰色の髭をしごく、女王に酷評された国内の婿候補をフォローする。

「陛下、それはあまりなお言葉ですじゃ。ギジェン家のプジョル卿は名将と呼ぶに相応しい武人じゃし、マルケス家のラファエロ卿も、極めて有能な文官じゃぞ」

「爺に言われずとも、分かっている。あいつ等を今の地位に就けたのは私だぞ。しかし、どれほど有能であっても、過ぎた野心家や、親の意向に一切歯向かえない坊やは、私の夫には向かない。そう言っているのだ」

アウラの人物評価は、辛辣ではあっても決して的外しているものではなかったため、老魔術師はそれ以上何も言わなかった。

「では、やはり、ご結婚はゼンジロウ様と？」

話を元に戻す、細面の中年男――ファビオの言葉に、アウラは簡単に頷き返す。

「ああ。予想より知恵が回るところなど、少々気になる点はあるが、人格的にも及第点だ。少なくとも、『餓狼』や『実家の操り人形』とは、比べものにならない。王家の血も十分に濃い。あれならば、貴族達からも表だった反対意見は出ないだろうよ」

カープア王家の血統魔法である「時空魔法」を自体に正しく継承させる。それは、この国では十分に大きな大義名分になる。

善治郎の王家の血が、国内貴族の誰よりも濃いことが一目瞭然である以上、表だってアウラと善治郎の結婚に反対できるものはいない。

「しかし、身分違いどころか、世界違いのお相手じゃぞ。結婚をしたとしても果たしてその後、上手く家庭を築くところ出来るかどうか、問題は多いと思うがのう」

先のことを心配する老魔術師に、アウラは意味ありげに笑い返す。

「まあ、それは、大なり小なり誰と結婚しても出てくる問題だ。後は、私の誠意と努力の問題だろうよ。昼間、婿殿にも言ったとおり、全てはこちらの都合で結ばれる婚姻なのだ。国政に影響を出すような無茶を言わない限り、婿殿の要望は受け入れるさ」

昼間、アウラが善治郎に見せた誠意ある対応は、決して表面だけのものではない。

アウラ自身、心理的にも一方的に巻き込んでしまった善治郎に負い目はあるし、理性的に考えても、夫となる人間に誠意ある対応をとるのは、理にかなっている。

夫は部下ではなく、家族である。順調にいけば今後何度も肌を重ね、生を全うするまでの何十年という時間を、寄り添って生きるのだ。

いがみ合っているのは、疲れるだけである。

「分かりました。そこは『家』の問題ですので、陛下にお任せします。しかし、王家が子をなすか否かは、王国の問題です。万が一、『夜の営み』に不具合があるようでしたら、率直にご報告お願いします。」

幸い、ゼンジロウ様は、『時空魔法』の習得も不可能ではないくらいに、『王家』の血が濃いお方。プジョル卿や、ラファエロ卿と同程度に王家の血を引いている『女』は、幾人かおります故」

率直に、普通であれば無礼極まりないことを言っただけなのは、ファビオ秘書官だった。

確かに、善治郎という濃い王家の血を持つ男の存在が明らかになった今、状況は当初とは変わっている。

これまでは、『時空魔法』を発動可能な人間がアウラしかいなかったため、アウラが子をなすことが至上命題であったのだが、それよりは多少劣るものの、今は善治郎という潜在的には『時空魔法』が使えてもおかしくないレベルの、王家の血を引く男が現れたのだ。極端な話、これまでの前例に立ち戻り、アウラには生涯独身のまま女王を務めて貰い、王家の後継者は善治郎と王家の血を引く貴族の娘の間に生まれた子、という選択肢も存在する。

元々、女王の結婚は、「王権の絶対性」と「家の家長は男」という、法と文化の矛盾を発生させてしまう行為なのだ。

善治郎の存在を知れば、王家の血を引く娘を持つ貴族達は、その辺りの問題を盾に取り、女王の結婚破棄と、自分の娘と善治郎の婚姻を迫ってくることは、十分に考えられる。

ある意味、山井善治郎の存在は、奇貨であると同時に、大きな爆弾でもあるのだ。

だが、女王アウラは、腹心の無礼な言葉に怒るそぶりも見せず、椅子の上で足を組み直すと、意味ありげに答えるのだった。

「ああ。その辺りは、後日の問題だが、ある程度は対応も考えている。だが、恐らくお前のその懸念は、無用だよ。婿殿との子作りは上手いくさ」

「ほう？ その自信の根拠をお聞きしてもよろしいですかのう？」

興味深げに問いかける、老魔術師にアウラは艶然と笑い返し、答えた。

「なに、簡単なことだ。今日の夜、婿殿と向かい会って夕食を取ったのだが、婿殿の視線は痛いくらいに私の胸元に注がれていた。本人は、隠していたつもりのようなだが、あれは間違いなく劣情の視線だ。

どうやら私の肢体は、婿殿の情欲を刺激するに十分なものであるようだ」

そう言ってアウラは、その特大の乳房を誇るように、胸を張る。

男のチラ見は、女にとってはガン見。
どうやら、善治郎の邪な思ひは、完璧に女王様にばれていたよう
であった。

第一章1【一夜を過ごして】

翌朝、善治郎は、王宮の客室で目を醒ました。

目覚めたばかりの善治郎の視界に飛び込んでくるのは、豪華なベッドの天幕である。

見覚えのない光景に、一瞬身体をビクリと震わせる善治郎であったが、しばらくして自分が昨晚どこで就寝したかを思い出し、肩の力を抜く。

「……ああ、そうか。ここは異世界、なんだよな」

善治郎は、自分が住んでいる六畳間より広そうなベッドから足を下ろした。

足元に用意されたスリッパの様な履き物をつつかえ、広いゲストルームを歩きく善治郎は、自分が無意識のうちに右手で脇腹を掻いている事に気づく。

「うわ、痒っ。あっちこっち、虫に食われているな、こりゃ。昨日は半分勢いで、結婚を承諾しちゃったけど、ちよっと早まったかもしれないなあ……」

今更ながら、善治郎はそう呟く。

昨日一日、生活をしただけで、善治郎はこの世界が現代日本と比べ、どれだけ不自由を強いられる世界であるか、実感させられていた。

昼食と夕食に出された食事自体は中々に美味しい物であったが、一緒に出された水や酒は異様にぬるかった。

善治郎は、ビールと発泡酒の違いも分からない程度の貧しい舌の

持ち主であるが、日本人らしく「発泡酒はギンギンに冷やしたものがジャスティス」、と断言している人間である。

そんな善治郎にとって、夕食に出された果実酒は、味以前の問題として、そのぬるさがたまらなく気持ち悪かった。

ぬるいと言えば、気温自体も問題だ。昨日アウラから聞いたところによると、ここカープア王国は日本の関東圏と比べてもかなり暑い地方のようだ。

一番寒い季節でも、街を歩く者が長袖を着ることはほぼ無く、もっとも暑い季節には、気温が体温よりも高くなるため、人々は出来るだけ狭い空間に身を寄せ合い、互いの体温で『涼を取る』のだという。

そういえば、インドの夏の逸話として、似たような話を聞いたことがあるなあ、と善治郎は半ば顔を引きつらせながら、思いだしたものである。

この世界には、温度計というものが存在しないので、はっきりとは分からないが、恐らく冬の最低気温で二十度弱、夏の最高気温は四十度から四十五度くらいを覚悟しておいた方が良さそうだ。

しかも、当然ながらこの世界には、エアコンなどという代物は無い。エアコンのある日本の夏しか知らない善治郎には、この暑さはかなりの強敵となるだろう。

実際、昨晩も暑く寝苦しかった。今はまだ夏真っ盛りではないというが、それでも善治郎は寝付くまで、最低でも一時間以上、キングサイズのベッドの上でゴロゴロを寝返りを繰り返した。

もっとも、寝苦しかったのは暑さのせいだけではない。快眠を邪魔するもう一つの要員が、虫だ。

どうやら、この世界には窓ガラスという代物が存在していないようなのである。そのため、窓は全て木戸になっており、昼間は光を取り入れるため、全て解放している。当然、虫は入りたい放題だ。

一応ベッドの天幕が、蚊帳の役割を果たしてくれるようなのだが、そんなもので全ての虫をシャットアウト出来るはずもない。

結果、朝起きたときには、善治郎は身体のおちこちを虫に食われてまくっていた。

だが、それらの不具合を全て合わせたより善治郎を閉口させたのが、夜の不自由さだ。

正直、電気のない夜というのが、こんなに不便なものだとは思っても寄らなかった。

アウラと夕食を取った食堂だけは、大量の蠟燭を使った大きなシヤンデリアでそれなりに明るく照らし出されていたが、廊下を歩くときは、先導するメイドさんが持つランタンだけが頼り。

部屋についても、灯りは机の上にランプが一つ備え付けられただけである。

その灯りで本を読もうとすれば、確実に目を悪くすることだろう。

「昔の人は早寝早起きだったって言うけど、分かるなあ。だって、どう考えても夜は寝る以外なにもできねーもん」

つい、ブチブチ文句を漏らしながら、着替えを済ませる。

王宮やお屋敷ものでは定番の、メイドさんによる「着替えの手伝い」は昨晚のうちに断つてある。

現在の善治郎の服装は、腰を紐で縛るゆつたりとしたズボンと、膝丈くらいあるネグリジェのようなブカブカの上着である。

これが、王侯貴族が使うもつとも一般的な夜着だという話だったが、実際使ってみた善治郎の感想としては、これならばTシャツとトランクスだけで寝た方が、ずっと寝やすい。元々寝相の良い方ではない善治郎は、何度も寝返りを打っているうちに、自分が着ているネグリジェに肩固めをかけられてしまった。

仮にもここは王宮で、善治郎は非公式ながら女王の王配というスペシャルゲストだ。衣食住、全てにおいて、最高のものを用意されたのだろうが、それでもなお、現代日本では一般庶民でしかない善治郎を満足させうる代物ではなかった。

時代の違い、文明レベルの違いとは大したものだ。

借り物の夜着から、着慣れた自分の服へと着替え終えた善治郎は、ベッドの端に腰を下ろし、メイドさんが朝食に呼びに来るのを待つ。

「改めて考えると、日本って恵まれてたんだなあ。大体の家に、冷蔵庫もエアコンもあるし。それに比べてこっちには、電気その物がないのか。でもなあ、こっちなら働かなくていいんだよな。それに、アウラさん、めっちゃ綺麗だったし」

ぬるい酒、寝苦しい部屋、暗い夜を経験した善治郎をなお、引きつけてやまないのが、昨日略式ながら、婚約を結んだ、アウラ・カープアの魅力である。

夕食時、大胆にスリットの入った赤いイブニングドレス姿で、善治郎の前に現れたアウラは、改めてその魅力的な微笑と、官能的な肢体で異世界人の婚約者を魅了してくれた。

女王陛下の大胆な艶姿にすっかり魅入られた善治郎は、不自然ではない程度に（と、善治郎自身は思っている）、その視線をアウラの豊かに実った胸の谷間や、スリット間から除く太股に向け続けた。今思い出しても、あの尻、乳、太股には、現代日本の生活を投げ打つだけの価値は十分にあるように思える。

「そうだよな。考え見れば、俺、今回こっちの世界に自転車を持ち込んでるじゃないか。ってことは、一ヶ月後に来るときもある程度の物は持ってこられるってことだろ？ よし、帰ったら俺の婿入り道具のリストアップだ！」

そう言つて善治郎がパチンと両手を鳴らし合わせたちようどその時、カランカランと入り口のベルが鳴らされる。

「はいっ！」

「失礼します。朝食の用意が調いました」

ドアの外から聞こえてくる聞き覚えのある若い女の声に、善治郎は大きな声で答える。

「はい、今行きます！」

ベッドから立ち上がった善治郎は、足早に入り口のドアへと駆け寄っていった。

第一章2【朝食の風景】

山井善治郎が、カープア王国にとってスペシャルなゲストである事は事実だが、現時点ではその存在は、女王アウラとその腹心しか知らない極秘の存在でもある。

そのため、昨日の昼・夜に続く、異世界で三度目の食事となる今朝の朝食も、善治郎と同じ食卓座るのは、婚約者であるアウラ唯一人であった。

善治郎の貧しい語彙で現せば、カープア王国の文化は、『典型的な中世ヨーロッパ風ファンタジーと未開の南国風文化を足して二で割ったような感じ』となる。

その気なれば、三十人くらいが同時に食事を取れそうなその長いテーブルは、驚いたことに一本の丸太を二つに割り、その表面をピカピカに磨き上げた代物だ。

一体樹齢何年の木なのか、善治郎には想像もつかない。ここまでの大木を一本まんな使用となると、そのコストは大理石作りのモノより遙かに高くつくだろう。

その大きな木製のテーブルには、銀食器に盛られたスープや、丸パンを乗せた籠が並べられている。善治郎はアウラと楽しく談笑しながら、異国情緒あふれる朝食を取っていた。

「すでに、送還の準備は出来ている。星の並びも今日の午前中いっぱいには問題ないゆえ、いつ送還するかはゼンジロウ殿次第だ。そちらの都合の良いときに声を掛けてくれ」

スープ皿の底を拭った丸パンの欠片を上品に口に入れ、ゆっくりと咀嚼、嚥下し終えたアウラは、相変わらず落ち着いた声で、そう善治郎に現状を報告する。

一方、異世界のテーブルマナーなど知るはずもない善治郎は、アウラがどのように食事を摂っていたかを思い出しながら左手でスプ皿を傾け、銀のスプーンでその琥珀色の液体をすくい、恐る恐る口に運ぶ。

「ありがとうございます、アウラさん。そうですね、帰る時間はいつでもいいです。ただ、一つお聞きしたいのですが、召喚や送還の時、私はどれくらいの荷物を持って世界を行き来出来るのでしょうか？」

アウラはこの様なプライベートの食事で、うるさくマナーを守らせる人間ではないのだが、今後女王の伴侶として、善治郎が公式の場で食事をする機会は必ずある。

今から、食卓マナーを覚えようとしている善治郎の様子に好感を覚えたアウラは、あえて「マナーなど気にせず楽にされてはいいかか？」と言う言葉を飲み込み、微笑み返した。

「うむ？ 召喚魔法とは人を召喚するものだからな。基本的には人が無理なく身につけられるモノしか、持ち運ぶことは出来ないはずだ。ゼンジロウ殿が偶然持ち込んだ、あの不思議な乗り物ぐらいが限界だろう」

期待を大きく外すアウラの返答に、善治郎は思わず眉をしかめる。

「うわっ、本当ですか？ 困ったなー。それじゃ、大したものを持ち込めないか……」

「ゼンジロウ殿？ なにか、我が王宮で気に入られたモノでも？」

「あ、いや。今回の事じゃなくて、次の、一ヶ月後にこっちに来る

ときのことです。出来れば、あっちの世界の道具とかを、色々持ち込もうと思っていたのですが……」

「ああ、なるほど」

善治郎の返答に、アウラは得心がいった。

考えてみれば善治郎にだって、向こうの世界に生活拠点もあれば、財産も所有しているだろう。昨晚、腹心達と予想したとおり、善治郎が向こうの世界の貴族や富貴層なのだとなれば、手放したくない財産が、両手で抱えきれないほどあっても、おかしくはない。

「それは確かに、ゼンジロウ殿の立場で考えれば、何とかしたい問題であるな。さて……」

もとより婿殿の要望には可能な限り答えるつもりでいる女王は、何か手はないか、思案した。

「……………ああ、そうだ。もしかすると、あれが使えるかも知れぬ」

頭の中であらゆる可能性を検索したアウラは、一つ使えそうな手段に思いいたり、ポンと手を合わせる。

「アウラさん、なにか方法が？」

喜色を浮かべ、椅子から腰を浮かせかける善治郎に、アウラは一つ頷くと、

「うむ。時空魔法の基礎である結界の魔方陣が描かれた、絨毯がある。

今回の帰還のさい、ゼンジロウ殿が絨毯を向こうの世界に持ち込

み、一月後、ゼンジロウ殿を再びこの世界に召喚するとき、ゼンジロウ殿が結界を発動させておれば、恐らく結界の内部のモノとひとまとめにしてこちらに引き込むことができるはずだ。

所詮は絨毯一枚分、ゼンジロウ殿の全財産を持ち込むことは不可能であろうが、身一つで運べる量と比べれば、格段に増えるであろう？」

「へえ、それなら結構持ち込めそうですね！ あ、でも私は潜在的にはともかく、現状は魔法も魔の字も使えないのですが……」

喜色の後落胆と、一喜一憂する善治郎に、アウラは「心配無用」と笑って諭す。

「大丈夫。あくまで基礎の基礎ゆえ、魔方阵はただ魔力を注ぎ込むだけで発動する。最悪、それも出来ないのであれば、少量の血を絨毯にしみこませればよい。血には、高濃度の魔力が内包されておる」

「あ、それなら私でもどうにかかりますね。なにからなにまで、ありがとうございます、アウラさん」

「なに、礼には及ばぬよ。婿殿が私に差し出して下さるものと比べれば、微々たるものでしかない」

アウラはそう言って、大物然とした笑みを返した。

魔方阵絨毯の価値を知らない善治郎は、アウラの好意を素直に受け取っていたが、その物の価値を正確に知れば、アウラがそれくらい誠実に善治郎をもてなそうとしているか、少しは理解できたかも知れない。

魔方阵を描いた絨毯というのは、歴とした魔道具である。魔道具

は、『付与魔術』と呼ばれる特殊魔法で作られる。

『付与魔術』もカープア王家の『時空魔法』と同様に、とある王家の人間だけが使える秘術だ。当然、『付与魔術』の産物である魔道具は、極めて数が少なく、その値段は天井知らずとなる。

まして、その絨毯に描かれている魔方陣は、基礎の基礎とはいえ『時空魔法』の魔方陣だ。言うならば、二つの王家の秘術が架け合わさった逸品。それは、カープア王家と『付与魔術』を継承する王家との友好の証ともいえる。問答無用の国宝クラスだ。

「無論、貴重な代物であることは間違いない。向こうの世界に忘れてくるようなことがないように願いたい」

だが、アウラは善治郎に心理的な負担を掛けることを嫌ったのか、そんな内情は一切知らせず、ただ何気ないように、そう付け加えるに留まった。

「分かりました。必ずお返しします」

「うむ、お願いする。他になにか、要望はないか？　すでに貴方と私は結婚の約束を交わしあった身、遠慮は無用だぞ」

朝食と食べ終えたアウラと善治郎は、柑橘系の果実の汁を混ぜた水を飲みながら、話を続ける。甘めのレモンのような味がするその水は、爽やかなのど越しで善治郎の口を楽しませる。これで、水でも浮かべて冷たくして飲めば、最高だ。

内心で相変わらず贅沢なことを考えつつ、善治郎は、ふと思いついたように言う。

「そうですねえ、他にはこれと言って……って、そうだ。婚約だ。結婚するんですよ、私達。それなら、アウラさん。あなたの『左の

薬指』にピッタリの指輪はありませんか？ あれば、一つ貸して欲しいのですが」

この世界には『婚約指輪』や『結婚指輪』といった風習はないのか、善治郎の意図が分からずに、アウラは不思議そうに首を傾げる。

「それは、探せばすぐに見つかるであろうが、何に使うのだ？」

「それは、まあ、その……一ヶ月後のお楽しみ、ということだ」

例え『結婚指輪』という風習は知らずとも、「サイズの合う指輪を貸してくれ」という言葉と「一ヶ月後のお楽しみ」という言葉を組み合わせれば、あちらの世界に戻る婚約者が自分に指輪をプレゼントしようとしていることくらい、簡単に推測できる。

アウラは艶を多分に含んでいるのに、媚を感じさせない不思議な笑みを浮かべ、善治郎と正面から視線を合わせる。

「分かった。楽しみにさせてもらう。『左薬指の指輪』が、婿殿の世界ではどのような意味を持つのか、一月後には教えてもらえると考えて良いだろうか？」

「あ……はい。その時には、必ず」

すでに八分方、こちらの意図が読まれていることに気づいた善治郎は、苦笑と共に、そう言葉を返すのだった。

第一章3【電力確保のために】

一度目の転移は気づかないうちに終わったが、二度目の転移は善治郎に軽い酩酊感のような物を残した。

「おおっと」

一步横にタタラを踏んだ善治郎は、頭を振って視界が歪む感覚を振り払い、周囲に目を配る。

アスファルトで固められた道。そこを走る無数の自動車。道の両わきに立ち並ぶのは、コンクリート造りの雑居ビル。

見慣れた風景と、排気ガス臭い空気の臭いに、善治郎は『帰ってきた』という実感を覚える。

あまりに変わらない風景に、「ひょっとして、あの異世界での経験は、ただの白昼夢だったのでは？」という疑念すら覚えるが、そうではない証拠に出かけたときは自転車に乗っていた善治郎が、今は徒歩で代わりに筒状に纏めた大きな絨毯を両手で持っている。

そして、左の小指にはアウラから預かった金の指輪。

それらの物的証拠が、昨日の一日が夢ではなかったと、善治郎に確信させてくれる。

「つていうか、なんか連続しているふうに見えるけど、実際には丸一日が過ぎてるんだよな。……過ぎてるんだよな？」

独り言を呟いた善治郎は、途中で自分の感覚に自信が持てなくなった。異世界で一日を過ごしてきた善治郎は、単純に今日が日曜日だと思っているが、地球でもその分の時間が同等に流れたという、その保証はない。

もしかすると、まだ土曜日なのかも知れないし、最悪、こちらの

世界では何日も時間がたっている可能性もある。

まあ、周囲の景色に大きな変化はないし、気温や太陽の角度もほとんど変わっていないので、まず大丈夫だとは思うが。

「やばい、まずは現状確認だ」

悪い方向に想像を働かせた善治郎は、ブルツと身体を震わせると、両手でしっかり撒いた絨毯を担いだまま、早足で自宅へと向かうのだった。

「よかった。時間のズレはほとんどないみたいだ」

六畳一間の独身アパートに戻り、電波式の置き時計で今日の日付と時間を確認した善治郎は、ホッと安堵の溜息を漏らした。

善治郎が異世界に持ち込んだ腕時計と電波時計は、同じ時刻を示している。

どうやら、向こうとこっちの時間の流れはほとんどシンクロしているらしい。これは幸いである。なにげに軽く考えていたのだが、向こうとこっちで時間の流れに差があるとすれば、善治郎の異世界生活ブランは根底から狂う。

なにせ、再召喚の約束は、あくまで「異世界基準の三十日後」の約束なのだ。もし、異世界とこちらの世界で時間の流れが異なっているのだとすれば、これから善治郎は毎日いつ召喚されるのか、ビクビクしながら生きなければならぬところだった。

そうなれば当然、異世界に婿入り道具を持ち込むのも夢のまた夢

だ。なにせ、魔方陣の絨毯を発動させるには、少量とはいえ善治郎の鮮血を垂らしておく必要があるのだ。まさか、いつ召喚されてもいいように、二十四時間体勢で、ダラダラ血を流し続けておくわけにもいくまい。

ともあれ、最大の懸念事項が杞憂に過ぎないと分かった善治郎は、一転明るい表情で部屋の隅に設置してあるパソコンの前に座り、電源を入れる。

「よし、時間はあるようでないんだ。検索、検索」

善治郎は、パチンと両手で両頬を張ると、気合いを入れ直して、声を上げる。

一ヶ月という時間は、長いように見えて短い。

取引先とアポを取って、時間を調節して、プレゼン用の資料を作っているうちに、気がつけば過ぎ去っている程度の時間でしかない。善治郎は、思いつく限りの検索ワードを片っ端から入力していた。

「……がああ！ やっぱり無理か、これは」

数十分後。善治郎は、検索サイトを開いたパソコンの前で、頭をかきむしっていた。

異世界生活で、切実に欲しいと思ったものの大半は、電気機器だ。エアコン、冷蔵庫、照明など。どれ一つとっても、安定した電気の供給無しで使える物は存在しない。

よって、善治郎が最初に目を着けたのが、家庭用の小型発電機だったのだが、当然といえば当然だが、異世界に持ち込んで、年単位で電気を供給し続けてくれるような代物は、そう簡単には存在していない。

「一番簡単なのは、ディーゼルやガソリン式の発電機なんだけどなあ。燃料がなあ……」

キャンプ用品として売られているこの手の発電機は、設置の手間もなく、簡単に電気を供給できるが、当然ガソリンや軽油といった、特殊な燃料を必要とする。

以前、バイオディーゼル燃料を、自作している人の話を聞いたことがあったので調べてみたが、異世界で善治郎のような素人が、再現できる代物には見えなかった。

大ざっぱに言えば、バイオディーゼル燃料の材料は、『植物油』と『メタノール（メチルアルコール）』と『苛性ソーダ』の三つだ。

このうち、異世界で入手可能なものは植物油のみ。メタノールと苛性ソーダは善治郎が自作するしかない。メタノールは炭焼きの時に生じる木酸液を蒸留すれば作れるらしいし、苛性ソーダはイオン交換膜で繋がった二連水槽と電源があれば、作れるという情報を得たが、どう考えてもどちらも善治郎の手には余る。

無論、薬局でエタノールや苛性ソーダを大量に買い込み、向こうに持ち込むという手はあるが、そんなことをするくらいなら、最初からガソリンスタンドに行って予備の軽油をポリタンクに詰め込み、持って行った方が早い。だいたい、そもそもそんな絨毯一枚分しか持ち込めない量の燃料では、電気の供給は一ヶ月も持たないだろう。

「火力は駄目、と。となると、後は風力か、ソーラーか？」

風力は比較的現実的だ。異世界でも風は吹いている。しかし、気になるのはその発電量の気まぐれさだ。文字通り『風任せ』なのだから、万が一風の熱帯夜などになられては堪らない。

ソーラーに至っては論外だ。善治郎が一番切実に必要としているのは、『夜の照明』の電力なのだ。

昼間しか使えない電気など、魅力が半減どころの話ではない。一応、夜に対応するように、大型バッテリーを搭載したタイプというものもあるのだが、バッテリーというのは非常に寿命の短い『消耗品』なのである。

「後は、最近はやりの風力とソーラーのハイブリッド発電か。これは悪くはないよな、うん」

善治郎は、コップに注いだペットボトルのお茶をすすり、またマウスに手を戻す。

冷静に考えれば、このハイブリッド発電機が一番無難だろう。メーカーの売り文句では「説明書通りに組み立てれば、どなた様でも即日使用可能」と書いてある。

その売り文句を信じて良いのならば、善治郎一人でも異世界で設置可能であるはずだ。

しかし、そこまで結論が出かけた善治郎を悩ませているのは、偶然見つけた、もう一つの発電装置の存在だった。

「家庭用水力発電機か、こんな物もあったんだな……」

善治郎はその魅力に取り憑かれたように、呟いた。

風力、ソーラーと違い、場所を選ぶせいであまり一般的には広まっていないが、今や家庭用小型発電機の波は、水力にまで押し寄せている。

水力発電の魅力は、いうまでもなくその二十四時間の持続性と、他とは一線を画する圧倒的な発電量だ。

風力やソーラーでは、一般家庭の発電量を賄いきるのは、理想通りの風・太陽光があっても難しいが、水力は違う。メーカーのカタログスペック通りの性能を期待して良いのだとすれば、その発電量は小型の物でも一般家庭の総消費電力を上回る。

だが、そんな魅力的な水力発電にも問題はある。

「あの王宮の近くに川とか水路とかあるのかな？」

滞在中、王宮から一步も外に出ていない善治郎である。王宮の周囲に、水力発電機を動かせるだけの水源があるかどうか分からないという、根源的な問題があった。

王宮では何百人という人間が生活しているのだから、水源がないはずはないと思うのだが、なにせ相手は魔法のある異世界である。

「はい、水はそれ専用の魔術師が、毎朝魔法で作っています」

などと言われる可能性もゼロではない。

ならば、水力発電機とハイブリッド発電機の両方を購入すれば、とも一瞬考えたのだが、そこには予算という問題が立ちはだかる。

残業代だけはごまかさない半ブラック企業に、数年務めている善治郎の貯金総額は、300万円強。

20代前半の若造の預貯金としては、なかなかの金額ではあるが、目的を考えれば潤沢な資金とは言えない。

善治郎が目を着けているハイブリッド発電機の値段が約50万円。水力発電機に至っては実に150万円もする。

発電機以外にも、大型エアコンや冷蔵庫、照明器具や新しいパソコンなど、予算を回したいものはいくらでもある。さらには下着や歯ブラシ、石けん、タオル、バスタオル、鼻かみ用のガーゼのティッシュなどもまとめ買いをすれば、馬鹿にならない金額になるだろう。

そこにアウラに送るペアの『結婚指輪』もプラスされると、発電装置だけに全体の3分の2もつぎ込む訳にはいかない。

しかし、発電装置の目処が立たない限り、持って行く電化製品が決まらない。

「あー、結局はどっちかを選ぶしかないのか。無難な小電力か、使えない危険のある大電力か。うーん……」

即決するのは難しい問題だが、あまり時間を掛けるわけにもいかない。そこらへんのスーパーで、肉や野菜を買ってくるのとは訳が違うのだ。注文すれば、次の日に届くような代物ではないし、その設置方法、運用方法を覚えるには、ある程度の時間が必要だろう。

設置のやり方は、マニュアルさえあれば、向こうの世界で直接試すことも出来るが、こちらで一度練習しておけば、分からないことを電話なりメールなりで、販売会社に問い合わせることができる。

だから、決断は早い方が良い。それは善治郎もわかっている。

「わかってる。わかってるんだけどなー。あー……どっちにしよう」

それでも善治郎は即座に結論を出せずにいた。

第一章4【思い通りにいくことは少ない】

翌日の月曜日、出社をはたした山井善治郎は、提出した『辞表』を前にして、難しい顔で腕を組む上司の言葉を待っていた。

「辞めるってか……」

「はい、すみません」

元々、仕事条件の厳しい会社である。辞めていく人間はそう珍しくないのだが、善治郎の場合数年間仕事についてきて、最近やっと『戦力』となる目処が付いてきた矢先での辞表提出である。

上司としても、入社半年の新人のように「辞めたけりゃ、勝手にしろ」とは言えない。

「実家に帰って、家を継ぐ、か。お前、そういう生活が嫌で、この仕事を選んだんじゃないかったのか？」

辞表の理由の欄に書いた、善治郎の嘘言いつに目を通して、上司は口元を不快げに歪めたまま、首を傾げる。

「ええ、まあ。何というか、ちょっと、心境の変化がありました……」

まさか、異世界の女王様と結婚してヒモになります。とは、書けないため、ここは嘘で塗り固めるしかない。内心冷や汗を流しながら、善治郎は、神妙な顔をしている。

「ふーん……まあ、辞めるって言うのを、無理に押しとどめても、

碌な仕事はできねえわな。分かった」

長らくこちら睨んでいた上司が、そう言葉を漏らした瞬間、善治郎は思わずホッと安堵の溜息を漏らした。

だが、そんな善治郎の喜びに水を差すように、上司は大きな声を張り上げる。

「ただし！ 今お前が担当している期日の近い仕事は、ちゃんと終わらせろ。それ以外の、お前が抱えている仕事も別の人間に引き継ぎさせるんだぞ。それが終わったら、今年の新入社員の教育係だ。

今のお前くらいまでとは言わんが、せめて仕事のイロハのイぐらいは叩き込んでいけ、いいな？」

いいか悪かと聞かれれば、よくはない。正直今は異世界召喚の準備で、時間は惜しいのだ。

しかし、そんなことを言っただけ跡を濁すのも気持ちの悪いものではないし、下手に刃向かって根掘り葉掘り聞かれて、万が一にも嘘がばれたりしたら、そのほうが遙かに厄介だ。

「分かりました。失礼します」

結局、善治郎は退社の瞬間まで、無難にハードワークをこなすことを選択したのだった。

仕事の引き継ぎや、後輩の指導まで任されるとなると、思っていた以上に残された時間は少ない。

これは、一分一秒も無駄に出来ないと悟った善治郎は、牛井屋で昼食を済ませると、その足で真っ直ぐ近くの宝飾店へと向かった。

「そうですね。この指輪ですと、14号から14.5号くらいになるのではないのでしょうか。お客様ご自身のサイズは17号ですね」

善治郎が持ち込んだ指輪と、善治郎自身の左の薬指を計り終えた中年の女店員は、業務用の笑顔を崩すことなくそう言った。

そもそも宝飾店に足を踏み入れること自体初めての善治郎は、そう言われてもアウラや自分の指が、太いのか細いのかもよく分からない。

「はあ、そうなんですか」

善治郎の様子から、すぐにこの客がまったく不慣れであると察した店員は、さりげなく説明を交えながら、話を続ける。

「お相手の方は女性としては、少々大きめのサイズになりますね。このサイズとなりますと、すぐに用意できるものは、若干数が限られるのですが」

「ええ、まあ。身長からして、私より一回り高い人ですから」

「あら、まあ。お客様だって低い方ではないのに。それだけ、背の高い方ですと、ある程度幅の太いしっかりとした物の方が、映えるでしょうね。少々お待ち下さい」

店員はサンプルを取り出しに、奥へと引つ込む。

「あ、はい」

残された善治郎は、自然にアウラの容姿を思い出していた。

大柄で官能的な肢体。激しい容姿の映える、目鼻立ちのはっきりとした容姿。その性格を現しているような、火のように赤い長髪。日焼けとは根本的に違う、生まれついていたの小麦色の肌。

彼女の指に映える指輪とは、どのようなものだろうか。確かに店員の言うとおり、控えめな作りの、細い指輪はあまり似合わない気がする。

もつとも、善治郎自身一つ勘違いをしている。アウラの身長が、善治郎より高いということはない。

むしろ、善治郎の方が指一本分程度だが、高い。正確に言えば、善治郎が172センチ。アウラは、170ちょうどくらいだ。

善治郎の目には、アウラが170の中盤から後半くらいに見えているが、それはその全身から滲み出る雰囲気を押された、錯覚に過ぎない。

「お待たせしました。簡単な手直しで、近日中にお渡しできる物となりますと、この辺りのものとなります」

そうしていると、後ろに下がった店員が、複数の指輪を盆のような物に乗せて、善治郎の前へ持って来る。

「へえ、結構色々あるんですね」

そう言う善治郎が真っ先に目を向けるのは、それぞれの指輪にぶら下がった正札だ。

貧乏性であることは分かっているが、指輪の善し悪しなど分からない善治郎にとって、一番気になるのは、懐から出て行く金額というのが、正直なところだ。

「迷われているのでしたら、まずは台座の金属から決めることをおすすめします。日本では、結婚指輪はプラチナが一般的ですが、お客様の肌の色ですと、むしろゴールドの方が指になじむのではないのでしょうか。通常のイエローゴールドが派手すぎると感じるんでしたら、こちらのようなピンクゴールドのリングもございます。もちろん、フィアンセの方との兼ね合いが一番大事なのでしようが」

一般に、肌の薄い者はプラチナや銀、濃い者は金が無難であるとされている。

善治郎は、異世界人の血が入っているせいか、日本人としてはかなり肌が濃い人間である。

まして、アウラは、完全無欠の異世界人。その肌の色は、天然自然の綺麗な小麦色だ。

「ああ、相手は私よりもっと肌の色が濃いですよ。小麦色って言うか……」

「まあ、それでしたら、やはりイエローゴールドをおすすめします。飾り石も、無色ダイヤよりカラーダイヤのほうがよろしいのではないのでしょうか。失礼ですがひよとして、お相手は、海外の方ですか？」

「あ、はい。そう、ですね。日本人ではないです」

「それでしたら、台座の石は、瞳の色や髪の色と合わせるという選

び方もございます。瞳や髪の色を合わせれば、身につけていてもなじみやすいですし、それだけ相手のことをよく見ているという、メッセージにもなりますから」

「は、はあ。なるほど」

日頃、こういった場に離れていない善治郎は、店員の販売攻勢に押され、ただ店員の言うことに頷くばかりになっていた。

第一章5【緊張の一瞬、運命の日】

数日後、期日の近かった仕事を一通り終わらせた善治郎は、新人研修の時以来となる定時帰宅を果たした自宅のパソコンの前で、苦悩のうなり声を上げていた。

「グオオ……、三年、たった三年の為に百五十万か……」

善治郎をうならせているのは、ハイブリッド発電機、家庭用水力発電機それぞれの販売会社からの返答メールである。

善治郎が問い合わせた内容は、大ざっぱに言って「そちらで販売している発電機は、自分で設置できる物なのか?」、「そのメンテナンスは、自分で可能なのか?」、「可能だとすれば、自己メンテナンスで稼働保証期間はどの程度か?」という三つであった。

それに対する二社の返答はほぼ同じ物であり、「お客様ご自身の手で設置は可能であるが、不安があるようならば、設置も弊社に任せて欲しい」、「購入時の資料に目を通せば、表面的な自己メンテナンスは可能だが、保証は出来かねる。出来れば、修理もこちらに一任して欲しい」、「稼働保証期間は三年」という善治郎の希望を打ち砕く、無情なものであった。

「三年、たった三年か……」

善治郎は、うつろな目で呟く。

元からある程度覚悟はしていた。そもそも、万が一メンテナンスフリーで善治郎が死ぬまで稼働してくれる夢の発電機があったとしても、肝心の家電――エアコンや冷蔵庫自体にも寿命はあるのだ。

エアコンや冷蔵庫のメーカー保証期間は、おおよそ十年弱。

どのみち、それくらいの時間がたてば、文明の利器から切り離された異世界生活に突入することは決まっている。

だから、持ち込む電化製品は、異文明になじむまでのいわば『補助輪』のようなものと、善治郎は考えていた。

「十年あればあっちの気候にも多少は身体が慣れるだろうし、場合によってはアウラさんに無理を言って、昔のマハラジャの宮殿みたいな、壁から水が流れる部屋とかも作ってもらえるかも知れないしな―」

善治郎は、マウスから手を話すと、両手を天井に突き上げるようにして、伸びをした。

こちらにも、ネットで調べた知識なのだが、かつてエアコンなどという上等な物がなかった時代、莫大な財力を有するインドのマハラジャの中には、壁一面から水が流し、床の溝を伝わって外に排水されるという、大がかりで原始的な仕組みによって、涼を取っていた者もいたという。

原理的には、昔の日本で行われていた『打ち水』などと一緒だ。水が蒸発する際に発生する吸熱現象を利用して、室温を下げるのである。

これならば、異世界の技術でも製造は可能そうであるが、いかにせん素人の善治郎が見ても、建築コストがバカみたいに掛かることは、予想できる。

向こうの国は、長い戦乱の世を勝ち抜いて、今まさに復興の真っ最中だとアウラは言っていた。

そんなときに、女王の伴侶と言う名の種馬ごときが、そこまで財力と労働力を浪費することを、アウラが許すだろうか？

少なくとも、三年後ではまず無理だ。だが、十年後ならば、順調に国力が回復していれば、ある程度の贅沢も許されるのではないか。

そう考えていたのだが。

「三年じゃ無理だよなー、どう考えても。やっぱりネックはバッテリーカー」

善治郎は、パソコンに向かい会い、考える。

ハイブリッド発電機には、色々と精密が部品も使われているが、水力発電機に限れば問題は、ベアリング（プロペラ回転部分の軸受け）と、バッテリーに限られた。

考えて見れば当たり前のことであるが、どのような発電機でも、バッテリーは必ずと言って良いほど組み込まれているのである。

そのバッテリーの寿命が約三年。幸い、元々消耗品であるため、バッテリーの交換は説明書を見れば素人でも十分に可能な仕組みになっているのだが、だからといって「予備のバッテリーを大量に買っていけばOK」と言うことにはならない。

メーカーがばら売りをしてくれない、と言うことではない。元々水力発電機は、日本の法律上と都心部の河川には設置できないため購入者の大半は、安易にメーカーに修理を頼めないような所に住んでいる者が多い。

そのため、不慮の事故などに対応するため、発電機の購入者が予備バッテリーも合わせて購入すること自体は、さほど不自然ではないのだが、問題は、予備は所詮予備だということだ。

確かに、使用していないバッテリーは、二十四時間三百六十五日使い続けているバッテリーと比べれば遙かに劣化していないが、それでも三年もたてば、素人の保管状態では劣化はする。

少々乱暴な例えだが、買いだめしておいた電池が、五年後、十年後、メーカーの保証通りの性能を発揮するか？ と考えて見ると、少し理解しやすいのではないだろうか。

「けどまあ、予備のバッテリーを三つくらい持って行けば、ある程度は持つかない？ 何とか十年は持たせたいな。ベアリングの方は十年保証だし、取り替えも難しそうだから要らないか？ あ、でもどのみち十年後なら家電の大半は寿命なんだから、ダメ元で自己修理に賭ける価値はあるか」

最初の数年を楽しむためだけで終わっただとしても、電力の持ち込みは諦めたくない。

学生の頃は、よくテレビやレンタルDVDを見ていた善治郎であったが、社会人になってからは取り溜めするばかりで、見る時間がなく、ハードディスクから落としたDVDばかりがドンドンと溜まっていった。

サッカーのアフリカワールドカップもテレビのニュースで結果を見ただけだし、ヨーロッパチャンピオンシップサッカーも、取るだけ取って一度も見えていない。

ネットで評判の良かったドラマのたぐいは、年に二、三本は録画していたし、善治郎が中学生の頃からずっと見続けていた、某アイドルグループがやっている日曜夜七時の一時間番組も、社会人になってからはまだ一度も見えていないのだ。

仕事もせず、衣食住が満たされ、ただダラダラ取り溜めたテレビ番組を見る時間。

恐ろしく、非生産的な時間の過ごし方であるが、仕事に疲れた今の善治郎には、その生活がこの上なく魅力的なものに思えてならない。

たとえば、頭の片隅で「そのうち、そういう生活に飽きてきて、身の置き所がなくなったりしないかなあ？」とう疑問がわいていても、今は抗えないくらいに魅力的だ。

「所詮持つて行けるものは、絨毯一枚分しかないんだし、日本円は

持っていてもしょうがないもんな。いっちゃぱーっと使ってやるか！」

開き直った善治郎は、持って行く家電製品の情報を調べ始める。

「ええと、エアコンも頑張れば自分で設置できるよな。あれ？でも、室外機の配管はどこを通せばいいんだ？あの宮殿の外壁、確かめっちゃ分厚い大理石作りだったよな？そもそも、あの滅茶苦茶広くて天井の高い部屋を普通のエアコンで、冷却できるのか？二十畳用でたりる、か……？」

冷静になれば、異世界での家電生活には数多くの壁が立ちはだかっているようだ。

それでも、よりよい未来を一秒でも長く継続させるため、善治郎はさして性能の良くない頭をフル回転させるのだった。



一ヶ月という準備期間は、アッという間に過ぎ去る。

この一ヶ月で出来る限りの準備を整えた善治郎は、床が抜けそうなくらいにぎしりと物が詰まった六畳間の真ん中で、バクバクなる心臓を抑え、深呼吸を繰り返していた。

「そろそろか？ いや、まだか……ちよつとして、あれは全部夢だったんじゃない？ いやいや、そんなことねーだろ。現に絨毯も指輪もあるし。……けど、何らかの不測の事態が起きて、俺の再召喚がご破算になるってことはあるよな？」

右手に持つカッターナイフで、定期的に左の小指の傷をほじくり、絨毯に血を垂らし続ける善治郎は、この期に及んで最大級の不安にかられていた。

すでに、異世界に渡るための準備は整えてしまっている。

会社はどうか後腐れなく辞めてきたし、ガス、電気、水道、電話、携帯電話など、ライフラインの契約も全て解除してある。アパートの管理人にも今月いっぱいこの家を出ると伝えてある。

銀行や郵便局の口座はそのままにしてあるので、来月の十日には最後の給料が入金されることだろうが、善治郎がその糧の自分の手で掴むことはないだろう。ないはずだ。あつては困る。

ここまで準備を整えて、万が一にも召喚されなかったりすれば、善治郎は使い道のない家庭用電力発電機や、バカみたいに長い延長コードなどを手に、ひたすら路頭迷うはめになる。

「やばい、頭がクラクラしてきた。血、出し過ぎたか？」

目の前が暗くなってきた錯覚に襲われた善治郎がそう呟くが、そんなはずはない。先ほどから、流している血の量など、病院で年に一度受けている血液検査で抜かれる量の十分の一にも満たない。

そのめまいや視界が狭まる感覚は、全て精神的な物に起因している。

「忘れ物はないよな？ 台車の上に発電機はあるし、延長コードもある。エアコン、冷蔵庫、パソコンにお土産の酒類。各種グラスや

皿とか食器も持ったし、指輪はポケット中、と」

現在善治郎は、持っている中で一番値の張るスーツを着ている。仮にも、結婚を申し込みに行くのだ。たとえば、異文化、異世界の嫁の元とはいえ、こちらにもそれなりの格好がある。

最初は、披露宴で新郎が着るような白スーツを用意しようかとも思ったのだが、その馬鹿げた高値に即刻それは諦めた。あれは、庶民が一度しか着ない衣類に、かけてよい金額を大幅に踏み越えている。

「結局、アウラさんに買っていくものは、指輪以外には酒だけになっちゃったけど、大丈夫だよな？ アウラさん、酒好きみたいだったし」

絨毯の片隅には、ブランデーやらウイスキーやら、はてには日本酒やワインのボトルが纏めて陳列されている。

日頃、酒と言えば発泡酒、極まれに一本千五百円程度のウイスキーを飲む程度の善治郎にとっては、一本一万円とか二万円とか値の付いた酒など、正気の沙汰には思えないのだが、仮にも女王の土産には、そのくらい張り込む必要があるだろう。

そう言えば、向こうで出された酒は、度数の薄い果実酒しかなかったことを思い出した善治郎は、急ぎよ家庭用の蒸留器を購入したのだが、果たしてこれで蒸留酒がちゃんと造れるのか、まだ試したことはない。

まあ、成功すれば設け物、ぐらいの気持ちである。

善治郎は、ふと冷静になって、肩に食い込んだリュックサックのヒモが、一張羅のスーツにシワを作っていることに気づく。

「うわっ、やばい。向こうで、スーツのしわ伸ばしなんて出来るのかな？ だからといって、これを置く勇氣はないからな。仕方ないと割り切るべきかー」

背中に背負っているリュックの中身は、着替え一式と予備の靴。契約を解除した携帯電話とソーラー充電器。他には、乾パン、チョコレート、水のペットボトル、ダース買いたライターとツールナイフ、手回し式のLEDライトと熱材製の毛布など、俗に言う『非常用袋』の中身に近い物がぎっしりと詰まっている。

もし、万が一、召喚される場所が狂ったら。召喚される時間が狂ったら。絨毯の魔方陣が上手く働かず、身につけている物しか持ち込めなかったとしたら。そんな不測の事態を考えると、多少服にシワをつけても、リュックを絨毯に下ろす気にはなれない。

もちろん、ある意味一番大事な代物であるアウラに送るペアリングは、箱ごとしっかりスーツの内ポケットにしまっている。

善治郎は不意に、ポケットにしまった指輪を再度確認したい衝動にかられたが、生憎右手にはカッターナイフを持ったままだし、左手は小指の先からポタポタと血を流している最中だ。

一度カッターナイフを絨毯の下ろして、内ポケットを探ってみようか。善治郎がそう考えた、ちょうどその時だった。

「ぐっ……！？」

身に覚えのある軽い酩酊感が、絨毯の上にしゃがみ込んだ体勢の善治郎を襲う。

とっさにカッターナイフを投げ捨て、両手を絨毯の上に付いた善治郎が、右隅のほうから『ガチャン』という音を聞いた次の瞬間、頭上から一ヶ月ぶりに聞く、迫力のある女の声が降り注ぐ。

「ようこそ、婿殿。二度目の召喚もうまくいったようで何よりだ。今度こそ、真の意味で貴方にこう言うことが出来る。この世界、我が国にようこそ。歓迎しよう、我が生涯の伴侶殿」

「アウラさん……」

見事、絨毯丸ごと転移を果たした善治郎は、立ち上がることも忘れて、両手を広げて歓迎の意を示す女王を、惚けたように見上げるのだった。

第二章 1【婿入り道具の危険物チェック】

無事異世界に転移を果たした数十分後。

善治郎は、スーツ姿のまま、一ヶ月前と同じゲストルームに通された。

善治郎が持ち込んだ、荷物一式は、城の兵士達が「責任を持って、後宮に運び込む」のだそうだ。

魔方阵の絨毯に乘せていた物はもちろん、善治郎が背負っていたリュックサックまで丸ごとである。

あまりに意図が見え透いた対応であるが、向こうの立場に立ってみれば極当たり前の要求であることは理解できたため、善治郎は特に逆らうこともなく、兵士達に荷物一式を預けたのだった。

無論、台車に乗せた水力発電機を初め、冷蔵庫、エアコン、フロアスタンドライトなど、電化製品を一つずつ指さし「これらは壊れ物ですので、取り扱いには十分に注意して下さい」と何度も念を押すことは忘れなかったが。

「そうだよな。王宮にいきなりあれだけ、怪しげな物体大量に持ち込んだら、まずは危険物がないかチェックされるのが当たり前か」

最悪、持ち込んだ電化製品などを危険物として処理される可能性もあるにはあるが、善治郎はその辺りやある程度樂觀視している。曲がりなりにもあれらの物資は、女王であるアウラの許可を得て持ち込んだ代物だ。

もし、まかり間違って持ち込んだ道具のうちどれかが危険物だと思なされたとしても、善治郎に直接弁明する機会ぐらいはくれるはずだ。

「危険物や、変な野心があるように勘違いされるような物は、意識

的に排除してきたつもりだけど、まあ、異世界だからあ……」

なんだかんだいっても、不安は残るのか、善治郎は溜息をつきつつ、スーツの上を脱ぐと椅子の背もたれにかける。

ついで、ネクタイの結び目に人差し指を引っかけると、グイグイ引っ張って喉元を緩め、ワイシャツの第一ボタンも外す。

「……ふう」

これで少しは楽になった。右手でパタパタと喉元に新鮮な空気を送り込んだ善治郎は、待ち時間を持て余すように、広いベッドの上に仰向けに倒れ込むのだった。



善治郎が広いゲストルームで暇を持て余している頃、カープア王国女王アウラ一世は、善治郎が持ち込んだ大量の『婿入り道具』を、部下達に一つずつチェックさせていた。

「全て開いて吟味しろ。ただし、開け方が分からないものは、無理をせず、印だけつけておけ。後で私の方からゼンジロウ殿に直接問いたです。危険な物、不審な物があったら、自己完結せずに全て私

の所に持ってまいれ」

「はっ、了解しました！」

「承知いたしました」

白い革鎧に身を包んだ近衛兵と、南国らしい半袖ミニスカートのエプロンドレスを着た侍女達が、女王陛下の命に従い、善治郎の荷物を丁寧にかけていく。

スリッドア冷蔵庫を上から順に開き、中に首を突っ込んで確認している者。エアコンの中を確認しようと、首を傾げている者。半透明の衣装ケースを開き、善治郎がしこたま買い込んだTシャツやトランクスパンツを一枚一枚丁寧に開いては、たたみ直している者。

突如王宮に持ち込まれた大量の『不審物』である。チェックを怠るわけにはいかないが、持ち込んだ相手は、女王の夫となるやんごとなきお方だ。

万が一にも品物を破損させたり、汚したりするわけにはいかない。そのため、十数人がかりだというのに、確認作業は中々はかどらなかった。

それでも、そうしているうちに、気になる物を発見した人間が、アウラの所に報告をあげる。

「陛下、こちらの透明な容器の中身は、酒のようです。特殊な封がされている模様で、開け方は分かりませんが、割れた器の中身から、酒の匂いがしています」

善治郎がアウラへの土産として持ち込んだ酒類。転移の衝撃で倒れてしまったのだろう。比較的薄い瓶に入っていた日本酒とワインが一本ずつ割れてその中身を絨毯にしみこませていた。

言われるまでもなく、その匂いから善治郎の荷物に酒が混ざって

いたことを知っていたアウラは、小さく一つ頷くと、

「残っている酒は纏めて酒蔵に安置せよ。割れた酒の器はこちらに持ってまいれ。あ、持ち運びには十分気を配れ。どうやら、その器は木樽などとは比べものにならぬほど割れやすいようだ」

そう、兵士と侍女に命令する。

「はっ、承知しました」

「はい、こちらです」

兵士がそつと両手に一本ずつ酒瓶を持ち、部屋から出て行くと同時に、侍女は割れた日本酒とワインの瓶を取り、アウラに差し出す。

わざと曇りガラスにした白い日本酒の瓶と、濃い赤紫色の透き通った赤ワインの瓶。その二つの破片を手にとったアウラは、窓から差し込む陽光に透かせて見て、驚きの声を上げた。

「すごいな。まるで水晶を加工したかのようだ。婿殿の世界では、この様な器が一般的なのか？」

この世界全体を見渡せばどうか分らないが、少なくともここカイプア王国には、ガラスの製造技術が存在しない。

現代の地球で作られた酒瓶のたぐいは、この世界の人間にはただの器というより、一種の芸術品に映る。デザインにも凝っている、ブランデーやウィスキーの瓶は特にそうだ。

「陛下、こちらはどうかやら食器のようです。グラスも皿も、木や銀ではなく、その酒瓶と同じような透明な材質か、光沢のある石の様

な物で出来ています。こちらにも、転移の衝撃で数枚破損しているものがありました」

善治郎が持ち込んだ食器は、日本ではごく一般的な陶器製のものであり、ついでに持ってきたワイングラスや、ウィスキーグラスは全てガラス製である。

善治郎が、わざわざこんな壊れ物を持ち込んだのは、前回食事を摂ったとき、この世界の食器が全て木製か金属製であることに気づいたからだ。

わざわざそれを指摘するほど、気になることではなかったが、陶器やガラスの食器に慣れてきた善治郎には若干の違和感があった。本人も気づいていないが、特に善治郎が違和感を覚えたのは、酒や水のグラスである。

銀は、他の金属と比べれば味移りのしない金属であるが、それでもやはり全く味がしないわけではない。

フォークやスプーンは日本でもステンレス製が一般的なため、善治郎も違和感は覚えなかったのだろうが、グラスのたぐいは違う。言うならば同じメーカーのお茶でも、ペットボトルで飲むのと、缶で飲むのと、ガラスのコップに空けて飲むのでは、味が違うように感じるのと同種の話だ。

アウラは、無色透明のワイングラスを手にとると、チンと指で弾く。

「これも見事だな。美術品の収集癖がある貴族ならば、これ一つでずいぶんな譲歩を引き出せそうだ」

無論これは、善治郎の財産であり、いかに妻であってもアウラに好きにする権利はない。しかし、あの物わかりが良くて、人の良い

婿殿の事だ。頼めば一つくらい融通してくれるのではないだろうか。いつの間にか、籠絡すべき貴族の顔を思い浮かべ始めたアウラは頭を振り、現状に思考を向ける。

「他にはなにか、あったか？」

「はっ、陛下。こちらをご覧下さい。これは、ひょっとして『武器』のたぐいなのではないでしょうか？」

そう言って、兵士が持ってきたのは蒼い長方形の箱に収められた金属の棒と、小さなねじくれた釘が沢山詰まった小袋、そして小さな刃が正面から向き合った形の不思議な刃物だった。

「見せてみる。うむ……いや、武器ではないな。恐らくなにかの道具だろう。武器として使うにはあまりに非効率的すぎる」

手渡された『ドライバーセット』『ネジ釘』『パイプカッター』を見たアウラは答えた。

それらは全て、エアコンを取り付けるための道具である。他にも『ハンマードリル』や『真空ポンプ』や『真空計』など、異世界人には意味不明の道具がたらと並んでおり、それら一式があればエアコンの取り付けは可能である。

ただし、経験者に限る、と但し書きが付くが。

ネットで一通り調べた結果、素人が紙の上の知識だけでエアコンの取り付けに成功する可能性はかなり低いと知った善治郎であったが、そのときにはすでにエアコンは購入した後であった。

エアコンの取り付け方を説明しているインターネットのホームページを片っ端からプリントアウトして持ってきている辺り、『エアコンのある異世界生活』を諦める気はないようだが、速攻で『扇風

機』と『冷凍室に入る大きさの金だら』を購入してきたという事実を鑑みると、現実がまるで見えていないわけでもなさそうだ。

続いて別の兵士も、なにに使うのかわからない装置を持ってアウラの前に進み出る。

「陛下、これは兵器ではないのでしょうか？ ご覧下さい。一見ただの箱に見えますが、中には複数の刃が設置されており、この横の棒を回すとこの通り、中の刃が高速で回転する仕組みになっている模様です」

「ほう、これは興味深いな。面白いカラクリだ。しかし、凶器ではないだろう。これで一体どうやって、攻撃を加えるつもりだ？」

「敵の手を掴み、この箱の中に突っ込み棒を回す……とか？」

言ってる途中で自分でも説得力の無さに気づいたのか、言葉が尻すぼみになる兵士に、アウラは苦笑を浮かべて突っ込みを入れる。

「それでは兵器ではなく、拷問道具だ。まあ、使いようによっては危険かも知れぬが、恐らく攻撃的な意図で作られた道具ではないだろう。元の場所に戻しておけ」

「はっ」

兵器やら拷問道具やら、色々不名誉な役割を押しつけられそうになった、善治郎の『かき氷機』は、無事に元あった場所へ戻された。

その後も、大量に買いだめた石鹸やら、歯ブラシやら、蚊取り線香やら、異世界人にはさっぱり用途の分からないものがゾクゾクと

発見される。

同じものを複数購入した、LEDフロアスタンドライトは、見た目だけならば、この世界にある大型の燭台に近い形をしているので、漠然と用途が想像できるようだが、蝋燭を立てる場所も、皿皿に相当する部分もないため、結局はこれも謎の物体のままだ。

そうしていううちに、絨毯の上に会った荷物ではなく、善治郎が直接背負っていたリュックサックの中身を確認していた侍女が、口の開いたままのリュックを片手に、アウラの前にやってきた。

「へ、陛下ッ。こちらの中身は水、食料、毛布や着替えが大半でした」

侍女の報告にアウラはしばし考え後、得心がいったように頷いた。

「ああ、なるほど。何らかの非常事態に備えていたということか。そうだな、婿殿には私の召喚魔法が失敗したあかつきには、どのような結果が出るか説明していなかったからな」

召喚魔法が失敗した場合には、魔法自体が発動しない。そのため、善治郎の用心は全く無駄だったのだが、この場合失態を犯したのはどちらかと言うことアウラの方だ。

「しまったな。婿殿に余計気を遣わせてしまった。後でわびねばならぬ。……ん？ どうした？ まだ、何かあるのか？」

リュックを持った侍女の顔色が悪いことに気づいたアウラは、なぜか顔色を失っている侍女にそう問いかける。

侍女は、青ざめた顔のまま「は、はい」とか細い声で答えると、

「こ、こちらをご覧下さい」

といって、リュックの横のポケットから、なにやら小さな巾着袋の有名モノを二つ取り出し、アウラへと差し出す。

「む、これは……!？」

無造作に、巾着袋を開き、中を見たアウラはその赤茶色の目を見開き、絶句する。

アウラが開いた二つの巾着袋。一つには、小指の先くらい大きさの、カラフルな色を封じ込めた透明な宝玉がぎっしりと入っており、もう一つにはやはりキラキラとカラフルに光る、砂粒大の真ん中に穴の開いた小さな粒が、無数に詰め込まれていた。

平たく言えば『ビー玉』と『ビーズ』である。

これも、善治郎の『ハプニング対策』の一つだ。

万が一、王宮以外の異世界に漂流してしまった場合のことを考えた善治郎は、異世界の街で換金できそうで、それでいてあまりかさばらないモノは何かと考えた結果、『ビー玉』と『ビーズ』を選択したのである。

王宮で、窓や食器に一切ガラスが使われていなかったことを思い出したため選択した代物であるが、内心善治郎は、異世界の人間を『未開地の原住民』扱いしている気がして、あまり良い気分はしていなかった。

しかし、背に腹は代えられない。ビー玉一つで一泊の宿が取れたり、ビーズ数粒で食事一食分の代金になれば御の字。それくらいに考えていた善治郎であったが、その価値観は大幅にずれていると言わざるを得ない。

目で見える気泡もほとんどなく、完全な真球をしたガラス玉のこの世界での価値は、現代日本のような『おもちゃ』でも、善治郎が想像しているような『ちょっとした通貨の変わり』でもない。

そのままズバリ、『宝玉』として扱われる。

実際、地球でもトンボ玉と呼ばれるガラス玉の一種は、その歴史的価値も付加されているとはいえ、一個百万円を超える金額で取引されるモノもそう珍しくはない。

善治郎が持ち込んだビー玉やビーズはそこまで大したものではないが、ガラスの製法自体が伝わっていないこの世界では、その価値は善治郎の想像を遙かに超えるモノとなる。

「嚴重にしまして、元に戻しておけ」

「は、はいっ……！」

命令を受けた侍女は、女王の手から二つの巾着袋を受け取ると、爆発物でも扱うような慎重な手つきで、それをリュックのポケットへと戻していった。

長かった善治郎の荷物チェックも、終盤に差し掛かり、すでに自分の担当を終えて、作業中の仲間達の邪魔にならないよう壁際に引っ込んだ兵士や侍女達が目立ち始めた頃、アウラは全体に声を掛ける。

「もう、なにか報告することはないか？」

すでに大部分の品については、一通り報告を受けている。

半ばもう報告はないと決めつけていたアウラであったが、ふと衣装ケースを開いている兵士の方に視線を向けると、その男はあから

さまにビクツと身体を震わせ、なにやら素早く手に持っていた物をケースの中に戻そうとする。

「待て！ 貴様、今何を隠した！？ 動くなっ、ゆっくりとその右手をケースから出せ！」

見咎めたアウラは、鋭い声を上げる。

（今の動きはなんだ？ 媚殿の持ち物に毒か何かを忍ばせたのか！？）

厳選に厳選を重ねて、この場に集めたはずの近衛兵士の中に、裏切り者がいたのか？

アウラは厳しい、苛烈な視線で、不審な兵士を射貫く。

「へ、陛下！ 私は決してやましいことは……！」

「言い訳はきかん！ 黙って右手を出せと言っている」

驚いた様子で弁明を始める兵士に、アウラは鋭く叱責の声を飛ばした。

「はっ」

その様子に、これは逆らっても無駄であると観念したのか。兵士は、ゆっくりと衣装ケースの中から右手を引き出す。

兵士の右手には、アウラが見咎めた通り、なにやら目にも鮮やかな赤い布地が握られていた。

「それはなんだ？ こちらを向いて、両手でその布を広げて見せろ」

「へ、陛下」

「広げろ」

なおも、抵抗しようとする兵士に、アウラは迫力のある声でそう命じる。

周囲では、事の成り行きを見守る他の兵士達が、万が一の事態に備えて、壁に立てかけてあった斧槍や剣を取りだし、詰問を受ける兵士を遠巻きにしている。

侍女達もいったん作業を中止し、兵士達の背中に隠れるように壁際へと避難している。

「……………」

緊迫する空気。痛いほどの沈黙。誰かがゴクリと、緊張で唾を飲む音が聞こえる。

そんな中、なにか大切なモノを諦めたように、その兵士は一つ大きな溜息をつくど、右手に持っていたその布を、女王の前で大きく広げて見せた。

それは、薄手の赤い「ネグリジェ」だった。無論、女物である。

「……………」

アウラは、その赤い布地越しに、横を向く兵士の顔をマジマジと見た。『布地越し』である。布地を顔の前に掲げる兵士の表情が、アウラの側から透けて見えるのだ。

身体を他者の視線から護るという機能は、全く期待できない服である。

アウラは無言のまま、その赤いスケスケネグリジェを凝視し続けた後、兵士に問いかけた。

「その服は、媚殿の衣装ケースに入っていたのか？」

忠誠を誓った女王陛下に嘘をつくわけにいかない近衛兵士は、ごく短く素直に答える。

「……はい」

「……………」

弛緩する空気。痛々しい沈黙。誰かがゴクリと、性的興奮で唾を飲む音が聞こえる。

そんな中、最初は俯いてずっと何かを堪えていたアウラが、ついに我慢の限界を超え、沈黙の空間に笑い声を響かせる。

「クッククク……。そうか、そうであったか。いや、すまぬ。これは私の邪推であった」

兵士を疑った女王は、そう自らの非を認め、兵士に謝罪のことを述べた。

「いえ、これも責務ですので」

兵士としてはそう言葉を返すしかない。冷静に考えてみれば、とっさに女王の目から何かを隠そうとしたのだ。疑われるのも無理はない。

とんだ災難である。

女王の伴侶の荷物の中から、明らかに女物としか思えない、やたらとエッチな服を見つけてしまったのだ。

その服の持ち主は誰で、その持ち主はその服を誰に送って、どうしてもらいたいのか。考えるまでもなく、はつきりと分かってしまう。

「疑われるような言動を取った軽率な振る舞い。誠に申し訳ありません」

エッチなネグリジェを右手に持ったまま、神妙に頭を下げる兵士の様子に、アウラの笑いのツボは刺激されっぱなしだ。

「よい、気にするな。先にも言ったとおり、これは私の邪推だ。忘れてくれ。しかし、それにしても、そうか。婿殿の荷物に、そのような代物が、なあ。……クククッ」

肩を震わせてなおも笑い続けるアウラは、笑いすぎで目尻に溜まった涙を指で拭い、呟く。

「それにしても、婿殿も『男』よのう」と。

『スケスケネグリジェ』。それは、善治郎が一世一代の大勝負のつもりで送る『結婚指輪』も霞む、そんな恐れのある素晴らしいプレゼントであった。

第二章2【婚姻の義、そして初夜】

山井善治郎が異世界に二度目の転移を果たしてから、十五日後。カープア王国では、女王アウラ・カープアと、百五十年前異世界に逃げた王族の子孫、ゼンジロウ・ヤマイトの『婚姻の儀』が執り行われる手はずとなっていた。

これは、異常なくらいに早い日程である。

準備自体は、善治郎が一ヶ月前にYESの返答をした時点から、整えていたのだろうが、それにしても一ヶ月と十五日、わずか四十五日だ。

現役国王の『婚姻の儀』の準備期間としては、異例の短さと言えるだろう。通常であれば、一年くらい時間を掛けて、国内外の王族貴族に通達を出し、国威を示すためにも最大級の贅をこらした式とするものだ。

それをこのような短時間で結婚までこぎ着けようとした理由は、「下手な横やりを入れられたくない」というアウラサイドの思惑にある。

なにせ、カープア王国では初めてとなる、現役女王の結婚である。前例がないぶん、いちゃもんをつける気になれば、いくらでもつけられる。

女王の結婚が権力構造を複雑にするのは間違いない事実だし、悪い事に善治郎は「アウラ以外の女」と子をなしても、次の世代に『時空魔法』を継承可能なほどに濃い王族の血を保有している。

そのため、アウラは善治郎の具体的な血の濃さが、対外的に広まる前に、強引に結婚まで話を持っていく必要性を感じていたのだった。

カープア王国で、王族もしくは、それに準ずる高位貴族の『婚姻の儀』の時だけ使用される『竜王の間』。

その広く荘厳な広間に、多くの高位貴族が集い、神妙な表情で式の進行を見守っていた。

『婚姻の儀』の主役は二人。

新婦であるアウラは、ノースリーブの白いドレスを纏っている。スカートはフレア状にはなっているが裾を引きずるほど長くなかったり、レース飾りがない代わりに摘んだばかりの白い生花が縫い込まれていたりと、細かな違いはあるものの、そのドレスは地球でも「ウェディングドレス」として通用しそうな作りである。

（そういえば、日本の白無垢も、西洋のウェディングドレスも、色が白ってことでは共通しているよな）

花嫁衣装に白が尊ばれるというのは、国境どころか世界すら超える共通認識なのだろうか？ 左右から突き刺さる好奇の視線を少しでも忘れようと、そんなことを考える善治郎の左腕に、ドレス姿のアウラがそっと右手を添える。

新郎である善治郎の服装は、転移してきたときに着ていた一張羅のスーツだ。

贅をこらしたウェディングドレスを着て、王権を示す王冠を被ったアウラの隣に立つと、少々見窄らしく見える格好だが、これには致し方ない理由がある。

『家庭の長は男』という常識が骨の随までしみこんでいるこの国で、現役女王の結婚という前例のない式を執り行うのだ。

夫となる善治郎の服装、式場での振る舞いについては、文字通り諸説紛々飛び交い、はっきり言えば決まりようがなかった。

カープア王国の風趣に会わせれば、新郎である善治郎は、新婦であるアウラよりも威厳を示す服装が求められる。しかし、新婦であるアウラは現役女王であるため、王冠を被って王権を示した形で『婚姻の儀』を迎える必要がある。

いかに夫とはいえ、女王より威厳のある格好をすれば、王権の絶対性を揺るがし兼ねない。かといって新郎が新婦より、威厳のない服装で出席すれば、「王族が国の伝統をないがしろにした」と、非難する者が出てくる。

結局、アウラは善治郎が異世界の生まれであることを利用して、「新郎の服装は新郎の世界の常識に合わせる」という「夫を立てる」理由で、この問題をうやむやにしているのである。

善治郎が着ているスーツは、若者であれば冠婚葬祭に出席しても問題の無いものではあるが、間違っても『新郎』が着る代物ではない。もっとも、そんな事は善治郎本人しか分からないのだから、ここは善治郎が口を噤んでいれば、四方丸く収まる話である。

出席した国内外の貴族達が、主に視線を向けるのは、やはり見慣れたアウラ女王ではなく、初めてお目にかかるその夫となる男だ。

（ほう、あれが）

（確かに、なかなかの魔力をまっておりますな）

（どうやら、王家の血筋の継承には、十分そうですな）

（問題は、そのお人柄ですが）

（なんでも、後宮に引きこもりっぱかりで、ほとんど姿を現さないのだとか）

（つまり、アウラ様にとって都合の良い、伴侶である？）

（さあ、それは、どうでしょう）

（せめて、嗜好の一端だけでも知ることができれば、お近づきになるきっかけとなるのですが）

（これは噂ですが、新郎殿の好みは赤いスケスケの……）

善治郎は、周りから突き刺さる視線を無視するように、必死に意識を左腕に感じるアウラの体温だけに集中し、ガチガチに固まった足取りで前へ進む。

（まずい、緊張で足の感覚がない……！）

自分が今、足の長い絨毯の上を歩いているのか、大理石作りの床の上を歩いているのか、その区別すら付かない状態だ。

ただ、真っ直ぐ歩くという行為が、これほど難しいとは思わなかった。

（やばい、転ぶ。絶対に転ぶッ！）

顔を引きつらせ、冷や汗を流す善治郎であったが、その危機は隣に立つ妻となる女が回避してくれた。

（あっ!?!）

バランスを崩しかけている善治郎の様子に気づいたアウラは、善治郎の左腕に右手で掴まっている振りをして、逆にガッチリと善治郎の腕を下から押さえ、転ばないようにバランスを取ってくれる。

（た、助かった……）

アウラは、生まれたときから直系の王族として、衆目に曝されて生きていた現役の女王。一方自分は、この年まで平々凡々に生きてきた、一介のサラリーマン。

このような場に、アウラが慣れていて、自分が慣れていないのは当然のことなのだが、流石に真っ直ぐ歩くという行為まで、嫁さんに助けて貰っては、ちょっと情けない気分になる。

だが、そうやって思考が内側に向いたのが功を奏したようだ。

考え事をしている間に、一時的に周囲の視線を忘れた善治郎は、どうにか必要最低限のバランス感覚と歩行能力を取り戻す。

やがて、初老の神官が待つ壇上へと上がった善治郎とアウラは、足を止めると神官から誓いと祝福の言葉を授かる。

「数多の精霊の祝福が、二人の未来にあらんことを。たとえば、その未来に七難八苦があろうとも、祖霊の声に耳を傾け、夫はその背に妻を護り、妻はその背に手を添え支え……」

神官からのありがたい言葉が、延々と続く。

この手の『祝福の言葉』というのも、異世界でもそう変わらないものようだ。

魔法が存在する世界なのだから、ひょっとして『祝福の言葉』にも本当に力があるのではないか、と聞いてみたが、どうやらそんなことはないらしい。

緊張でろくに神官の言葉も聞き取れない善治郎を置き去りに、『婚姻の儀』は恙なく進行していった。



その日の夜。

「ふう、どうにか終わった……」

「フフ、流石に疲れたようだな、婿殿。まあ、私も同様だが」

後宮の一室で、善治郎とアウラはテーブルを挟んで向かい合うソファーに腰掛け、互いの労苦を労い合っていた。

三時間に及ぶ『婚姻の儀』の後、さらに善治郎とアウラは二時間を超える『お披露目の儀』と呼ばれる、式に主役として参加してきたのだ。

この手の儀式になれていない善治郎はもちろん、善治郎のフォロ

ーにまで気を配っていたアウラも、十分に疲労困憊している。すでに、入浴を済ませている二人は非常にラフな服装に着替えている。

アウラは、腰まで届くような深いスリットの入った赤いドレス姿で、善治郎に至っては、向こうの世界から持ってきた、白地にブルーストラ이프のパジャマ姿だ。

まあ、すでに婚姻を済ませ、この後初夜を迎えるのだから、そのような格好を晒しあうことに問題はないのだが。

正面座るアウラが、スリットから除く足を組み直すたび、善治郎はこの後ベッドで行う行為について想像せずにはいられない。

今夜、ついに、善治郎は、今日の前に座っているグラマラスで妖艶な美女を、その両腕に納めるのだ。

（やばい。興奮しすぎて、自分でも興奮してるんだか、緊張してるんだか、分からなくなってきた）

「あ、暑いですね。アウラさんも何か飲みますか？」

善治郎は緊張を隠すようにそう言って、席を立つ。

「ああ、せっかくだから、頂こうか」

「はい。それじゃ、ワインを空けましょう。赤は持ってきたときに割れちゃいましたけど、白とロゼは無事でしたからね」

善治郎は、部屋の隅で低いうなり声を上げている冷蔵庫からワインを一本取り出すと、グラス二つを探しだし、結婚したばかりの妻が待つ、ソファアーへと戻ってくる。

（まずいなあ、自慢じゃないけど、彼女なんて大学二年の時以来だからなあ。どうやって雰囲気盛り上げればいいか、わかんねえや）

正確には、善治郎の女性歴は「大学二年から三年にかけての一年ちよつと間、一人の女と付き合ったことがある」だけである。おかげで、童貞でも彼女いない歴イコール年齢でもないが、実感としては、自分の女関係の経験値は、童貞の頃と大差ないと思っている。

「はい、どうぞ」

善治郎は、二つのワイングラスに白ワインを注ぐと、グラスの一つをアウラの前へおく。

そして、テーブル向かいのソファアへと戻ろうとしたのだが、そこにアウラが声を掛ける。

「ゼンジロウ殿。よかったら、そっちではなく、ここに座らぬか」

そう言つてアウラは、自分が座っているソファアの隣をポンポンと叩いた。

意表を突かれた善治郎は、自分のワイングラスを手を持ったまま、しどろもどろに答える。

「え？ い、いや、ですが、それは……」

「良いではないか。今日より私と貴方は、真の夫婦となったのだ。身を寄せ合うことに、誰憚ることがあろう」

そうまで言われると尻込みするのも、なにやら間違っている気がする。

善治郎は頷くと、

「分かりました。では、失礼します」

と断り、アウラの隣に腰を下ろした。

善治郎の太股と、アウラの太股が隣り合う形でぴったりとくつき合う。

「……………」

「……………」

（しまった。いくら何でも近すぎた）

大の大人が三人そろって座ってもまだ余裕のある長いすに、足と足をくつつけるように腰を下ろしたのだ。ちょっと気まずいが、ここからあえて離れるのも、変に意識しているようで、逆に気が引ける。

先ほど、アウラも言ったとおり、善治郎とアウラは、すでに夫婦なのだ。二人だけの空間で、身体を重ねる事を忌避する理由はない。

（どうしよう、なんか言わねえと……！）

焦る善治郎が、冷たい白ワインをすすりながら、話題を探している間に、アウラのほうからいつも通りの落ち着いた声で話しかてくる。

「それにしても、婿殿の持ち込んだ「電気製品」というのは、本当に見事なものだな。この明かり、この冷却力。まるで、シャロワ・ジリベール双王国にいるような気分になってくる」

そう言ってアウラは、室内を明るく照らす、LEDフロアスタンドライトに目を向ける。

LEDフロアスタンドライトとは、電球部分にLEDライトを使用した、人の背丈ほどある大型の電気スタンドの事である。

善治郎は、一台に付き、三つのLED電球を使うフロアスタンドライトを、合わせて八つこの世界に持ち込んでいた。

三×八で、最大二十四のLED電球を同時に灯すことが出来るのだ。

全開で明かりを灯せば、後宮のこの広い室内も、現代日本の夜くらいには明るく照らすことが出来るだろう。無論、真上から照らす訳ではないないし、光源も複数に渡る分、光のムラが乗じるのは否めないが。

今明かりを灯しているのは、雰囲気重視して、ソファー近くの一台だけだ。

善治郎は、先に話題を振ってくれたアウラの気遣いに苦笑しながら、

「ええ、頑張りましたから。こっちに來てから最初の十日間は、ほとんど発電機の設置に掛かりきりでしたね」

そういつて、少し胸を張る。

事実、この世界にやってきてから今日まで、善治郎が行った唯一の作業が、後宮中庭への水力発電機設置と、そこからこの部屋に電源コードを引く工事であったと言っても良い。

無論、発電機を実際に持ち上げたり、王宮の外を流れる水堀から木製の水橋で中庭まで水を引いたり、後宮の外壁の石をずらし、コ

ードを通す穴を空けたりしたのは、アウラが手配した兵士達である。

しかし、連日三十五度を超える（体感ではない。実際に持ち込んだ温度計が示した値だ）、日本で言えば真夏日の中、水力発電機が無事稼働するよう、設計図を引いて、作業する者達に理解をさせ、指示を出したのは、善治郎だ。

アウラがあえて自分を結婚相手に選んだ理由を考えれば、このような多数の人間と接触し、リーダーシップを発揮するようなまねは慎むべきだとは、わかっているが、こればかりはしょうがない。人任せで成功する作業ではないのだから。

アウラとの結婚を決意してから、地球で過ごした一月の内、もっとも多くの時間をこの、水力発電機の設置方法を身につけることに費やしたかいがあったというものだ。

おかげでこの異世界の後宮で、冷蔵庫も、LEDライトも、パソコンも、今は無事に稼働している。

「確かに、苦勞に見合うだけの価値はあるようだ。うむ、冷たい酒のいうのも、存外悪くない」

アウラは、グラスに入った白ワインを一気に飲み干し、音も立てずグラスをテーブルに戻す。

「フフッ」

善治郎の緊張具合を知ってか知らずか、アウラは隣に座る善治郎の右腕を両手でそっと胸の谷間に抱き取ると、コテリと頭を善治郎の肩に預けた。

右腕を包み込む、柔らかな肉の谷間。右肩から首筋にかかる熱く

湿った吐息。アウラの赤い頭髮から漂う、柑橘系の良い香りは、善治郎が持ち込んだシャンプーの匂いだ。

その柔らかな感触と、甘い香りに、善治郎はあまたがくらくらとしてくる。

「あ、ぐ。あ、あ、そう、そう言えば、先ほど、言っていた『双王国』というのは何なのですか？ その国には、このような仕掛けがあるのですか？」

焦って口数を増やす媚殿に、アウラはクツクツと笑いながら、あえて善治郎の思惑にのるように答える。

「ああ、シャロワ・ジリベール双王国。『付与魔術』の血統魔術を受け継ぐ王家を頂点の一つにいだく、大陸中央部の大国だ。世界で唯一『魔道具』の生産が可能なその国の王宮は、夜は『光の宝玉』で明かりを灯し、夏は『風の宝玉』で涼を取り、冬は『火の宝玉』で暖を取る。

まあ、そういった大陸の情勢は、いずれ覚えて頂くとして。ゼンジロウ殿？ 先ほどから、私は一つ不満があるのだが、な？」

アウラは急に両手で善治郎の両頬を固定すると、クツと善治郎の首を自分の方に向けさせる。

「ななな、な、何でしょうか、アウラさん？」

ろくに抵抗も出来なかった善治郎は、目の焦点が合わないくらい
の至近距離にアウラの顔を見て、盛大にどもりながら返答を返す。

「それだ。その、他人行儀名しゃべり方と、さん付けの呼び方。そ

ろそろ、どうにかならぬだろうか？ その口調は、ゼンジロウ殿本来の物ではあるまい？ 昨日まではともかく、今日から私たちは、夫婦となったのだ。

急に態度を変えろと言うのも無茶かも知れぬが、こういったことは形から入った関係が、やがて身についてくることもあるという。どうであろうか。貴方本来の口調で話しかけてはくれぬか？」

確かに、敬語に近い口調を意識的にしていた善治郎は、少し冷静を取り戻し、答える。

「でも、それを言えばアウラ、さんだって」

「私は常にこの口調だ。特に、畏まっているわけではない。だが、そうだな。確かに、夫を呼ぶときにいちいち『ゼンジロウ殿』と呼ぶのは、少々他人行儀ではあるな。

私も、貴方のことをゼンジロウと呼び捨てにしても良いだろうか？」

ふわり笑い、アウラはそうねだるように問いかける。

「あ、うん、それは、いいよ」

「有り難う、ゼンジロウ」

早速アウラは、善治郎の名前を呼ぶ。

「ささ、貴方も私の名前を呼んでくれまいか、ゼンジロウ」

まだ、了承もしていないはずなのに、交換条件のようにそう強引に自分の意思を押し通す辺り、流石に交渉になれている女王様といったところか。

善治郎は、その勢いに押されるようにして答える。

「あ、アウラ……」と。

「ゼンジロウ」

「アウラ」

息が掛かるほどの至近距離で、顔と顔を寄せ合い互いの名を呼び合う男女。

「……………」

「……………」

元々、今夜結ばれる覚悟を決めていた男と女だ。
相手の唇に、己の唇を近づけていったのは、どちらが先立っただろうか？

「…………ンン」

「…………ム、ンウ」

どちらかともなく、まるでそうすることが自然であると最初から理解していたかのように、二人の唇が重なり合う。同時に、善治郎の両腕は、アウラの背中を強く抱きしめ、アウラの両腕は甘えるよ

うに善治郎の首に絡みつく。

「ん、んん、ンンン……」

「アア……ムウ……ンン」

愛おしげに抱き合い、狂おしげに唇を会わせる。

「……プハア」

「……フウ」

長く、情熱的な口づけをやめたのも、二人ほぼ同時だった。

唇を離れたアウラは、善治郎の肩に顎を乗せ、より一層強く抱きつくと、善治郎の耳を擦るように小声で囁く。

「先に寝室に行く。女には準備がある故、ゆっくり百を数えた後、寝室に来てくれ」

「え？ あ……」

そう言い残し、アウラは善治郎の腕の中から抜け出すと、ソファ―を立つ。

「あ、アウラ」

反射的に手を伸ばす善治郎に、アウラは、首だけこちらに向けと妖艶な笑みを浮かべ、

「焦らずとも、逃げはせぬ。百を数えて、それからだ。な？」

そう言い残し、隣の寝室へと姿をくらますのだった。

「……ふう」

人足先に寝室へ入ったアウラは、後ろ手でドアを閉めると、まず一つ大きく深呼吸をした。それから、真っ直ぐベッドの横に向かうと、そこに立ててある寝室用のLEDフロアスタンドのスイッチを入れる。善治郎から使いからは習っていたが、本当に感嘆だ。パチンと音がなった次の瞬間には、真っ暗な寝室に白い光が満ちている。明るくなった寝室で、アウラは今更ながら、先ほどまでの自分の言動を思い返し、頬を紅潮させ、恥じらいでその豊満な身体をくねらせた。

「こ、これは中々くるものがあるな。世の夫婦は、毎夜毎夜、あの様な嬉し恥ずかしい行為を行っているのか？」

アウラは、赤いナイトドレスを着た自分の身体を、自らの両腕で抱きしめる。

心臓がバクバクわれ鐘のようになり、全身の肌という肌が、熱病にでもかかったかのように熱くなっている。

「よ、よもや、ゼンジロウ殿に気づかれたのではあるまいな？ い、いや、ああして肌を合わせたのだ。気づかれぬはずはあるまい。……ど、どうすればよいのだ？」

初夜を期待して、心臓を高鳴らせたり、肌を熱くしたり。はしたない女だと思われただろうか？

自分から言い出しておいて、今「ゼンジロウ殿」とまた敬称をつけている事に気づかないほど、アウラは動転していた。

まあ、それも無理はあるまい。生きてきた年数と、命の掛かった修羅場を潜った数は善治郎に勝るアウラであるが、肝心の異性との経験は「経験人数一人」の善治郎より格下なのである。すなわち、「経験人数ゼロ人」。真正正銘の生娘だ。

より多くの種をまくことが時には求められる男の王族と違い、確実によりよい血筋の種を腹に受けることを求められる女の王族は、原則、貞操観念がかなりしっかりしている。

そのため、未婚の女王族は、イコール未経験者であると考えて、だいたいは間違いない。

カープア王国の文化では、男女の仲は男がエスコートするのが一般的とされている。素直にその身を善治郎に委ねても全く問題はなはずなのだが、この期に及んでも余裕があるふりをしたがるのは、アウラの女王としての矜持か、はたまた年上としての自負心か。

ともあれ、赤いナイトドレスを脱ぎ去り、ショーツ一枚になったアウラは、キングサイズのベッドに潜り込み、静かにその時を待つ。

やがて、聞こえてくるドアをノックする音。

「ッ！」

『ねえ、もう入っても良いかな？』

ドア越しに聞こえてくる夫の声に、アウラはもう一度深呼吸をすると、いつも通りの平静を装った声で返事をかえす。

「うむ。よいぞ、入ってきてくれ。歓迎しよう、ゼンジロウ」

「お、おじゃまします。ッ！」

そう言って恐る恐る入ってきた善治郎は、スタンドライトに照らし出されるアウラの姿を目の当たりにして、思わず息を呑む。

足を組んでベッドの上に横たえた下半身は薄い上掛けで覆われているが、そのボディラインが透けてみる。

大きな枕を背にして起こした上半身は、頭から垂れ下がる赤い頭髪でかろうじて先端部分を隠しているだけで、その小麦色をした柔らかい双乳は、ほとんど隠れず、あらわになっている。

「おや、いつまでそこで惚けているつもりだ、ゼンジロウ。遠慮は要らぬ。ほら、私の横に来てくれ。熱い一夜をともに過ごそうぞ」

そう妖艶な笑みで、善治郎を誘うアウラの様子からは、先ほどまでの可愛らしい動揺の影は欠片も見受けられなかった。

第二章3【女王夫婦の朝の風景】

枕元においたある携帯電話が、無機質な電子音を奏でる。

「ん……ンン？」

半ば夢うつつのまま、善治郎は右手を伸ばし、手探りで探し当てた携帯電話のモーニングコールを止めると、そのまま顔の前に持ってきて時計部分を見る。

5..30 AM

現代日本に生きるサラリーマンの起床時間と比較すれば随分早い時間帯だが、この世界の基準ではそれでも遅い部類に入る。

照明が、自然の火以外にほぼ存在していない文明では、太陽の出ている時間帯は貴重だ。

一般人は、日の出の時刻である四時過ぎには起き出すのが一般的であり、こんな時刻までゆっくりと寝ているのは、それだけでずいぶんと贅沢な時間の使い方と言える。

しかし、善治郎に限って言えば、本来こんな時間にわざわざ目覚ましをセットしてまで目を醒ます必要はない。

善治郎には、LEDスタンドライトという夜を明るく照らす手段があるうえ、昼に急いでやらなければならない仕事もない身なのだ。

そんな善治郎があえてサラリーマン時代から愛用している携帯電話の目覚まし機能を使ってまで、早起きした理由はただ一つ。

昨夜、無事初夜を迎えた妻――アウラとすれ違いにならないためである。

一緒に床に入り、目が醒めた時にはすでに嫁さんは仕事にいった後だった。というのは、流石にちよつと寂しいものがある。

携帯電話を元あった場所に戻した善治郎が、ベッドに寝そべったまま身体を左に向けると、そこには無防備な寝顔を晒し、スースーと心地よい寝息を立てるアウラの姿があった。

昨夜は行為に及んだ後、濡らしたタオルで身体を拭いただけでそのまま寝たため、善治郎もアウラも一糸まとわぬ裸である。

一応、薄手の毛布のような掛け布団を二人仲良く被っているが、その薄手の掛け布団すら鬱陶しく思えるほど、カープア王国の夜は蒸し暑い。

「……………」

善治郎は半ば無意識のまま、隣で寝る妻の背中に手を回す。

横向きに寝たまま、抱き寄せるようにアウラの背中に右手を回した善治郎は、そのままあやすようにアウラの背中をトントンと手の平で軽く叩いた。

胸元に掛かるアウラの寝息と、手の平に感じる肌触りが、善治郎に昨夜の行為を思い起こさせる。

「アウラ……」

確かに自分は、昨晚この女と肌を合わせたのだ。

その実感が、急速にアウラへの愛情を育てる。アウラの裸の乳房

が、自分の胸板にくっつくように抱き寄せ、善治郎は何度も何度も愛おしげに、アウラの背中や赤い頭髮に撫でる。

そんな事をすれば、アウラが目を醒ますのも必然である。

「ン……アア……？　ゼンジロウ、か」

目を醒ましたアウラは、抱き寄せる善治郎の腕に身を任せ、素直に裸身を善治郎に密着させると、甘える猫のように、善治郎の首の辺りに顔を擦りつけ、喉を鳴らす。

（あー、なんだか、猫っていうより、雌ライオンとか雌虎とか、そういう猫科の大型肉食獣を手なずけた気分だなあ）

首元を感じるくすぐったくて心地よい感触に眼を細めた善治郎は、そんな事を考えつつ、アウラを抱きしめる力を強める。

ちまたではよく女を猫に例えることがあるが、アウラの迫力はそんな可愛らしい生き物には、収まらない。雌豹という例えでもまだ足りない。獅子や虎、そういった食物連鎖の頂点に君臨するような、覇者の雰囲気漂わせている。

しばしの間、互いの体温を実感し合うように、裸のまま抱き合っていた二人であったが、やがてアウラは善治郎の腕の中からスルリと抜け出すと、そのままベッドの外に降りた。

実るべきところは豊かに実り、締まるべきところは締まっている魅惑的な裸身を惜しげなくさらしながら、アウラはベッドの脇に用意してある水桶にタオルを浸し、身体を拭う。

「ふう……」

一応、行為を済ませた後、寝る前に身体を拭いたとはいっても、この熱帯夜で男女が寄り添って一夜を過ごせば、気持ち悪くなるくらいには汗も掻く。

「ああ、終わったら貸してくれ。俺も身体を拭きたい」

アウラと比べると随分と色白な善治郎も、そう言って裸のままベツドから降りると、身体を拭いている妻に近づく。

「ああ、良いとも。なんだったら、私が拭いて差し上げようか？
旦那様」

そうイタズラっぽく笑い返す新妻の誘惑に、一瞬負けそうになった善治郎であったが、頭を振って答える。

「それは凄く魅力的だけど、魅力的すぎて中途半端で済ませられなくなりそうだ。朝から最後まで付き合ってくれるんなら、もう飛びつくんだけど」

「それは残念だ。生憎仕事を立て込んでいて、そこまで時間の余裕がない。すまないが、今夜までまってくれ」

手早く身体を拭き終えたアウラは、水桶にタオルを浸しきつく絞ると、その絞ったタオルを善治郎にほうり投げる。

「了解、滅茶苦茶楽しみにしてる。そう言えば、今日はこの後どうなるのかな？ 食事とかは」

絞ったタオルで身体を拭きながら、善治郎はふと思い出したように、服を着込んでいているアウラにそう尋ねる。

アウラは、

「ああ、朝食と昼食に後宮まで足を伸ばす余裕はなさそうだ。夕食時には、うまくすれば後宮に来られるかもしれない。一緒に食事を摂りたいと言うのであれば、ゼンジロウが王宮の方に来れば、一応可能だが」

と言って、少し探るような視線で善治郎の方を見る。

（王宮で食事って、アウラ以外の貴族達と鉢合わせになる可能性が結構ありそうだな。何も知らない今の俺がへたにそういう奴等と会話を交わしたら、予想もしない方向からアウラの足を引っ張りかねないよな）

あまりにも堂々としたその振る舞いから、つい忘れがちだが、男系社会のこの国では、女王であるアウラの権力は、決して不動のものではないのだ。万が一にも夫である善治郎の口から、アウラへの不満や批判と捉えられるような言葉が発せられたら、それだけでアウラには十分なダメージとなりうる。

（考え過ぎかも知れないけど、用心に越したことはないか）

「いや、王宮までわざわざ足を伸ばすのも面倒くさいし、ここでダラダラ適当に過ごしてるわ。あ、でも、近いうちにこの国の常識とかマナーとか、恥を搔かない程度に覚えたいな。外に出る機会が全くないとも限らないし」

それは、善治郎からの「アウラの足を引っ張るような行動は可能な限り差し控える」という宣言であった。

善治郎の言わんとしていることを的確に読みとったアウラは、愛おしげに笑い返すと、

「そうか。それならば、何としても夕食までには職務をおえて見せよう。夜まで、一人で寂しいだろうが、我慢してくれ。常識やマナーについては、私が直接教えてやればいいのだが、そこまで時間はないな……分かった。適当な人間を見繕っておく」

そう、軽く請けおった。

「悪いな、世話をかける」

「気にするな。不便を強いているのはこちらの方だ」

やがて、服を着終えたアウラと善治郎は、どちらともなく歩み寄る。

「それじゃあ、行ってくる」

「ああ、行ってらっしゃい」

これじゃホントに男女が逆だ。そう思いつつも善治郎は、アウラと軽く口づけをかわし、女王としての仕事に向かう妻を、笑顔で見送ったのだった。

「さて、それでは今日は何をするか」

仕事に向かうアウラを見送った善治郎は、元の世界から持ち込んだTシャツとトランクスの上から、この世界の民族衣装らしき白いタツクのない太めのズボンを履いた格好で、茶の間のソファーに身体を横たえ、寛いでいた。

昨日までは発電機の設置やら、結婚式の準備やらで、なんだかんだと忙しい日々をおくっていた。

本格的な「何もしないダラダラ生活」は、今日のこの時から始まる。

いずれは暇を持て余すようになるのかも知れないが、今のところはやりたいことが山ほどある。

サラリーマン時代に、取るだけ取って、全く見る事が出来なかったDVD。買うだけ買って、封も開けていないゲームソフト。

大学時代からひいきにしていたバンドや歌手の曲も、ネットのダウンロード販売で半ば惰性で買いつけていたが、聞くのは通勤時の電車の中だけ。

買うだけ買って、まだ一度も聞いていない曲も多数ある。

「やっぱり最初は、取り溜めたテレビ番組かな。あ、でも今見始めたら途中で朝食の時間になるか」

朝食の時間になれば、後宮に配属されている侍女が声を掛けてくれることになっている。

一応、善治郎はこの後宮の主であるため、その気になればその日の気分で食事の時間をずらすことも可能ではあるのだが、それはそう気安く言い出せることではない。

なにせ、この世界には電子レンジはおろか、ガスコンロや水道すらないのだ。食事の時間を早めると言うことは、その分下働きの人間が短い時間で水くみを終えなければならぬということだし、食事の時間を遅くすということは、その時間に合わせてもう一度作り直させることを意味する。

現代日本のように、できあがった料理を取っておいて、レンジでチンするような簡単な物ではない。

「所詮は、入り婿の分際だからなあ。下働きの人達の不評を買うのは危険すぎるわ。ええと、持ち込んだ食料はどれくらい残ってるかな？」

何となく小腹が空いた気がする善治郎は、冷蔵庫を開けて中をのぞき込む。

冷蔵庫の中には、この世界の果物や酒と一緒に、善治郎が日本から持ち込んだ酒や食料品も入っている。

もっとも、善治郎が持ち込んだ食料品は、リュックに詰め込んでいた、チョコ、乾パン、ビスケットの類と、後は学生の頃から愛用している粒タイプのキシリトールガムくらいだ。

「チョコは、ちょっと勿体ないかなあ。アウラに聞いた感じじゃ、カカオ自体知らないみたいだもんなあ。こっちで入手できる可能性はゼロに近い。幸い砂糖は豊富にあるみたいだけど、かなり雑な黒砂糖なんだよなあ」

恐らく、サトウキビかそれに相当する糖分の多い植物のエキスを絞って越しただけの代物なのだろう。この世界の砂糖は、日本の上

白糖と比べると、独特の風味がある。

一応、持ち込んだパソコンには、ケーキやクッキー、プリンなどの作り方を写真入りで説明しているネットのホームページをオフライン閲覧できるようにしてあるのだが、この世界の砂糖や小麦粉で果たして、まともな物が出来るのか、少々疑問である。

そもそも、ハンドミキサーも電子レンジも善治郎はこっちに持ち込んでいないのだから、現代日本のような手軽さでお菓子作りは出来ないだろう。

善治郎としては、一ヶ月の準備期間で可能な限り、必要な物を揃えたつもりでいたのだが、いざこうして異世界生活をスタートさせてみると、「なぜ、俺はあれを持ってこなかったんだ!」と後悔する物が、多数出てきている。

その最たる物が、「窓ガラス」だ。

善治郎が木戸を開け放ち、外気が容赦なく吹き込む窓と、その下にひとまとめにしてあるエアコンとその取り付けセットに視線を向けて、うつろな声を上げた。

「完璧、盲点だったよなあ。日本じゃ、建物の中は密閉された空間で当たり前だから、考えてもみなかったや……」

窓ガラスがないこの部屋に、もしエアコンを取り付けたとしても、善治郎が臨むような快適な室温は保たれないだろう。窓を全開にした状態では、エアコンの恩恵も半減などというものではない。

かといって、真昼間から木戸を閉め切って日光を遮り、LEDス

タンドライトで生活するというのは、流石に少々不健康すぎる。

「まあ、どのみちエアコンは設置に失敗する可能性の方がずっと高い訳だから、最初から無かったものとして諦めるかな」

少なくとも、窓ガラスの変わりになるような、光を通して熱気を遮断する何かを入手するまでは、エアコンの設置に力を注ぐ気にはなれない。

「はあ」

溜息をついた善治郎は、当面の間、エアコンと窓ガラスの問題については考えるのは辞めることにする。幸い、扇風機の前に氷の塊を置けば、局地的には思った以上に涼が取れることが分かっている。

「まあ、いいや。不景気なことばっかり考えててもしょうがないし、不便なら不便なりに楽しむことを考えよ」

善治郎は、そう割り切ったことを言うと、DVDを大量に納めてある収納バッグを開けて、今日見る番組を模索し始める。

「ええと、あの番組はどこまで見てたっけ？ ソーラーカーは、牛相撲やってる島まで行ってたよな？ VS百人刑事鬼ごっこの第三回を見たのが最後か？」

善治郎は、食事を終えたらすぐにDVD鑑賞会に入れるよう、先に見るDVDの用意を済ませるのだった。

第二章 4 【野心家の元婚約者候補】

善治郎が扇風機で涼を取りながら、一人でDVD鑑賞会を楽しんでいる頃、その妻であるアウラは執務室で女王としての責務を果たしていた。

国のトップであるアウラの職務とは、その大半が会議と面談だ。今のカープア王国には政治のトップである宰相と、軍のトップである元帥がいないため、アウラは極めて多忙な日々を過ごしている。

会議や面談の間に生じる隙間時間は、提出されたる報告書に目を通すだけで過ぎ去っていく。

竜皮紙（走竜の革をなめして作った獣皮紙）の束を乱雑にめくり、目を通していたアウラに、傍らに立っていたファビオ秘書官が声を掛ける。

「陛下、そろそろ時間です」

細面の中年男に声を掛けられ、アウラは竜皮紙に落としていた目を上げる。

「ああ、もうか。次は誰だ？」

現代日本のように正確な時計がないぶん時間にはルーズなこの世界であるが、それでも王宮内では最小で一時間の四分の一――十五分刻みで時間を計るくらいには、時間に対して精度を持っている。

業務の大半が昼間の日が昇っている時間帯に済ませなければならぬ分、日中の女王は現代日本の政治家なみに忙しい。

「はい、次の面会予定者は、騎士団のプジョル・ギジェン將軍です」
秘書官の告げた名前に、アウラはあからさまに顔をしかめた。
それは、善治郎が召喚されるまで、アウラの婿としてももつとも
有力視されていた二人のうちの一人の名前である。

先の大戦では、若くして数々の武功を上げた有能な軍人であることは間違いないのだが、いかんせん野心が強すぎるため、女王の婿としては不的確な人物だとアウラは見ている。

手が届くところにあった『女王の夫』という立場を、ギリギリで訳の分からない異世界人に奪われた野心家が、果たして何を言いに来たのか？

想像しただけでアウラは思わず溜息が漏れる。

「陛下、將軍級の軍人と、大臣級の文官は、国王に直言を申し出る権利を有しています。プジョル卿は自らが持つ正当な権利を行使しているに過ぎません」

冷静すぎる秘書官の言葉に、アウラは一層苛立ちを募らせる。それでも、理性ではフアビオ秘書官の言葉が正論であることは理解している。

「分かっている。もう良いぞ、入れてくれ」

苛立ちを吐き出すように深呼吸した後、アウラはいつも通りの威厳のある表情と声でそう命ずる。

「はっ」

中年の秘書官は、アウラに一礼すると、待合室に続くドアへと向かい、正確な歩調でカツカツと歩いていった。

「アウラ陛下。まずは、改めて、お祝い申し上げます。ご結婚おめでとうございます」

「ありがとう、プジョル卿。お前にそう言ってもらえると、少し心が軽くなる。私とお前の間には、男女の縁はなかったようだが、主従の縁は今後も大事にしていきたいものだ」

「……はっ、勿体ないお言葉です」

王の執務室で、向かい会って座るアウラとプジョルの会話は、白々しいまでの社交辞令から始まった。

プジョル・ギジェンという男を簡単に言い表すのならば、それは『典型的な武人』という言葉になる。

女としては大柄なアウラと比べても頭一つ大きい体躯。掘りが深く、精悍な顔立ち。半袖の裾から覗く両腕には複数の傷痕が刻まれており、そのグローブのように大きな両手の平には、固く大きな剣ダコが見える。

善治郎とプジョル。見た目の上ではどちらが、アウラの伴侶に相応しいかと聞けば、恐らく百人中百人がプジョルと答えるだろう。

赤髪に小麦色の肌のアウラと、黒髪に褐色の肌のプジョルが並べば、視覚的には収まりがよい。身長も女としては長身のアウラと、男としても長身のプジョルでちょうど均整が取れている。

優れた武人であり、有能な將軍であり、先の大戦では若くして多くの武勲を上げた英雄。

女王の伴侶になり損なった英雄は、忠誠の対象である女王に向かい、単刀直入に言うのだった。

「して、陛下。ご存じかと思いますが、私には十歳年下の妹がいます。私と同程度の薄いものではありませんが、王家の血も引いており、魔力も高く、人格・教養も人前に出して恥ずかしくはない程度には整っております。

いかがでしょう。王家の血を増やす意味でも、妹をゼンジロウ様の側室に加えて頂けないでしょうか」

「……………」

唐突で単刀直入な野心家の申し出に、アウラはキリキリと痛む頭を抱え込みたい衝動を、必死に堪えた。

これだ。このあからさますぎる野心があるから、この男はどれだけ武人として有能であっても、女王の伴侶としては極めて不適切だったのだ。

アウラ自身、夫の傀儡に甘んじる性格ではないため、もしアウラとプジョルが婚姻を結べば、カープア王国はかなり高い確率で、女王派と王配派に分かれ、内部分裂を起こしていたことだろう。

それにしても、結婚式を済ませたばかりの新妻に、いきなり側室の話を持ちかけるとは、配慮もへったくれもあつた話ではない。

アウラは、悠然とした表情を崩さず、問い返す。

「ふむ、興味深い話ではあるな。して、当人である妹自身は何と言っているのだ？」

「？ ギジェン家の家長は私ですが？」

アウラの問いに、プジョルは心底不思議そうに首を傾げた。

女の婚姻先を決めるのは、家長の仕事。プジョルはこの国の伝統に従った常識的な判断を下しているだけである。

むしろ、典型的な女王気質を保ったまま今の年まで生きてきたアウラが、カープア王国の常識から外れている。

とはいっても、大多数の男は、ある程度娘や妹の意思も考慮して嫁ぎ先を決めるものなのだが、このプジョルは、全面的に自分の都合だけで妹の嫁ぎ先を決める気にいるようだ。そして、そうすることを自分の正当な権利であると、信じて疑っていない。

話の持つて行き方を間違えたことに気づいたアウラは、余裕のある微笑を浮かべたまま、話を次に続ける。

「そうか。だが、婿殿はこの世界に転移してきたばかりで、まだ心身に余裕がない。今のところ、私の相手だけで手一杯と仰せだ」

きっぱりとしたアウラの拒絶に、プジョルはその鋭い目元をスツと細ませる。

「……それは、誠にゼンジロウ様ご自身のお言葉でしょうか？」

不敬とも取られかねない、女王の言を疑う配下の問いに、アウラは必要以上に胸を張って答える。

「無論だとも。まさか、疑っているのか？」

「いいえ。失礼しました。しかし、私も一人の王国貴族として、新たに主君となったゼンジロウ様にご挨拶に窺いたいというのは、率直な本音です。

私がそう言っていたと、ゼンジロウ様に『間違いなく』、伝えて頂けないでしょうか」

「……分かった。『一言一句違えることなく』、必ず婿殿の耳に入れるでしょう」

「お願いします」

最後にプジヨルは、右拳を左肩にそえる騎士風の礼をして、女王の執務室を後にした。

ドアの向こうに野心家の將軍が去ったことを確認して、アウラは大きく溜息をつく。

「まったく、自分の婚姻が失敗したら、次は妹を送りこむとはな。相変わらずの、剥きだしの野心。いっそ清々しいわ」

その言葉とは裏腹に、忌々しげに吐き捨てる女王に、それまで彫像のように立ち尽くしていたファビオ秘書官が、平坦な声で答える。

「しかし、プジョル將軍は率直である分、貴族全体の動きを予見するのに、非常に役に立ちます。恐らく、同様の申し出が近日中に殺到することでしょう。それをさきほどのようなお言葉で断り続けければ、『陛下が、妻の身でありながら、自らの権力を守りたいが故に夫の自由をないがしろにしている』という噂が立つことは必然です」

相も変わらぬ単刀直入で耳に痛い秘書官の言に、アウラは顔をしかめて、反論する。

「後宮に閉じこもって出てこないのは、他ではない、嬪殿の意思だぞ。私は何も言っていない」

「はい。私は、存じております。あの方は、聡明で、今のところは善良で、表面上は陛下に極めて協力的ですから。しかし、そのような陛下とゼンジロウ様の関係すら、後宮に引きこもったままでは、王宮貴族には伝わらないのです」

いちいちもつともな秘書官の言葉に、アウラは溜息をつくしかない。

「となるとやはり、ある程度は嬪殿にも王宮に出て来て頂いて、直接嬪殿の口から、私との夫婦関係がうまくいっているとアピールして貰うしかない、か。」

「なんだか、嬪殿には迷惑ばかり掛けている気がするな」

あれだけ誠実に愛情を向けてくれる伴侶に、予定外の苦勞を押しつけるのは、少々気が引ける。

「なんだか本当に、自分が権力のため、夫の自由を束縛する悪女になった気分になる。」

だが、そんな女王の憂鬱など気にもとめない秘書官は、細面の鉄面皮をピクリとも動かさず、話し続ける。

「仕方がありません。実際、プジョル將軍が仰った、『ゼンジロウ様が側室を持つ』という案は、王家の血の存続を考えれば、極めて妥当な提案ですから」

「まあ、それは確かに、な」

その言葉の正当性は、アウラとしても認めざるを得ない。

アウラと善治郎、一夫一妻のままでは、どれだけ熱烈に愛し合っても、生まれてくる子供の数には限りがある。まして、アウラは女王という激務の身。そうちよくちよく出産の為に、引きこもるわけにもいかない。

「実際、お前はどうか考えてる？ やはり、プジョル將軍の申し出は受け入れるべきだと思うか？」

アウラは、ふと思いついたように、そう秘書官に問いかけた。

この中年の秘書官の冷徹なまでに効率だけを重視した意見は、全体の指針としては非常に参考になる。

アウラの問いに、ファビオ秘書官は珍しく少し肩をすくめると、

「私なりの意見はございますが、それは聞きようによっては王家への侮辱と取られかねないものです。陛下のお耳に入れてよいものなのか、判断が付きかねます」

そう、頭を下げた。

だが、アウラは取り合わず、ヒラヒラと手の平を振ると、続ける

ように促す。

「かまわん。元々、慇懃無礼が貴様の取り柄であろうが。怒ることはあっても、罰することはないから、気にせず話せ」

女王の許可を得た秘書官は、「かしこまりました」と一礼すると、話し始めた。

「まず、結論から申し上げますと、私はゼンジロウ様の側室にプジョル將軍の妹姫を入れる事には反対です」

「ほう？」

予想外の結論から入った秘書官の言葉に、アウラは興味を引かれたように身を乗り出す。

「ゼンジロウ様の側室に、貴重な王家の血を継ぐ貴族を入れる。そうすれば一見、次代の王族が増えて王家の未来が安泰になるように見えますが、実際には、次々代の事を考えれば袋小路です。」

なにせ、王家の血を色濃く引くものが全員、ゼンジロウ様の異母兄弟姉妹となるのですから」

「ああ、なるほど」

アウラは得心がいったように頷いた。確かにそうだ。いかに王家の血を引く者の人数を増やしても、その全員が一人の父を持つ異母兄弟姉妹では、次々代の婚姻政策が極めて困難になってしまう。

カープア王国では、異母兄妹、異父姉弟など婚姻は、禁止こそさ

れていないものの、あまり推奨もされてない。

「ですから、単純に王家の血の存続だけを考えるのであれば、プジョル將軍の妹姫は、陛下のもう一人の夫候補であった、マルケス家のラファエロ卿辺りに嫁いでいただくのが最善でしょう。」

また、同時にゼンジロウ様には、魔力に恵まれた女魔術師か、適当な貴族の娘を側室に迎え、血の薄い王家の分家を作って頂けたのなら、言うことはありません。ああ、無論、陛下とゼンジロウ様との間に、本流となる御子が生まれることが大前提です」

淡々と語るファビオ秘書官の言葉に、アウラは口元を引きつらせたような笑みを浮かべた。

「貴様に掛ければ、王家と貴族の婚姻政策も、まるで『走竜』の交配並の話になってしまうな」

女王の皮肉にも、細面の秘書官は全く動じない。

「ですから、最初に無礼を申し上げるとお断りしました。そもそも、これは『時空魔法』の継承者を存続させるという方向からだけ見た話です。婚姻には人心というものが絡みますし、下手にギジェン家とマルケス家のような有力貴族同士が婚姻で結ばされれば、王家にとって有力すぎる国内貴族が誕生するという弊害も生まれます」

「分かっている。それらの状況を見て、最終的に判断を下すのは私だ。……だが、いずれにせよ、婿殿を多少は貴族共の矢面に立てなければ、私への不審は増すばかり、か。」

ファビオ、婿殿が後宮に引きこもったまま、どれくらいの期間で

あれば、貴族達の不審を抑えていられる？」

アウラの唐突な問いに、秘書官は淀みなく答える。

「そうですね、最短で一月、最長で一月半といったところででしょうか。それより長くなるようでしたら、その後例えゼンジロウ様が何と言おうと、『陛下が言わせている』という風評がぬぐい去れなくなるでしょう」

「一ヶ月、まあ、そんなところか。よし、分かった。幸い、婿殿の方から、『この世界の礼儀や常識を学びたい』と申し出てくれている。婿殿に家庭教師を設けよう」

「家庭教師、ですか。後宮は男子禁制ですが……？」

探るような秘書官の言葉に、アウラは意味ありげに微笑み答える。

「無論、家庭教師候補は女に限る。ついでに魔術の基礎も教えてやって欲しいから、魔術師である方が望ましいな」

魔力の高い女の家庭教師。それだけを聞けば、アウラ公認の側室候補にしか聞こえない。しかし、アウラは釘を刺すように付け加える。

「もし、『適切な候補』がないようであれば、お婆様にご足労願う。軽率な行動に出る奴がいないことを祈るばかりだ」

お婆様とは、アウラが信頼する筆頭魔術師エスピリディオンの妻にあたる、パスクアラの事である。すでに七十歳を超える老女である彼女が『家庭教師候補』だと聞いてもまだ、家庭教師候補として、

妙齡の未婚の女を推薦する者がいれば、それはアウラの意図も読めないばんくらか、女王の要請より己の権力拡大を優先する野心家のどちらかだ。

中年の秘書官は、困ったように小さく肩をすくめて、女王に忠告した。

「陛下。臣下をあまり露骨に試しすぎると、人心が離れていきます。くれぐれもご注意を」

「分かっている。しかし、お前が言うとおり、将来のことを考えれば、嬪殿には側室を迎えて分家をつくる可能性も無視するわけにはいかないのだ。ならば、早いうちに『危険な側室候補』をつまはじきにしておく必要がある」

実際、今のところ新妻として特殊な新婚生活を円滑に回しているアウラとしても、少々不本意な話ではあるのだ。

政略結婚は王族の義務とはいっても、王族にだって恋愛感情も独占欲もある。

「まったく、少しは水入らずの新婚生活を楽しませてくれても罰は当たるまいに」

アウラはそう言って、面白くなさそうに肩をすくめるのだった。

第二章5【予期せぬ出来事】

その日の夜。共に夕食を済ませたアウラと善治郎は、一つのソファーの上でピツタリと寄り添うようにして腰を掛け、くつろぎの時間を過ごしていた。

「ふむ。夜更かしの危険性があるとはいえ、こうして十分な明かりがあると、夜の過ごし方が有意義になるな」

「はは、そうだね。俺の場合は、こういう夜の過ごし方に慣れきっちゃってるから、あんまりありがたみは感じないんだけど」

室内を照らす六つのLEDスタンドライトを見渡し、感心したように声を上げるアウラに、善治郎は小さく笑いながら、返事を返す。昼間は、王として激務をこなしているアウラであるが、日が落ちた後は比較的自由な時間が取れるようになっていく。無論、週に一度や二度は、出席が臨まれる舞踏会のような催しもあり、夜イコール自由時間と決まっているわけではないが、深夜残業が当たり前であつた善治郎のサラリーマン時代と比べれば、就業時間は十分『早い』部類に入るだろう。

おかげで、こうして善治郎はアウラと、夫婦水入らずの時間を過ごすことが出来る。

だが、女王とその伴侶ともなると、例え夜のくつろぎの時間といえども、その会話に政治的な色が滲むのは避けられない。

「それで、俺にマナーや常識を教えてくれる家庭教師の人を、今公募してるんだ？」

「うむ。決定まではしばらく時間が掛かる。その間は、暇を見て私が直接教えよう。本当ならば、私が全部教えてやればよいのだが、時間の余裕がない。すまぬな」

「いいよ、いいよ。アウラが忙しいのは、俺でも分かるから。あ、でも、その家庭教師の人は大丈夫だね？ 変なこと言ったりしないか不安なんだけど」

マナーと常識を覚えてくれる人物に対して、無礼な口を利かないか心配するというのも本末転倒な気はするが、善治郎の心配ももっとでもある。

女王の伴侶の家庭教師に選ばれる人物となると、ある程度は地位や身分の人間のはず。

だが、善治郎の心配にアウラは笑顔で首を横に振ると、

「まあ、そなたの日頃の言動からすると、まず大丈夫だとは思う。それに、最低限のマナーと常識は、家庭教師が決まるまでに、私から教えるから安心してくれ」

そう言った。

「あはは、お手柔らかに」

善治郎が苦笑を浮かべて双言葉を返したその時、コンコンとドアがノックされる。

「あ、はい？」

『失礼します。入浴の準備が出来ました』

反射的に声を上げる善治郎に、ドアの向こうから侍女がよく通る声でそう報告を入れてきた。

そういえば、もうそんな時間か。

ソファーから立ち上がった善治郎は、棚の上からLEDランタンを手取る。

一度目の転移の際、夜の浴室の暗さに閉口した善治郎が、わざわざ近くのキャンプ用品店で買い求めた代物だ。

本来であれば、単一電池を四本使用するのだが、善治郎は充電式の単三電池と、単三電池を単一電池として使用可能な電池スぺーサーを使っている。

流石に、素人が水浸しになる浴室まで延長コードを引っ張るのは危険極まりないので、浴室の明かりはこのLEDランタンだけが頼りだ。

まあ、それでも豆電球サイズのLEDを十二個使用しているこのランタンは、善治郎の感覚でも『薄暗いけど我慢できないほどではない』くらいには、明るく浴室を照らしてくれる。

ちなみに、アウラや侍女達の感覚で言えば『あり得ないくらいに明るい』という表現になる。

「よし、大丈夫。まだ、しばらくは充電の必要もなさそうだな」

一度スイッチを入れて、問題なく明かりが点ることを確認した善治郎は、ランタンを片手に提げドアへ向かう。

「では、参ろうか、ゼンジロウ」

アウラは、そんなゼンジロウの開いている方の腕に、ごく自然な動作で自分の腕を絡ませ、スッと胸元に抱き寄せる。

「ええと、それは、その、一緒に入るってことかな……？」

そう言えば、すでに床は共にしているが、入浴を共にしたことはなかった。

大胆な誘いにドキマキする善治郎に、アウラは妖艶に微笑み返す。

「お前が嫌でないのならば、な」

「嫌がるはずがないだろう」

限界まで鼻の下を伸ばした善治郎は、アウラと仲良く腕を組んだまま、空が飛べそうなくらいに軽い足取りで、浴室へと向かうのだった。



仲良く二人での入浴を済ませた善治郎とアウラは、湯上がりの火照った身体を氷扇風機で冷やしつつ、それぞれ好みの酒をつぎ、グラスを傾けていた。

善治郎は箱買いした缶の発泡酒、アウラは昨日開けた白ワインの残りである。

どちらもよく冷蔵庫でよく冷やされており、湯上がりの渴いた喉の乾きを心地よく癒してくれる。

「ふう、これはやみつきになるな」

薄い夜着姿のアウラは、氷越しに送られている扇風機の冷風と、ガラス製のワイングラスに入った冷たい白ワインに眼を細め、感嘆の声を上げる。

この熱帯夜が続くカープア王国で、湯上がりに冷たい扇風機の風を浴びながら、冷たいワインを飲む。

通常は、王侯貴族でも絶対に味わうことが出来ない贅沢である。

いかにアウラがこの国の気候になれているとはいっても、熱帯夜を不快に感じない訳ではない。

「まずいな。意思を強く持っておかなければ、私も後宮に入り浸りになりそうだ」

「大歓迎、と言いたいところだけど、女王様がそれじゃ拙いんだよな。まあ、暇を見つけて出来るだけ来てくれ。いつ来てくれても、俺は歓迎するから」

「分かった。今後は昼食も、可能な限りこっちで取るから、そのつもりでいてくれ」

「了解。昼時間に合わせて、氷を用意しておくよ」

善治郎は笑ってそう、取り合った。いかに大型冷蔵庫があるとは

いっても、扇風機の前に置く氷は二十四時間態勢で用意できるわけではない。タイミングを合わせて、ある程度氷を節約しないと、せっかくアウラが涼みに来たのに、肝心の氷がないという事態になりかねない。

夜はともかく、昼はすでに三十七度を超える気温を記録するようになっていなのだ。気温が体温より高くなつては、扇風機だけ回しても熱風を吹き付けるだけで、涼は取れない。

まあ、氷がなくても扇風機の前に水を張った桶を置いておけば、多少はマシだが、やはり氷ほど劇的な冷風にはならない。

つくづく、エアコンが欲しい。

やがて、湯上がりの火照りや喉の渇きも癒えてきたアウラは、少し表情を引き締めて善治郎に言う。

「そういうわけで、『何もしくなくていい』と言った手前、少々心苦しいが、早速講義を始めようか。最初は、王族の一般的な受け答えからだ」

「え、ええ？　もう、今晚から始めるのか？」

驚く善治郎にアウラはニンマリと笑い返すと、

「もちろんだ。これだけ立派な灯りがあるのなら、夜の時間は有効に活用しなくてはな」

そう言って、隣に座る善治郎の瞳をのぞき込む。

善治郎は渋い顔で、天を仰ぐ。

「うわー、せっかくのアウラと過ごせる貴重な時間が勉強に潰され

るのかー」

善治郎の率直で飾らない感想に、アウラは一瞬素の照れた表情を見せる。しかし、善治郎の視線が天井からこちらに戻るより早く、いつもの悠然とした表情を取り繕い、答える。

「そ、そう言ってもらえるのは嬉しいが、時間は有限だからな。なに、大丈夫だ。閨を共にする時間まで食い込ませるようなマネはしない」

「まあ、それなら仕方がないか。どうせなら、アウラのいない昼間を勉強の時間に充てられるといいんだけどな。ん？　ちょっと待てよ」

矛盾したことを言った後、善治郎はふと思いついたように、ソファーから立ち上がる。そして、持ち込んだ物資をひとまとめにしてある部屋の隅へ向かう。

「確か、持ってきてるはずだよな。小さいものだし、ついでに絨毯に乗つけたはずだ……」

「ゼンジロウ？」

「よし、あったあった、これだ」

やがて、目当ての物を探し当てた善治郎は、なにやら四角い銀色の箱を持って、アウラが座るソファーへと戻ってくる。

「ゼンジロウ、なんだそれは？」

少し不審そうな顔で問いかけるアウラに善治郎は、

「これは、『デジカメ』、『デジタルカメラ』って言って、本来は写真、静止画を取る機械なんだけど、一応動画も音声付きで取れる筈なんだ」

そう言ってデジタルカメラを掲げて見せた。

しかし、アウラは意味が分からないと言った様子で首を傾げる。

「シャシン？ 静止画？ 動画？ 音声付き？ なんだそれは？」

その答えに、善治郎は少し考えたが、的確な説明の言葉が思いつかない。この手の道具を知らない者に口で説明するのは意外と難しい。

「ああ、何て言うかな。一瞬で凄く精密な絵が取れたり、声や動く絵も録音、録画できたり」

「ロクガ？ ロクオン？」

さらに首を傾げるアウラに、これ以上自分の拙い説明を続けても無駄だと感じた善治郎は、論より証拠とばかりにデジカメの電源をオンにする。

「まあ、とにかく使ってみせるから。アウラ、さっき言ってたマナーとか常識の説明を始めてくれないか？」

そう言って、デジカメを構える善治郎に、アウラは少し不審そうな視線を向けたが、結局は善治郎を信用することにしたのか。言われたとおりにソファから立ち上がり、話し始める。

「……よく分からないが、良いだろう。では、受け答えの基本から説明を始めるぞ。」

通常、王族が公的な場で、自分より目上の者と相対することは少ない。だから、最初に覚えて欲しいのは、目下の者への対応と、同格の者への対応だ。

基本、声を掛けるのは目下の者からだ。一般的には、目下の者は……」

実演を交えながら、マナー付いて説明を続けるアウラを、善治郎はデジカメの動画モードでとり続ける。

社会人一年の時に買った代物で、それなりに使い込んではあるのだが、動画は最初の内に何度か興味本位で取っただけだ。

果たしてちゃんと撮れているのか、この距離で音声はしっかりと入っているのか。

不安要素は多々あるが、そう深刻に考える必要もあるまい。失敗したら失敗したときだ。別段動画が上手く撮れないと、にっちもさっちもいなくなるわけでもない。

「……というわけだ。まずはこれくらいで良いか。ちゃんと聞いていたか、ゼンジロウ？」

アウラが説明を一度切った所で、善治郎もデジカメの動画モード停止させる。

「よし、有り難う、アウラ。後は、これがちゃんと映っているかな。ごめん、ちょっと口で説明するのは難しいんだ。悪いけど、ち

よっと待って」

善治郎はそう断ると、デジカメを持ったまま部屋の隅にあるパソコンの前へと移動する。そして、パソコンを起動させると、デジカメからSDメモリーカードを取り出し、パソコンに差し込む。

「ふむ。よく分からぬが、それもお前の世界の道具なのか」

パソコンを弄っている善治郎の背後に、アウラも近づいてきて、善治郎の背中越しにパソコンの画面を見ている。

「うん、そう。ええと、ハードに落とす前に、まずはちゃんと撮れているか見てみるか」

そう言って善治郎は、SDメモリーカードの動画ファイルを直接起動させる。

マウスを操作して、カチリとファイルとクリックする。すると次の瞬間、パソコンのディスプレイに、見覚えのある部屋の本真ん中で身振り手振りを着けながら、しゃべり続ける赤髪と小麦色の肌をした迫力美女の姿が映し出された。

「ほう、驚いた！ これは、私の姿か。言っている言葉も、先ほど私が喋っていた内容その物ではないか。一体どのような原理になっているのだ？ 双王国の魔道具でも、このような物は見たことがないぞ！」

「……………!？」

感嘆の声を上げるアウラが、善治郎にそう問いかけるが、善治郎

はそれに答えを返す余裕はなかった。

善治郎は、生まれて初めて動画を見るアウラよりも、さらに大きな衝撃を受けてたからだ。

「Es normalmente raro que las posiciones familiares imperiales opuestas a la persona que es superior que a sí mismo aun l ugar publico. Por consiguiente lo aprendo primero y lo quiero Es... la correspondencia a la persona que iguala con la correspondencia a la persona actual...」

「……なに、これ？」

善治郎の耳には、画面の向こうで話すアウラの言葉は、何一つ理解できない未知の言語にしか聞こえなかった。

幕間2【言葉と文字と言霊】

録画したアウラの言葉が理解できない。驚きの事実を告白した善治郎に、アウラが首を傾げ、不思議そうに問い返す。

「それはつまり、この道具は音は取れても『言霊』は取れないということなのではないか？ 実際、この道具からは魔力が感じられないからな」

「は……？ 『言霊』？」

全く聞き覚えのない言葉を、平然と言ってよこすアウラに、善治郎は理解が追いつかない惚けた表情で、オウムのように言葉を返す。善治郎の表情を、しばらく不思議そうに見ていたアウラであったが、どうやらこれは、根本的な所で話が通していないようだと思う。

「さて、ゼンジロウ。最初から順番に話していこう。まず、そなたは何をそんなに驚いているのだ？」

アウラの問いに善治郎は、戸惑いを隠せない声で言葉を返す。

「それは、普段は普通に聞こえているアウラの言葉が、デジカメを通したら全く理解できなくなったから……って、考えてみれば、そもそもここが異世界なのに、日本語が普通に通じているのがおかしかったんだなあ」

最初の転移から一月半、こっちに棲みついてからすでに半月近くがたっているというのに、不覚にも善治郎はその事実を、今の今ま

で全く疑問にも思っていなかった。

「よし、そこだ。根本的に話が食い違っているのはそこだな。ゼンジロウ。ひょっとして、そっちの世界では、異なる言語を使用する者同士は会話が成立しないのか？」

あまりに当たり前の事を言ってくるアウラに、善治郎は一瞬「当たり前だ」と返しそうになるのをグツと堪える。

「うん、それはごく当たり前のことなんだと思ってたけど、その言い方だと、ひょっとしてこっちの世界は違うのかな？」

「うむ。この世界でも、国が異なれば言語も異なる。大陸だけに限っても北部と南部、東部と西部、それぞれが全く異なる言語体系を持っているが、会話を交わすことにはなんら支障は無い。なぜならば、複数の人間が同じ認識を持つ音には、『言霊』が宿るからだ。

これは、この世界では、ほとんどの人間が意識すらしていない常識中の常識なせいで、今まで説明する必要性すら感じていなかったが、まずは聞いてくれ」

そう言うと、アウラはこの世界では一般常識にも等しい存在、『言霊』について説明を始めるのだった。

一通り、アウラの説明を受けた善治郎は、頭の中で今聞いた言葉を整理するように言葉にする。

「ええと、つまりこの世界では、言葉には等しく『言霊』というのが宿っていて、例え異なる言葉を使っている人間同士でも、意思の疎通には不自由はないってこと？」

「そうだ。だから、この世界では、『言葉が通じない』という現象は原則あり得ない」

頷くアウラに、善治郎は、解消されない疑問点を矢継ぎ早にぶつける。

「ええと、そんな便利なものがあつたら、言葉を覚えるのに支障があるんじゃないの？ ほら、適当に『あー』とか『うー』とか言ってるだけで意味が通じちゃうんじゃない？」

「いや、それはない。言霊は、あくまで『万人が共通の認識を持つ正しい音』に宿るのだ。例えば生まれたての乳飲み子が『オッパイ』と言う意味を『あー』と言う音に込めたとしても、その赤子だけがそう思っていただけでは、言霊は働かない。最低でも数千人数位の人間が『あー』という音に『オッパイ』という意味を認識していなければならぬ」

「へー、意外とよくできてるんだな。それなら、例えば悪い大人が、小さな子供に『椅子』の事を『机』、『机』の事を『椅子』って教えたとして、その子が別な言葉を話す人に机のつもりで『椅子』って言うっても、相手の人には『椅子』としか聞こえないってこと？」

「そうだ。言霊が宿るのはあくまで『共通の認識を持つ正しい音』だ。本人の意思には、関係はない」

「なるほど……。ん？ でも、それじゃなんで、今録画化した画像の音は理解できなかったのかな？ 音は正しく再生されているよね？」

善治郎の当然の疑問に、アウラは小さく頷き、答える。

「それはその道具に魔力がないからだろう。私達も日頃使っているときには全く意識していないが、『言霊』による意思疎通にも微弱的な魔力を使用しているのだ。魔力の宿らない音は、例えば『正しい音』を再現できても、『言霊』は働かない」

「なるほど、なるほど。それじゃ、この世界では、複数の言語を使用できる人間ってほとんどいないんじゃないの？ どれか一つでも言葉を覚えていれば、事が足りるだろうし、勝手に翻訳されちゃうんだったら、二つめの言語を覚えるのも難しいよね」

例えば、アメリカ人が「アップル」と言っても日本人の耳には自動的に「りんご」と聞こえてしまうわけだ。これでは、日本人が後天的に英語を学ぶのは不可能に近い。

それは、事実その通りだったようで、アウラは深く頷いた。

「そうだ。だから、複数の言語を覚えている人間というのはごく一部の魔術師に限られる。熟練した魔術師は、意識的に魔力の放出を抑えられるからな。この様に」

と言って、アウラは意識的に魔力を遮断すると、

「Amo Zenjirō」

と、短く言葉を発する。その言葉は、さきほどパソコンで再生し

たデジカメの動画同様、善治郎には未知の言語にしか聞こえない。

「こうやって、魔力制御の出来る異国の魔術師に、教えて貰うのだ。逆に、自分が魔力制御できれば、自分の魔力を遮断するだけでも、言霊は働かなくなる。言霊の発動には、話し手と聞き手、双方が魔力を有していることが条件だからな。また、場所によっては魔力の発動を根本的に遮断するような特殊空間も存在するらしい。そういうところでは、言霊も働かないだろう」

アウラの言っていることが正しいのだとすれば、地球は丸ごと魔力の発動が遮断される特殊空間であるか、地球人の九十九パーセントが魔力を全く持たない人種であるかのどちらかだ。

どちらにしても、百五十年前、地球に駆け落ちしてきた善治郎のご先祖様は、さぞかし苦勞したに違いない。なにせ、『言葉が通じない』という概念すらない人間が、誰とも言葉通じない世界に放り出されたのだから。

無事生き延びて、子孫を残したことが奇跡にすら思えてくる。

「へー。この世界で複数の言語を覚えるのって、大変なばかりでメリットはほとんどないみたいだな。でも、一部の魔術師はわざわざそれだけの苦勞をして、覚えてるって事だよな？　なんで、そこまですて覚えるのかな？　必要もなさそうなのに」

そういう善治郎のもっともな疑問に、アウラは小さく笑って答える。

「それは、言葉を覚えるよりも『文字』を覚えるためだ。文字とは言語の発音を書き記した代物。会話も出来ないのに、文字を覚えるというのは難しいからな。文字には言霊は宿らないゆえ、そうやって覚えないと、異国の書物は読めぬ」

「あ、そうか。そう言えば、この世界の文字ってまだ見てないな。ねえ、ちよっと書いてもらえるか？」

もののついでとばかりに善治郎は、パソコンの横に置いてあるコピー用紙とボールペンをアウラにわたす。

「ふむ。これは、随分と白くて薄い皮紙だな。こっちのペンも不思議な形をしている。インク壺はどこだ？」

「ああ、違う。それは、動物の皮じゃなくて植物から作られてて、ってまあいいや。そのペンもボールペンって言って、そのまま押しつければ普通に書けるから。インクは中に入ってるんだ」

初めて触れる現代日本の筆記用具に最初は戸惑っていたアウラであったが、元々ボールペンの扱いというのは、ツケペンと比べて特別難しいものではない。すぐに慣れて、感嘆の声を上げる。

「ほう、これは便利だな。インクに浸す手間がなくなるだけでも助かるし、何よりこんな薄い皮紙でも引っかかって破いたりしないくらいになめらかだ」

「紙はともかく、ボールペンはダース単位で買ってきてるから、よかったら一、二本持ってく？ 色も、黒だけじゃなくて、赤とか、青もあるよ」

「ありがたく、貰っていく。ふむ、書けたぞ。我が国を中心とした大陸南西岸部で使用されている文字は、この様な三十字からなっている」

やがて、アウラはコピー用紙に見たこともない三十種類の記号を書き出し、善治郎に見せた。

「へえ、予想はしていたけどやっぱり表音文字なんだな。数が三十七ってことは、アルファベットに近いのかな？　ねえ、アウラ。そこに、『あ』『い』『う』『え』『お』。『あ』『か』『さ』『た』『な』って書いてみて」

「む、なんだと？　すまん、もう一度言ってくれ」

「うん、一つずつ行くよ。最初は『あ』……」

幸い意味を持たない、短音であれば、『言霊』も働きのようがないらしく、善治郎の発音はそのままアウラの耳に届く。

そうして書いてもらいうちに、この国の文字が、およそ元の世界のアルファベットと同じ作りをしていることが判明する。

言語学的に母音と子音という明確な区別があるわけではないが、複数の文字を連ねて一つの発音を作る辺りは、全く同じだ。ただし、RとLの区別がなかったり（Lに相当する文字が存在しない）、Mに相当する文字が複数存在したりと、細かな違いは多々あるが、三十文字の内大多数は、アルファベットに直接置き換えて書き記すことが出来そうだ。

他に、明確な違いを挙げるとするのなら、大文字、小文字といった差がない点だろうか。細かなニュアンスを書き記すのに不自由しそうだが、一から覚えるには数が少ない分、若干楽そうだ。

「ああ、これなら三十個の文字を覚えるだけなら簡単そうだな。そこから、文章全体を覚えるのは骨だろうけど。でも、どうせなら、

文章より先に数字を覚えたほうが役に立ちそうだな。アウラ、この世界の『数字』を覚えてくれないかな？」

アウラが発音するとおり、三十個の記号にカタカナで読み仮名を振り終えた善治郎は何の気なしにアウラにそうお願いする。

しかし、アウラの反応は、善治郎の予想を大きく覆すものだった。

「『数字』？ ようは数の文字表記のことか？ いきなり数を全て覚えるの大変だと思うが」

そう言ってアウラは、別のコピー用紙に、ツラツラと単語を書き始める。

「これが一、これが二、これが三だ。最初は十まで位にしておいた方が良いと思うぞ。商人や軍人ならばともかく、一般的な貴族でも『億』や『十億』といった単語表記は、知らない者も珍しくないからな」

「……………」

思わず無言で善治郎は、アウラの手元を見る。そこには、アウラが、『一』『二』と言う度に、複数の文字を組み合わせて、単語を書き記しているのが見える。

ちょうどアルファベットで一を『one』、二を『two』、三を『three』と印すように。

「……ひょっとして、この国には『数字』って存在してないわけ？」

一瞬、そんな馬鹿な、と思う善治郎であったが、考えて見れば日

本もその昔、アラビア数字が入って来るまでは漢数字や、算木、ソロバンなどを用いて、結構複雑な計算をこなしていた。

鶴亀算に代表されるような初期の連立方程式や、水面から顔を出している水草を横に引っ張ってその長さの変化から、三平方の定理を用いて、水堀の深さを計算するようなマネもやっていた。戦国時代の商家や大名の補給物資管理なども、残っている文献を調べると、予想以上に綿密な計算がされている例もあるらしい。

そう考えれば、数字が存在しないイコール数学が存在しないというわけではないのだろう。そもそも、これだけ立派な王宮を建てている時点で、建築学にある程度の高等数学が含まれていないはずがない。もし、万が一、経験則だけでこの王宮を建てているのだとすれば、そっちのほうがすさまじい。ほとんど、魔法の領域だ。

しかし、数字がある場合とない場合では、計算能力に対する『底辺人口』に明確な違いが出る。

凡人の筆算能力を向上させるためには、ゼロを含む十進数の数字の概念は、必須だ。

「数字。数を印すための特別な文字、ということか？ 興味深いの。それがあると、どのような利点があるのだ？」

興味深げに問いかけるアウラに、善治郎は思わず熱心に数字の有効性について説く。

「ああ、まず何より覚えるのが、簡単だ。十進数だとすれば、ゼロも含めて十個の文字だけを覚えればすむし、後はそこに、十、一、 $\times$ 、 $\div$ の四つの記号を覚えれば大抵の人間が簡単な四則演算くらいなら二、三年で……」

「ふむふむ……」

いつの間にか善治郎は、転移する前に自分に誓った「出来るだけ目立つ成果は上げないようにしよう」という自戒も忘れて、熱心に数字の有効性について説明するのだった。

第三章 1【避暑の昼休み】

善治郎がアウラから、『言霊』の存在を教えられてから、数日後。カープア王国の気温は日増しに上昇を続け、ついに一年でもっとも暑い季節が始まろうとしていた。

正確な気温は分からない。持ち込んだ温度計は、四十度越えを記録した日以降、精神衛生上の理由から、見えないように裏返しにしてある。

体感的には、四十度越えの日よりもさらに気温は上昇しているように感じられるが、吊してある時計をひっくり返して確認するだけの勇気が、善治郎にはもてなかった。

ここ数日は、流石に「不健康」などとも言ってられず、善治郎は後宮の木戸を全て閉め切り、真っ昼間からLEDスタンドライトを灯して一日を過ごしている。

だが、そんな溶けるような暑さも、善治郎にとっては悪い事ばかりではない。

まともに活動しては、死人が出かねない気温が続くこの時期、王宮では正午から約三時間にわたり、休息時間を設けているのだ。

おかげでここ数日、善治郎は夜だけでなく、昼も妻であるアウラと後宮で二人の時間を過ごす事ができていたのだった。

「ふう、暑かった。執務室と比べれば、ここは天国だな」

木戸を閉め切った後宮の一室に入ってきたアウラは、まず真っ先に迷うことなく冷蔵庫へと向かった。

「あ、アウラ。お疲れ様」

冷蔵庫をあさるアウラに、善治郎はソファアの上に寝っ転がって携帯ゲームをピコピコやりながら、声を掛ける。

「おう」

アウラは善治郎に背中を向けたまま短く返事を返し、手慣れた様子で製氷室からザラザラと氷を取りだし、冷蔵庫横に供えてあるかき氷機に入れる。

かき氷機の取っ手をグルグルと回し、ガラスの器に山盛りのかき氷を作ると、冷蔵の中で冷やしてある赤い瓶に入ったイチゴのシロップを遠慮会釈なくドバドバとかけまくる。

ゲームをやりながらも、目の横でその様子を見ていたのだろう。善治郎が、慌てたように抗議の声を上げる。

「ちょっと、アウラ！ それ、かけすぎ！」

しかし、アウラは全く動じず、

「けちけちするな、減るものでもあるまいし」

そう言って、キャップを閉めた苺シロップの瓶を冷蔵庫に戻し、かき氷を入れたガラスの器を片手に、善治郎が寝そべるソファアへ

と歩いていくる。

「減るよ！ これ以上ないくらい明確に減るよ！」

抗議の声を上げつつ、善治郎はパタンと携帯ゲーム機を閉じて、寝そべっていた体勢からソファーに座り直し、アウラが座るスペースを空ける。

向かいにもう一つ大きなソファーがあるというのに、わざわざ座り直してまで同じソファーに座るあたり、なんだかんだ言っても夫婦仲はうまくいっているようだ。

アウラは、苺シロップで真っ赤になったかき氷を長い銀のスプーンですくい口元に運ぶ。

「大丈夫だ。今、城の料理人達に果実の絞り汁と黒砂糖を使い、似たようなものを作らせている」

自信を持ってそう答えるアウラに、善治郎は興味を引かれた口調で、

「へー、それって美味しいの？」

そう、問いかける。

「……だから、このイチゴシロップは私がもらう。お前は、城の料理人達が丹精込めて作った特製果実砂糖汁を使うがよい」

「ねー、それって美味しいの？」

「……おう、頭がキーンとなった。このキーンがたまらぬ」

「なあ、結局今のところうまくいってないんだろ……」

婿殿のジト目に少し罪悪感を覚えたのか、女王は目を逸らしながら、白状した。

「うむ……向こうの世界の食文化というのは、実に優れているな。まったく同じものを再現するのは、難しそうだ」

素直に白状した女王の言葉に、善治郎はため息をつく。どのみちあまり期待はしていなかったが、ちよつとがっかりだ。

「はあ……だったら、大事に使おうよ。イチゴ、メロン、ブルーハワイ、それぞれ一本ずつしか持ってきてないんだから」

「うむ、イチゴは任せろ」

「いや、俺もイチゴが一番好きなんだけど、って、まあいいや」

衣食住の全てを嫁に養って貰っているヒモ旦那の身としては、それくらいは嫁に譲るのが夫婦円満のコツというものだ。

善治郎は、携帯ゲーム機をテーブルに置くと、ソファから立ち上がり冷蔵庫へと向かう。

そして、冷蔵の中で大量に冷やしてある絞った濡れタオルを一つ取り出すと、ちよつとかき氷を食べ終えたアウラへ放る。

「アウラ、汗」

「おう、すまぬ」

水分を取って全身から汗が噴き出ていたアウラは、素直に冷タオルを受け取ると、それで顔や身体の汗を拭う。

「……………」

「……………」

真っ昼間ではあるが、現在この部屋は外の熱気と陽光を遮断するため、木戸を閉め切ってかわりにLEDスタンドライトを灯している。

まるで夜のような雰囲気の中、服を着たままとはいえ、タオルで身体を拭く愛妻の姿に、善治郎は自然と視線を奪われる。

そんな善治郎のあからさまな視線に気づいたアウラは、艶やかに笑いながら、もったいをつけるように少し善治郎に背を向けように身体の向きをずらし、話しかける。

「しかし、私はゼンジロウが持ち込んだものの恩恵に授かるばかりで、礼を返せていない気がするな。何もしなくてよい、などと言っておきながら、礼儀、常識、魔術と学ぶことを強要しているようなものであるし」

アウラの言葉は事実である。毎日、口にする冷えた飲み物。水塊と扇風機を使った涼を取る仕組み。常夏で知られるカープア王国でもっとも暑いこの時期を、これほど快適に過ごした記憶は、アウラにはない。

強いて比較するとすれば、まだ幼子だった頃、水辺の高山に築かれた王家専門の避暑地で過ごした夏くらいのものだろうか。

「いいよ、その辺は気にしないで。持ち込んだものはどれも俺が自分で使いたくて持ってきた物だし、仮にも生まれ育った国とは違う

ところに根を生やすんなら、最低限その国の文化風習を覚える必要があることぐらいは、最初から覚悟してから」

一方、そう答える善治郎の言葉にも、嘘偽りはない。いかにアウラが「なにもなくていい」と約束してくれていたとは言っても、食べて遊んで寝るだけの座敷犬のような生活が出来る可能性は、そう高くないと最初から踏んでいた。

地球の歴史を見れば、王の側室のような日陰者でも、公的な行事には駆り出されるのが常だ。そう考えれば、最低限、王室に恥をかかせないくらいに、常識や国の歴史を学ばされることは必然と言える。

それに、就業時間が日没に左右されるこの世界での『仕事』など、日付が変わる前に帰宅できれば「今日は早く帰れた」と感じる善治郎のサラリーマン生活と比べれば、どうということもない。

そんな事情を察することは出来ないアウラは、汗を拭き終えたタオルをテーブルの上に置き、念を押すように尋ねる。

「のう、ゼンジロウ。なにか、不自由しているものはないか？ 私の立場を正しく理解してくれているお前が、意識的に他者との接触を断っているのは分かっている。そうすることで私が助かっているのは事実なのだが、こうもお前の自由を束縛したままで、なにも返せないのは心苦しい」

善治郎が婿入りしてからそろそろ一月弱。我が儘も言わなければ、迷惑も掛けてこない婿の言動が、自分と自分の妻の置かれている立場を十全に理解した上で、あえて迷惑を掛けないよう自制していることに、アウラもいい加減気づいている。

ついでに言えば、侍女や専属料理人など、後宮に務める使用人達の善治郎に対する評判も今のところはすこぶるよい。

手間が掛からず、我が儘を言わず、威圧的な言動も取らない主人だ。使われる身としては、これほど楽な相手はいないだろう。

聞き取り調査を終えた後、アウラは思わず厨房の責任者と侍女頭にわざわざ「現状が当たり前だと思わないように」と警告をしたほどだ。

人間とはなれる生き物である。手間の掛からない主人になれきた使用人が、主人の唐突な我が儘に対応できなくなると言うのは、意外とよくある話である。

どうもアウラの基準では、この異世界から連れてきた婿殿は、必要以上に周りのことを気にしすぎて、自分の欲求を押し殺すくせがあるように見える。

しかし、そうは言われても善治郎としては、これと言った要求はない。

確かにそろそろ後宮の外に出てみたいという欲求はあるが、そうすることで生じる面倒な事態を考えてもなお、押し通したいほどの我が儘ではないし、暑さや食べ物に対する不満は、いかにアウラが女王でもどうにか出来るものもあるまい。

そうして、自己完結してしまう『物わかりの良さ』が、アウラからするとどこかしいのであるが、元々も生まれも育ちも庶民に過ぎない善治郎には、思うがままの我が儘を口にするのを『見苦しい』と捉える価値観があるため、話は簡単には進まない。

「まあ、今のところは満足してるよ、うん。不満があったらちゃんと言うから」

「不満を言うのではなく、希望を言って欲しいのだがな。まあ、いい。とにかく、遠慮は無用だぞ。私はお前の献身に少しでも報いたいのだ」

優しげに笑い、そう言うアウラの笑顔に、善治郎は愛おしいと思う気持ちと同時に、ちょっとしたイタズラ心を覚える。

チラッと横目で現在時刻を確認し、昼休みがまだ十分に残っていることを確認した善治郎は、ソファ―に座っているアウラに近づくと、冗談めいた声を上げてアウラに飛びついた。

「よし、わかった。そこまで言うなら……身体で払え！」

冗談めかしてぶつかってくる夫の意図を瞬時に察した女王は、両手を広げて夫の行為を受け入れた。

抱きついてくる夫をしっかりと受け止め、ガッチリとその身体を抱きとめる。

「分かった。……ンン」

そして、両腕をしっかりと善治郎の背中に回し、情熱的に唇をあわせる。

「……………」

しかし、夫の反応は予想外のものだった。毎夜であれば、こうして抱き合えば、積極的に口を合わせ、こちらの肢体に手を這わせてくる筈の夫が、なぜか人形のように身動きもせず、身体を硬くしている。

「……どうしたのだ？　ゼンジロウ？」

「……………」

善治郎は無言のままアウラから離れると、部屋の隅に移動し、しがみ込む。

「ど、どうしたのだ、ゼンジロウ？　なぜ、そんな部屋の隅っこで絨毯を指で突きながら、暗い顔をしている？」

情熱的な抱擁をしてきたかと思うと、一転して落ち込む旦那の急変ぶりについて行けないアウラは、戸惑いの声を上げる。

その声に、善治郎は部屋の端っこで小さくなり、のの字を書いたまま、嗚咽混じりに声で答えるのだった。

「……いや、確かに俺も全力じゃなかったよ？　本気でぶつかった訳じゃないよ？　でもさあ、嫁さんソファーに押し倒そうとしたのに、ガッチリ正面から受け止められて、あまつさえ押し倒そうとした事実にも気づかれなかったって……」

別段善治郎は、肉体的頑強さをプライドのよりどころとする『マツチヨ』な精神構造をしているわけではない。しかし、それでもやはり、一人の男として、嫁に自分の体当たりを受け止められてしまうというのは、ちょっと悲しいものがある。

「あ……」

ゼンジロウの物言いに、アウラはあからさまに顔を引きつらせた。（しまった。やけに情熱的に抱きついてくると思ったら、あれは私

を押し倒すつもりだったのか)

王宮騎士ほどではないが、長年実戦も経験しているアウラの身体は、戦士として十分に鍛えられている。自分より少し大柄とはいえ、善治郎のような素人の突撃ぐらいは、笑って受け止められるくらいの体力はある。

しかし、こちらの世界は現代日本以上に、男社会であり、また肉体的頑強さを美德とする価値観がある。嫁を押し倒そうとして受け止められてしまった夫の悲哀は、善治郎本人より、アウラのほうが理解できる。

どうすればいいのだろうか？ 意図せずに、夫に恥をかかせてしまった女王はしばし考え込む。そして、

「き、きゃあ」

困り果てたアウラは、わざとらしい声を上げて、自らソファアに倒れ込んだのだった。

「遅いよ！ 俺そんな時間差で効果現れる特殊なタックルした覚えがないよ!？」

「……きゃあ」

善治郎の突っ込みにもめげず、アウラはソファアに倒れたまま、わざとらしい悲鳴を上げ続ける。

「いや、だから……」

「……きゃあ」

「……………」

悲鳴を上げるアウラが、ソファアの上で身をくねらせると、その拍子に深いスリット入ったスカートがめくれ、小麦色のその足が太股の半ばまであらわになる。

毎晩見慣れている光景ではあるが、これはよいものだ。

「……うりゃあ！」

「キャッ!？」

結局善治郎は、時間差タックルが成功したことにして、ソファアに倒れるアウラに覆い被さっていったのであった。



それから約一時間後、ソファアの上で、共にいい汗をかいた善治郎とアウラは、再び冷蔵庫から取りだした冷タオルで身体の汗を拭いただけの半裸姿で、勉強会へと突入していた。

善治郎がパソコンに向かって座り、アウラはその斜め後ろに立っている体勢だ。

善治郎が座るパソコンの横には、アウラが持ち込んだ竜皮紙の束が置いてある。

竜皮紙に書かれている内容は、去年の国内の地方別納税状況である。納税関係の書類というのは、基本的に『地名』と『個人名』と『数字』だけで構成されているため、この世界の文字と発音を覚えるのに最適だというのが、アウラの主張だ。

その意見を鵜呑みにしたわけではないが、善治郎は素直に毎日、アウラが書かれている単語を一つずつ指さし、読み上げる様をデジカメの動画で撮影し、その画像を頼りにパソコンの表計算ソフトに竜皮紙に書かれている内容を、打ち込んでいった。

総数三十からなるこの国の文字も、すでに数日前に全て、マウスでドット絵を描く要領で『外字登録』をすませ、キーボードの各文字に割り振っている。

一文字打つ度に変換しなければならないので非常に非効率的だが、こうすることで一応パソコンでもこの世界の文字を打ち込むことが出来る。

そうやって善治郎は、アウラから受け取った税収書を、この世界の文字表記と、カタカナ及びアラビア数字表記を並列して打ち込み、文字の読み方を一人で勉強するための資料を作成したのだ。

わざわざ昨年の税収書類を用いる辺り、アウラには他の思惑があるようにしか思えないのだが、表向きの理由はそうになっている。

「それで、ゼンジロウ。書類は完成したのだな？」

「おう。昨日のうちに打ち終わったよ。今、プリントアウトする」

善治郎は、ここ数日の努力の結晶である表計算ソフトに打ち込んだデータを、プリンターで印刷する。このプリンタは捨てるのももったいないので持ってきた代物だ。コピー用紙はともかく、インク

の換えが各色予備が三つずつしかない貴重品なのだが、どのみち使わなければ目詰まりを起こして、駄目になるだけだ。

プリンターに関しては特にけちるつもりもない善治郎は、景気よく昨晚打ち込んだデータをプリントアウトしていった。

機械が自動的に紙を吐き出す様子を興味深げに見ていたアウラであったが、やがて用紙の排出は終わったのを確認し、その紙の束を手に取り、ザツと目を通した。

「よし、それじゃ読みが正しいか確かめてみるか。ゼンジロウ、一枚目から読み上げていってくれ」

「分かった、始めるよ、最初は、アウベニス伯爵領、税收は竜皮が一千枚。麦が二千袋。木材が……」

プリントアウトされた用紙をアウラが見ている横で、善治郎はパソコンのディスプレイを直接見て、読み上げていく。

いちいち頷き、相づちを入れながら聞いているアウラは、途中発音や数字がおかしいところを指摘する。

「あ、そこは『ボニージャ子爵』ではなく、『ボニーヤ子爵』だ」

「オツケー、ジャじゃなくてヤね」

確かに地名、家名の類は固有名詞のため『言霊』が働かず、誰が口にしてもちゃんと正しい音が耳の届くので、文字に慣れ親しむのは良いかも知れない。しかも、王家の税收書に名が乗るような名門貴族の存在を、善治郎が優先的に覚えられるという副産物まで付く。

そう考えればこの、『税收書』で文字の基本的な読み方を覚える

というのも、あながち間違ってやり方ではないのかも知れない。

単語を百も二百も覚えれば、例えば知らない単語でも、何となく文字の読み方は分かってくるものだ。

どのみちこの世界には、現代日本の小学一年生用『国語の教科書』のような、初心者が文字を覚えるために最適化した書物は存在していない。

やがて、税収書を使った文字の読み方講座が無事に終わったところで、最後にアウラがふと疑問に思っていることを口にする。

「なあ、ゼンジロウ。所々数字が『赤文字』で印されていたり『青文字』で印されていたりするところがあるのだが、これは一体何なのだ?」

アウラの問いに、善治郎は珍しく含みのある笑みを持って答えた。

「ああ、それは実際に書かれている数値と、表計算ソフトが計算した数値が異なっているところを色別にして分かりやすくしてあるんだ。赤文字は少なく間違っているところで、青文字は多く間違っているところだよ」

「ほう……」

善治郎の答えに、アウラは表情の消えた顔で、小さく声を上げる。

一般的に、王家に提出される税収書とはいえ、その数値が間違えていないか、王宮サイドで全て再計算しているわけではない。

なにせ、数が数だ。とてもではないが、全て再計算などしていは、竜皮紙も人件費も馬鹿のようにかさんでしまう。

通常は、ザッと目を通し、一目で分かるくらいに数字がおかしい

のを洗い出した後は、抜き打ちでランダムに数枚取り出し、再計算するだけで済ませている。

その抜き打ちのランダム抜き出しも、「なぜか」国内の大貴族や調査官と懇意にしている貴族の領地はほとんど対象にならないという有様だ。

しかし、表計算ソフトを駆使する善治郎ならば、この程度の計算は、一人でも全く問題にならないレベルである。なにせ、やることは基本となるフォーマットを作って、そこに数値を間違えずに突っ込んでいくだけなのだから、ある程度会社で事務仕事をこなしたことのある人間ならば、誰でも出来る。

「ゼンジロウ、これを少し借りてもよいか？」

アウラのその言葉を、十分に予想していた善治郎は出来るだけ邪気のない笑顔を取り繕い、答えるのだった。

「うん、いいよ。手加減は忘れずにね。って、これは俺ごときが言うことじゃないか」

「分かっておる」

頭を掻く婿の言葉に、女王は苦笑を持って答えたのだった。

第三章2【女王の思惑】

その日の午後、自分とファビオ秘書官の二人しかいない執務室で、アウラは昼休みに善治郎から譲り受けたコピー用紙の束を取りだした。

ファビオ秘書官は鉄面皮を保ったまま、ピクリと片眉だけ跳ね上げる。

「陛下、これは？」

「昨年の主立った貴族の税收書だ。婿殿の国政に対する理解を知る指針とするため、『文字を覚える資料』という名目で目を通して頂いたのだが、数日ではぼ完璧に再計算を済ませ、数値の不備を漏れなく指摘してくれた」

「……ほう」

アウラの言葉に、細面の秘書官の目に、警戒の色が滲む。相変わらず、善四郎に対する警戒を解かないファビオ秘書官に、アウラは苦笑を隠さず言う。

「相変わらず、お前は婿殿に対する警戒を解かないのだな。婿殿には、お前が警戒するような野心はないと思うぞ」

アウラ言葉に秘書官は素直に同意を示しつつ、それでもかたくなに答える。

「はい、その意見には私も同意します。この一月のゼンジロウ様の

言動から判断しますに、あの方が政治的野心を持っている可能性は低いでしょう。しかし、それはあくまで低いのであって、無いと言いきれる根拠はありません。

なにより、あの方の知性・教養を知れば、その野心の無さがあまりにアンバランスです。この一月の態度がよくできた擬態である可能性は無視できません」

ファビオの目には、善治郎は極めて不自然な存在に見える。

平民であれば、自分の置かれている立場を理解できるはずがない。貴族であれば、能力と立場に応じた野心を持たないはずがない。

女王の伴侶という立場が、自分と周りにどのような影響を与えるのか。大枠で理解した上でなおかつ、女王の政治権力に傷をつけないう、細心の配慮を払って振る舞う『男』など、果たしてそのような都合のよい存在がこの世に存在するだろうか？

まあ、異世界の人間がこちらの常識に当てはまらないのはある意味当然と言えるので、もしかすると向こうの世界には普通に存在しているのかも知れない。

だが、無害で協力的な振りをして、こっそり爪を研いでいる可能性がゼロではない以上、最低でも誰か一人は警戒し続ける人間が必要だ。

「陛下は、下手に警戒されない方がよろしいでしょう。寝食を共にしている人間に内心を隠し続けるというのは極めて困難ですから。その分、私がゼンジロウ様の言動に気を配っておきます故」

「わかった。苦勞をかける、ファビオ」

「はい、陛下の側近となって以来、苦勞の日々です」

女王のねぎらいの言葉を、中年の秘書官は全面的に肯定して返した。

「……普通こういうときは、形だけでも「いえいえ、とんでもございません」とか、「陛下の為とあらばこの程度、苦勞の内に入りません」とか、答えるのではないか？」

口元に苦笑を浮かべるアウラに、ファビオは無表情のまま小さく肩をすくめ、

「事実をそのまま申し上げることが、私の役割であると自認しております」

そう、堂々と言ってのけるのだった。

事実、ファビオの耳の痛い直言には、これまで何度も助けられてきたアウラに反論の言葉はない。

アウラは一つ息を吐くと、話を元に戻す。

「しかし、この数日婿殿世界で使われている『数字』という文字を見せてもらったが、これは便利だな。何らかの形で取り入れることが出来れば、有益ではないかと考えるのだが」

善治郎がこの世界の文字を覚えると平行して、アウラも善治郎からアラビア数字の読み方と使い方について教わっている。

当然ながら、文字と言語を丸ごと覚えなければならない善治郎と比べ、0から9までの十の数字とその使い方を覚えるだけでよいアウラは、ずっと早くアラビア数字の使い方をマスターしつつある。

アラビア数字で筆算を行うのはまだ無理だが、アラビア数字で書かれている数を見て、そこに書かれている数字を理解できるくらいには、すでにその知識を自分の物にしている。

善治郎から借りてきたこの納税書を見れば、アラビア数字の簡単さは一目瞭然だ。

一つのたとえとして、同じ数を、アラビア数字と英語で書き比べてみれば、その違いがよく分かるだろう。

アラビア数字で表せば「2932」とこれだけですむ数を、アルファベットで表記すると「two thousand, nine hundred and thirty-two」と、実にこれだけの長文になってしまう。

納税書には、このような数字が何百と記されているのだ。その一つ一つを書き記したり、目を通すのに費やされる時間は誤差の範囲だとしても、それが何百何千と集まれば、そこに生まれる時間の差は膨大なものとなる。読むにしても書くにしても、数字を導入すれば作業は遙かに効率的になるだろうし、善治郎が言っていたとおり、無学な一般庶民にも、「文字は読めないが、数字だけは辛うじて読める」という層が生まれる可能性もある。

もつとも一般庶民に数勘定ができる層が増えたとして、そのことが国や王家にとってメリットとデメリット、どちらが大きくなるかは、分からない。

希望的な意見を述べるアウラに、ファビオ秘書官は少し考えた後、答える。

「そうですね。数字が有益な存在であることは同意しますが、いきなり全面的な導入には反対です。現場に大きな混乱を招きますし、

いかにアラビア数字というのが簡単に覚えられるものであると言っても、知らないものを一から習得するというのは、それなりの負担です。

強制的に学ばせようとするれば、程度の大小は分かりませんが、反発は必至でしょう」

「む、そうか。そうだな……」

ファビオの現実的な意見に、アウラはしばし顎に手をやり考え込んだ。

「ふむ、それならば、まずは数勘定を主としている部署に数字の読み方一覧表を配布し、今後王家が提出する資料は全て、既存の文字表記と数字表記を併記するようにするか。そうして、しばらく様子を見るというのはどうだ？」

「そうするには、最低でも王室付きの事務官達には、強制的に数字を学ばせる必要がありますが？」

アウラの提案に、ファビオはあくまで冷静に疑問を投げかける。

「駄目か？」

問い返されたファビオ秘書官はしばし黙考した後、首を縦に振る。

「いえ、それくらいでしたら大丈夫でしょう。早速手配しておきます」

「うむ、よろしく頼む」

アウラは、満足そうに頷いた。

一気に導入できないのはもどかしいが、この手のダイナミックな改革は、急ぎすぎると大概失敗するものだ。最悪、今後採用する新人達の初期教育にアラビア数字の習得を混ぜて、「数字を操れる人材は次世代から」、と割り切った方が良いかも知れない。

当面、数字の導入による効率化は、目に見える形にはならないと思っただ方が良いだろう。

即効性のある利益を求めるのならば、数字その物よりも、数字を使って善治郎が計算してくれた、この『納税書』の内容こそが力を発揮する。

「ベルビデス辺境伯に、コルンガ男爵。ダビーノ領主騎士に、ガメス領主騎士。納税額の差異が特に目に余るのはこの辺りか」

名前を読み上げながら、アウラはペロリと赤い舌で唇を舐める。肉食獣の笑みを浮かべる女王に、中年の秘書官は諭すように冷静な声で助言する。

「陛下。例え不正であっても、これまでは見逃されてきた慣例がございます。急激に締め付けを強めては、暴発を招きかねません」

「分かっている。いきなり、罪状を突き付けて強攻策にでるような愚行はせんよ。これはあくまで、臭わせて向こうの譲歩を引き出すための材料だ」

アウラはそう言って、少し苛立たしげに鼻の周りに皺を寄せた。

人間は面白いもので、例え明文化されている違法行為でも、何十

年という長い間、その行為が正当の取り締まられずに放置されていると、自分の違法行為が正当なものであると錯覚することがある。

そう言う認識の人間を、ある日突然、厳正に法に基づいて処罰しようとする、「これまでずっと何も言わなかったのに、何でいきなり！」と憤慨するものだ。

それは感情的な意見であるが、多数意見である場合、配慮を怠ると王といえども手痛い反撃を喰らう事になる。カープア王国における王と王家の力は、圧倒的な物ではあるが、結託する貴族の力を無視できるほどではない。

「さらに申し上げれば、陛下が今名前を挙げられた方々は、皆先の大戦で武功のある方ばかりです」

「……そうだな。彼等のあげた戦功が、我が国が戦勝国となった理由の一端を担っているのも、事実だ」

付け加えるファビオ秘書官の言葉を素直に認め、アウラは首を縦に振った。

現在残っている貴族の大半は、先の大戦を生き延びた面々である。単純に私腹を肥やすために、領民に重税を課したり、王国に払う税をごまかしたりするような無能は、ほとんどいない。そのような無能な王国に寄生するだけの貴族は、戦乱の世で家を守りきれず、たいがい没落している。

だからこそ、残った貴族達はやっかいなのだ。

先にアウラが名前を挙げた貴族達は、そうしてごまかした税を自

領の軍備にあてたのだ。その兵力が、先の大戦では、国土防衛の一翼を担ったのだから、払わなかった税も回り回って王国のために使われたと言えなくもない。

しかし、その税が正当に納められていれば、その分もつと円滑に王国軍が編成され、国軍を強化できたのも事実だ。

軍の効率化のため、国税による王軍の強化をうたう王家と、王軍ではフットワークが重く、自領防衛の役には立たないと、自領軍強化の手を緩めない地方領主。

どちらも間違っていない分、王家と地方領主の間に摩擦が生じるのは必然とさえ言える。

そうした脱税行為が黙認され、地方領主の兵力強化が進めば、国内のパワーバランスに大きな支障を来すのは、火を見るより明らかだ。

最悪でも、地方領主が連合軍を築いて王家に反乱を企てても、王国軍がそれを問題なく鎮圧できる力関係は保っておきたい。

現状、主立った地方貴族達に、無駄に王家に刃向かうような現実の見てない人間はいないが、次代、次々代の後継者達も全員有能で目端の利いた人物である保証はない。

「だが、違法行為は違法行為だ。加減はするし、彼等のメンツや名誉を傷つけないよう配慮もするが、それなりの代償は払って貰う」

きっぱりと言いきるアウラに、ファビオはしばし黙考し、

「それでは、これまでの書類の不備が発覚したと内々に通達し、今後そのような事がないように、彼等の『自主的な協力を要請する』

という形で話を持っていくのはいかがでしょう」

そう、妥協案を提案した。

「まあ、その辺りが妥当な線か。分かった、細かい調整は任せる」

「はっ、了解しました」

話が一段落したところで、アウラはふと別な話題を振る。

「そういえば、婿殿の家庭教師はどうなった？ そろそろ、主だったところは出そろった頃だろう？」

急なアウラの問いに、ファビオ秘書官は慌てず、肯定の返事を返す。

「はい。自薦三、他薦三十一。その大多数は、高い魔力を持つ、妙齢の未婚女性です」

魔力の高い、結婚適齢期の未婚女性。あからさまな側室狙いの人選に、アウラは失笑を禁じ得ない。

「やれやれ、こちらの意図に気づかずにやっているのならばタダの無能ですむが、気づいてやっているのならばちょっと厄介だな。私はそこまで舐められているのか？」

女王の真意を無視して、女王の伴侶に側室候補を送りこむ。血統維持という大義名分があるにせよ、ある意味主君に喧嘩を売っているに等しい。

「舐められていると言うより、それだけゼンジロウ様の側室に息の掛かった者を送りこむことに、リスクを上回る魅力を感じているのでしょうか」

ファビオの言葉に、アウラは不快げに鼻を鳴らす。

「フン、婿殿は側室の背後に踊らされるほど、迂闊な人間では無いと思うのだがな」

「同感ですが、それはゼンジロウ様の実態を知っている我々だからこそ言える感想です」

「まあ、そうだな。となると、やはり、婿殿の家庭教師は、パスクアラお婆様にご足労願うしかないか」

そう言ってアウラは、身体の凝りをほぐすように、椅子に座ったまま伸びをする。

そんなアウラに、ファビオ秘書官は珍しく少し口ごもりながら、口を開いた。

「いえ、それなのですが、一人こちらとしても無視できない人物が推薦されております。マルケス伯爵が、ご自身の細君であるオクタビア様を推薦されているのです。

ご存じでしょうが、オクタビア夫人は貴族女性のかみとも呼ばれるお方。知識、教養、魔法技術、あらゆる点から見てもケチのつけようがありません。その上、既婚者ですので一応陛下の意思をくんだ形にもなっております」

「あ、あのヒヒ爺い……」

予想外の展開に、アウラは喉の奥から絞り出すような声を上げた。

知識と教養があり、魔法にも長けた、既婚女性。一見すると、アウラの意図を統べてくんだ人選である。もともと、オクタビア夫人という人物が、マルケス伯爵の妻とは言っても後妻であり、現在まだ二十代の前半という若さで、その美しさと控えめで男を立てる人格から、ほんの数年前までは『宮廷の名花』として名をはせた人物であるという事実を無視すれば、の話であるが。

ちなみに、アウラの元婚約者候補であり、マルケス伯爵の息子であるラファエロ・マルケスは、義理の母に当たるオクタビアよりも一回り年上である。

「まさか、あのヒヒ爺、自分の妻に不倫をけしかけるつもりか？」

アウラの予想に、ファビオ秘書官は首を横に振る。

「いいえ、これはあくまで私の私見ですが、マルケス伯爵もそこまでは考えていないと思います。ただ、ご存じの通り、オクタビア夫人はこの国の常識に乗っ取った、『理想的な貴族女性』です。ごく自然に男を立て、男の自尊心を擦り、動的な自信を植え付けることに長けている方。」

そういう人物とゼンジロウ様を長時間接触させることで、ゼンジロウ様の積極性を引き出し、陛下とゼンジロウ様の間に亀裂を生じさせようとしているのでは」

控えめな美人に、褒められ、尊敬の視線を向けられ、おだてられれば、大概の男はいい気になる。「俺だってやればできる」という気分になる。そうして、善治郎の精神状態を誘導し、政治への積極

性をわき上がらせることが出来れば、貴族達にとって善治郎は使い勝手のよい、王権に直結するパイプとなる。

少々、乱暴に例えれば、善治郎を「女王の尻の下から、引きずり出す」ことが目的というわけだ。

この場合厄介なのは、背後で操るマルケス伯爵の腹は真っ黒でも、矢面に立つオクタビア夫人自身には、一欠片の悪意もないと言う点だ。

アウラがこれまで聞き及んできたオクタビア夫人の人物像が正しければ、夫人は何の悪意もなく、純粹に『家庭教師』という職務に全力を尽くすはずだ。

表面上は、善治郎の家庭教師として、最適の人選と言える。

「いかがされますか、陛下？ 適当に理由をつけてお断りすることもできますが」

こちらの真意を探るような、秘書官の不躰な視線に少し不快感を覚えたつも、アウラは首を横に振り、答えるのだった。

「いや、そこまでして伯爵の不評を買うのも得策ではないだろう。どのみち、いずれは婿殿も最低限表に出ることになるのだ。

あれも駄目、これも駄目という訳にもいくまい。背後に控えるマルケス伯ともかく、オクタビア夫人自体の人格に問題が無いのであれば、むしろ婿殿にとっても益の多い人選と言える。受け入れろ」

「はっ、承知しました。では、そのように手配します」

アウラの言葉に、ファビオ秘書官は、慇懃な動作で一礼して答え

るのだった。

第三章3【家庭教師は美貌の貴婦人】

その日、後宮はちょっとした緊張感に包まれていた。

これまでは善治郎と女王アウラの他には後宮で働く使用人しか存在しなかったその閉鎖空間に、今日初めて部外者が足を踏み入れるのだ。

善治郎は、後宮の一室でソファーに深く腰を掛け、何度目になるか分からない深呼吸をする。

（しかし、家庭教師ね。この年で今更、勉強し直すとは思わなかったな。いや、社会人になってからも勉強はあったけどさ）

社会人時代、それなりに外回りも経験している善治郎は、特別初対面の人間を苦手としているわけではないが、自分が『上』の立場で対応するのは初めてである。

外部の人間に、善治郎が持ってきた電化製品を見せるわけにはいかないのです、この部屋はごく一般的な後宮の一室だ。氷扇風機の恩恵を受けられない室温の高さに、善治郎はしきりに汗を流し、先ほどから黒砂糖と塩を適量に混ぜた水で水分を補給している。

（敬語は使っちゃ駄目、向こうが名乗るまでこっちは名乗らない。でも、極端に無礼と取られる言葉遣いや態度も厳禁、と。難しいな、マジで）

善治郎が頭の中で、これまでアウラに教えられてきた基礎的な受け答えを思い出している間に、その時はやってきた。

『失礼します。オクタビア様をお連れしました』

「ッ、通せ」

一度咳払いをしてから、善治郎は日頃あまり使わない命令口調でそう言った。一瞬サラリーマン時代の癖で、入り口まで出迎えに行きそうになったが、腰を浮かせたところで間違いに気づき、ソファから立ち上がった体勢で、待つ。

次の瞬間、ガチャリと音を立てて、入り口のドアが開き、一人の淑女が入室してきた。

「お初にお目に掛かります、ゼンジロウ様。カープア王国マルケス伯爵領領主、マヌエル・マルケス伯爵が妻、オクタビアと申します。此度はゼンジロウ様の教師という大役を仰せつかり、光栄に存じます。無学、非才の身ではありますが、全力を尽くす所存です」

淑女は耳に心地よい柔らかな声色でそう言うと、深々と頭を下げた。

（へー、無学、非才ってこの国でも『謙遜』の美德はあるんだな）

『謙遜』は地球でも国によっては通用しない地域があると何かで読んだことのある善治郎は、そんな感想を抱きながら、精一杯威厳のある声を装い、命ずる。

「面を上げよ」

「はい」

淑女——オクタビアは頭を下げたときと同様、流れるような仕草で頭を上げた。

善治郎は、オクタビアの顔を目の当たりにする。

（なるほど、これがこの国で『貴婦人の鏡』と呼ばれる人か。確かに、そう言われるだけのことはあるな）

華奢、清楚、貞淑。オクタビアの顔を見た善治郎の頭にそんな単語が唐突に浮かぶ。

背はあまり大きくない。善治郎から見て『普通』の高さに目線があるのだから、恐らく百六十センチぐらいだろう。

だが、肩幅が狭く、なで肩であるため、実際の身長以上に華奢で小柄なイメージがある。

艶やかに光る真っ直ぐな黒髪。日本人でもめったにいないような漆黒の瞳。そして、そんな髪や目の色とは反するように、南国人にしては色素の薄い、クリーム色に近い小麦色の肌。

鼻は高いが、全体的に顔の掘りも浅く、「日に焼けた日本人」といえば、そのまま通りそうな感じだ。

もっとも、現代日本でこれほどの美人にお目には掛かりたければ、モデルや芸能人の事務所にいかないとまず無理だろうが。

「ゼンジロウだ。アウラ女王陛下の夫である。今後、どれほどの付き合いになるかは分からぬが、よい関係を築きたいものだ」

「はい。私めごとときには、勿体ないお言葉です」

善治郎が、必死に頭の中で考えたセリフを読み上げると、オクタビアは殊勝に頭を下げる。

この、下手に出ていけない相手との会話というのは、予想以上に善治郎の精神を疲れさせる。

「では、マルケス夫人の指導方針から聞こうか。座れ」

思わず、善治郎は昨日のうちに頭の中で用意していた段取りをすっ飛ばし、オクタビアに着席を促した。

「？　ッ、はい、失礼します」

善治郎の言葉に、一瞬驚きの表情を浮かべたオクタビアであったが、すぐに自分が何のためにここに呼ばれたのかを思い出し、素直にソファーに腰を下ろした。

オクタビアが腰を下ろしたのを見届けた後、善治郎もゆっくりとソファーに尻を戻した。

テーブルを挟み、向かい合うようにしてソファーに座る善治郎は、オクタビアから今後どのような方針・方法で常識・マナー・魔術について学ぶのか、一通り説明を受けた。

「つまり、原則お前は私に歴史や魔術について教える。その際、私の態度にマナーや常識から外れている点があれば、その都度指摘する。そう言うことか？」

頭の中で言われた内容を纏めて口にする善治郎に、オクタビアは柔らかに微笑み返す。

「はい、常識やマナーというのは、口頭で伝えてもなかなか身につ

くものではございません。ゼンジロウ様はすでに、大梓での振る舞い方はご理解されているようですので、そうするのが得策かと存じます」

「そして、今後は昼食もお前と一緒に取る？」

「はい、会食という場合は、常識、マナーが凝縮された空間です。この二つを身につけるのは、最適であると考えました」

なるほど。言っていることは確かに筋が通っている。マナーというのはいくら口頭で言い聞かされても、身には付かないものだ。

やってみて、間違えて、指摘を受ける度に、磨いていく。時間は掛かるが、それが最適なのかも知れない。

ただ、今後常識とマナーの先生に見守られながら毎日昼食を取ると思うと、いささかうんざりする。

少なくとも、ここ数日アウラと過ごしていたような、心弾む楽しい一時にはならないだろう。

「わかった。お前がそれが最善だというのなら、こちらとしても否はない。そのように取りはからえ」

善治郎の言葉に、オクタビアは柔らかに笑い、頭を下げた。

「ありがとうございます。では、早速ですが、先ほどゼンジロウ様は、私が入室したとき、ソファアから立って私を迎えてくださいましたね？」

「あっ」

早速の駄目出しに、善治郎は思わず素の声を上げる。

オクタビアは、非難がましい口調にならないよう、細心の注意を払い言う。

「私ごときに丁寧な対応を取って頂き、非常に恐縮なのですが、ゼンジロウ様のお立場であのような行動を取りますと、『軽く見られる』恐れがあります。原則、ゼンジロウ様が立って迎えなければならぬのは、国内ではアウラ陛下ただお一人です。

国外の王族でも、王その人か第一位王位継承者以外には、あそこまで丁寧な対応をされる必要はありません。

また、ゼンジロウ様は自分が立ったまま、私に席を進めて下さいましたが、これも身に余るご厚意です。常識やマナーは時と状況で変化しますので、決めつけるのは禁物ですが、もう少し腰を落ち着けた対応が、王族には望まれます」

「分かった。以後気をつけよう」

表面を取り繕い、頷く善治郎であったが、内心は冷や汗をダクダク垂らしていた。

（やばい、気をつけていたつもりなのに、まだサラリーマン時代の癖が出てたか）

サラリーマンであれば、商談に招いた客が席に着くまで自分は腰を下ろさないのが、常識だ。一度身につけてしまった、癖を矯正するのは、思った以上に難しそうだ。

善治郎の内心を見抜いたのか、オクタビアは慰めるようににつこ

りと笑うと、落ち着いた声で次の話へ移行する。

「それでは、今日はまず、魔術の基礎についてご説明させて頂きます。不明な点、疑問な点がございましたら、なんでも仰って下さい。私の知識で分かる範囲で、お答えします」

「うむ、よろしく頼む」

「……ゼンジロウ様。その、頼むというのは」

「そ、そうだな。ええと……発言を許す、説明を初めよ」

早速やらかした善治郎は、ごまかすように咳払いをすると、言い直す。

今度は、合格だったらしく、オクタビアは小さく頭を下げると、耳の心地よい声で、丁寧に説明を始めた。

「では、最初に魔術の基礎からご説明させて頂きます。魔術とは、大きく二種類に大別できます。一つは、大小はあれども万人が操ることの出来る、『四大魔術』。もう一つは、特殊な血筋の方々のみ可以使用できる『血統魔術』です」

「四大というのは、地水火風で、血統というのは『時空魔法』とかのことか？」

途中で口を挟む善治郎の態度に、オクタビアは気を悪くするそぶりも見せず、笑顔でこっくりと頷き返す。

「はい、その通りです。ただし、『血統魔術』は特定の血筋の方以

外には使えないという点を除けば、その基礎となる部分は四大魔術となんら変わりません。

魔術の発動に必要な条件は三つ。『正しい発音』と『正しい認識』、そして『正しい魔力量』です」

「発音と、認識と、魔力量？」

ちよつと聞きには、よくゲームや本で出てくる魔法その物にも聞こえるが、具体的には分からない。

善治郎の様子から、正しく理解できていないことを悟った美貌の家庭教師は、具体例を挙げて説明を始める。

「まず、魔術にはそれ専用の言語がございます。世間では安直に『魔術語』と呼ばれる言語なのですが、この言語を使用しなければ、魔術は発動しません。ご覧下さい」

そう言つて、オクタビアはピンと右手の人差し指を立てる。そして、

『中空に散らばる見えざる水は、この指先に集い、球形を取れ。その代償として我は、水霊に魔力十八を捧げる』

そう善治郎の耳には聞こえた次の瞬間、オクタビアの指先に、丸い透明な水滴が浮かんだ。

「ツッ!？」

その現象に驚く暇もなく、善治郎は頭を押させる。

（なんだ今のは？ オクタビアさんがちょっと口を開いたら、滅茶苦茶長い言葉がこっちの耳に届いたぞ？）

誓っても良いが、今オクタビアは、あんな長文を読み上げるほど、長く口を開けてはいなかった。

なにが起きたのか分からないでいる善治郎に、オクタビアは指先に作った水滴を先ほど飲み干したお茶のカップに入れると、深々と頭を下げる。

「申し訳ありません、ゼンジロウ様。今のは私が浅慮でした。魔術語は、僅かな音の強弱、アクセント、音節の切り方で、意味が変化する非常に難しい言語なのですが、その代わりに短い音に非常に多くの意味を込めることが出来るのです。」

そのため、初めて魔術語を耳にした方は、短音に含まれる多くの情報量に不快感を覚えることがあることを、失念しておりました。重ねてお詫び申し上げます。申し訳ありませんでした」

オクタビアは、そう言って白いうなじが見えるほど、深々と頭を下げた。

善治郎は、軽く頭を振って応える。

「今の話が本当であれば、どのみち魔術を習う際には、避けられない事態だったのだろう。最初の説明がなかったのは、確かにお前の落ち度だが、それは謝罪すればすむ程度の問題だ。

説明を続けよ」

謝罪を受け入れた善治郎に、オクタビアは恐縮したように応える。

「寛大なお言葉、ありがとうございます。以後、このようなことがないように、細心の注意を払います」

「うむ」

善治郎は、大げさに礼を言う貴婦人に戸惑いを覚えたが、どうにか表情には出さず、鷹揚な答えを返す。

確かにこれは、オクタビアが軽率といえば軽率だが、少々彼女が気の毒な面もある。

元々、言霊の存在が一般的であるこの世界では、音の量と耳の届く情報量が異なっていることに違和感を覚える人間は少ない。まして、頭に衝撃を覚えるほど鋭敏な感覚を持っている者は本当に希だ。そう言う意味では、オクタビアも善治郎も運が悪かった、と言える。

「では、説明を続けます。今私は、『正しい発音』を『正しい認識』で持って唱え、『正しい魔力量』を注いだ結果、『水球作製』の魔術が発動したのです。では、これから、今上げた三つを意図的に間違えて見せます」

オクタビアはそう言うと、また右手の人差し指をピンと建て、呪文を唱える。

『ウルムグオ』

善治郎の耳に、全く意味の分からない短い呪文が聞こえる。しかし、呪文は発動しない。

「今、私はわざとほんの少しだけ発音を間違えました。それだけで

意味が成立せず、呪文は発動しません。では、今度は正しい発音で、間違った認識の呪文を唱えてます」

そう言ってオクタビアは、先ほど同様、ほんの少しだけ口を開き、短く言葉を口にする。

『中空に散らばる見えざる水は、この指先に集い、球形をとれ。その代償として我は、水霊に魔力十八を捧げる』

すると、今度は最初に呪文が成功したときと同様、善治郎の耳は意味のある長文が聞こえてきたが、オクタビアの指先に水滴は現れない。

「今、私は正しく呪文を唱えながら、心の中では別な呪文が発動する様を想像していました。結果はごらんの通りです。では最後に、今度は、発音と認識を正しく行い、込める魔力量を意図的に間違えてみます」

『中空に散らばる見えざる水は、この指先に集い、球形を取れ。その代償として我は、水霊に魔力十八を捧げる』

本日四度目になる『水球作製』の呪文は、正しく善治郎の耳にその意味を伝える。だが、やはり、効果は現れない。

オクタビアは不思議そうにこちらを見る善治郎に、小さく笑って説明する。

「今私は、『十八』の魔力を捧げる、と魔術語で言いながら、あえて『十九』の魔力を込めました。結果呪文の発動は失敗です」

その言葉に、それまでは一応納得して聞いていた善治郎が、驚き

の声を上げる。

「ちょっと待って、多すぎても駄目なの、か？」

とっさに、口調を取り繕うのを忘れかけた善治郎の問いに、オクタビアは頷き答える。

「はい。多すぎても、少なすぎても、魔法発動しません。これが、魔力消費量の多い大魔術の場合、多少の違いは誤差として見逃されるのですが、細やかな魔術ほど込める魔力の最適量は厳密です。

そのため、大魔力を持つ魔術師は、多くの場合、私が今唱えたような細やかな魔術を苦手としています。もっとも、筆頭宮廷魔術師のエスピリディオン様のように、例外はいくらでもあります」

説明を受ければ納得のいく話ではある。二百？のペットボトルを傾けて、コップにすり切れ一杯まで水を満たすのと、十リットルのポリタンクを傾けて、コップにすり切れ一杯まで水を満たすのでは、どちらが簡単かは考えるまでもない。

頭の冷静な部分でオクタビアの言葉を理解しながら、善治郎は半ば呆然と説明を聞き流していた。

善治郎としては、魔術が使えると言うことになりドキドキワクワクしていたのだ。

しかし、自分のような大魔力を持つ人間は、細やかな魔術には向かないのだとすると、基本的に後宮から出ることない自分は、まともにも魔術を使う機会はほとんどないのではないだろうか？

「それは、下手に大魔力を持つと、一般的な魔術の習得にはかえって向かない、ということか」

「はい。事実、アウラ陛下は、時空魔法以外は、火系統の戦場用広域殲滅魔法しか使えないと聞いております。

もつとも、そう言った大魔術は、込める魔力が多いだけでなく、呪文も極端に長いので、正確に発音出来るようになるまで、一つ習得するのに半年以上も時間をかけたという例も珍しくないようです」

聞けば聞くほど、善治郎が魔法を使えるようになる日は遠そうだ。

「では、率直に聞くが、今日から学び初めて、私が魔法を発動できるようになるまで、どれくらい掛かる？」

いつの間にか、教養やマナーの勉強が主題であることを忘れ、善治郎はオクタビアにそう問う。

オクタビアは、善治郎が何を望んでいるのか鋭敏に察したが、教師役を引き受けた身として、嘘をつくわけにもいかず、華奢な身を縮こませ、首をすくめて応える。

「それは、その……正確に魔力を込めるには、まず己の魔力を自覚して、それを自在に操作できるようになる必要があります。通常、魔力を自覚できるようになるまで二年、その操作に一年が相場とされております」

「……三年」

呻くように言葉を漏らす善治郎に、オクタビアは慌ててフオーロする。

「あ、でも、そこを過ぎれば、あとは比較的簡単です。正しい発音

を覚えて、正しい効果を鮮明に脳裏に描いて、正確に魔力を込めるだけです。簡単な呪文なら一日で使えるようになります」

その簡単な呪文が、大魔力を持つ善治郎には不向きだと先ほど言ったばかりであることを思いだしたのか、途中で言葉に勢いをなくしたオクタビアは、申し訳なさそうに上目遣いで善治郎を見る。

その目線が、善治郎の頭を冷やしてくれた。

考えて見れば、そもそも自分が魔術を覚える必要はないのだ。ただ、大魔力を持つ王族のたしなみとして『覚えておいた方が良い』というだけなのだから、習得に三年、五年と時間が掛かっても問題はない。

（どのみち、魔法を覚えても、俺の生活に役立つことはなさそうだしな）

この時点では、自分の血統に流れる特殊魔法『時空魔法』の可能性を知らされていない善治郎は、安易にそう魔法の可能性を切って捨てる。

「分かった。では、ゆっくり焦らずにやっていこう。よく、指導してくれ、オクタビア」

「はい、お任せ下さい、ゼンジロウ様」

どうしたのか分からないが、短い時間で立ち直った女王の伴侶に、美貌の女家庭教師は、誠意を籠もった言葉と、柔らかな笑みで応えるのだった。

第三章4【妻の追求、夫の告白】

オクタビアを家庭教師に迎え、最初の講義を無事終えた日の夜。数時間に及ぶ緊張の時間から解放された善治郎は、妻であるアウラと二人、後宮の一室でくつろぎの時間を過ごしていた。

湯上がりの善治郎は、いつも通り缶の発泡酒。一方、アウラは、ブランデーを注いだグラスを顔の前に持ってきて、その芳醇な香りを楽しんでいる。

数日掛けて白ワインを一瓶飲み終えたアウラが、次に選んだのが、この箱入りのブランデーだ。どうやら、この世界では蒸留酒の類は一般的ではないらしく、最初はブランデーのアルコール度数にむせていたアウラであったが、飲み方が覚えた後は、ワインよりも美味そうに飲んでいる。

善治郎がうろ覚えの知識で「確かブランデーは、常温ストレートが常道だったはず」と教えた通り、何も入れずストレートで飲んでいる。

LEDライトの明かりにブランデーグラスを透かし、琥珀色の影を目で楽しみながら、アウラはその中身を少しずつ喉へ流し込む。

「なあ、それって美味しいの？」

善治郎の問いに、アウラは満足げに首を縦に振り、答える。

「うむ。驚くほど香りが高く、味が濃い。飲み慣れると、やみつきになるな」

「へー、そう言うもんかね」

正直に白状すれば、ブランデーとウイスキーの違いもろくに分からない善治郎には、アウラの感想が理解できない。だが今アウラが飲んでいるブランデーは、ヘネシーのXOとか言う名前で、一本一万円以上した代物である。分かる人には分かるのだろう。分からない人である善治郎は、冷たい発泡酒で満足だ。

アウラは、飲み干したブランデーグラスをいったんテーブルの上にも戻し、隣に座る夫に話しかける。

「それで、どうであった？ 感想を聞かせて貰おうか」

唐突にそう話を切り出すアウラに、善治郎は少し意表を突かれたが、発泡酒の缶を口から離して素直に答える。

「ああ、そうだな。一言で言うところ『覚悟していた以上に疲れた』ってとこかな。礼儀やマナーがなっていない点を何度も注意されたよ。特に昼食は、ほとんど何を食べたのか覚えていない」

「苦勞を掛けるな」

「いいって、必要なことなんですよ？ それに、魔法の講義は面白かったし。まあ、使えるようになるまで三年以上かかるって聞いたときは流石にちょっとへこんだけど」

善治郎はそう言って、アウラに向かい、缶を持っていない方の手をヒラヒラと振った。

実際、魔法を目の当たりにして興奮したのは事実だ。

この世界を行き来したのも歴とした魔法なのだが、いかんせんあ

れは当事者であったため、魔法が発動するところを見ていたわけではない。それに比べて今回オクタビアが見せてくれたのは、指先に水を球状に止めるという、非常に分かりやすい魔法だ。

魔法としての説得力は、こちらの方が何倍も勝っている。

「まあ、魔術に近道はないからな。身につけたいのであれば、地道に努力するしかない。逆を言えば、時間さえ掛ければ誰でも習得できる技術でもある。最後までやりきる覚悟さえあれば、決して無駄な努力にはならんぞ」

アウラはそう言うのと、励ますように隣に座る夫の腕をその深い胸の谷間に抱きとる。

「アウラ……」

そして、柔らかい感触に眉尻を下げる夫の意表を突き、女王は少し意地の悪い笑みを浮かべ耳元で囁く。

「して、オクタビア殿はどうであった？ やはり、お前の目にも魅力的に映ったか？」

妻の口から漏れた、別な女の名前。男の常か、善治郎はやましいことは何も無いはずなのに、反射的にビクリと身体を震わせる。

「んん？ どうであった？」

逃げられないよう、ガッチリと腕を抱いたまま、なおも問いかけてくるアウラに、善治郎は視線を天井に這わせながら、答える。

「あー、うん。確かに綺麗な人だし、人当たりも凄く良い感じだよ

ね。ああ、こういうタイプが、この国では人気なんだって、凄く納得した」

「……ほう」

短く返すアウラの返事は、心なしがいつもより少し低い気がする。

「それは、お前の目にも好ましい女に映ったと言うことか？」

アウラも自分に自信がない訳ではないが、オクタビアとは正反対の人間である自覚はある。思わず、探るような口調になってしまう。そんな妻の機嫌の悪化に気づかないほど、善治郎は鈍い人間では無い。

「いや、確かにストライクはストライクだけど、外角低め一杯って感じかな。下手に手を出してスイングを崩したら『ど真ん中の剛速球』を打ち返すのに支障が出そうなイメージ」

しかし、慌てた頭で紡いだ言い訳は、この世界の人間には全く理解不能な代物であった。それでも、口調と全体のニュアンスから善治郎の言わんとしていることを悟ったアウラは、ニンマリと笑うと、より直接的な言葉を求め、再度問い返す。

「つまり、どういうことだ？ もう少しはっきりと言ってくれ」

はっきり言ってくれと言われても、「言えるか」というのが、善治郎の正直な感想だ。ここで「僕が愛してるのは君だけだ」とか「君の方がずっと綺麗だよ」などと言えるほど、善治郎は羞恥心を見ることができる人間ではない。

「ん？ ほら、はっきりと、な？」

楽しそうに自分の腕を抱いて揺さぶる妻に視線を向けず、善治郎は天井に目を向けたまま、己の羞恥心と妻の要望の間を取り、精一杯の答えを返す。

「ええっと、その……だから。最初に召喚されたあの日、俺を召喚したのが、アウラじゃなくてオクタビアさんだったら、俺は今頃この世界にはいなかったっていうこと」

言いながら善治郎は、自分の頬が紅潮していることを自覚する。この答えで、アウラは満足してくれるだろうか？ 首は上に向けたまま、視線だけを横に向けた善治郎の視界で、アウラの赤い長髪がゆらりと揺れる。

「ふ……ふふふ、そうか。そうか」

嬉しそうに笑う、アウラの声。

どうやら、善治郎の答えは、アウラの心を震わせるのに十分なものだったらしい。

「私も、召喚されたのがお前であったのは、この上ない幸運であったと思っている」

アウラはそう言って善治郎の頬に、熱く濡れた唇を強く押しつけたのだった。



深夜。いつもの通り、夫である善治郎と仲むつまじく一つのベッドで眠りについたアウラは、真夜中過ぎに目を醒ますと、静かに寝息を立てる善治郎を起こさないよう、細心の注意を払いベッドから降りた。

寝室にもLEDスタンドライトは設置してあるが、善治郎が寝ている手前スイッチを入れるわけにはいかない。

アウラは、真っ暗な中手探りで衣類を探す。やがてアウラの手が、柔らかく薄い布地を探り当てた。

アウラはそのやけに肌触りの良い、薄い服——赤いスケスケのネグリジェを手を持ち、こみ上げてくる笑いを堪える。

床につく前、こちらの問いに嬉しい答えを返してくれた夫への感謝を込めて、この扇情的な夜着を纏って見せたのだが、その時の善治郎の反応は、『デジカメ』とやらに納めておきたいくらいに楽しいものだった。

「ウエエ!？」

と言葉にならない悲鳴の様な声を上げて、硬直した夫を前にして、アウラは失礼としりながら、笑い声を堪えることが出来なかった。

善治郎も、その『エッチな夜着』の存在がアウラにばれていないとは思っていなかったようだが（転移初日に丸ごと持ち物検査をされているのだ）、アウラの方から自主的に着て見せたのは、かなり効果的な奇襲であったようだ。

恥ずかしい衣装を身につけているのはアウラの方なのに、顔を真っ赤にして羞恥と戦っているのは善治郎という何とも奇妙な状況となった。

それでも、妻の妖艶なネグリジェ姿に善治郎は十分に刺激を受けたのだろう。

昨夜の営みは、これまで過ごしてそれと比べても少し激しく、少し長かった。

「……………」

夜の営みを思い出し、頬を緩めながら、アウラはスケスケネグリジェではなく、寝る前に着ていたワンピース型の部屋着を探り当てる。部屋着を手を持ったアウラは、善治郎を起こさないよう、足音を忍ばせて、ゆっくりと寝室から出て行った。

寝室から、善治郎が昼間主に使用しているメインルームへと移ったアウラは、LEDスタンドライトを一つだけ点灯させ、その明かりの下、素早く部屋着を着込む。

蒼い袖のないワンピースを着込んだアウラは、革張りのソファに腰を下ろすと、テーブルの上に供えてあるベルを鳴らす。

すると、しばらくして一人の若い侍女が部屋に入ってきた。手に持つ蝋燭立ての明かりを頼りに、暗い廊下を渡ってきたのだろう。薄闇になれた目にはLEDの明かりが眩しいのか、少し眼を細めている。

カープア王国の人間には珍しい、長い金髪が印象的なその侍女は、元はアウラの側仕えであり、今は善治郎の一番近いところで働いている人物である。

「失礼します、陛下」

恭しく頭を下げる侍女にアウラは一瞥をくれると、ソファアの上で足を組み、言う。

「報告を聞こう」

主君の言葉を受け、忠実な侍女は今日自分が見てきたことについて、できるだけ私心が混ざらないように気をつけて、話し始める。

「はい。私が見た範囲では、オクタビア様に不審な様子は見受けられませんでした。誠実に、ゼンジロウ様の家庭教師役を務められていた模様です」

昼間、水やタオルの差し入れなどで、善治郎とオクタビアの勉強風景に何度も足を踏み入れていたその侍女は、しっかりとした口調でそう報告する。

「うむ、そうか。やはり、オクタビア殿はただの偵察要員かな？」

報告を受けたアウラは、独り言のようにそう呟いた。

元々オクタビアは、はかりごとには向かない真っ直ぐな女だ。マルケス伯爵としては、妻の目を通して、問題の『女王の夫』の人となりを知ることが主目的だったのではないだろうか。

油断は禁物だが、今から神経質になることもないだろう。

「分かった。今後は、オクタビア殿に不審な言動があった場合だけ、報告を入れよ」

「はい、畏まりました」

頭を下げる侍女に、アウラは「うむ」と頷き、話を続ける。

「では、このところ嬪殿はどのように日々を過ごしている？ 誰か、手つきになった者はいるか？」

歴代の王の中で、後宮の侍女に手を出さなかった者はむしろ少数派である。まして、善治郎は後宮に通う歴代の王と違い、後宮に住んでいるのだ。

若く見目麗しい侍女達に、色目を使わないほうが不自然なくらいである。

しかし、侍女は少し困惑したように、首を横に振り答えるのだった。

「それが……今のところゼンジロウ様に、手を触れられた者はおるか、女を意識させるような目を向けられた者も皆無です。そもそも、ゼンジロウ様はお部屋に私達が立ち入る事を嫌う傾向がございます。ですから、私たちは用事を仰せ使わされた時以外は、この部屋に足を踏み入れないようにしております。逆に、この部屋のお掃除をするときは、ゼンジロウ様は別なお部屋に移動されます」

侍女が部屋を掃除するから、部屋を移動する。主人と侍女の関係で考えればあり得ない話だが、この辺りはどうしても善治郎がまだ、日本での生活習慣が抜けていないのだろう。

言うならば、お母さんの掃除機に追い立てられるお父さんのような感覚である。

侍女の報告に、アウラは頷き、指示を出す。

「そうか。何度も言うようだが、媚殿はあれが欲しい、これをして欲しいという自己主張が弱い御仁だ。そうした欲求を口にすることを『悪徳』と捉えている節がある。仕える人間としては、難しい類だろうが、なんとか意をくみ、要求を満たすように努力をしてくれ」

「はい。畏まりました」

「よし、もう良いぞ。ご苦労だった」

「はい、失礼します」

報告を終えた侍女は、一礼をして部屋から出て行く。

パタンと音を立てて侍女が出て行った一室で、アウラは一つ息を吐く。

「……喉が渴いたな。水にしておくか」

ふと、喉が渴いていることを自覚したアウラは、寝室に戻る前に水を一杯吞もうと、冷蔵庫を開け、銀の水差しを取りだす。そして、水差しから、コップに一杯水を注ぎ、水差しはまた冷蔵庫の中へと戻す。

「ふう」

一息で冷水を飲みほしたアウラは、一つのLEDライトだけで照らされる、薄暗い部屋の中で、独り言をつぶやく。

「そうか……ゼンジロウは、オクタビア殿にも侍女達にも、目もくれぬ、か」

アウラは無意識のうちに、両腕で自らの身体を抱く。

今夜も、何度も善治郎と愛し合った身体だ。まだ、身体のあちこちに、夫の指や唇が触れた感触が残っている。善治郎と言う男が、どれだけ情熱的に女を求めるか、アウラは身体で知っている。

それなのに、そんな男が、自分以外の女には目もくれていないという事実。

「ふ、ふふふッ」

知らずにアウラは、笑いがこみ上げる。この感情を何と言い表せばよいのだろうか？

異性に愛されるというのが、これほど心地よいものであるとは、思いもしなかった。

王として政務で得られる充実感とも、将として戦場で勝ち得た勝利の美酒とも違う、この身体の奥底からわき出す熱気。

いやらしい言い方をすれば、それは一種の『優越感』だ。一人の男が自分にだけ女としての魅力を感じているという、喜び。自分を最高の女だと認めてくれる快感。

「まずいな。なんだか、独占欲が出てきた」

この感情におぼれてしまうと、今後善治郎が側室を迎える事態に陥ったとき、反射的に感情だけで反対してしまいそうだ。

アウラは、自分の思いのままにならない感情に戸惑いを隠せない。さらに意外なのは、その暴走する感情が、アウラにとってとても心地よいものであると言うことだ。

「まあ、いい。先の可能性について、今から心配する必要もあるまい」

アウラは頭を振ると、LEDスタンドライトを消し、手探りで寝室のドアを開く。

寝室へ戻ったアウラは部屋着を脱ぎ、ゆっくり寝息を立てている善治郎の横に、その豊かに実った褐色の裸体を滑り込ませる。

「ふふふっ」

アウラは、こちらに背を向けて寝る善治郎の背中に、裸の両乳房を押しつけるようにして、抱きつく。

「……んん」

男の背中としては、特別広い方ではない善治郎の背中に、アウラは不思議な位の安らぎを感じる。こうしていると、「帰ってきた」という穏やかな気持ちになる。

事実、そうして善治郎の背中に抱きついたアウラが、安心しきった表情で熟睡するまで、そう長い時間はかからなかった。

第三章5【一番穏やかな時間】

善治郎がオクタビアの教育を受けるようになって数日後。

一足先に公務に向かった愛妻を見送った善治郎は、オクタビアの授業までの隙間時間を、パソコンに向かい、有効利用していた。

パソコンで再生している動画は、アウラに協力してもらって作製した、善治郎用の教養・マナー講座である。

デジカメの動画機能で録画した音声には『言霊』が働かないという問題点があったのだが、ちよつと考えて見れば、その解決方法は極めて簡単であった。

アウラが説明した内容を、その場でそっくりそのまま、善治郎が日本語でオウム返しに繰り返せば良いのである。

『Cuando se invito al baile;
un compaero que baila primero
uno el pedazo ultimo uno el
pedazo……』

『ええと、ダンスパーティーに招かれた時は、最初と最後の一曲を踊る相手に……』

パソコンで再生される画像からは、聞き取れない現地語で話すアウラの声に遅れて、日本語で話す自分の声が聞こえてくる。

機械で再生された自分の声を聞くというのは、あまり気持ちの悪いものではないのだが、利用価値が高いのは間違いない。

そうして善治郎が、パソコンで教養・マナーの復習をしていると、入り口のドアがノックされる。

『失礼します、ゼンジロウ様。オクタビア様がおいでになりました』

「ッ、わかった、すぐ行く」

侍女の声に、善治郎はパソコンの電源を切り立ち上がった。パソコン、腕時計、携帯電話と正確な時計を複数持っている善治郎であるが、分単位で時間を守るのが善治郎一人のため、細かな時間を気にする意味はあまりない。

「よっし、それじゃ行きますか」

善治郎がドアを開けて廊下に出る。そこには見慣れた金髪の侍女が丁寧に頭を下げていた。

最初は、かなり戸惑っていた善治郎も、今ではある程度使用人達の慇懃な態度にも慣れてきている。

「ご苦労様。それじゃ掃除よろしく」

「はい、畏まりました」

善治郎の意図をくみ、可能な限り善治郎がいる部屋には入ってこない侍女達を、善治郎は『ホテルの従業員』のように捉えることで、適切な距離を計っている。

善治郎の言葉や態度は、後宮の主としては少々気安すぎるのだが、流石に『自宅』とも言うべきこの後宮まで、取り繕った態度をとり

続けるのは、無理がある。幸い、後宮の使用人達はアウラが厳選した信頼の置ける口の堅い人間達だ。ある程度、砕けた態度を取っても、問題はないだろう。

（昨日の復習は一通り済ませたから、なんとか午前中のうちに教養とマナーの講義を終わらせたいな。そうすれば、昼休み明けから夜までの時間を魔法の講義に当てることが出来るしな。ああ、昼休みは三時間以上あるんだから、アウラと合流できればそこで魔法の予習復習も済ませておくか。その方が、午後の魔法講義もはかどるだろう）

そうやって今日の予定をきっちりと効率的に立てながら、善治郎は行く。

隙間時間を復習にあて、授業の内容を前倒し。昼の休み時間に午後の魔法講義の予習も済ませて、さらに効率化を図る。

やはり、二十四年間培ってきた『勤勉』と『真面目』を美德とする価値観は、今更書き換えようがないのだろうか。

善治郎は、ヒモ志願者であった自分を一時的に忘れたかのように、与えられた責務を『可能な限り効率的に果たす』よう、計画を立てていた。

善治郎がオクタビアの講義を受けている間に、侍女達は善治郎が普段使っているメインルームと寝室の清掃に取りかかっていた。

王宮付きの侍女として、恥ずかしくないだけの高いスキルもを持

つ彼女たちであるが、ここの掃除は他とはちよつと勝手が違う。

「分かっていますね？　ゼンジロウ様の私物は原則から拭き、水拭きは厳禁ですよ」

「はい！」

掃除担当侍女の全体責任者らしい、上品な中年女性の声に、若い侍女達は澆刺とした返事を返す。

侍女達全員に、電化製品の詳しい取り扱い方を教えるのは無理がある。そう、悟った善治郎は、あらかじめ侍女達に「掃除はから拭きだけで十分。水拭きは辞めて」と伝えていた。

実際には、水拭きが危険な部位は全体の一部なのだろうが、それをいちいち侍女達に教えるくらいならば、自分でやった方が早いというのが、善治郎の感想である。

自らも手を動かしながら全体の動きを見張っていた中年の侍女は、テキパキと掃除を続けている風に見える若い侍女達三人組をジロリと睨み、大きな声を上げる。

「その！　テーブル前だけ、何人がかりで掃除をしているのです！　？　そこは一人で十分です。すぐに終わらせない」

中年侍女の叱責に、パソコンが設置されたテーブルを丁寧に拭いていた三人は、ビクツと首をすくめる。

そこは、つい先ほどまで善治郎が座っていた場所である。つまり、稼働中の扇風機と、まだ溶けきっていない氷塊が置いてある場所だ。

冷凍室の中では、すでに金だらいで次の氷塊を作っている最中だ。善治郎が戻ってくる昼休みまでには、完成していることだろう。そのため、善治郎はこの使いかけの氷は、侍女達が好きに使っても良いと許可をしていた。

ついでに言えば、冷蔵庫の中で冷やしているタオルも、分別を守った範囲であれば、使用を許可している。

周りにいる侍女達がこまめに汗をぬぐうのは、善治郎の環境を快適に保つ上でも意味のあることである。

「いくらゼンジロウ様が、残りの氷は好きにして良いと仰っても、それは仕事をちゃんとやった上でのお話です。仕事をさぼって主の道具を使い涼を取るなど、言語道断です」

中年侍女はそう言うと、無情にも部屋の木戸を開け放つ。

途端に窓は、ムツとするような熱風が部屋の中へと吹き込んできた。

「きゃっ!?!」

「やだ、もうちょっとだけ」

「ああ、氷が、私の氷が溶けちゃう……」

途端に掃除の振りをして、冷風を満喫していた侍女三人は、大げさなりアクションで嘆き悲しんでみせる。

午前中は比較的過ごしやすいとは言っても、それでも気温は辛うじて体温よりは低い程度だ。

悲鳴を上げる侍女三人に、中年の侍女は年を取ってまだ細いままの腰に両拳をあててプリプリと怒る。

「何時までもふざけているではありません。日の光にさらさないと、汚れている場所が見えないでしょう。スタンドの灯りを消しなさい。消し方は分かっていますね？」

有無を言わさぬ中年侍女の言葉に、若い侍女達は諦めたように仕事に戻る。

「はい」

「それじゃ、私はあっちの絨毯をぞうきんがけするわ」

「ああ、氷、私の愛しい氷……」

どうにか仕事に戻った問題児三人組を見守り、中年侍女はホッと溜息をついた。

「まったく、この子達は。ちょっと眼を離すと、たがが緩むのだから」

後宮勤めを仰せつかった当初は、彼女たちも緊張で身をガチガチに強張らせ、異世界から来たという主の不評を買わないよう細心の注意を払っていたのだ。

しかし、いざ蓋を開けてみると、女王の婿という人物は、拍子抜けするくらいに手の掛からない主だった。

我が儘は言わない。多少のミスは笑って許す。そもそも、滅多なことでは侍女を呼びつけない。おかげで、若い侍女達は一月もしないうちにこの様だ。

この三人は、中でも特に「緩い」部類だが、同様の懸念は若い侍女全体に言えることである。

「ほんと、嘆かわしい。これが、栄えある後宮勤めの侍女達だなんて」

中年侍女は、革張りのソファを手際よく雑巾でふきながら、ぶつぶつと不満の声を漏らしていた。

メインルームの掃除が終われば、次はベッドルームである。

「うわあ……」

「昨日もか……」

「陛下達、仲良しさんだねえ」

善治郎とアウラの寝室に入った侍女達は、毎日の事ながら、ベッドから立ちこめる匂いに、微妙に引きつった笑いを浮かべていた。

ベッドのシート。横の籠に入れてある、昨夜使用した夜着や下着。そこから漂う匂いが、昨晚も女王陛下とその嬪殿が、この部屋で思い切り仲良く過ごしたことを物語っている。

「結構なことです。この様子でしたら、早ければ来年にもお世継ぎが期待できるかも知れませんか」

一方、中年の侍女は一人そう言って満足げに頷いている。

確かに、王国の一国民としては、女王と婿の仲がよいことは嬉しいのだが、己の美貌にある程度自負のある、若い侍女達にとっては少々複雑な感情もある。

南国であるカープア王国の侍女服は、北部諸国のそれと比べて随分と薄着だ。

明るいブルーのスカートは膝丈くらいまでしかないし、腕は完全なノースリーブである。流石にバストやウエストラインがはっきりするような、無駄に扇情的な作りはしていないが、若い侍女が着れば結構魅力的に見えるはずなのである。

それなのに、彼女たちの主は、今日まで彼女たちに指一本触れようとしてこない。

よほど女に淡泊な質なのだとすればまだ納得もいくのだが、女王陛下との夜の営みにはこの上なく積極的であるという『物証』が毎朝寝室に転がっている。

別段、女王の婿の『お手つき』になることを望んでいるわけではないのだが、こうも水を向けられないと、少し女としてのプライドが傷つく。

「ほら、あまり時間がありませんよ。手早く、済ませましょう。シートを交換して。汚れた夜着を洗濯に回して、洗濯を終えたものを衣装箱に戻しなさい」

「はい」

「分かりました」

「ふー、寝室はちょっと涼しい……」

メインルームと比べれば、寝室は狭い上にもものも少ない。洗濯物やシーツの交換の時間を合わせても、寝室の手入れはメインルームのそのの半分以下だ。

侍女達は慣れた手つきで、己の職務を果たすのだった。



その日の午後。今日もオクタビア先生との味わう余裕のない昼食会を済ませた善治郎は、午前中のうちに綺麗に清掃を終えた後宮のメインルームで、アウラと安らぎの時を過ごしていた。

まだ昼と言うこともあり、二人が持つグラスに入っているのは酒類ではなく、氷を浮かべた水や果実の絞り汁だ。

善治郎は講義で、アウラは政務で疲れた頭を休めるように、二人は寄り添うようにソファーに座り、テレビを見ている。

テレビから流れてくる音声は、当然ながら日本語で、言霊も働かない以上アウラには理解不能であるはずなのだが、現在二人が見て

いる画像には、音声はあまり関係ない。

しばらく黙って画面を見ていた後、「よし、分かった！」と声を上げたのは、アウラの方だった。

「嘘、また？　言うなよ、絶対言うなよ！」

先を越された善治郎は、悔しそうに驚きの声を上げると、食い入るように画面に映る風景写真に見入る。

その写真のどこか一部が徐々に変化しているはずなのだ。それを制限時間内に当てるとというのがこのゲームの趣旨なのだが、今のところ持ち込んだ善治郎よりも、今日始めてやるアウラの方が遙かに勝率が高い。

やはり、観察力と注意力の差だろうか。

「うむ、言わぬ、言わぬ。画面右端に映っておる薄紅色の花は、今が見頃だろうなあ」

「うわああ！　アウラ、お前、性格悪ッ！」

ゲームを楽しむ二人の顔には、外では見せないリラックスした表情が浮かんでいた。

その後。テレビとゲームの電源を切り、静かになったメインルームでアウラは氷水を入れたグラスを傾けながら、隣に座る善治郎に

声を掛ける。

「で、講義の進み具合はどうだ？ 昨夜の話では、そろそろ教養とマナーに関しては合格点がもらえそうだとの話であったが」

アウラの問いに、善治郎は満足げに頷き答える。

「ああ、一応午前の講義でその辺りは、合格をもらったよ。まあ、最低限外に出ても恥をかかないってレベルらしいけど」

「ほう、それは良かった。では、午後の講義は魔法のみか」

アウラは笑顔でそう答えつつ、内心想う。

相変わらず、この婿殿は勤勉だ。本人にはその自覚がないようだが、与えられた任務に対し、己の力量が及ぶ範囲で最善の結果を出すことを、当然と考えている節がある。

アウラの部下にもこの手のタイプは何人かいるが、実はこういった人間を使いこなすのは意外と難しい。努力を惜しまないので、使い勝手はよいのだが、弱音を吐くのが下手なため、上役が上手に仕事を割り振ってやらないと、壊れるまで一人で仕事を抱え込んでしまう悪癖があるのだ。

そんな妻の内心を知らない善治郎は、笑顔で言う。

「うん、そうなんだ。だから、今のうちにちよっと、魔法について教えてもらえるかな？ 確か、魔法の一番ネックとなるのは、効果の持続性が極端に低いって事なんだよね？ で、その弱点を最初から克服しているのが双王国の『付与魔法』と、俺達カープア王家の

『時空魔法』だって聞いたんだけど、それってつまり、時空魔法はその名の通り、空間だけじゃなくて時間にも作用するってこと？」

早速、午後の授業の予習を始める婿殿に、アウラは苦笑を隠さずに言葉を返す。

「ここら、講義の話は講義が始まってからにせよ。今、お前の横にいるのは、教師であるオクタビアではなく、妻である私だ」

教養とマナーに関して、最低限の合格点をもらったと言うことは、いよいよ善治郎も公務や大規模な社交界に姿を現す事になると言うことだ。今後はもっと忙しくなると言うのに、今からそんなに頑張りに続けていては、長く持たない。

「あー、うん、そーだね。うん、そーだった」

右腕に押しつけられる柔らかい愛妻の肢体に、眉尻を下げた善治郎の頭の中から、昼間のうちに確認しておこうと思っていた魔法に関する疑問点が、スルリと抜けて行く。

隣り合って座るアウラは、善治郎の右肩に顔を乗せ、善治郎は背中から回した腕でアウラの肩を抱き、グッと抱き寄せる。

「スウ……」

「ふむ、寝たか……」

夫が眠りについたのを確認した女王は、小さく笑うと静かに寝息を立てる夫の腰に腕を回し、自らも目をつむる。

「クー……」

やがて、女王夫婦は身を寄せ合ったまま、睦合いで不足している夜の睡眠時間を取り戻すように、そろって寝息を立て始める。

女王の婿、ゼンジロウの社交界デビュー数日前。善治郎は、まだ穏やかな時間を過ごしていた。

幕間3【それぞれの思惑】

善治郎の社交界デビューが決まった数日後、王宮を後にしたオクタビアは、王宮にほど近いマルケス伯爵家の王都屋敷を訪れていた。

白い大理石のような石材をふんだんに使い、アーチを多用したその建造物は、素人が一見ただけで分かる、王宮と同時代の建造物である。

王宮と同時代から存在する、王宮に極めて近い位置に立つ本屋敷。その存在は、マルケス伯爵家の王国における立ち位置を端的に示していると言える。

「ここで止めてください。少し歩きます」

二頭立ての立派な竜車で屋敷の門を潜ったオクタビアは、竜車の中から御者席に座る従者達にそう声を掛ける。

「畏まりました」

護衛を兼ねている中年の御者は、そう短く答えると、慣れた手綱さばきで静かに竜車を止めた。

「足元にお気をつけ下さい、オクタビア様」

「有り難う、貴女もね」

オクタビアは、年若い侍女に手を取ってもらい、竜車から降りる。今は一年の中で一番暑い季節だ。攻撃的なまでの日差しに思わず眼を細めるオクタビアであったが、門の内側は外と比べると五度以

上気温が低い。

庭のあちこちに水を湛えた人工池を設置し、水面から屋敷向かって風が流れるように、樹木を植えている影響だ。

現代日本人ならばともかく、カープア王国生まれのカープア王国育ちであるオクタビアにとっては、不快に感じるほどの気温ではない。

オクタビアは、前後左右を腰に剣を下げた護衛と、お付きの侍女に固められていることをごく自然に受け入れた様子で、門から屋敷正面入り口までの短い道のりを、静かに歩み進む。

門から入り口までの道は、照り返し対策として赤茶色の石畳が敷き詰められており、その両脇には色鮮やかな花をつけた南国風の樹木が立ち並んでいる。ハイビスカスを思わせるような赤や黄色の大きな花だ。

カープア王国の色彩は、自然物に限らず華やかなものが多い。

オクタビアが今着ているロングドレスも、光沢のある明るい青色だ。形こそ身体のラインをあまりあらわにしない落ち着いたものが、その色合いは現代日本人の感覚で見れば『派手』と呼ばれる部類に入るだろう。少なくとも、オクタビアのような二十代中盤近くの既婚者が日常的に着る服ではない。

やがて、オクタビアが屋敷の正面入り口までやってくると、大きな両開きの扉はオクタビアが何か言う前に、ゆっくりと内側から開かれる。

扉の向こうでは、ドアを押し開けた屈強な男二人と、上品な初老の男が立っていた。

「お帰りなさいませ、オクタビア様」

いつもと変わらぬ落ち着いた声で迎えてくれた王都屋敷の老執事に、年若い伯爵夫人は笑顔で答える。

「ただいま、セルリオ。あの人は、いつもの部屋ですか？」

「はい。お館様は、二階でお待ちです」

「そうですか。では、着替えて埃を落とした後、すぐに向かうと伝えて下さい」

「はっ、畏まりました」

「よろしく、お願いします」

恭しく一礼する老執事を労うように、オクタビアはフワリと笑うと、侍女を引きつけて軽い足取りのまま、屋敷の奥へと消えていった。

それから約半時間後。オクタビアは屋敷の一室で、夫であるマヌエル・マルケス伯爵と半月ぶりの対面を果たしていた。

「お帰り、オクタビア」

年期を感じさせる木製の椅子から立ち上がったマルケス伯爵は、

両手を広げて、二回り年下の愛妻を迎える。

マルケス伯爵は、恰幅の良い中年貴族である。

年の頃は、四十代の中盤から五十代の前半くらいだろうか？ 背はあまり高い方ではない。百七十二センチの善治郎と並んでも、恐らくほとんど差がないだろう。腹回りは年齢相応に太くなっているが、短く切り揃えられた頭髪と、綺麗に整えられた口ひげが、艶やかな黒色を保っているためか、実年齢より若く見える。

「お久しぶりです、あなた」

飾らない素の笑顔を夫に見せたオクタビアは、そのまま軽く抱擁を受ける。恰幅の良い夫と、華奢で小柄な妻はしばし抱擁をした後、部屋の隅に設けられた席に向かい会う形で腰を下ろした。

窓から差し込む日差しは相変わらずの暑さだが、窓の下には流れのある水堀が設けられているため、部屋を吹き抜ける風は意外と涼を運んでくれる。

恰幅の良いマルケス伯爵は、侍女に持ってこさせた冷茶で喉を潤すと、少し真面目な表情で、話し始めた。

「ご苦労だったね、オクタビア。急な依頼ですまなかった」

「いえ、尊きお方の教育役という大任を仰せつかったのですもの。お礼を言うのは私の方ですわ」

「そうか。うん、そうだね」

相変わらず、毒気の欠片もない妻の返答に、マルケス伯爵は表情

を取り繕うことなく苦笑を漏らす。

一般に上流社会の女は、言葉と表情を取り繕うことに長けているというが、この年若い後妻は、数少ない例外だ。もし、彼女の言動が全て演技だったとすれば、マルケス伯は深刻な女性不信に陥るだろう。

「それで、ゼンジロウ様はどのような方だった？ お前の忌憚ない意見を聞かせてくれ」

「はい、とても感じの良い方でした。学習意欲も高く、人間的にも信頼の置ける方だと思います」

「ふむ、なるほど」

マルケス伯爵はいちいち頷きながら、しばらくの間、妻の口から女王の伴侶の人となりについて聞き出した。

オクタビアの人物鑑定眼は、「人が良すぎる」という欠点を除けば大方信頼が置ける。彼女が言う美点を十分の一ぐらいにさっぴき、欠点を十倍ぐらいに拡大して考えれば、おおよその人物像は想像が可能だ。

オクタビアの言を、マルケス伯爵なりに翻訳すると、どうやらゼンジロウという男は、「甘いくらいに下の者に寛容」で、「覇気や向上心といった、男らしい美德は欠片も無く」、「自分の置かれている立場を理解できる程度の知能はある」人間ということになる。

正直、王家にちよっかいをかける足がかりとしては、あまり適当ではない人格である。

野心がなく、保守的で、そのくせ理性的な人間というのは、陰謀

に巻き込むのが難しい。

とはいえ、ゼンジロウは事実上カープア王家唯一の男だ。手出しが難しいからと言って、黙って見ているには惜しい人材である。

しばし黙考した後、マルケス伯爵は率直に意見を求めた。

「では、オクタビア。仮に、ゼンジロウ様に側室を宛がうとしたら、お前はどのような人物が良いと思う？」

オクタビアも、一応は上級貴族の生まれだ。この手の話題には慣れているはずなのだが、意外な事にオクタビアは少し苦笑した後、首を横に振る。

「それは、しばらくはやめておいた方が良いでしょう。私が直接、アウラ陛下とゼンジロウ様が並んでおられるところを拝見したのは数えるほどですが、ゼンジロウ様の日頃の言動や、後宮に務める侍女達の話からだけでも、お二人がとても中睦まじいことは感じられます。

今、後宮に側室となる方が上がられたとしても、おそらくは身の置き所がないのではないのでしょうか？」

当たり前だが、通常側室の立場というのは正妃に比べて圧倒的に低い。まして、今回のケースは『王』と『王妃』と『側室』ではなく、『女王』と『その伴侶』と『側室』だ。

通常、正妃と比べて公的な立場が弱く、生まれも低い事が多い側室が、唯一正妃に勝る可能性があるのが王の愛情だ。その愛情において、ゼンジロウと女王アウラの間に入り込む余地がないのだとすれば、確かに放り込まれた側室には、むごい未来しか待っていない。

「ふむ、それほどか……」

「はい」

オクタビアの返答に、マルケス伯爵は虚を突かれたような様子で首をひねった。

マルケス伯爵は、決して愚鈍でも、頭の固い人間でもないが、それでもあの『女王アウラ』をそこまで愛する事の出来る男がいる、というのは少々想像の外にある。

オクタビアを後妻に迎えていることでも分かるように、マルケス伯爵の女の趣味は、基本的にカープア王国の一般的貴族男性の例に漏れない。

すなわち、出しゃばらずに男を立てる、黙って後ろに付いてくるような女が、『良き女』の基準なのだ。

そんなマルケス伯爵から見ると、アウラ・カープアと言う人間は、王としては「女に生まれたことが惜しいくらいに女傑」であるが、一人の女としては、とてもではないが魅力的とはいえない。

念のため確認するように、マルケス伯爵は再度問う。

「ゼンジロウ様は、心底よりアウラ陛下に愛情を注いでいると?」

「はい。そもそも、あのような野心も権力欲もお持ちではない方が、生まれ育った世界を捨ててまで、この世界にやってきた理由は、陛下への愛情しかないのではないのでしょうか?」

正確に言えば、善治郎がアウラとの結婚を受け入れた理由は、アウラへの愛情が半分、半ブラック会社務めからの逃避衝動が半分と言った所なのだが、そこまで詳しい事は、善治郎本人しか知らない。

しかし、いずれにせよ、女王アウラが善治郎の好みのタイプなのだとしたら、マルケス伯爵としては少々やりづらい話である。カープア王国は大陸南西部に覇を唱える大国だが、アウラのような女はアウラしかない。少なくとも、マルケス伯爵の手駒にはいない。

「ふむ。であれば、しばらくは、両陛下の仲を取り持つ方向で立ち振る舞った方が得策か」

マルケス伯爵はそう呟く。元々、マルケス伯爵家は、現政権においても十分な権勢を誇る名家だ。一族の繁栄といっそうの領地拡大のため、権謀術数を張り巡らせるのは、高位貴族の半ば本能のようなものだが、リスクを承知で賭に出る必要がある立ち位置にはない。

女王と婿の仲がそれほど良いのであれば、当面の間は二人の蜜月を応援することによって、女王の心証を良くすることに終始した方が良いのかも知れない。

実際、女王が婿と子供を作るとは、婿が側室を持って王家の血を拡散させることより優先されるのは、紛れもない事実である。

「はい、私もそれがよいと思います」

夫の出した結論に、オクタビアは心底嬉しそうな笑顔で頷いた。オクタビアも、高位貴族の性として、貴族・王族の婚姻は、男女の恋愛より血の存続や、家同士のつながりが優先されることも承知

している。

しかし、そう言った現実を踏まえた上で、やはり感情的には、愛し合う男女は横やりを受けずに幸せな家庭を築いて欲しいと思う。

そんな愛妻の内心など知るよしもないマルケス伯爵は呟く。

「それにしても、ゼンジロウ様の女の趣味は分からん」

アウラの耳に入れば、不敬罪で問われかねないその呟きは、マルケス伯爵の本心からの言葉だった。



同じ頃、女王アウラは、久しぶりに王都外れの王軍演習場を訪れていた。

大陸南西部に当たるこの辺りの植物は、異常なくらいに成長が早く、手入れを怠るとすぐに畑が雑草まみれになることで有名なのだが、流石にここは千人単位の武装した人間や、何百匹もの走竜が常時走り回る演習場だ。

とくに、手入れと言うほどのことは何もしていないのに、この辺りは見渡す限り、剥きだしの赤土が広がっている。

本日、演習場を使用しているのは、王国軍の最精鋭とも言うべき、『弓騎兵団』の面々だ。

一般に、大陸南部で人を乗せる生き物は走竜と呼ばれる大きなトカゲの一種である。

走竜は、大陸北部で使用される『馬』と比べると若干速度では劣るものの、馬の倍以上の体躯を誇り、そのパワーは馬の比ではない。北方諸国で軍馬として使用される大型馬と比べても、およそ三倍から五倍のパワーがあるとされている。

変温動物の性として、一定より気温が下がると途端に活動が鈍るという致命的な弱点もあるにはあるのだが、ここ大陸南部ではほとんど表面化することのない弱点である。

演習場を訪れたアウラは、傍らにファビオ・プジョル將軍を従え、目の前に整列する百を超える騎兵達に視線を向ける。

アウラの服装は、軍装だ。カープア王家の象徴色でもある赤を基調としたその軍装は、襟や袖に金糸で飾り模様が縫われているものの、原則動きやすさと頑丈さを追求した代物である。

しかし、『野暮ったい』と表現しても良いその軍服も、アウラが着るとまるで別な印象を受ける。

軍服の厚めの布地でも、アウラの豊かな胸元や、大きめの尻を隠しきることは出来ない。まして、腰には剣を下げる必要性から、太いベルトでギュッとウエストを締めているのだから、尚更だ。

否が応にも、くびれたウエストが胸と尻の豊かさを強調してしまう。

この場に善治郎がいれば、さぞかし「眼福、眼福」と喜んだことだろう。

もつとも、鍛えられた王国騎士達が、演習中に女王に不埒な視線を向けるはずもない。

広い演習場は、水を打ったように静まりかえっている。

「……………」

その静けさ自体が、この騎士達の練度を物語っている。人間だけならばともかく、目の前の騎士達は全員走竜に騎乗しているのだ。百を超える走竜が一所に集まり、誰も隊列も乱さなければ、興奮して走竜を嘶かせたりもしないというのは、中々出来ることではない。

その結果に満足したのか、アウラは一つ頷くと、右手も持つ短鞭でピシリと軽く左手を叩き、命令した。

「初めよ」

「はっ。それでは、演習はじめ！」

アウラの言葉を受け、隣に立つプジョル将軍が、その立派な体躯に見合った大声で、騎兵達に命令を飛ばす。

「「「オウ！」」」

騎兵達は、怒号のような声を上げると、日頃の修練の成果を見せるべく、竜に鞭を入れるのだった。

竜騎士達は、威勢良く、女王と將軍に日頃の成果を見せつける。手に長槍を持ち、突撃をする者。ぬかるみや、倒木を並べたりして作った悪路を巧みに走竜で行く者。そして、花形とも言うべき、騎乗弓術を披露し、竜の背に跨ったまま、遠くの的を矢で射貫いている者。

アウラは、立ち上る土埃で顔や髪が汚れることも全く気にもとめず、傍らに立つプジョル將軍に話しかける。

「なかなかのものだな。よく、ここまで鍛え上げた」

女王の言葉に、野心家の將軍は神妙に頭を下げる。

「はっ、ありがとうございます。現状、騎兵の充足率はやっと八割を超えたところです。今年か、来年中には予定の数を揃えられるかと」

「五年で八割まで戻したか。よくやってくれた、將軍」

先の大戦でもっとも深刻なダメージを被ったのが、国軍の柱とも言うべき、この騎兵团であった。

騎兵の補充には、金も時間も莫大にかかる。竜を育て、竜を調教すると同時に、その竜に乗る人も育てなければならないのだ。

六、七年で定数に戻すことが出来るといっているのであれば、確かにそれは一つの功績と言えるかもしれない。もっとも、補充される騎士は実戦経験のない若い騎士ばかり。数は戻っても、質は戦中の騎士

団には、遠く及ばないだろう。

アウラのお褒めの言葉に、プジョル將軍は厳つい表情を崩さないまま、首を横に振り答える。

「その言葉は、竜厩舎の飼育員達にかけてやって下さい。彼等こそ、最大の功労者です」

「そうだな、そうしよう」

プジョル將軍の言葉に、アウラは素直に首肯した。

人が育てる騎乗動物として、走竜が馬に大きく劣っている点を上げるとするのならば、その寿命の長さがある。

一般的な馬の寿命が二十年から三十年なのに比べ、走竜の寿命は五十年前後だ。

寿命が長いと言うことは、戦場で活躍できる期間が長いということでもあるが、同時に生まれた竜を実践に投入できるようになるまで、より長い時間が掛かるということでもある。

馬であれば、生まれて四年か五年で軍馬として一応の形が付くのに対し、走竜は最低でも十年はかかる。

つまり、この五年で新たに軍に加わった走竜達は、全て戦時中に卵からかえった竜と言うことだ。

大戦の最中、予算が大幅に削られた中で、馬よりも遙かに大きな竜の餌を確保し、死なせることなく育てた飼育員達の労苦は、並々ならぬものがあっただろう。

いずれにせよ、国防の根幹を担う、騎兵団の充実はアウラにとつ

でも大きな朗報である。

「そう言えば、来年から多少ではあるが、軍事費を上乗せできそう
だ。今のうちに、使い道を考えておけ」

アウラはふと思い出したように、プジョル將軍にそう通達する。
上乗せできる軍事費というのは、他でもない。善治郎の再計算に
よって発覚した、地方貴族の脱税分の話である。

地方貴族達と、数日に亘る丁々発止の話し合いを設けた結果、国
庫に納められる税額をそれなりに増やすことに成功したアウラは、
その大半を軍事費に回すことにしたのである。

元々、地方貴族達はその金を地方軍の軍事費に充てていたのだ。
そういった素性の金を、軍事費以外に当てると言うことは、単純に
考えれば国内の軍事力を落とす結果になる。

今のところ、周辺各国との関係は、小康状態を保っているとはい
え、軍備縮小方針に舵を切れるほど、平和を確信できる状態ではな
い。

アウラの言葉に、プジョル將軍は今日初めて少し口元をほころば
せる。

「ほう、そうですか。分かりました。金額を確認し次第、主立った
者から意見を集めて、軍の要望を纏めておきましょう」

「ああ、頼む」

アウラは視線を、演習中の騎兵団に向けたまま、頷き返す。

「承りました。幸い、明後日の立食会に出席するため、軍の主立った人間も大部分は王都に集まっていますからな。さほど、時間を取らずに、報告を上げられることでしょう」

プジョル將軍の言葉に、アウラは鞭を持つ右手をピクリと振るわせる。

明後日の立食会とは言うまでもなく、善治郎の社交界デビューのことである。

分かつてはいたことだが、この野心家の將軍は、積極的に女王の婿とつながりを持つつもりようだ。

（はて、どうなる事やら）

あの野心の欠片も無い婿殿と、この野心の塊のような將軍は、一見水と油のように見えるが、そう言った人間が気の置けない親友同士になったりすることもあるのが、人間の面白いところだ。

（この野心家に、妙な影響を受けて欲しくはないのだが、男同士の交友関係にまで口を挟むのは、『妻』の領分を超えているしな）

アウラとしては、見守るしかない話だが、さほど不安に感じていないのは、それだけ善治郎を信頼し始めている証だろう。

「妹も、非常に楽しみにしております。是非、ゼンジロウ様に、妹をお目通しさせたいものです」

「そうか、私の方からも、婿殿に改めてそう伝えておこう」

相も変わらぬ剥きだしの野心を披露するプジョル將軍に、アウラ

はさほど心をゆらさず、落ち着いた声でそう言葉を返すのだった。

第四章1【立食会の幕開け】

王宮主催の夜間立食会パーティ。定期的に開かれるその行事は、上流貴族達の社交の場であると同時に、王国・王室の権威と権勢を国内に知らしめる絶好の機会でもある。

無粋な話ではあるが、夜間に開かれる行事というのは、それだけで恐ろしく金が掛かるものだ。

広い大広間を照らし出すのは、高い天井にぶら下がっている大小いくつものシャンデリアだが、そこで燃えている蠟燭という代物は、貴族の金銭価値で言っても決して安いものではない。

『蜜蝋』はカープア王国でも生成されているが、現代の地球のようにミツバチの養殖に成功しているわけではないため、原材料は採取頼みだし、東方諸国から輸入される『木蝋』は輸送費がかさむ分、どうしても割高になってしまう。

付け加えるのならば、シャンデリアその物もこの世界では超がつく高級品だ。なにせ、ガラス製造技術の存在しない世界である。シャンデリアは全て、銀と天然の水晶で出来ている。小さなモノ一つでも一財産だ。

さらに、広い部屋全体に敷き詰められた赤い絨毯は、専門の職人が三世代に亘って編み続けた一点物で、飲食物をのせている背の高いテーブルは、すべて一本の木を削りだして作られた贅沢な代物。

平民はもちろん、中流以下の貴族でも目がくらむような、きらびやかな空間である。

事実、中の下クラスの貴族達は、「昨晚、王宮の大広間のパーテ

ィに参加してきた」という話題だけで、一日盛り上がることもあるという。

そんな夜の大広間に初めて足を踏み入れた善治郎は、シャンデリアの明かりの下、貴族達の挨拶攻勢を作り笑顔で必死に裁いていた。「ゼンジロウ、紹介しよう。これなる男は、パントハ男爵だ。先の大戦では騎士隊長として武を振るい、今日は領主として腕を振るってくれている」

善治郎の右腕に、左腕を絡めたアウラが、そう言って一人の中年男性の名前を読み上げる。

「お初にお目に掛かります、ゼンジロウ様。勿体なくも陛下より男爵を賜っております、トマス・パントハと申します」

「うむ、領主自らの挨拶、大儀である」

「ははっ」

鷹揚に頷いてみせる善治郎の前で、パントハ男爵と名乗った中年の男は下げていた頭を上げた。

オレンジ色のノースリーブドレスを着ているアウラが、左胸に着いている大きな花飾りを直している間に、パントハ男爵はそのまま女王夫婦の前から退去していく。

去っていく男の後ろ姿を見ながら、善治郎は周囲に気づかれないようにそっと溜息を漏らした。

幸いにして、王族の元に息をつく間もないくらいに挨拶攻勢を掛

けるほど、この国の貴族達は礼儀知らずではない。

周りが気をつかって少し猶予を設けてくれている間に、善治郎は今挨拶をしてきた人間の容姿と印象を頭の片隅に印す。

（中肉中背の四十男、黒髪のパントハ男爵。目線があからさまに媚を売っている感じ。どちらかというと悪印象……と。あー、せめて名刺くれ、名刺ッ）

善治郎は内心、悲鳴を漏らした。

サラリーマン時代にも、取引先の顔と名前を覚える作業はやらされている善治郎であるが、その数は多くても一度に十人弱だ。

それに比べて、今日紹介される貴族達は何十人という数である。しかも、当然ながら名刺交換のような風習は存在しない。

せめてもの慰めは、背広姿のサラリーマンと違い、社交界に出る貴族達は特徴的な服装をしている人間が多いため、多少は個体識別がしやすいということくらいだろうか。

南国らしく、女はノースリーブのロングドレス、男は半袖のシャツと大枠は決まっているが、その色合いや細かな形は、スーツとは比較にならないくらいに多種多様だ。

おかげで善治郎の脳内では「太った花柄シャツおじさん」やら、「紫のトドおばさん」などという、失礼極まりないキーワードが乱舞していた。

アウラの様子から見ると、今のところ善治郎は、大きな問題もなく対応できているようだ。元々この立食会というイベントは、舞踏会のように特定の技術を身につける必要もなければ、公的行事ほど規律にうるさい物でもない。

付け焼き刃のインスタント王族が社交界デビューをするには、悪くない選択だ。その分、一般貴族達との距離が近く、対応に追われることになるのは、許容範囲内のデメリットだろう。

善治郎がそんなことを考えていると、スッと離れたアウラが、テーブルの上から銀杯を取って善治郎の元に戻ってくる。

「ゼンジロウ」

「ああ、有り難う、アウラ」

アウラが差し出す銀杯を受け取った善治郎は、随分と喉が乾いていたことを自覚した。

杯の中身は、この国で作られた麦酒だ。度数が低く、苦みが強く、なにより生ぬるいその酒は、善治郎の口に合う代物ではなかったが、熱帯夜の空気で渴いた喉を潤す役割は、十分に果たしてくれる。

「お下げします」

「ああ、頼む」

善治郎が銀杯の中身を飲み干したを見たアウラが、近くに立っていた侍女服姿の給仕係に目をやると、その給仕は素早くこちらに近づき、善治郎の手からカラの銀杯を受け取り、下がっていく。

そのタイミングを見計らっていたのか、喉を潤した善治郎がホッと緊張から少し解き離れたところで、次の貴族がアウラ、善治郎の前に進み出る。

男女一組、二人の貴族だ。

その、女の方には善治郎も見覚えがある。この世界に来てからずっと、後宮に引きこもっていた善治郎が、見覚えのある女など、妻であるアウラと後宮の使用人達を除けば一人しかない。

マルケス伯爵夫人オクタビア。と、いうことはその横に立つ太めの中年男が、マヌエル・マルケス伯爵なのだろうか。アウラの婚約者候補、ラファエロ・マルケスの父に当たる、カープア王国有数の大貴族。

（うわー、話には聞いていたけど、本当に親子くらい年の離れた夫婦だな。美人の後妻さんって、男のロマンの一つだよなあ）

不埒なことを考えていた善治郎の右腕を、不意にアウラはギュッと強く力を込めて握りしめる。

一瞬心が読まれたのかとドキッとした善治郎であったが、すぐにそれは事前に話し合っていた合図であることを思い出す。すなわち、「可能な限り顔と名前と第一印象を覚えておいて欲しい、重要人物」の合図だ。

「ご無沙汰しております、アウラ陛下。そして、お初にお目に掛かります、ゼンジロウ様」

「本日はお招きに預かり、ありがとうございます、両陛下」

丁寧に頭を下げる年の離れた夫婦に、アウラはいつもの迫力ある笑顔で応え、善治郎に二人を紹介する。

「よく来てくれた、マルケス伯、オクタビア夫人。紹介しよう、ゼンジロウ。我が国における重鎮の一人、マルケス伯爵マヌエル卿だ。となりのオクタビア夫人は紹介するまでもあるまい」

「貴公がマルケス伯か。噂は聞いている。夫人には世話になっている」

意識的に胸を張り、鷹揚に答える善治郎に、マルケス夫妻は揃っ
てもう一度頭を下げた。

「はっ。この者が、ゼンジロウ様のお役に立てたのであれば、幸いです」

「勿体ないお言葉です、ゼンジロウ様」

いつの間にか、周りの貴族達も興味津々な様子で、こちらの様子を伺っているのが感じられる。

一番近い者でも十メートル以上離れているので、会話が丸聞こえということはないだろうが、注目を浴びているという意識は常に持っておく必要があるだろう。

そんな場馴れしていない婿殿を矢面に立てて、恥を掻かせる気は毛頭ないアウラは、善治郎の右腕に左腕を絡めたまま、積極的に対応に回る。

「謙遜するな、伯爵。夫人の才色兼備ぶりは噂に違わぬ見事なものだ。今後も伯爵共々、その力を我が王国のために役立てて貰いたいものだ」

「はっ、過分なお褒めの言葉、ありがとうございます」

「はい、陛下。私でお役に立てるのでしたら、今後も微力を尽くす所存です」

原則、対応はアウラに任せた善治郎は、水を向けられる度に「ほう、そうか」とか「ふむ、そうだな」などと相づちを入れるだけだ。

善治郎の社交界デビューは、こうして無難に幕を開けたのだった。

しかし、無難に幕を開けた立食会も、閉幕まで平穩にすむという保証はない。

そもそも、この立食会における最大の目的は、衆目にアウラと善治郎の仲がうまくいっていることを知らしめることだ。

そうした目的を考えれば、いつまでもアウラが善治郎の腕をとり、フォローに回っているわけにはいかない。そんな状態が続けばむしろ逆効果だ。「アウラが夫の自由を束縛している」という風評に目鼻をつける結果になってしまう。

そのため、一通りの挨拶がすんだところで、アウラと善治郎がしばし別行動を取ったのは、当初から予定されたことであつた。

「ふう」

アウラと離れた善治郎は、一人ゆっくりと大広間を歩み進む。周

りからは好奇の視線が向けられるが、王族である善治郎に話しかけてくる者はいない。

基本的に、この国の礼儀では、目下の者が目上の者に声を掛けるというのは、不敬とされているのだ。立食会のようなある程度碎けた場であれば、多少の無礼は目を瞑ってもらえるが、それを踏まえても直系王族である善治郎に、声を掛けられるものは皆無に等しい。

声を掛けても、ギリギリ無礼ではないと見なされるのは、大領の領主や軍の将軍クラスといった国の重鎮ぐらいの者だろうか。しかし、そういった重責を担っている人間は、たいがい常識や場の空気を読むことに長けているため、あえて冒険を犯して『自ら』王族に声を掛けるといふ冒険に出る者は、皆無に等しい。

そんな冒険に出る大領主や将軍がいるとすれば、その者は良くも悪くも礼儀・儀礼という物を軽視している剛の者か、それだけの高位にあってもなおどん欲に上を目指しているような、底なしの野心家だ。

（仕方がない。こっちから話しかけるしかないか）

元々、中小企業のサラリーマンとして、社内業務だけでなく、外回りや対外交渉もやらされていた善治郎は、初対面に人間に声を掛けることをさほど苦とする人間ではない。

直系王族が直接声を掛けても問題がなさそうな無難な人間を求め、善治郎がゆっくり視線を会場全体に巡らせたその時だった。

「失礼します、ゼンジロウ様。少々お時間を頂いてよろしいでしょうか」

突如横合いからスツと進み出てきた体格のよい壮年の男が、片膝を着き善治郎にそう声を掛けてくる。

（え、え、ええ？　うそ、向こうから声を掛けてきた？　誰だよ、おい？）

善治郎が習ったマナーでは、「まずあり得ない」と言われていた状況に遭遇し、善治郎は内心パニックを起こしつつも、反射的に表情を固まらせ、ゆっくりと跪く男の方へ向き直る。

「なんだ……？」

精一杯の威厳を取り繕い、振り向いた善治郎の視界にその男が入る。

膝を付いていても、一目で「大きい」と分かるほどの、よく鍛えられた巨軀。その身体に纏うは、立食会には若干不釣り合いな、黒地に金糸の飾りをあしらった無骨な服装——それは、カープア王国陸軍騎兵団の第三正装である。

左胸の房飾りの形と数から、この巨漢が現王国でも最高位に近い軍人であることが見てとれる。

シャンデリアの灯りの下、赤い絨毯の上で膝を付くその様はまさに、『騎士』そのものだ。それも、白面の王子様然とした王宮の『騎士』様ではない。最低限の礼節を知りつつも、戦場で武勇を振るうことにこそ生き甲斐を見いだす、荒ぶる国の守護者としての『騎士』だ。

善治郎は膝を付く『騎士』を見下ろしながら、頭の中で思い返す。

善治郎に声を掛けることがギリギリ許されるのは、大領の領主か、將軍クラスの軍人。

あえて声を掛ける者がいるとすれば、その者は多少の礼儀など歯牙にも掛けない、良くも悪くも剛の者。

さもなくば、王配の不評を買うリスクを承知した上で、なお積極的に王配とのつながりを求めるほどの、よほどの野心家。

それら全ての条件を満たす男が、善治郎の前で膝を付いていた。

善治郎は、跪く男に声をかける。

「これは、プジョル卿か。なに用かな？」

その男の名前は、善治郎も事前に何度も耳にしている。かつて、マルケス家のラファエロ卿と並び、アウラの最終婚約者候補であったその男の存在を、善治郎が意識していないはずがないし、アウラからも「要注意人物」として、事前に何度も聞かされていた名前だ。

「はっ、実はゼンジロウ様にぜひ、受け取っていただきたい贈物がございます。そのため、無礼を承知で声を掛けさせて頂きました。ささやかな物ですが、受け取って頂けたのならば、望外の幸福です」

カープア王国竜騎兵团総団長、プジョル・ギジェン將軍は、赤い絨毯に膝を付いたまま、自分の前に立つ女王の伴侶を真っ直ぐ見上げ、そう言っただけのだった。

第四章2【贈物のさばき方】

女王の伴侶の足元に跪き、直言申し上げる、王国きっての名将と名高い将軍。

この組み合わせが周囲の注目を集めないはずがない。いつの間にか談笑をやめた貴族達がこちらに興味深げな視線を向けていることに気づいた善治郎は、内心『厄介な事になった』と冷や汗を掻きながら、わざとらしくゴホンと咳払いをした。

（ああ、畜生。こんなケース想定してないぞ。こっから全部、アドリブかよ、おい）

サラリーマン時代の善治郎は、社内プレゼンや対外交渉におもむく前には、可能な限り準備を整え、予想される質問の一覧表を用意して対応していた人間である。

今おかれているような、オールアドリブで対処しなければならぬ「想定範囲外」の状況には、少々弱い。

それでも善治郎は、必死に頭の中で、付け焼き刃の知識と今自分がおかれている状況を照らし合わせ、言動を決定する。

（ええと、ここは立食会だから、ある程度の無礼は許されていてんだよな。で、俺は王族で、こいつは将軍だから……）

心の中で善治郎は、プジョル将軍を「こいつ」呼ばわりする。初対面の人間に、悪感情を抱くのは、褒められたものではないことは理解しているが、それでも善治郎は、愛妻の婚約者補であった男にニュートラルな感情で接することが出来るほど、人間が練れていな

い。

そういった諸々の感情を表情の裏に隠し、善治郎は取り合えず無難に答える。

「將軍、このような場で、膝礼は無用だ」

「はっ、失礼します」

善治郎の言葉を受けて、プジョル將軍はよどみのない動作で立ち上がった。

自分より、立ち上がったプジョル將軍の偉容に、善治郎は後ずさりしたくなる衝動を押し殺す。

大きい。身長百七十二センチの善治郎より、有に頭一つは大きい。のだから、百九十センチは確実に超えているだろう。体重も百キロに近いのではないだろうか。無論、その中身は脂肪などではない。みっちり鍛えられた筋肉で形成された、戦うための巨体だ。

「では、用件を聞こうか。贈物があると言ったな」

頭一つ上にあるプジョルの目を正面から見据え、善治郎は頭の中で情報を整理する。

事前情報として、こういった場で贈物攻勢を掛けてくる者が現れる可能性については、教えられていた善治郎である。モノで人の歡心を買おうとする行為は、異世界でも共通する価値観のようだ。

（確か、理由もなしに断っちゃ駄目なんだよな。問題は、受け取る

ときの態度か)

あまり喜び過ぎれば、相手はその『喜び』に見合うだけの見返りを期待するし、失望したような様子を見せれば、相手に公衆の面前で恥を搔かせることになる。

モノを受け取るときの言葉や表情だけでも、周囲の運命を動かしかねない今の自分の立場に、善治郎は改めて、重いプレッシャーを感じる。

そんな善治郎の内心などつゆ知らぬプジョル将軍は、「はい」と答え、もう一度頭を下げると、後方に控えていた部下らしき年若い騎士に目で合図を送る。

若い騎士は白い布に撒かれた細長い品を両手で抱え、小走りにプジョル将軍の側へとやってくると、その布でくるまれた細長い何かを、プジョル将軍に手渡した。

その様子に、善治郎は無表情装った表情筋を僅かに崩し、少しだけ目を見開く。

(ええ？ 目録じゃなくて、現物を直で持ってきたの？)

通常、こういう場で人に物を贈る場合は、最初に目録を渡し、現物は後日相手の屋敷に届けるのが一般的だと善治郎は聞いていた。何せ、貴族・王族の贈り物だ。物によっては、毛並みの良い『走竜』や、避暑に適した家屋敷であることも珍しくない。

無論、宝飾品や宝剣など、持ち込みが可能である大きさの物である場合は、直接手渡しすることもあり得ないわけではないらしいが、

基本的にはあまりやらない。

現物を直接持ち込んで、万が一にも受け取りを拒否されたりしたら、並の恥ではすまされないからだ。

「ご覧下さい、ゼンジロウ様」

驚く善治郎を尻目に、プジョルは慣れた動作で布をはぎ取り、中身をあらわにする。

（なんだれは？ 弓、か？）

中身を見た善治郎は、内心首を傾げる。その中身は、複雑に湾曲した、無骨な棒だった。善治郎にはそれが、特に装飾も施されていない、実用一点張りの『弓』にしか見えない。

そんな善治郎の感想を肯定すべく、プジョル將軍は胸を張って言う。

「王都でも指折りの名工の手によって作られた『竜弓』です」

その言葉に、こちらの様子を見守っていた周囲の貴族達から、「ほう！」と驚きこの声が漏れる。

どうやら、この『竜弓』と呼ばれる代物は、感嘆の声が上がるほど大した代物であるらしい。

改めて善治郎は、プジョルの手にあるその『竜弓』とやらをしてみるが、やはりそんなにありがたいものには見えない。

王宮に持ち込むための手続きとして、弦を張るために空いている

両端の穴を黄土色の粘土用な物で埋められ、その上から王宮の印で封印されているその弓は、大きさも善治郎の記憶にある弓道用の和弓の半分くらいしかなく、非常に頼りなげに見える。

反応の薄さから、善治郎が『竜弓』について無知であることを理解したのだろう。

プジョルは、低い声で蕩々と説明を始める。

「『竜弓』とは、土台となる薄い木の板に、ほぐした『走竜』の腱と、削りだした『走竜』のあばら骨を貼り合わせて作られた弓です。

見ての通り、大きさは弓兵隊が使う長弓の半分ほどしかありませんが、威力、射程共に長弓に勝ります。

小さい分取り回しも優れており、熟練者が使えば、命中精度、速射性も十分に確保できます。騎乗では最強の武器と言えるでしょう」

複数の素材を組み合わせて作られた弓、一般に合成弓と呼ばれる代物である。似たような物は、過去地球の歴史上にも存在しており、実際に戦場で猛威を振るった実績がある。

コンボジットボウ

「しかし、その反面、竜弓を手に出来る騎士は極一握りに限られています。なぜならば、弓にするのに適した柔軟性のある腱や骨が取れるのは、まだ成長過程の若い『走竜』だけです。素材が極めて貴重な上、作製には多大な手間と時間を要するのです」

一般に、『竜弓』の素材となり得る走竜は、五歳から七歳までの若い走竜だけだとされている。成長が止まった走竜の骨は、固く丈夫になる反面柔軟性が失われるからだ。腱も骨ほどではないが、やはり同様の弊害が生じるとされている。

プジョル將軍の説明で、この『竜弓』がどのような物であるか気づいた善治郎は、ピクリと頬を振るわせた。

『竜弓』の存在は知らなかった善治郎だが、『走竜』が国にとってどれくらい大切な物であるかは、すでに説明を受けている。

その走竜が先の大戦で激減しており、国軍の必要数に戻すため、今もなお厩舎の飼育員達は日々多大な努力を払い続けているという事実も、だ。

その大事な『走竜』を若いうちに締め、武器の材料にする。極端な言い方をすれば、この『竜弓』という代物は、成長した『走竜』一匹に匹敵するだけの戦果を上げなければ、「割に合わない」だけのコストが掛かっていると言うことになる。

「ゼンジロウ様？」

こちらの様子が少しおかしいことに気づいたのか、探るように名前を呼ぶプジョル將軍に、善治郎は努めて平坦にした声で、問いかける。

「一つ教えてくれ、將軍。この、『竜弓』という代物は、誰にでも簡単に扱うことができる代物なのか？」

善治郎の問いの意図が分からぬまま、プジョル將軍は素直に答える。

「いいえ。なにせ、この小さな作りに、膨大な威力と射程を持たせております故、一般兵では満足に引き絞ることも出来ない者も珍しくはありません」

予想通りの答えに、善治郎は溜息が漏れるのを堪えた。

威力は折り紙付きだが、扱いが極めて難しく、素材も貴重なため数が少ない兵器。どう考えても、例え一弓だけでも、善治郎の手元で死蔵させていて良い代物には思えない。

しかし、周りの様子からみても、『竜弓』という代物は王族に呈するのに必要な『格』を持った物であるようだ。何と言って断れば、波風を最小限に抑えられるだろうか？

必死に無い知恵を振り絞った善治郎は、ゆっくりと考えながら答える。

「そのような貴重な品を、進呈してくる將軍の心意気、嬉しく思う。しかし、歴戦の戦士である將軍ならば見て分かるだろうが、私は戦場では何の力にもなれない、非力な存在だ」

「はっ、しかし……」

なにやら言いかけるプジョル將軍の言葉を遮り、善治郎は続ける。

「よって、私はこの弓を受け取りはするが、この手には持たない。プジョル將軍、卿の配下の中にも、まだ『竜弓』を与えられていない騎士がおろう。その中で、もっとも腕が立ち、王家への忠誠が厚い騎士に、その『竜弓』を渡してやってはくれぬか。」

それが、私にとって、もっとも望ましいその弓の使い道だ」

しばし、会場は水を打ったように静まり返る。

「……………承知いたしました。ゼンジロウ様の心遣いを裏切る事なき者に、必ずやこの弓を授けましょう」

長い沈黙の後、プジョル將軍は両手で『竜弓』を持ったまま、深く頭を下げたのだった。

一連の騒ぎを、少し離れた所で見守っていた女王アウラは、綺麗に事が収まった状況に、ホッと安堵の息を漏らしていた。

（良かった。どうにか、受け取らずに裁いてくれたか）

あそこで弓を受けっていたら、非常に面倒な事になるところだった。

あれが、宝剣や飾槍のような権威付けの武器ならば、受け取ってもさほどの問題はないのだが、実用武器を受け取った場合、その品を使う心づもりがあるという風に取りられてしまう。

そうなれば、今後プジョル將軍からの、訓練や狩猟会の誘いを断るのが極めて難しくなっていたことだろう。

自ら「弓を使うような立場に立つつもりはない」と宣言したことで、善治郎の評判が落ちる可能性があるのが気がりではあるが、にべもなく断るのではなく、『所有権を主張した上で、その弓を持つに相応しい騎士に貸し与える』という形を取ったことで、プジョル將軍にも恥を掻かせずにすんだ。

アウラの立場で判断すれば、最善に近い結果である。

最悪、アウラは自分が乱入して、強引に事態を納める覚悟もしていたのだ。そうしていたら、「女王陛下は婿を尻に敷いている」という噂が逆に強まっていたことだろう。

「中々に見事な受け答えでしたな。陛下」

アウラの隣に立つマルケス伯爵が、にこやかに声を掛ける。

「ああ、すまぬ。会話の途中であつたな、伯爵」

左胸の大輪の花飾りの位置を手で直したアウラは横に向き直り、先ほどからずっと側を離れないマルケス伯爵に向き直る。

太めの伯爵は、楽しげに笑うと、眼を細め、

「いえいえ、ご成婚されたばかりの陛下が、つついゼンジロウ様を目で追ってしまうのは自然なことですよ。仲睦まじく、結構なところかと」

「そう言ってもらえるとありがたい」

アウラは、皮肉にも聞こえるマルケス伯爵の言葉に苦笑を漏らし、小さく鼻を鳴らした。

再び、アウラは善治郎とプジョル將軍のほうへ戻す。『竜弓』を部下に預けたプジョル將軍は、その後もめげずに善治郎と会話を続けているのが見える。

以後は比較的当たり障りのない話を続けているようで、善治郎も

穏やかな表情で、無難に受け答えをこなしている。

とはいえ、プジョル將軍が一度や二度の失敗で懲りて、後は無難にこなす程度の野心家ならば、『餓狼』などという異名で呼ばれてはない。

「確かに、ゼンジロウ様のお役目は、時代に血をつなげることであり、身を危険に晒す戦場に立つ必要はありませんな。」

ならば、ゼンジロウ様。アウラ陛下との間に、王家の血を継承するお方が出来た暁には、次はゼンジロウ様ご自身の家を継ぐ子を産む、『側室』が必要ではないかと思考する次第なのですが」

贈物攻勢の次は、見合い攻勢を掛けてくるプジョル將軍に、遠くで聞いていたアウラは、一瞬揃って顔を引きつらせる。

そんな、アウラの様子に気づくはずもないプジョル將軍は、堂々とした押し出しで、攻勢を強める。

「ところで、話は変わりますが、我がギエン家は僅かながら、カープア王家の尊き血を継いでいることをゼンジロウ様はご存じでしょうか。」

私は本日ここに、妹を伴って来ているのですが、せっかくの機会です。妹をゼンジロウ様に紹介させて頂きたく存じます」

全く話は変わっていない。

女郎屋の女の売り込みだって、もう少し前口上があるだろうと、言いたくなるくらい単刀直入な売り込みだ。

その様子を離れた所で見ているアウラは、露骨に顔を引きつらせる。これは流石に介入するべきだ。

覚悟を決めて一步前に踏み出そうとするアウラに、横に立つマルケス伯爵が、意図の読めない穏やかな口調で声を掛ける。

「ああ、そう言えば私はまだ、プジョル將軍と挨拶をしておりましたな。陛下、お話の途中ですが、少々場を外してもよろしいでしょうか？」

「ッ!？」

マルケス伯爵のわざとらしい言葉に、アウラは動きを止めた。

マルケス伯爵の意図は分からないが、その言葉はアウラにとっては、絶妙な助け船だ。

ここで、アウラが「いや、そういうことならば、私も同行しよう」と答えれば、「自らの意思で強引に夫の会話に割り込んだ」と言われない形で、あの餓狼の見合い攻勢に介入することが出来る。

（なにを企んでいる、伯爵。私に恩を売るつもりか？）

マルケス伯爵の意図が読めない分、少々不気味だが、今のアウラにこれ以上、善治郎とプジョル將軍の会話を傍観するのは耐えられそうにない。

「いや、そういうことならば、私も同行しよう」

アウラは素直に、マルケス伯爵の出した助け船に乗ったのだった。

第四章3【立食会の閉幕】

王宮で開かれる社交界の場は、「剣を交えない戦場」などと呼ばれることもあるが、それは多分に誇張された表現だ。

大部分の貴族達にとって社交界とは直接顔を合わせ、ちょっとした世間話に花を咲かせるだけの息抜きの場に過ぎない。美味しい食事と、美味しい酒が舌を楽しませ、着飾った淑女、紳士が互いの目を楽しませる。

そんな貴族達の優雅な遊び場。それが、社交界本来の姿であり、「剣を交えない戦場」として活用しているのは、全体で見れば極少数派である。

しかし、そんな事実も善治郎にとっては何の慰めもならない。

現在、善治郎の前に立つのは、剛胆にも向こうから声を掛けてきたプジョル・ギエン将軍と、将軍が紹介した妹のファティマ。

斜め前に陣を取るのは、ギエン将軍に挨拶をしに来たついでに、会話の輪に加わったマヌエル・マルケス伯爵と、その妻オクタビア。そして、隣でそっと善治郎の腕に手を掛けている、マルケス伯爵と会話の途中だったという名目でやってきた女王アウラ。

社交界デビューを果たした善治郎の周囲に集まった人間の大多数は、社交界の場を「剣を交えない戦場」として捉えている少数派ばかりだった。

「それでは、紹介させていただきます。これが妹のファティマにございます」

「ファティマ・ギエンです、ゼンジロウ様。お目通りかない、恐

悦至極に存じます」

プジョル將軍の紹介を受けて、完璧に礼儀に乗っ取った態度で頭を下げたのは、黒い長髪をポニーテール状に纏めた、年若い少女だった。

肌の色はカープア王国人の平均に漏れない褐色、少しつり上がり気味の瞳も黒だ。

（まあ、美人だな）

善治郎は、頭を上げたファティマの顔を「見上げ」ながら、心の中でそう呟いた。そう、ファティマの目線は、善治郎から見て、見上げる位置にある。ファティマが壇上に上がっている、などという落ちはない。単純に、この少女は善治郎より背が高いのだ。

まあ、兄であるプジョル將軍が百九十を超える長身なのだから、同じ両親から生まれた妹のファティマが長身であることは、当たり前なのかも知れない。

百七十の中盤はあろう長身。身体の半分を占めるような、長い足。胸と尻のボリュームは乏しいが、それ以上に細いウエスト。スタイルだけなら、現代地球でもショーモデルで通用しそうな少女である。

「ふむ、そなたが將軍の妹姫か。確かに、目鼻立ちは將軍と似ているな」

「はい。皆様、そう仰います」

「兄に似ている」と言われた少女は、緊張した面持ちを崩し、嬉しそうに微笑んだ。その表情が偽りではないのだとすれば、彼女にと

って「兄に似ている」というのは嬉しい評価のようだ。

（と、いうことは兄妹仲はいいってことなのかな？　後で、アウラに聞いてみるか）

「ゼンジロウ様。ギエン家の末姫、ファティマ姫と言えば、才色兼備の美姫として国中に知られているのですよ。そう言えば、私もちよくちよく社交界には顔を出す方なのですが、ファティマ殿と直接お会いするのは、随分と久しぶりな気がしますな。いやはや、お美しくなられた」

「ありがとうございます、マルケス伯爵。私は最近まで、ペルニア侯爵のお屋敷に行儀見習いに上がってましたから」

横から賞賛の形を取って会話に加わるマルケス伯爵を、年若いファティマは気の強そうな笑顔で正面から受け止める。

これから善治郎に売り込みを掛けたいファティマとしては、どれだけ耳に聞こえの良い言葉を重ねられても、マルケス伯爵の存在は『障害』にしか映らない。元々つり上がり気味のファティマの目元が、自然と険しくなる。

一方、妹よりは遙かに年期を重ねているプジョル將軍は、ここで老練なマルケス伯爵を敵に回す愚をよく分かっている。

「ははっ、ファティマ。そんな風にわざと顔を崩さなくとも、伯爵はお前に色目を使うような方ではないぞ。なにせ、伯爵の隣には、お前など及びも付かない最高の淑女がおられるのだからな」

そう、笑い話にして、妹の華奢な肩をトントンと叩く。

「お、お兄様……！」

と、一瞬抗議しかけたファティマであったが、プジョル將軍に至近距離で睨まれると、次の瞬間には青菜に塩を掛けたようにシユンと元気を失った。

「そ、そうですわね。やはり、オクタビア様の前に出ると、私も自信を失ってしまいそうです」

「そんな……私なんてもういい年ですから。ファティマ様の方がずっとお美しいですわ」

兄の冗談に乗り、そう言って作り笑いを浮かべるファティマに、オクタビアは頬をほんのりと赤めて俯く。

二十四歳、既婚というオクタビアの肩書きからすると、普通は「年を考えろ」と非難を浴びそうな反応だが、そのような仕草がいまだに様になっている辺りが、大多数の異性に人気がある理由であり、一部の同性に蛇蝎のように嫌われている理由でもあるのだろう。

一部の同性の一人であるファティマは、「けっ、この良い娘ちゃんババアが」と言う感想は胸の奥に閉じ込め、

「本当にオクタビア様は、奥ゆかしいのですね」

と、笑い返した。この天然万年美少女に皮肉は通用しない。かといってあからさまに攻撃をすれば、こちらが悪者にされるという、社交界の間では無敵の存在である。

そうして、妹の失態を笑い話でごまかしたところで、プジョル將軍はめげずに妹の売り込みを続ける。

「まあ、確かにオクタビア殿と比べるとまだまだですが、ファティマも中々見所はあるやつです。歌や踊りに関してはちよつとしたものですし、行儀見習いの経験がありますから、侍女の真似事ぐらいは務まります」

「ほう、ギジェン家ほどの家格で行儀見習いとは珍しい。だが、感心なことだ。将来的には私の側仕えとして、召し上げることがあるかもしれない」

「……はっ、その時はどうかよろしくお願いいたします、アウラ陛下」

プジョル將軍の攻勢を横からインターセプトしたアウラに、將軍は一瞬口ごもってからそう言葉を返した。正直、妹をアウラの側近にそえても、あまりうま味がない。男女の関係に発展する可能性が高い、善治郎付きだから価値があるのだ。

流石に直接「妹を側室に入れてくれ」とまでは言わないものの、あからさまに続く売り込み攻勢に、善治郎は息苦しくなるくらいのプレッシャーを感じる。背中には、熱帯夜の暑さとは別な理由の汗をかいている。

隣にアウラがいなければ、この場を納めたい一心で、言質を与えるような言葉を吐いていたかもしれない。

「ところで、話は変わりますが、ゼンジロウ様はどのような女性がお好みですか？ いえ、当然一番は陛下でしょうが、二番三番に目

が行くことはございませんかな？」

相変わらず言葉と裏腹に、全く話を変えないで、ギジェン將軍は正面から切り込んでくる。

隣にアウラがいるというのに、堂々と女の好みを聞いてくる辺り、相当に良い度胸をしている。無論、この国の王族は一夫一妻制ではないので、日本の常識をそのまま当てはめるわけにはいかないだろうが、それにしても男女関係で生ずる嫉妬心いうものは、世界を超えた共通のものではないだろうか？

善治郎は思わずアウラの表情を確認したい衝動を辛うじて堪える。このタイミングでアウラの方を向けば、「ゼンジロウ様は、受け答えの際、アウラ陛下にお伺いを立てていた」という噂が広まってしまう。

だが、だとすると、この場は何と答えるべきなのだろうか？ 感情のまま答えて良いのだとすれば、「いらんいらん。せっかく美人の嫁さんと仲良くやってるのに、人の家庭に異物を放り込むな」といったところになるのだが、そう素直に答えて良い立場ではないことは、自覚している。

「む、それは考えた事がなかったな」

沈黙を続けるわけに行かず、ごまかすようにそう呟いた善治郎の言葉尻を、プジョル將軍が捉えるより一瞬早く、フォローしたのはマルケス伯爵だった。

「はははっ、ゼンジロウ様と陛下の中睦まじさは妻から聞き及んでおりましたが、どうやら噂は誇張どころか過小だったようだ。今のゼンジロウ様は陛下に夢中で、他の女性は目に入らないのですな」

助かった。半ば反射的に善治郎は、そのマルケス伯爵の言葉に乗る。

「からかうな、伯爵。まあ、違うとは言わぬが」

善治郎の言葉に、マルケス伯爵はわざとらしく目を見張り、笑う。

「これはこれは、カープア王家は安泰ですな。いやはや、めでたい」

マルケス伯爵はそう答えて、わざとらしく大笑した。

ここまであからさまな態度に出られれば、プジョル將軍にもマルケス伯爵が全面的に善治郎のフォローに回っている事に気づく。

隣に控えているアウラも、今のところは静かにしているが、あまり激しく切り込めば夫に変わって反撃をしてくるだろう。つまりこの場でプジョル將軍は、孤立していると言うことだ。

何処をどう間違えたのか分からないが、この場でこれ以上無理をしても、リスクに見合うほどの成果は得られなさそうだ。ここで無理に押し続けて、万が一もアウラやマルケス伯爵を激昂させたりしたら事だ。「プジョル將軍が、アウラ女王やマルケス伯爵と不和の関係にある」、などと噂を流されれば、諸外国の謀略を誘発しかない。

プジョル將軍は、『大国』カープア王国で実権を握る事に野心を燃やしているのであって、『亡国』カープア王国を支配したい訳ではない。この辺りが、引き時だろう。

「確かに、それは何にもましてめでたい事です。アウラ陛下は素晴らしい伴侶を得られましたな」

プジョル將軍はそつと妹の背中を二度叩き「売り込み終了」の合図を送ると、自らもそう言ってマルケス伯爵が逸らした話の方向に乗る。

「ああ、最高の夫だとも。お前達のような有能な臣下に恵まれ、ゼンジロウのような立派な夫を得られて、私ほど幸運な主君は大陸南部諸国、いや、このランドリオン大陸全土を探してもいないのではないかな」

「ははは、大陸最高と申しましたか。そこまで持ち上げられると、少々こそばゆいですな」

「いや、伯爵。あまりうぬぼれない方が良い。恐らく、陛下の仰る『幸せ』の半分以上はゼンジロウ様の事をさしておられる。我々の力など微々たるもの」

「なるほど、確かに。最高の伴侶であるゼンジロウ様と比べれば、我等の忠誠も小さなモノでしかないかもしれないかもしれませぬなあ」

その後は、互いにチクリチクリと痛いところを探り合いながらも、女王も將軍も伯爵も積極的な攻防は行わず、比較的穏やかに時間が過ぎていくのだった。



「終わった……！」

その日の夜遅く、立食会から帰ってきた善治郎は、万感の思いを乗せた言葉を発し、黒革張りのソファにどっしりと尻を落とした。

LEDライトで照らし出されるいつもの部屋。侍女達が用意しておいてくれた氷塊扇風機の風で、火照った身体を冷やす善治郎は、すっかり座りなれたソファの上で「帰ってきた」と強く実感する。

この一ヶ月ちょっとした間に、この後宮を『我が家』と捉えられるくらいに馴染んできた、ということなのだろう。

意外と環境適応力は高いようだ。

「苦勞を掛けたな、ゼンジロウ。だが、苦勞の甲斐はあったぞ。お前が公的な場で意思表示をしたからな。私との不仲説や、私がお前の自由を不当に縛っているという噂は、ある程度沈静化するだろう。もっともこの手の噂の常で、完全に払拭は不可能だろうがな」

そう答えるアウラも、オレンジ色のドレス姿のまま、少し疲れたようにソファに身体を預けている。

場馴れしている分、アウラの疲労はゼンジロウほどではないようだが、常時気を張り続けていたアウラも、やはり相当に疲労してい

るようだ。

「そっか。それは良かった。これでしばらくは引きこもってゆっくり出来るって訳だ。それにしても……まだ目が変な感じだ」

ソファアの背もたれに両腕をかけたまま、善治郎は何度も瞬きを繰り返す。先ほどからずっと目がチカついているのだ。

どれほど数を増やしたところで、シャンデリアの明かりはあくまで蝋燭の炎に過ぎない。炎の明かりには明るさの限界がある上に、ちょっとした空気の流れて容易く揺らぐという欠点がある。

足りない光量、揺らぐ複数の光源。目に負担を掛けるには十分すぎる悪条件だ。

特に、こちらの世界に来てからも、現代文明の利器に頼り切っている善治郎の目には、シャンデリアの明かりはきつかった。

「ああ、まだなんだか視界がぼやけてる」

そう言いつつ、善治郎はソファアに座ったまま、靴を脱ぐ。

カープア王国は、日本を超える高温多湿の気候のため、屋内では裸足が許される文化なのだが、流石に立食会や舞踏会のような場は別だ。

内履き専用の布靴と長い、靴下を脱いだ善治郎は、ホッと開放感に包まれる。

「足が涼しい……」

考えて見れば、こちらの世界に本腰を入れて転移してきてから今日まで、スリッパ以外の履き物を履いたのは初めてだ。今更ながら、

自分が本格的に引きこもっていた事実気づく。

靴を脱ぎ、胸元のボタンを上から二つまで外せば、かなり身体も楽になる。どうせこの後風呂に入って、髪に塗られた香油を落とすのだから、と自分に言い訳をして、善治郎は結局その場でシャツとズボンも脱ぎ、トランクス一丁になる。

サラリーマン時代には、スーツ・革靴に身を包み、対外交渉の場で舌戦を演じた経験はあるのだが、身体に残る疲労感、その時の比ではない。なれない服装というのも多少は関係しているのだろうが、やはり『王族』という下っ端サラリーマンとは比較にならない、影響力の大きな立場に、プレッシャーを感じていたのだろう。

「どれ、私も楽になるとするか」

だらしなくトランクス一丁になった夫を見習うように、アウラもソファアールから立ち上がると、首の後ろに両手を回し、シュルリと衣擦れの音を立て、下着姿になる。以前は王族の常として、着替えは侍女たちに手伝わせていたのだが、善治郎と閨をともしにするようになってから、部屋に他人が入るのを嫌う善治郎に会わせて、アウラも脱ぎ着に侍女の手を煩わせることは少なくなっている。

互いに半裸になった男と女。今更恥ずかしがるような間柄ではないが、意識せずにすむほど枯れた関係でもない。

「ゼンジロウ」

「ん、サンキュ」

アウラは、冷蔵庫から冷タオルを二つ取り出すと、その一つをゼ

ンジロウに放った。

ソファアに戻ったアウラは、冷蔵庫で冷やされたタオルで、身体にまとわりつく汗や香油をぬぐい取りながら、善治郎に尋ねる。

「では、疲れているところをすまないが、記憶が鮮明なうちに聞いておこうか。どうだ、ゼンジロウ。この立食会で顔を合わせた貴族の中、特に印象に残った人物はいたか？」

アウラの問いに、ゼンジロウは首筋の香油を拭く手を止めて考えた。

「印象に残った人か……うーん。途中までは結構いたんだけど、最後のギジェン兄妹に全部持ってかれた感じだな。正直、あの二人以外ろくに思い出せない」

その返答は半ば予期していたのだろう。アウラは口元に笑みを浮かべながら、善治郎が座るソファアに腰を下ろす。

「やはり、そうか。まあ、確かに印象的だったからな。では、まず兄のプジョル・ギジェン將軍から聞こうか。お前はあの男にどのような第一印象を抱いた？」

アウラの問いに善治郎は、気まづげにスッと視線を逸らす。

聞かれることを覚悟していた質問ではあったが、同時に聞かれることを怖れていた質問でもある。

善治郎は視線を逸らしたまま、齒切れの悪い言葉でまず言い訳をする。

「あー、その、なんだ。なんつか、俺も男だから、正直、プジョ

ル・ギエンと、ラファエロ・マルケスの二人に関しては、偏見の混ざらない意見を言うことは不可能に近いんだけど。ラファエロ・マルケスなんてまだ会ってもいないのに、すでに好感度マイナスになってるし……」

善治郎の言葉に、軽く目を見張ったアウラは、クツクツとこみ上げてくる笑いをかみしめる。プジョル・ギエンとラファエロ・マルケス。かつて、アウラの婚約者候補であった男達の名前だ。

その二人には「偏見がある」という言葉に、夫の嫉妬心を感じ取ったアウラは、胸の奥にあまり趣味の良くない類の歓喜の感情がわき上がるのを自覚する。

思わず夫の身体に腕を伸ばしたい衝動にかられるたアウラであったが、夫がことさら『香油』の匂いを嫌っている事を思い出し、直前で思いとどまった。

いつものように、しっかりとふれ合うスキンシップは、入浴後まで我慢した方が良さそうだ。こんな些細なことで、夫に悪感情を抱かれてはたまらない。

「大丈夫だ。お前の意見を鵜呑みにするほど私も迂闊ではない。だから、思うがままに申せ」

どうやら、これは答えずにやり過ぎるのは無理なようだ。観念した善治郎は、隣に座るアウラの方に首を向け、少々要領を得ない口調で話し始める。

「ああ、分かった。そうだな……俺の第一印象は『敵と味方しかないさそうなタイプ』って感じ、かな」

言いたいことは何となく分かるが、少し具体性に欠ける善治郎の

言葉に、アウラはその双眼に興味深げな色を乗せ、再度問いかける。

「ふむ、それはどういう意味だ？」

「いや、だからさ、何て言うか、プジョル將軍って滅茶苦茶迫力や威圧感があるのに、それを全く隠そうとしていないでしょ？ その上、びっくりするくらいずけずけと自分の要求を口にするし。

目的を達成するためなら、敵を作ることを恐れていないって言えばいいのかな」

「なるほど、な」

アウラは、小さく頷いた。少々媚殿に失礼だが、思っていた以上に当たっている人物評価だ。確かに、剥きだしの野心家であるプジョル・ギジェンは、軍部を中心に信望者も多い代わりに、嫌っている者も多い。

ただ、「敵を作ることを恐れていない」という評価は少々不当だ。軍人であると同時に名家出身の貴族でもあるプジョル將軍は、宮廷内で無闇に敵を作るほど迂闊な人物ではない。

敵に回していけない人物を前にすれば、愛想笑いをするくらいの使い分けは出来る男だ。

そう言った意味では確かに、善治郎はプジョルを『偏見』で見ているのだろう。妻の元婚約者という肩書きを持つ男に、無意識でライバル心を持ち、その男の欠点を探し、誇張して語る。

善治郎自身が言うとおりに、決して褒められた態度ではない。しかし、自覚があって、そんな自分を嫌悪出来るだけの見識があるのな

らば、特筆するほど大きな問題点ではあるまい。

度が過ぎるようならば、アウラが妻として注意すれば良いだけだ。

大体にして、思い人と関係の深い人間に、暗い感情を抱くのは、人間としてごく普通のことだ。

「では、妹のファティマ・ギジェンについては、どう思った？ 率直な感想を聞かせてくれ。ちょっと見とれているようにも見えたのは、私の目の錯覚だったか、ん？」

そう尋ねるアウラの瞳には、少し暗い感情の色が見え隠れしていた。

幕間4【兄と妹 夫と妻】

後宮で善治郎が、イタズラっぽい笑顔を浮かべるアウラに問い詰められていた頃、ギジェン家の王都屋敷では、王宮から帰還したプジョル將軍とその妹のファティマが、屋敷の一室で静かに会話を交わしていた。

「あの……お兄様、あれで良かったのでしょうか？」

立食会で見せていた気の強そうな表情は何処へ行ったのか、ファティマはオドオドとソファアの上で身体を縮こませ、上目遣いに対面に座る兄を窺う。

兄と妹と言うより、主人と犬を連想させるファティマの態度を、プジョル將軍は極当たり前のように受け止め、小さく首を縦に振る。

「ああ、上出来だろう。欲を言えばきりがないが、十分に合格点だ。良くやったぞ、ファティマ」

「はいっ！ お兄様」

兄に褒められた妹は、心の底から嬉しそうな笑みを浮かべ、ホッと安堵の溜息を漏らす。

ファティマの漏らした吐息が、テーブルの上に乗る燭台に掛かり、ユラユラと薄暗く室内を照す炎をゆらした。

この世界で、夜間照明のメインとなっているのは、植物油に芯糸を垂らした油皿だ。

固体である分、油皿より取り扱いが容易い蠟燭は利用価値が高いのだが、生産量も輸入量も限られているため、日常の照明として使用している家は、貴族の中でもごく一部の富貴層に限られる。

ギジェン家はそのごく一部の富貴層である。

もっとも、その机の上の小型の燭台と、部屋の四隅に設置されている背の高い四本の燭台、その全ての蠟燭の明かりをあわせてもその明るさは、善治郎が持ち込んだLEDランタンの半分にも満たない。

それでも、向かい会って座る兄と妹に、互いの顔を視認させるには十分な灯りである。

プジョル將軍は、嬉しそうに自分の顔を見上げる妹の目を見つめ返し、独り言を言っているような素っ気ない口調で言葉を返す。

「ともあれ、ゼンジロウ様はお前という存在を、意識するようになったはずだ。少なくとも、顔と名前は覚えてもらえただろうし、あの様子ならば第一印象もそう悪くはあるまい」

「はい」

特に、立食会という大多数の貴族達の前でアピールできたという事実は大きい。

あれであの場にいた貴族達は、プジョルのスタンスを理解したはずだ。プジョル・ギジェンが妹のファティマを善治郎の側室に入れる事を望んでいる、と。そう知った上で、今後、善治郎の元に自分の息が掛かった女を送りこもうとする人間は、どれくらいいるだろうか？

まあ、海千山千の貴族達が、一気に全員手を引くことは絶対になりだろが、少なくとも数の貴族がギエン家との衝突回避の方向に舵を切ることだろう。

さらに、これまでファティマの元にはかなりの数の婚姻話が舞いこんでいたのだが、それらの攻勢にも今回の一件はいい牽制になるだろう。

ギエン家の家長であるプジョル・ギエンは、妹を善治郎の側室に入れる事を望んでいる。

裏を返せばそれは、王配の側室になるのと同等か、それに準ずるくらいのうま味のある婚姻条件を提示できなければ、プジョルは妹を他家の嫁に出さないという意味表示をしたとも取れる。

「……………」

「お兄様……………」

プジョルは、蠟燭の明かりに照らし出される妹の顔に視線を固定したまま、考える。

（ふむ。欲目抜きで、なかなかの美人に育ったと思うのだがな。ゼンジロウ様の反応は今一分かりづらい）

贈り物の『竜弓』を「自分は引けない」とはっきりと明言する辺り、武人としての側面は全く持たない人物のようだが、あの場で「腕の立つ忠誠厚い兵士に渡せ」と切り返す辺り、頭はそう悪くなさそうだ。

（馬鹿な野心家であれば、話は簡単だったのだが、そこまで都合の

良い話はないか)

あの受け答えを聞いている限り、善治郎という男は馬鹿ではない。だが、馬鹿でないのだとすれば、なぜあの善治郎と言う男は、女王の都合の良い人形に甘んじているのだろうか？

よほどの馬鹿でない限り、女王の伴侶という立場は、少し手を伸ばすだけで大きな権力を掴むことが出来る立場であることを理解できずなのだが。

(もしかすると、冒険を嫌う質なのかも知れんな)

自分自身が野心家である事を自覚しているプジョル將軍は、同時に世の男全員が、自分の様な野心家では無いことも理解している。

ある程度の地位、ある程度の財、ある程度の名誉。それで、満足してしまう男も世の中には確かに存在する。ひよっとすると、あの善治郎という男もその類の存在なのかも知れない。

女王の伴侶として、後宮でかしくかれ、贅をこらした生活を過ごすだけで当面の欲望を満足させてしまっている。そういう可能性はある。

(だとすると厄介だな。アウラ陛下との離間工作はまず成功すまい)

現状に満足している人間を唆すのは難しい。まず、その満足している現状を悪化させるか、満足している心に野心を植え付けて飢えを覚えさせる所から始めなければならぬからだ。そういった工作は、すでにある野心の火種を大きくするのと比べると、格段に手間が掛かる。

プジョルは蠟燭の明かりで薄暗く照らし出される天井に視線を向

け、無言のまま考え続ける。

（現状で最善は、ゼンジロウ様の側室にファティマを入れて、その間に産まれた子が次代の王になることなのだが、その可能性は低い、と見るべきか）

ファティマを善治郎の側室に入れる事を諦めるつもりはないが、問題は時間だ。女王アウラと善治郎が閨をともにする間柄である以上、すでにアウラの腹の中には子種が宿っていてもおかしくはない。

そこまでいっていないとしても、アウラと善治郎の関係が現状のまま一年も続けば、嫡子が生まれるのは時間の問題だ。これから側室入りを目指すファティマの第一子は、女王の第一子より年下になる、と考えるべきだろう。そして、その女王の第一子が男であったなら、それより後に生まれるファティマの子が、例え男であったとしても王位に就く可能性は低い。

（ならば、アウラ陛下とゼンジロウ様の間に子が産まれた場合にも、対応した身の振り方を考えておくべきか）

幸い、プジョルはまだ三十代の前半という若さだ。もし、近いうちに、アウラと善治郎の間に男子が産まれたとして、その子が成人するのは十五年後。その時プジョルは、まだ五十になっていない。戦士としてはともかく、將軍、宮廷貴族としてはまだまだ現役のはず。

（カープア王国で女王の即位は『場繋ぎ』と見なされるからな。一定以上の帝王学を身につけた成人した男子がいれば、王権の譲渡は時間の問題のはずだ）

アウラと善治郎の間に子が生まれ、その子が成人と認められる十五歳になったところでアウラから子に王冠が移る。この先、波乱がなければそうなる可能性は高い。

望ましい未来をたぐり寄せるために努力をするのは当然であるが、実現する可能性が高い未来の対策を取っておくことも、忘れてはならない。王国一名高い将軍と言っても、所詮はプジョルも1人の有力貴族に過ぎないのだ。一事が万事、思い通りになるはずもない。

「ふむ、やはり、多少はアウラ陛下とも足並みを揃えておくか」

プジョルは、対面に座るファティマにも聞こえないくらいの小声でそう呟くと、視線を天井から下ろした。

政治の世界は複雑だ。全面的な敵や、全面的な味方というのは皆無に等しい。

軍の最高位である『元帥』に野心を燃やしているプジョル将軍と、国軍を王家の指揮下に置いておきたいアウラの利害は、原則としてはぶつかり合っているが、視野を少し広げて、『国軍』と『地方領主軍』という別な対立構造から見ると、また立場は変わってくる。

女王であるアウラも、国軍の最高位を目指すプジョルも、国軍の軍備増強、地方領主軍の縮小という方向性に関して、見解の一致を見ている。

一通り考えを纏めたプジョルは、真剣な表情でこちらの顔をのぞき込む妹に、その漆黒の双眼を向けて言う。

「ファティマ。私はお前を、ゼンジロウ様の側室に入れるつもりだ

が、状況は流動的だ。場合によっては、他家に嫁入りしてもらう可能性も十分にある。心づもりはしておけ」

善治郎の側室に入れる事が、第一希望であることは間違いないが、ファティマは現在十七歳だ。今がまさに結婚適齢期。本人の容姿や能力、ギジェン家の家名を持ってすれば適齢期を過ぎても結婚相手に困ることはないだろうが、その場合、結婚相手のランクは確実に下がる。

妹の幸せの為に、時間制限を設けて、ある程度粘っても目がないうようならば、側室入りはすっぱり諦めた方が得策だろう。

プジョル將軍も、妹を幸せにしてやりたいとは思っているのだ。ただ、妹の幸せより、ギジェン家の繁栄や、自分の野心を満たすことの方が優先順が高く、肝心のその『妹の幸せ』というのも、プジョルが考える『幸せな結婚』を押しつけるだけなのが少々問題なのだが、それもこの場合は、さほど大きな問題にはならない。

「はい、お兄様。私は、どのような家に嫁いでも、ギジェン家の娘として恥ずかしくないよう、勤め上げて見せますわ」

兄の言葉に、妹はうつとりとした表情で首肯する。

「うむ、期待しているぞ」

「はいッ」

兄、プジョル・ギジェンを敬愛し、ギジェン家の娘であることに誇りを持ち、政略結婚の意義を幼少の頃から叩き込まれている少女、ファティマ・ギジェンにとって、プジョルに言われた内容は特に忌

避するようなものではなかった。



夜更け頃、後宮の大きなベッドの上では、一糸まとわぬ裸体をさらした善治郎とアウラが、複雑に身体と身体を絡ませ合い、軽く息を弾ませたり、荒い息を吐いたりしていた。

具体的に言えば、軽く息を弾ませているのがアウラで、思い切り荒い息をついているのが善治郎である。両者の息の上がり具合の違いは、ベッド上の運動における男女の運動量の違いと、それぞれ個人の基礎体力の違いに由来する。

ちょっと前までソファアの上で、『ファティマに見とれていた』件について問い詰めていたアウラと、問い詰められていた善治郎が、こうして寝室のベッドで一戦交えるに至ったかについては、さほど長くも複雑でもない経緯がある。

楽しみにアウラが善治郎を問い詰め始めたタイミングで、ドアの向こうから侍女が『浴室の準備が調いました』と告げてきたので、とりあえずは一度会話を打ち切った善治郎とアウラは、仲良く浴室に向かい、汗と香油を流すことを優先した。

その後、湯上がりの薄着姿で部屋に戻ってきたアウラは追及を再開したのだが、元々本気で怒っていたわけではない。ただ、善治郎との会話を楽しみながら、『ファティマ』という少女の第一印象を聞き出したかっただけである。

善治郎に焦った口調で「いや、確かにストライクではあるけど、せいぜい真ん中低めだよ。間違ってもど真ん中じゃない。この後、ど真ん中のストライクが来るって分かっている以上手をだすような球じゃないよ、絶対」などと言われれば、意地の悪い表情を取り繕うのも難しい。

吹き出すアウラと、からかわれていたことに気づいて怒ってみせる善治郎。謝るアウラに、突っぱねる善治郎。謝りながら抱きつくアウラに、抱き返しながらアウラの口を自分の口で塞ぐ善治郎……。そんなことを繰り返しているうちに、いつの間にか2人は寝室のベッドで激しく愛し合うようになっていたのである。

「……………」

善治郎は、裸の愛妻を胸元に抱き寄せ、その赤い頭髪を何度も撫でながら、顔を綻ばせる。

氷扇風機から冷風が吹き抜けるベッドの上は十分に涼しく、こうして肌と肌を合わせていても互いの体温が心地よく感じられる。

「ん……」

善治郎は横向きに寝たまま、アウラを抱きしめる腕に力を込めた。

「ふふ……」

アウラは抵抗するそぶりも見せず、抱かれるに任せて、その汗ばんだ裸身を善治郎に押しつける。

互いの心臓の鼓動が肌を通して感じられるほどの密着感。頬に当たる吐息や、肌をくすぐる髪の毛の感触が生み出すすぐったささえも、心地よい。

抱きしめ、髪を撫で、背中を叩く。そうしているうちに、善治郎の腕の中でアウラはスースーと寝息を立て始める。

「相変わらず、寝付きが良いなあ……」

窓から差し込む星明かりの下、照らし出される愛妻の赤い頭髪を手で梳くように何度も撫でながら、善治郎は微笑んだ。

左腕をアウラの首の下に差し込んだまま、善治郎は少し上体を起こし考える。

アウラの言葉を信じて良いのなら、今夜の立食会は、それなりに無難に乗りきることが出来たようだ。

「やたら疲れたけど、俺にとっても有意義な時間だったかもしれないな」

立食会で向けられた貴族達の視線を思い出し、善治郎はポツリと呟く。

異世界から現れた女王の婿に向けられる視線は、お世辞にも心地よいモノではなかった。大多数は、値踏みのような好奇の視線だった

が、善治郎がプジョル將軍に向かって「戦場では何の力にもなれない、非力な存在だ」と明言したときには、あからさまに失望や侮蔑の視線を向けてきた者もいた。

それが当たり前なのだ。どれだけ後宮に引きこもっていても、どれだけアウラの足を引っ張らないように言動に気をつけていても、善治郎の事を疎ましく思う人間は絶対にいる。

「問題は、嫌われないように振る舞うことが最善ではない、ってことだよな」

善治郎はあくまでアウラの伴侶であり、アウラの味方であり、アウラと運命を共にする者である。女王の伴侶として相応しくない、と思われるほど評判を下げるのはもってのほかだが、あまり評判を上げるのも考え物だ。

元々妻が夫より前に立つことに忌避感が強いこの国で、下手に善治郎が『有能』だと勘違いされてしまうと、アウラの足場を揺らさせることになってしまう。

理想は、『人畜無害で子作り以外の能はないが、最低限公的な場に出て国政の恥をさらさないだけの知識と教養を持った人物』、と思ってもらえることだ。

なんとも、さじ加減の難しい話だが、その程度の苦労は矢面に立って国政を切り盛りしている愛妻の苦労と比べれば、微々たるものだ。その程度の労苦を厭うようでは、アウラの伴侶として横に立つ資格はない。

もっとも所詮は、二流大学を出て中小企業のサラリーマンをやっ

ていただけの自分が、『有能』と勘違いされるような成果を上げられるとは、善治郎自身は思っていないが。

「アウラ……」

善治郎は改めて、自分の腕の中で寝息を立てる愛妻の寝顔を見る。無防備と言っても良いくらいに、穏やかな表情で眠るその様子に、善治郎はアウラの自分に向ける信頼が深まってきたという実感を覚える。

最初に婚姻があり、そのすぐ後に身体を重ね、それからお互いのことを知り、愛情と信頼を高めていく。恋愛結婚になれている現代日本人の目には奇異に映る順序かも知れないが、お見合い結婚の一種と考えれば、むしろ理想的に事が進んでいると言っても良い流れだ。

もっとも、アウラに一目惚れしたのに近い善治郎にとっては、恋愛結婚と言っても間違いではない。

「アウラ……」

善治郎は、いい加減痺れてきた左腕を、アウラの首の下からそっと抜き取った。

「ん……んん……やあ……」

その拍子にアウラは、むずがるように寝息を立てたが、目を醒ますまでには至らなかったようだ。

ホッと安堵の溜息をついた善治郎は、腕を抜いた拍子に乱れたアウラの長髪を手で丁寧にすくい上げ、枕より上にそっと押し上げる。

「……俺も寝るか」

そして、横向きに眠るアウラと顔と顔が向き合うように、身体を横たえると、眠気が来るまでじつと静かに目を瞑り続けるのだった。

第五章 1 【森の祝福】

善治郎が立食会で無難な社交界デビューを果たしてから、数ヶ月。

南国カープア王国でも、流石に日中温度計が四十度越えを示したり、夜でも三十五度以上ある様な日々は、何日も続かない。

ここ最近はずっと、日中の最高気温が三十度を僅かに超える程度で、夜になると軒並み二十五度を下回る過ごしやすい日々が続いている。

このくらいならば、昼間は氷なしの扇風機で十分だし、夜は特に冷房を働かせなくても寝苦しくない。

カープア王国には、日本のような分かりやすい『四季』はないが、後宮の窓から外の風景をよく見ると、色々違いがあるのが分かる。

来た頃は、赤や黄色の大輪の花が咲いていた花壇に、青や紫色の水仙のような細い花卉の花が咲き、差し込む日差しの影もほんの少し長く伸びている。数ヶ月前には、蚊取り線香を窓際に焚いて撃退していた羽虫も、最近は数が減り、夕暮れに鳴き声を響かせる鳥も種類が変わったようだ。

『四季』と呼ぶほど劇的な変化ではないが、一応「季節が変わった」と言っても良いのではないだろうか。

何はともあれ、来た当初と比べて格段に過ごしやすい季節になったのは間違いない。

しかし、肝心の善治郎は、そんな穏やかな季節を満喫できる状態ではなかった。

昼間から寝室に籠もり、ベッドの上で胎児のように身体を丸めて寝る善治郎。

「はっ、はっ、はっ……」

その呼吸は細く、呼気は熱い。頬は紅潮し、額や首筋からは、絶えず汗が噴き出している。涼しくなったとは言っても、日中は三十五度前後の気温があるはずなのに、顎まですっぽりと羽布団を被っているその身体は、先ほどから寒さに耐えかねるように、ガタガタと震えている。

やがて、布団の中からピーという、この世界には馴染まない電子音が小さく鳴り響く。

「うう……」

辛うじてその音を聞き止めた善治郎は、布団の中でゴソゴソすると、脇の下に挟んでいた『体温計』を取りだし、顔の前にかざす。

《38.3℃》

デジタル式の体温計に表示された数値は、善治郎の平熱より二度以上高い値を示していた。



善治郎が熱を出して寝込んだ。

昼食の少し前にその知らせを受けたアウラが最初にとった行動は、後宮で働く職員達に後宮からでないように通達することと、自らの体調を顧みることだった。

熱を出した夫は心配だが、アウラは王である。女王が病魔に冒されないための予防は、女王の伴侶を病魔の手から救い出すことよりも優先される。

いったん業務を停止し、王宮内の私室へ下がったアウラは、すぐさま王室御用達の医者呼びつけ、自分を診断させた。

薦を編んで作られた椅子の上で、大きく口を開けて喉の奥を見せていたアウラは、初老の医者「はい、もう結構です」と言う言葉を受けて、口を閉じる。

「どうだ？」

「はい、大丈夫です。少なくとも、現時点では陛下に、病気の兆候は見られません」

簡潔なアウラの問いに、初老の医者は柔らかな笑みを浮かべそう答

えた。

医者の答えに、アウラは威圧感のある厳めしい表情を保ったまま、内心安堵の息を漏らす。

良かった。この世界の医療技術は、あまり進歩していないため、医者への保証も絶対の安心をもたらすものではないのだが、医者への口調からするとまず安心して良さそうだ。

我が身の安全が保証されれば、アウラも王としてではなく、妻としての言葉を口に乗せることが出来る。

「そうか。では、手数をかけるが、後宮で寝込んでいる嬪殿を頼む」

男子禁制の後宮で、数少ない例外とされるのが医療関係者だ。男社会中心のカープ王国に、女医はほとんど存在しない。そのため、医者は例外としておかなければ、後宮の住人は病魔に冒されても医者に掛かることが出来なくなってしまう。

「はい。全力を尽くしましょう」

老医師は、柔和は笑顔で承ると、女王の許しを得て退出していった。

入れ替わるようにして、アウラの秘書官を務める、ファビオ・デウバジェが部屋に入ってきて来る。

「失礼します、陛下。ご容態はいかがでしたか？」

細面の中年秘書官に、アウラは小さく微笑むと、早速指示を飛ばす。

「ああ、私は問題なしだ。ミシエル医師には、そのまま婿殿の診察に回って貰った。病状次第では、婿殿に『治癒の宝珠』を使いたいと思っているのだが、お前の意見を聞かせてくれ」

『治癒の宝珠』という言葉に、ファビオ秘書官はピクリと片眉を跳ね上げたが、すぐに首を縦に振り、同意を示した。

「……そうですね。ミシエル医師の診断結果を聞かなければ明言は出来かねますが、ゼンジロウ様の病が死病の類であるようならば、考えるまでもありますまい。今、ゼンジロウ様を失う訳にはまいりません」

『治癒の宝珠』とは、南大陸の中部に位置する大国、シャロワ・ジルベール双王国で作られた魔道具である。

『付与魔法』のシャロワ王家と、『治癒魔法』のジルベール法王家。両王家の魔法技術の結晶とも言うべき『治癒の宝珠』の効果は絶大だ。

流石に、欠損部位の再生や、失われた五感を取り戻すことは出来ないが、基本的に治癒の宝珠を使って命が助からなかった傷病者は、ほとんど存在していないという。

中世イスラム圏に毛が生えた程度の医療技術しかないこの世界に存在する『万能の薬』。しかも、その作り手が世界に十数人しかないとなれば、『治癒の宝珠』一個に小国が傾く程の値がつけられるのも、当然と言うべきなのかも知れない。

カープア王国は南大陸の西部に覇を唱える指折りの大国であり、シャロワ・ジルベール双王国とはそれなりの付き合いのある友好国

だが、それでも『治癒の宝珠』は現在三つしか保有していない。

購入金額も馬鹿高いが、例えば金を詰んでも、絶対に買える保証がない貴重品。それが、『治癒の宝珠』だ。

「そうか、お前がそう言うのならば、安心だ」

ファビオ秘書官の返答に、アウラは表情に安堵の色を滲ませる。アウラ自身、善治郎が倒れたと聞いた瞬間、『治癒の宝珠』を使うことをとっさに考えたのだが、その判断が、妻としての感情によるモノか、王としての理性によるモノか、自分でも分からなくなっていた。

冷静に考えてみれば、アウラがまだ子をなしていないこの段階で、善治郎に死なれるのは王国を揺るがす一大事なのは、貴族ならば誰でも分かる。そういった判断も下せないくらいに、アウラの思考が鈍っていたということなのだろう。

いざとなれば、『治癒の宝珠』を使用すればよい。その結論に達したおかげで日頃の冷静さを取り戻したアウラは、椅子の肘掛けに右肘を付き、頬杖をつく。

「それにしても、朝、目を醒ましたときには、婿殿もごく普通にしていたと思ったのだがな。どのような病を患ったのか」

「毎夜、閨を共にしておられる陛下が発病していないのですから、陛下が過去に患ったことのある、一度しかかからない類の病の可能性が高いかと」

ファビオ秘書官の言葉に、アウラは頬杖を突いたまま考える。

一度掛ければ、二度と発病しない病。

アウラも過去には、そういった病にかかった経験は何度かある。

「一度しか掛からない病、過去私が患った、朝にはピンピンしていたのに昼前に発病……ひょっとして、あれか？」

しかし、そこにもう一つ「朝までは何ともなかったのに、昼前に急に容態が悪化した」という条件を加えると、アウラが思いつく病名は一つに絞られる。

アウラよりよほど冷静な、ファビオ秘書官はとっくにその病名にたどり着いていたのだろう。

「おそらくは、陛下のご想像通りではないでしょうか」

秘書官は、相変わらずの鉄面皮のまま、抑揚の無い声でそう答えた。

秘書官の言葉に、アウラは脱力感を覚える。

善治郎の病気が「あれ」なのだとしたら、これまでの心配はまったくの徒労であったことになる。

アウラの予想は、それから程なくして王宮に戻ってきたミシエル医師の言葉で裏付けられた。

「ゼンジロウ様は『森の祝福』を受けておいでです」

死亡率が限りなくゼロに近い病名を告げられたアウラは、脱力感のあまり天井を仰ぎそうになるのをこらえ、厳めしい顔で、ミシエル医師に「そうか、ご苦労だった」と告げる。

その後ろでは、女王の狼狽を目ざとく見咎めた秘書官が、片頬を吊り上げて人の悪い笑みを浮かべるのだった。



「アウラ。『森の祝福』ってなに？」

熱を出して寝込んだ夫を見舞うため、業務を早めに切り上げて後宮にやってきたアウラに、善治郎はグツタリと大きなベッドに倒れ込んだまま、視線だけを向ける。

時刻としてはまだ夕暮れ時だが、外気が吹き込まないように木戸を閉め切ってあるため、外の様子はうかがい知れない。善治郎が眠りやすいよう、寝室のLEDスタンドライトも点灯させているのは一つだけだ。

そんな薄暗い寝室の中、ベッドの横に置いた椅子に腰を掛けたアウラは、冷蔵庫から持ってきた冷タオルで、甲斐甲斐しく善治郎の額や首筋の汗を拭いてやりながら、答えを返す。

「簡単に言えば、この辺りに昔から蔓延している風土病だ。毒性が

弱く、発病しても老人や乳幼児でなければ、滅多なことで死に至ることはない。さらに、一度感染すれば二度と感染することがない上に、不思議とこの病を経験した者は、他の病にかかったとき、症状が軽くてすむことが多いので『森の祝福』と呼ばれているのだ」

熱で良く回らない頭で、どうにかアウラの言葉を理解した善治郎は、思わずポツリと感想を漏らす。

「すげえ……俺、この病原菌と抗体を作った身体を地球に持って帰ったら、ノーベル賞取れそうな気がする……」

地球でも、麻疹や水疱瘡のように、一度掛ければ原則二度と発病しない類の病は存在したが、その効果が他の病原菌にも劇的に作用する抗体を作るとは、まさにファンタジーだ。

だが、それはそれとしてこの病気が「滅多なことで死に至ることはない」というのは、最高の朗報だ。異世界の病の恐怖に震えていた善治郎は、一瞬身体の節々の痛みも忘れて顔を綻ばせる。

「そっか。それなら、寝てれば治るんだな……。どれくらい？」

「そうよの。早い者で三日、長引く者で七日くらいか」

つまり回復まで、おおよそ五日前後は掛かるということか。無理をすれば立ち上がれないこともない程度ではあるが、こんな体調が五日も続くと思うと流石にウンザリする。

関節という関節が痛むせいで、寝ていても身の置き場がないし、熱が高いせいで汗を掻きっぱなしなのに、喉が腫れていて水を飲むだけでも痛い。

眠れば楽になるのだが、寝苦しさと身体の痛みが安眠を妨害してくれる。症状としては重めの風邪に似ている。

（それにしても、このしんどい状態が最長一週間も続くのに、本当に『滅多なことでは死なない』のか？ どう考えても、この世界の文明レベルでは死人続出に思えるんだけどな）

善治郎の、熱でゆだった脳裏に、ふとそんな疑問がわき上がる。

三十八度を超える高熱で数日間寝込んでも、滅多なことでは死なないのは、家も布団も栄養状態も満たされた現代日本の一般家庭ならばこそだ。

栄養状態の悪い貧民層にとっては、十分致命傷となり得る病に、善治郎には感じられる。

その善治郎の感覚は間違っていない。

この病気が『森の祝福』などと、暢気な呼ばれ方をしているのは、若いうちに掛かっておくと遙かに軽い症状ですむからだ。体温でいえば、せいぜい三十七度前後だろうか。

だから、市井では、近くに『森の祝福』を発病した人間が出ると、若い子供のいる親はわざわざ『祝福』をうつしてもらいに行くのだという。

無論、それでもなお、『森の祝福』に負けて命を落とす少年・少女もいるが、それは諦めるしかない。『森の祝福』にも耐えられないような子供は、どのみち成人するまで育たない。そう自分に言い聞かせて、親たちは自分の心を騙すのだ。

ともあれ、そういった貧困層の事情はこの際善治郎には、あまり

関係がない。

「そう言えば、侍女達が困っていたぞ。せめて、病気が治るまでは彼女たちの立ち入りを許可した方が良いのではないか？　そうしてくれた方が、私も安心なのだが」

ふと思い出したようにそう言うアウラの言葉に、善治郎はベッドの上で身をよじり、珍しく不快そうな表情を浮かべる。

「あー、出来ればそれは辞めて欲しい。正直、周りに人がいると、治るものも治らない気がする……」

「だが、その身体では、食事も小用も一人では足せまい？　看病する人手は必要だ」

今は、特別に時間を作ってこうしてアウラが付き添っているが、女王であるアウラは本来この様な仕事をする身分ではない。王族の世話は、家族ではなく、使用人の仕事だ。

「あー、うん……」

相当喉がやられているのか、か細い声でしか返事を返せない善治郎であったが、その割りには頑固にアウラの提案を呑みこもうとしない。

「ゼンジロウ……？」

なおも問いかけるアウラに、善治郎は痛む喉に無理をかけて、小さな声を絞り出し、白状した。

「俺さ、病気の時って、すごく神経ささくれるんだ。ちょっと油断すると、周りに当たり散らしたり、我が儘言ったり。そういうことしたくないから……周りに人について欲しくない……」

病気で寝込んだとき、常とは違う感覚になる人間というのは、珍しくない。

病気で弱った身体が、心にも影響を及ぼすのか、異常に気弱になったり、訳もなく人恋しくなったりする人間は多い。

善治郎の場合、それは攻撃性として表面化する。

呑みこむスープが熱いのも、身体を拭くタオルがぬるいのも、そもそも自分は今こんなに辛い思いをしているのに、健康にしていること他人が存在していること自体が憎らしく思えてくる。

無論、善治郎も今はいい年をした大人だ。例え病気で心身が弱っているても、そんな無駄な攻撃性を常時周囲にまき散らすほど薄弱な精神はしていないが、そうした攻撃性を抑えるのは疲れるものだ。

ならば多少不自由でも、周りには誰もいない方が良い。今だけはアウラにも隣にいて欲しくない。いや、アウラにこそ、いて欲しくない。この良くできた嫁に子供のような我が儘を言ったりしたら……正直、病気が治った後、精神的に立ち直ることは出来ない気がする。

「大丈夫……着替えくらいは自分で出来るし、トイレの時はベル鳴らすから……」

「むっ、しかし」

侍女や執事など、理不尽な主に怒鳴られるも仕事のうちだと思う

のだが、この数ヶ月でアウラも善治郎の価値観をかなりの部分、理解している。

人に理不尽な迷惑を掛けることに、強い罪悪感を覚える善治郎の価値観からすると、確かにここで侍女達に当たり散らしたりしてしまえば、後のダメージは大きそうだ。

しばし考えた後、折れたのはアウラの方だった。

「……分かった。出入りは最小限にするように言っておく。もうすぐ夕飯だが、何か食べたいものはあるか？」

何気なく付け足したその言葉は、無意識のうちに出了言葉だった。その言葉に、心の弱っていた善治郎は、反射的に希望を漏らす。

「お粥……梅干しか、卵と醤油のお粥が食べたい」

「オカユ？　なんだ、それは？　ウメボシ？　卵は分かるが、シヨウユとはなんだ？」

アウラの反応は、熱で頭の鈍った善治郎にも簡単に理解できた。全く、今言った言葉は通じていない。言霊の自動翻訳も働かなかった所を見ると、少なくともこの言語圏に『梅干し』と『醤油』に相当するものは無いということだ。

アウラの言葉に、善治郎は弱々しく笑い返す。

「んん、今は説明する元気ないから……後でね。食べるのはなんでもいいよ。何でも食べるから」

「……分かった。厨房に頼んで、とびきりの病人食を用意させる」

アウラは一瞬なにか言いたげな表情を浮かべたが、すぐにいつもの迫力のある笑顔に戻ると、しなやかな動作で椅子から立ち上がる。

「ん、楽しみにしている……」

寝室から出て行くアウラの背中に、善治郎は擦れた声でそう呟いた。

ボタンと音を立ててアウラが立ち去ると、薄暗い寝室には善治郎一人が残される。

「うう……」

善治郎は手探りでベッドの横の台上から、湯冷ましの入った500?ペットボトルを手にとると、キャップを開けて、口に運んだ。

「ぐっ……」

生ぬるい水を嚥下するだけで、喉がピリピリと痛む。それでも汗をかいた身体に水分を補給しなければ、どれだけ危険かは分かっている善治郎は、痛みをこらえて水を飲む。

「ふう……」

ペットボトルの湯冷ましを半分近く飲んだ善治郎は、キャップを

閉めると再びペットボトルを台上に戻した。

このペットボトルは、一度目の転移の時、こちらの世界に忘れていった自転車の籠に入っていたお茶のペットボトルである。

日本ではただの資源ゴミに過ぎないこの小さな入れ物も、この世界では貴重品だ。

軽くて、落として割れる心配がなくて、キャップを閉めれば倒してもこぼれることもない。非常に使い勝手のよい器である。これがないければ水を飲むのにも、もっと苦勞をしていた事だろう。

ひりつく痛みと引き替えに、喉の渇きを癒した善治郎は、身体から汗が噴き出すのを自覚しながら、枕に顔を突っ伏し身もだえる。

（ああ、俺、何言ってるんだ。こんな異世界で、お粥が食べたい、って俺は、聞き分けのない子供か!?!）

アウラが、空気を読む、物わかりの良い人間で助かった。もし、あのままこの場にアウラが居座ったら、次は「桃缶が食べたい」などとのたまったかも知れない。

善治郎は、自分が大した男ではないことは自覚しているが、この世界に存在しないものを欲しいなどと、子供のような我が儘を抜かす馬鹿男だとは思われたくない。

（ああ、くそ。早く治さないと、精神的に死んでしまう……）

不幸中の幸いと言うべきか。自己嫌悪に苛まされる善治郎は、しばしの間発熱のけだるさも、関節の痛みも忘れて、ベッドの上で突っ伏すのだった。

第五章2【双王国からの訪問者】

『小飛竜』と呼ばれる竜がいる。その名が示すとおり、翼竜（空を飛ぶ爬虫類の総称）の中でも、特に小柄な種で、せいぜいカラスと同程度の大きさしかないこの竜は、人間が家畜化に成功した四種類の竜の中で、唯一の翼竜種である。

『走竜』は戦力。『鈍竜』は労働力。『肉竜』は食肉。では、『小飛竜』の役割は何かというと、それは伝達力だ。

ようは伝書鳩の役割を果たしていると思えば、おおよそ間違いない。『走竜』に乗った伝令兵が直接書状を届ける伝令網と比べると、不慮の事故で書状が届かない可能性があまりに高いため、確実性には欠けるが、その速度は圧倒的だ。

走竜に乗った伝令騎兵がリレー方式でかけ続けても五日はかかる距離を、『小飛竜』ならば一日で届く。

そんな『小飛竜』が、東の国境砦から王宮に飛来したのは、その日の正午のことだった。

「東の国境から、報せだと？」

その日の午後、執務室で業務に精を出していたアウラは、ファビオ秘書官の報告を受けて、怪訝そうに首を傾げた。

「はい。先ほど、東の国境砦から『小飛竜』による報告書が届きました。こちらです」

そういつて、細面の中年秘書官は、テーブルの上に小指ほどの大きさの木の筒を三つ並べる。

中の書状は、恐らく全て同じものだ。迷子や大型飛竜に捕食される危険のある『小飛竜』通信は、同じ内容の書状を持たせた『小飛竜』を複数飛ばすのが一般的なのである。

アウラはそのうちの一つを手にとると蓋を開き、中から薄い竜皮紙を取りだし、サツと目を通した。国境砦の将軍が、わざわざ貴重な『小飛竜』を飛ばしてきた位なのだから、ある程度緊急性の高い事態が起きたのだろう。

余りよい予感がしないまま、アウラはその小さな竜皮紙に目を通し、小さく溜息をついた。

「陛下？」

「……………」

問いかける秘書官に、アウラは無言のまま手に持つ小さな竜皮紙を突き出す。元々『小飛竜』という情報伝達手段は、圧倒的な速さを持つ代わりに、敵対者に横から奪われる危険があるため、緊急性は高くても、秘匿性は低い情報に限るのが一般的だ。

アウラの腹心とも言える、ファビオ秘書官がそれに目を通すことは、さほどおかしい事ではない。

「では、失礼します」

竜皮紙を受け取ったファビオ秘書官は、その小さな紙片に目を通して、ピクリと頬肉を振るわせる。

『本日未明、東砦にシャロワ・ジルベール双王国のイザベツラ王女殿下一行が、護衛兵士三百名と共に来訪。入国許可を求めたため、条約に基づき、都市内部での武装解除を条件に入国を許可。なお、東砦からもイザベツラ殿下の護衛として、騎兵三百が同行』

そのような本文の後に、手紙をしたためた日付と、東砦の責任者である將軍のサインが書かれている。

ファビオ秘書官が一つめの竜皮紙に目を通していている間に、アウラは残り二つの筒も開き、念のため中身を確認したが、予想通りそこには一つめと全く同じ文面が記されていた。

読み漏らしが無いように、何度もその短い文章を目で追ったファビオ秘書官は口を開くと、平坦な声を上げる。

「イザベツラ殿下、ご来訪ですか。近隣諸国の王族・貴族で、殿下のお力が必要な重傷者が出たということでしょうか？」

「ああ、恐らくな。イザベツラ殿下直々となると、相当金を積んだ

はずだぞ」

イザベッラ・ジルベール。その名が示すとおり、南大陸中部の大国、シャロワ・ジルベール双王国の王家の一つ、ジルベール法王家の王女である。

王女とは言っても、現法王が六十を過ぎている関係上、彼女も四十過ぎで、すでに三人の子を持つ母なのだが、特筆すべきは彼女が法王家の中でも五指に入る『治癒魔法』の使い手だということだ。

ジルベール法王家の『治癒魔法』の恩恵にあずかるため、双王国を訪れる人間は多い。しかし、当たり前だが、怪我や病気で死ぬか生きるかの瀬戸際に立っている人間で、母国から双王国の首都まで足を運ぶことが出来る人間は極少数派だ。

では、病床から動かすことも出来ない重傷者はどうするかというと、法王家の人間を招くのである。財政担当者が青ざめるような大金を詰んで。

「殿下護衛は、三百名か。この少なさからすると、かなりの数の『魔法具』持ちがいるな」

「はい、間違いないでしょう。何処の国か分かりませんが、本格的に張り込んだようですね」

「すぐに調べろ。場合によっては、近隣諸国に政変がおこる可能性もあるぞ」

「承知いたしました」

ジルベール法王家の人間が、他国に請われて患者の元に向かう場合、通常尋常ではない数の護衛を引き連れる。

精銳の騎士が千人ぐらいが最低ラインだろうか。一見すると過剰なくらいの護衛を法王家の人間が引き連れるのは、少し考えるとすぐにその理由が分かる。

法王家の人間は、世界で唯一の『治癒魔法』の使い手だ。死の淵からすくい上げて貰った王族・貴族が、その存在を「手放したくない」と考えるのは極当たり前の事だろう。

治療にやってきた法王家の人間を軟禁して、『彼（彼女）は、我が国への亡命を希望している』と声明を上げた例が、過去何度かあったらしい。

そうした過去の教訓から、ジルベール法王家は、王家の人間の他国来訪の際には、必ず相手国が邪なを行動に出た場合、洒落にならない被害を与えられるだけの戦力を常に武装状態で入国させることを、絶対条件として持ち出すようになったのである（無論、その護衛の旅費、宿泊費も相手国持ちだ）。

しかし、軍隊というものは、その数が多ければ多いほど行軍の速度が鈍るものである。千人単位の軍隊に護られながら長期行軍を行えば、助かるはずの患者も助からないケースも存在する。

そのようなケースで切り札として投入されるのが、今アウラが言った『魔法具』持ちの騎士である。

シャロワ・ジルベール双王国のもう一つの王家、シャロワ王家が作製した『魔法具』で武装した、一騎当千の騎士達。彼等を投入することで、護衛兵士の数の大幅縮小が可能になり、その結果として行軍速度は上昇する。

つまり、護衛兵士の数が少ないと言うことは、それだけ患者の容態が切羽詰まっていたという推測が成り立つというわけだ。

「いずれにせよ、うちに向かっているということは、すでに診療は終えた帰りということだな。『時空魔法』を使うため、スケジュールを整えておくか」

「はい、よろしく願います」

アウラの言葉に、秘書官は小さく頭を下げる。

イザベッラ王女が、カープア王国を訪問する理由は明白だ。アウラに『瞬間移動』の魔法で双王国の首都に送ってもらうつもりなのだろう。

『瞬間移動』の魔法は、長時間の詠唱と多大な魔力を必要とする大魔法であるため、そう簡単に使用できるモノではないが、ジルベール法王家の王女に頼まれれば、アウラとしても否とは言えない。

『治癒魔法』の使い手に貸しを作るよい機会だ。日頃であれば、アウラとしてもむしろ歓迎すべき客である。

「問題は、婿殿だな」

アウラはそう言うのと、顎に手をやり思案する。

昨日、『森の祝福』を受けて寝込んだ善治郎は、今まさに病床に付いている真っ最中だ。

「東の国境砦となると、イザベッラ殿下が王都入りするのは五日後か？」

「おおよそ、そのくらいでしような。長引いた場合、ゼンジロウ様はまだ『森の祝福』から回復していないかも知れません」

『森の祝福』の発病期間は短くて三日、長くて七日だ。症状の重い善治郎の場合、イザベッラ王女来訪時に、まだベッドから起き上がれないでいる可能性は十分にある。

アウラは少し顔をしかめた。

「……やっかいだな。他国のものを、婿殿の部屋に入れたくはないのだが。今の内に、寝室を別に用意しておいて、最悪の場合、イザベッラ殿下来訪中は、婿殿にもそちらの部屋で過ごして頂くか」

善治郎が日頃過ごしている部屋は、善治郎が持ち込んだ電化製品で満ちている。知られたからといって即座にどうにかなるモノではないと思うのだが、出来ればあまり広めたくない情報だ。

そのためには、善治郎が別の部屋にしばらくの間だけでも移り住むのが一番簡単な解決方法だ。元々、複数の女が暮らすことを前提に立てられた後宮に、現在は善治郎しか住民はいないのだから、空き部屋はいくらでもある。

「それが無難でしょうな。どう考えても、イザベッラ殿下の見舞いをお断りする必然性はありません」

確かに『森の祝福』は死病ではないし、病気に強い身体を得るためには『治癒魔法』で快癒してもらうのは断った方が良い。しかし、『治癒魔法』の中には、『体力回復』や『精神快癒』のような、病気を直接治さず、患者を苦しみを和らげる簡易魔法も存在するのだ。

イザベツラ王女が見舞いをしたいといえば、断るという選択肢はない。

「となると、場合によっては熱でうなされた状態の婿殿と、イザベツラ殿下を会わせることになるのか」

発病中の善治郎は、本人が言うとおり少し刺々しく攻撃的になっている。イザベツラ王女は、見た目は少し恰幅の良い上品な中年女性ではないが、中身は三十年以上『癒し手』として働いてきた、生粋のジルベール法王族だ。

病床の人間が無礼な言動を取った所で、それを本気にしないくらいの度量は持ち合わせているが、その言動から情報を吸い取ろうとするようなしたたかさも併せ持っている。

「面倒な事にならないと良いのだが……」

呟くアウラ自身、何の問題も起こらない可能性は低いことを、半ば覚悟していた。



それから六日後。

アウラは、王宮の私室にイザベツラ王女を迎え入れ、談笑と言う名の私的な会談の場を設けていた。

イザベツラ王女一行が、カープア王宮に到着したのが昨日の夕刻のこと。公的な顔会わせは、今日の午前中に謁見の間で済ませてあるが、公的な場ではお互い自由な言葉は紡げない。

ゆえに、イザベツラ王女の第一声は、このような物になるのだった。

「ご無沙汰しております、アウラ陛下。まずは、ご結婚おめでとうございます」

革張りのソファアに膝を揃えて座った少し太めの中年女性はそう言っていると、洗練された動作で小さく頭を下げる。

謁見の間では、互いにガッチリとした正装に身を固めていたアウラとイザベツラであるが、この場ではすでに装飾の軽いドレスに着替えている。

アウラは、濃紅のノースリーブロングドレス、イザベツラは白い比較的ゆったりとした半袖のドレス姿だ。

カープア王国では、白いドレスは少女の特権で、ある程度年のいった淑女は遠慮するもののだが、双王国では白は、ジルベール法王家の象徴色である。よほどのことがないかぎり、法王家の人間は白を基調とした服を纏う。

色合いだけでなく、ドレスの形も、カープア王国の一般的なモノとは随分と違う。カープア王国ではスリットの入ったロングドレスが一般的なのだが、イザベツラのドレスはフレアスカートで、胸元の開きも極小の作りになっている。

胸の谷間が見えるくらい首回りが空いているのが一般的な、カープア王国のドレスとは対照的だ。

同じ南大陸でも、双王国がある中央部は、カープア王国がある西部ほど暑くないことが関係しているのかも知れない。

「ああ、おかげでつつがなく式を終えることが出来た。双王国からはご立派な祝いの品を頂き、恐縮のしだいだ」

そう答えるアウラは頭を下げず、むしろ胸を張る。年齢こそ、イザベッラ王女が十歳以上上だが、肩書きは一国のトップであるアウラが圧倒的に上だ。イザベッラ王女は、あくまで数いる王族の1人に過ぎない。

イザベッラ王女は、口元に小さく手を当てて上品に笑う。

その仕草は、王族というより、上品な商家のマダムといった雰囲気である。

「気に入って頂けたのなら、幸いですわ、陛下。本来ならば私個人からも引き出物を持参するのが礼儀なのでしょうが、この度は緊急の事態だったので用意がなく……この埋め合わせは、後日必ずさせて頂きます」

「埋め合わせはその『緊急の事態』についての内容を聞かせてもらう、というわけにはいかないのだろうか？」

アウラの少し挑発的な言葉を、イザベッラ王女は毛ほどの動揺も見せずに受け流す。

「はい。いかな陛下のご要望とあっても、『癒し手』の信用にかか

わかりますので、そのぎはご容赦願います」

柔らかな笑みと、柔らかな口調で紡がれたのは、断固とした拒絶の言葉だ。

まあ、それはそうだろう。いつ、誰が、どこで、どのような、傷病を患った。そういった情報をペラペラ吹聴されるようでは、恐ろしくて誰も治療を頼めない。漠然とではあるが、現代社会で言うところの『医者守秘義務』に近いモラルを、ジルベール法王家の間は持ち合わせている。

最初からイザベッラが首を縦に振るはずはない事を分かっているアウラは、すぐにその話を切り上げた。

「そうか、それは残念だ。ああ、そういえば、殿下には一つ見てもらいたい品があるのだ」

それからアウラは、さも今思いついたかのような顔でそう言う、テーブルの上のベルを鳴らす。

恐らく、ドアの外でずっと待機していたのだろう。すぐさま、ドアが開かれ、ファビオ秘書官が姿を現す。

「お呼びでしょうか」

「ああ、私とゼンジロウ殿の『指輪』と、『あれ』を持ってきてくれ」

「はっ、畏まりました」

ファビオ秘書官は、一礼するとすぐさま退室する。

「指輪？」

小首を傾げるイザベツラ王女に、アウラは意味深に微笑み返す。

「ああ。婿殿の国では、婚姻の際、男から女にペアの指輪を贈る風習があるのだそうだ。その指輪をせっかくだから、何らかの『魔道具』にしてもraitたい」

「あら、素敵。ええ、そういうことなら、私が責任持ってお預かりますすとも。私の方からシャロワ家に依頼する際、一言そえておきます」

「よろしく頼む」

そんな会話を交わしていると、入り口のドアがノックされ、銀のトレイを右手に持ったファビオ秘書官が戻ってきた。

「失礼します、お持ちいたしました」

「ご苦勞、それをおいたら下がって良い」

「はっ」

ファビオ秘書官は、アウラとイザベツラが向かい会って座るテーブルに銀のトレイをおくと、一礼をして退出していく。

トレイの上には、二つの指輪と二つの巾着袋が乗せられている。巾着袋を目にしたイザベツラ王女は、少し怪訝そうな顔をしたが、

その視線が指輪に向けられると、次の瞬間には目を大きく見開き驚きをあらわにする。

「これはっ」

「手に取ってみてくれ、どうだ？ 忌憚ない意見を聞かせてくれ」

ニヤリと笑うアウラの言葉を受けて、イザベッラは指輪の一つをその手に取り、窓から差し込む陽光にさらした。

異世界の陽光を浴びた、地球産の指輪が、キラリと黄金と金剛石の輝きを放つ。

善治郎がアウラに贈った結婚指輪。それは、幅の広いダイヤの指輪である。

イエローゴールドの土台に、ブリリアントカットにカットティングされた無色透明の小粒なダイヤが三つ並べて、埋め込まれている。

本当ならば、店員が進めるとおり、アウラの目や髪の色に合わせてピンクダイヤを、とも考えていた善治郎であったが、色合いの濃いピンクダイヤは驚くほど高い。ほのかに赤みを帯びている程度のものではあれば、善治郎の予算でも手が出るものもあったのだが、色に妥協するくらいならば、と結局善治郎は無色透明のスタンダードなダイヤを選んだ。

「何と見事な……この石は水晶ですか？」

「いや、ダイヤだそうだ」

「ダイヤ！？ ダイヤをこの様に？」

イザベツラ王女が淑女にあるまじき、驚きの声を上げたのも無理はない。

この世界にダイヤという石は存在しているが、それを加工する技術は、まだ存在していないのである。

ましてや、光の入射角、反射角を計算して、もっとも強く美しい輝きを放つように多面体カットを施すなど、卓越した技術者でも出来ることではない。

宝飾のカッティング技術というのは、精密な機械の進歩と共に歩んできた道のりだ。

同じ事は、土台の金属部分にも言える。

「これは、一体どのようなにしてこれほどに細かい揃った線を描き出したのか……」

ファッション性の高いその結婚指輪には、シンプルであるが細かなラインが、ちょうど漫画の書け網のように無数に堀られている。イザベツラ王女の母国であるシャロワ・ジルベール双王国は、宝飾に関しても大陸有数の先進国であるが、それでもこれと同じものを再現できる人間はいないだろう。

総合的な芸術性ということに関して言えば、この世界の宝飾技術も決して負けていないのだろうが、もっと単純な技術の問題として、これは再現が不可能だ。

世界一の書道家に、パソコンでプリントアウトするより揃った字を書け、と言っているようなものである。

イザベツラ王女の反応に、アウラは自分の予想が外れていなかったことを悟り、内心胸をなで下ろした。

（やはり、ちょっと目の利く人間に見せれば、目の色を変える代物だったか）

あの結婚式の夜、初めて身体を重ねた後、善治郎から送られたその指輪を見た時、アウラも今のイザベツラ王女と大差ない、驚きの声を上げたものだ。

あまりに精密な加工。どの角度からもキラリと眩い光を放つその三つの石。

ベッドから降りて嬉しそうに差し出す善治郎に、一度はその指輪を左手の薬指に填めて貰いながら、アウラはすぐに善治郎に理由を話し、自分も善治郎も、日頃はその指輪を填めないように説得をしたのだった。

その輝きは、あまりに強すぎる。アウラが日頃、この指輪をしていれば、目ざとい貴族達は即座に目をつけて、指輪の出所を聞き出したことだろう。

そうなれば、否応なく送り主である善治郎に注目が集まる。あの時点で、善治郎が下手に注目を集めれば、社交界デビューのタイムリミットが外圧によって繰り上がっていたかも知れない。

気にしすぎの気もしたアウラであったが、イザベツラ王女の反応を見ると、どうやらアウラの心配は当たらずとも遠からずだったようだ。

やがて、ニヤリと笑ってこちらを見ているアウラに気づいたイザ

ベッラ王女は、取り繕うようにオホホと笑うと、指輪を銀のトレイに戻す。

「あ、失礼いたしました、陛下。すっかり魅入ってしまつて」

「見事なものだろう。それを、魔道具にして貰いたいのだが」

「ええ、これほど見事な品でしたら、シャロワ家の者も気を入れて仕事に掛かってくれると思いますわ」

一般的に魔法具とする品は、武器の次に宝飾品が多い。その関係上、『付与魔法』を操るシャロワ王家の人間は、必然的に宝飾品を見る目も肥えている。

「ふむ、こういった魔法を込めるかはまだ決めていないのだが、何か良い案はあるか？」

「そうですね。どれほど見事な品でも、やはり小さな宝飾品ですから、あまり大魔法は込めない方がよろしいかと存じます。基本的なところでは『発火』『耐火』『水作製』などでしょうか」

「『快癒』とまで贅沢は言わんが、『体力回復』くらいは無理か？」

「五回も使えば、その指輪が灰になっても良いのでしたら、可能ですか？」

「む……」

その後もしばらくの間話し合うアウラであったが、中々ピンと来る魔法が思いつかない。どのみち、イザベッラはしばらくカープア

王宮に滞在するのだ。今この場で決める必要はない。

話が一段落したところで、指輪をトレイに戻したイザベツラ王女は、ふとトレイにのっている二つの巾着袋に目をやった。

「そういえば、陛下。こちらの袋には、何が入っているのでしょうか？」

イザベツラの言葉に、アウラは大きい方の巾着袋をトレイから取り上げると、楽しげな笑みを浮かべ、その口を開く。

「ああ、これも婿殿の私物なのだがな。せっかくだから、イザベツラ殿下に鑑定をお願いしたいと思い、持ってきてもらったのだ。殿下は、宝飾品に関しては一言あるのだろうか？」

「それは、仮にも双王国の王族ですから、人並み以上には詳しいつもりですが、シャロワ家程ではありませんよ」

そう言葉を返すイザベツラも、その視線は興味津々に、アウラが持つ巾着袋に向けている。

アウラの言葉から推測するに、あの巾着の中身は、宝飾品の類のようだ。しかも、この見事な指輪を作った国から来た人間の持ち込んだ代物だ。

いやが上にも期待は高まる。

イザベツラの視線を指先に感じながら、巾着袋の口を開いたアウラは、巾着の口に中指と親指を差し込み、その中身を一粒取り出す。そして、コトリと音を立てて、中指と親指で摘んだ『それ』をトレイの上に置いた。

ビー玉だ。

無色透明のガラス玉に、色ガラスを封じ込めた、一番シンプルな昔ながらのビー玉が、コロコロと銀のトレイの上を転がる。

「ッ!？」

その輝きを目の当たりにしたイザベッラ王女は、指輪を手にとったときより大きく目を見開くのだった。

第五章3【ビー玉と金貨】

指輪を見た時の驚きが、「隠す気のない驚き」だとすれば、今イザベツラ王女が浮かべているのはさしずめ「隠すことに失敗した驚き」と言うべきだろうか。

イザベツラ王女は、一瞬「しまった」という表情を浮かべた後、すぐにいつもの柔和な顔つきに戻る。

「失礼しました。それにしても、驚きました。これは、一体何なのでしょうか？」

銀のトレイの上で転がるビー玉に視線を向けたまま、イザベツラ王女はさも驚いたような口調でそう言った。その「驚き」は、取り繕った驚きで、最初にビー玉を目の当たりにした時のような、生の感情としての「驚き」ではない。

予想を超える大きな反応を見せたイザベツラに、内心訝しみながらアウラは、笑顔の奥に感情を隠し、言葉を返す。

「驚いたであろう？ これも媚殿が持ち込んだ品だ。水晶でも、もちろん金剛石でもない。ガラス、というモノらしい。水晶などと比べれば随分脆く、割れやすいのだそうだ」

脆い、という言葉で、そっとビー玉に手を伸ばし掛けていたイザベツラ王女は、ピクリとその手を止める。

アウラは少し笑うと、

「ああ、脆いとは言っても、高所から固いところに落とすと割れるという意味だ。普通に手で持って傷が付くことはないし、このように下が絨毯であれば、落としてもまず問題はない」

そう付け加える。

「そうですか。では、手に取ってみてもよろしいでしょうか？」

「うむ。よく見てくれ」

アウラの許可を得て、そっと三本の指でビー玉を摘んだイザベッラ王女は、それを先ほどの指輪と同じく日の光にかざし、ホッと恍惚の息を吐く。

「素晴らしいですわね……」

「率直にきこう、イザベッラ殿下。それを融通すると言えば、貴女はそれ一つに、いくら値をつける？」

何らしかの意図があるのか、驚くほど率直に切り出すアウラに、イザベッラは視線を正面に戻すと、取り繕うように一度咳払いをした後、問い返す。

「つまり陛下は、この宝玉をお売りする心づもりがある、と？」

偉く真剣な面持ちのイザベッラに、アウラは小さく笑い返すと、

「いや、元々それは婿殿の私物だからな。勝手に全て売り払うわけには行かぬ。しかし、なにせ元々この世界に存在していない代物だ。価値を知るために、幾つか手放す許可はもらっている」

そういつて首を横に振った。

宝飾品のような、生活必需品でも、軍事的に価値のあるモノでもない品というのは、価値が定まっているようで定まっていない。特に、ガラス玉はこれまでこの世界には存在しなかった代物だ。

アウラや善治郎が、いくら主観で「これは価値があるモノだ」と思っているても、外に出して一般的な評価を得なければ、正しい価値はつけられない。

そう考えれば、一つ二つ世に出して、その価値を確立させるといふアウラの発想は、そう奇をてらったモノではない。その意見を求める相手として、イザベツラ王女を選んだのも悪くない選択だ。

しかし、そのイザベツラ王女は、真面目な表情でアウラが耳を疑うようなことを言っている。

「そうですね。仮に私がこの宝玉を買い取ることが出来るのだとすれば、私は金貨30枚をお支払いします」

金貨30枚。

予想外の金額に、絶句しかけたアウラであったが、それでもどうか表情には出さず、短い言葉で問い返す。

「……本気で言っているのか？」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙の後、イザベツラ王女は観念したように小さく肩をすくめて答える。

「……分かりました。では、金貨50枚。流石にこれ以上の値をつける者は、いないと存じます」

いつの間にか、仮定の話ではなく、今この場で商談を行っているように、イザベツラ王女はそう言って、一気に金貨20枚の上乗せを提案した。

今度こそ、アウラは驚きを完全には隠しきれなかった。

ビー玉一つに金貨30枚でも『過分』だと感じ、「本気で言っているのか？」と問いかけたのに、まさか更なる上積みを提案されたのだから、驚くのも無理はない。

まさか、アウラの「本気で言っているのか？」と言う言葉を、「そんな安値で買いたたくつもりなのか？」と言っているように誤解してしまったのだろうか？

そう思ってアウラがイザベツラ王女に探るような視線を向けると、イザベツラ王女はそのふっくらとした上品な顔に、にっこりと優しい笑みを浮かべてこちらを見ている。

その笑みを見たアウラは確信した。

（いや、違うな。イザベツラ殿下が、あれだけ分かりやすい言外の意図を、察し間違えるとは考えがたい。ということは、この値上げはわざとか。たかが宝玉一個にそこまで法外な値をつける意味はなんだ？）

金貨50枚という金額は、それだけ常識外なのだ。

分かりやすい例を挙げれば、騎乗用の『走竜』は金貨1枚で購入できるし、戦闘用の訓練を受けた『騎士用走竜』でも金貨2、3枚も出せば、それなりのモノが手に入る。

さらに、領地を持たない中小貴族の邸宅の売買価格が、およそ金貨50枚から金貨100枚の間だといえば、いかに珍しい見事な代物だとはいえ、宝玉1個の値段として金貨50枚というのがいかに破格であるか、分かるだろう。

無論、宝飾品の中にはそれくらいの値がつくものも珍しくはないし、もう一桁上の品も存在するにはする。しかし、アウラの見立てではこのビー玉という代物は、そこまでの価値はないように思える。

何かがおかしい。

そう感じたアウラは、情報を得るため、もう一つの中着袋に指を入れると、そこから数粒のビーズを取りだし、銀のトレイに乗せる。

「では、これはどうだ。こちらの中々面白い代物だと思うのだが」

赤、青、緑。綺麗に透き通った色とりどりのビーズは、十分に人目を引く品であったが、イザベッラ王女の反応は、ごく一般的な範囲に留まった。

「まあ、こちらも素敵ですわね。粒も揃っている上に、真ん中に小さな穴が空いているんですね。色々面白い使い方が出来そうですね」
褒め称える言葉にも、うっとりとしたその視線にも偽りはなさそ

うだが、ビー玉を見た時のような驚愕の色は見えない。

「美しいだろう。それに面白い。そのまま、糸を通せば、首飾りに出来そうだ。こちらは、どれくらいの値が相応だと思う？」

「そうですわね。見た目の良さは一目で分かりますが、大きさが大きいですし……一粒、銀貨10枚といったところでしょいか」

ふっくらとした顎に手を張り、イザベツラ王女が提示した値段は、アウラの予想とそう大きく外れたモノではなかった。

ちなみに、場所や時代による細かな差異を省けば、金貨1枚はおおよそ銀貨100枚の価値がある。王都で働く日雇労働者の賃金がおおよそ銀貨3枚から5枚だ。

ビー玉は一つに金貨50枚。銀貨に換算すれば、5千枚だ。一方、ビーズは一粒で銀貨10枚。

つまりイザベツラ王女は、ビー玉にビーズの500倍の価値を付けたというわけになる。

重量比で見れば確かにそれくらいの違いはありそうだが、アウラには、ちよつとビー玉の値付けが過剰に思えてならない。

ビーズの値が予想通りだった分、ビー玉の値の異常さがよりいっそう際立つ。

（それにしても、ここまであからさまな値付けをすると言うことは、隠す気はないという意味表示だろうな。少し試してみるか）

「なるほどな。いや、参考になった。礼として殿下にお一つ進呈し

よう。好きなモノを一つ選ぶがよい」

アウラはそう言って、わざとらしい仕草でビー玉の入っている巾着袋を持ち上げると、そっとその中身を銀のトレイの上にぶちまけた。

何十というビー玉が、銀のトレイの上をコロコロと転がす。

「まあっ」

口元に手を当てて、驚きの声を発するイザベツラ王女の視線の先を、しっかりと確認しつつ、アウラはにこやかに笑い、言葉をかける。

「ささ、遠慮は無用だ。手にとってよく確かめた上で、好きなモノを選ぶがよい」

銀盤の上にひしめくビー玉。中に色ガラスを封じたスタンダードなモノ、表面が曇りガラスになったモノ、綺麗なマール模様モノ、さらには地球儀を模した簡単な大陸図が描かれたモノ。

それらが一つのトレイに盛られている様は、確かに『宝玉』と言っても差し支えがないくらいに、見栄えがする。

「……………」

「……………」

アウラの視線から、自分のの出方を窺っていることを察したのだろう。イザベツラ王女は、一度肩をすくめると、トレイの上からビー玉を一つ摘み上げる。

「では、お言葉に甘えて、これを頂きます」

イザベッラ王女が手に取ったのは、模様も何も入っていない、限りなく無色透明に近いビー玉だ。

「それで、残りの宝玉ですが」

「分かっている。全ては媚殿の意向次第だが、もし媚殿が手放す意思を示すことがあれば、その時は必ず殿下に最初に声を掛けよう」

「お願いします」

アウラの言葉は、イザベッラ王女にとっても満足のいくものだったらしく、王女はフワリと笑い、丁寧に頭を下げる。

それからイザベッラ王女は、窓から差し込む日の影に目をやると、さも今思いいったったような顔で言う。

「ああ、不作法にも、すっかり話し込んでしまいました。陛下、宝玉の礼と言っては何ですが、陛下の夫君のお見舞いを許可して頂けないでしょうか。少しはお力になれると存じます」

「もちろん、大歓迎だ。ジルベール法王家の見舞いを断る者など、この大陸にいるはずがない。用意ができ次第、後宮に案内するので、それまでは隣室で休んでいてくれ」

「承知いたしました。それでは、失礼します」

最後は笑顔で会談を終えたイザベッラ王女は、洗練された動作で立ち上がると、小さく礼をし、隣室へと下がっていった。



「……というわけで、イザベツラ殿下は、丸い大きな宝玉に金貨50枚、小粒の穴の空いた宝玉に銀貨10枚の値をつけた。お前の率直な意見が聞きたい」

イザベツラ王女が隣室に下がるのと入れ替わるようにして姿を現したファビオ秘書官に、先ほどの会談の内容を打ち明けたアウラは、そう言って秘書官の意見を求めた。

「金貨50枚ですか。いささか、高値が過ぎる気がしますな」

ピクリと眉を跳ね上げてそう言う秘書官に、アウラは不機嫌さを隠さない声をぶつける。

「ファビオ、言葉は正確に使え。お前は、本当に金貨50枚という値が、「いささか」高値が過ぎる程度だと言うのか？」

「……失礼しました。訂正します。予想を遙かに超える高値ですな」

不快げな主の声に全く怯むことなく、ファビオ秘書官は謝罪と訂正の言葉を並べ、小さく頭を下げる。アウラとしても、このような些細な言葉使いに、何時までもこだわる気はないのだろう。

すぐに、冷静な表情を取り戻すと、ソファアの前に立つ秘書官の鉄面皮を、ソファアの上から見上げながら、会話を続ける。

「おかしいだろう。それどころか殿下は、この指輪よりも、宝玉に大きな反応を示したのだぞ」

アウラと善治郎の結婚指輪。細かな細工の施された金の台座に、金剛石というこの世界では研磨方法が確立されていない石が飾られたその宝飾品は、誰が見ても一目で分かる美しさだ。宝飾品に関して、何の知識の無い人間が見ても、普通はビー玉よりこちらに価値を見いだすだろう。

「はい。何より、あのイザベツラ殿下がそこまであからさまな態度に出たことが、不可解です」

ファビオ秘書官はそう言って、主の意見に同意を示した。

イザベツラ王女は、どちらかという人と人が良いことで通っている人物ではあるが、それでも四十年以上大国の王族として、宮廷社会を生き抜いてきた人物だ。

あからさまに物欲しげな言動を取れば、相手に付け込まれる。そのくらいの常識は持ち合わせているはずだ。

それなのに、あえて金貨50枚という馬鹿げた金額を提示してきた。

「イザベツラ殿下は特に新しい物好きでもなければ、浪費家でもなはずだ。ならば、イザベツラ殿下にとって、金貨50枚という金

額は、適正な価格であると言うことになる」

「もしかすると、競合相手を想定しているのかも知れません。この宝玉の存在を知れば、イザベツラ殿下と同等か、それ以上の金額を出す存在に心当たりがあるのだとすれば、この不可解な高値も納得がいきます」

「いずれにせよ、ただの宝飾品と見なしているという線はないな」

「はい、それは確實でしょう。詳細は全く想像もつきませんが、その宝玉に何らかの高い利用価値を見いだしたのだと、考えてよろしいかと」

「ふむ……」

アウラはソファアーの上で腕を組み、イザベツラ王女の反応を思い出す。

アウラがトレイの上にビー玉を纏めてばらまいたとき、イザベツラ王女の視線は最初からあの無色透明なビー玉に向けられていた。それが偶然や、イザベツラ王女の意図したミスリードではないのだとすれば、宝玉の色や透明度に何らかの価値があるのかも知れない。しかし、そうだとすると、それは水晶で代用が可能な物に思える。

「駄目だな。情報が少なすぎて、当て推量にしかならん。後で、爺の意見を聞いてみるか」

「それがよろしいでしょう。私や陛下にはない知識も、エスピリデイオン様ならばあるかもしれません」

筆頭宮廷魔術師であるエスピリディオンは、カープア王国随一の魔術師であると同時に、多方面の知識を持つ賢者でもある。あの老魔術師ならば、なにかヒントとなる知識を有しているかも知れない。

「そうだな。爺に話を通しておいでくれ。今夜にでも知恵を借りたい、とな」

「承知いたしました」

ファビオ秘書官はそう答えて、丁寧に頭を下げる。

「それにしても、一つ金貨50枚か。全て同じ値が付くのだとすれば、婿殿はこれだけで金貨2500枚近い資産を有していると言うことになるな」

それだけあれば、小さめの砦が一つ建つ。

「はい。イザベッラ王女がその宝玉にどのような価値を見いだしたのか、詳しい事情を知らないまま売り払うのは危険ですが、もしこちらに実害が出ないものであれば、ゼンジロウ様のご自由にされてもよろしいかと、存じます」

「ああ、商売相手として、双王国の王家は掴まえておきたいところだからな。なにせ、支払いが全て新造金貨だ」

「はい。失礼を承知で申し上げるのならば、ゼンジロウ様が入手した金貨を国庫の大型銀貨と交換して頂きたいくらいです」

「率直すぎるぞ、それは」

中年秘書官の言葉に、アウラは思わず苦笑を漏らす。

現在、南大陸で金貨を鑄造している国は、二カ国しかない。シャロワ・ジルベール双王国は、その二カ国の一国であり、カープア王国は残念ながらそうではない。

カープア王国の領内には金山は存在せず、辛うじて幾つかの河川から砂金が取れる程度だ。とてもではないが、毎年定期的に金貨を鑄造できるほどの、金は取れない。

その代わり、銀山に関しては南大陸でも有数の数と質を保有しているため、通常の銀貨の25倍の価値を持たせた、純度の高い『大型銀貨』で諸外国との取引を行っているのだが、それでもカープア王国の大型銀貨の価値は、双王国の金貨の4分の1程度である。

そのため、国内に流通している最高値の通貨が、自国産ではないという問題は、解消されないままなのだ。

ならばせめて、いざという時のために、国庫に双王国の金貨を大量に蓄えておく必要があるのだが、カープア王国は先の大戦を乗り越えたばかりだ。国庫の中身はかなり寒い。

最悪、銀貨で双王国から『金貨を買う』という案も真剣に議題に上がりつつある状況である。例えば2000枚程度の金貨でも、十分魅力的に映る。

とはいえ、ここで話し合っても、これ以上進展することはない。

「よし、ではこの話は夜、爺を呼ぶまで保留だ。これ以上、イザベツラ殿下をお待たせするわけにも行かないからな。殿下を後宮にお通しする。そっちの準備は出来ているか？」

「はい。いつでもお通し可能です」

ファビオ秘書官の返答に、アウラは「よし」と一つ頷くと、ソファーから立ち上がる。

イザベッラ王女は大切な賓客で、善治郎の見舞いも、表向きは彼女の「善意からの行動」ということになっている。あまり待たせては、失礼に当たる。

「では、行くか」

立ち上がったアウラは、自らイザベッラ王女を後宮に案内するため、隣室のドアをノックするのだった。

第五章3【ビー玉と金貨】（後書き）

本作のヒロイン、女王アウラのイラストをいただきました。

t o k u m e i 様、ありがとうございました。

第五章 4 【治癒術士の見舞い】

善治郎が『森の祝福』を発病してから今日で6日。

昨日から急きょ移動させられた、後宮の一室で、善治郎はベッドの上で寝汗をかいていた。

すでに熱は37度の中盤くらいまで下がっているし、喉の腫れも収まり食欲も戻ってきている。

一昨日までは、鶏肉とくせない葉野菜の細切れスープを啜るのがやっとだったが、今朝は甘じょっぱいアンをかけたマッシュポテトのような料理も食べることが出来た。善治郎にはジャガイモの親戚に感じだが、実際には蒸かしたバナナを潰した料理らしい。宮廷料理と言うより、庶民料理のたぐいなのだが、比較的胃腸に優しく、栄養価が高いため、病人食に向いているのだという。

医者の見立てでは、一両日中には完治するだろうとのことだ。

善治郎自身、身体が格段に楽になったという実感がある。しかし、この数ヶ月で住み慣れた本来の寝室から、電化製品が一切無い別な寝室に移され、一人新品のベッドに横たわっているのは身体が休まる気がしない。

それでも、闘病で体力の衰えた体は眠りを欲する。過ごしやすくなったとはいえ、昼間は30度を超える熱気の中、ウツラウツラと船をこぎ出していた善治郎の意識を、まどろみの中から引き戻したのは、額に乗せられた柔らかい手の平の感触と、聞き覚えのない女の声だった。

「だいぶ熱も下がっているようですね。これならば、一両日中には

日常に戻れるようになるのではないでしょうか」

「……んあ？」

うつすらと目を開いた善治郎の視界に飛び込んできたのは、自分の額に手を乗せて、柔らかな笑みを浮かべる、上品そうな中年女性の姿だった。

「……誰？」

半覚醒状態のまま、善治郎はポツリとそう言葉を漏らす。

真っ直ぐな淡い栗色の長髪。目元に優しげな皺を寄せた、焦げ茶色の瞳。そして、生来のモノではなく日焼けによって色の付いた肌。アウラ達、カープア王国人はラテン系と黒人のハーフのような外見なのに対し、この中年女性は、より西洋人に近い顔立ちと色彩を持っている。

あきらかにカープア王国の人間とは人種が違う。記憶力にはあまり自信のない善治郎だが、これだけ特徴的な人間を見かけていたら、絶対に覚えているはずだ。

異国の中年婦人――イザベッラ王女は、善治郎の額にのせていた手を外すと、椅子から立ち上がり、ドレスの裾を摘んで優雅に礼をする。

「お初にお目にかかります、ゼンジロウ様。シャロワ・ジルベール双王国18代法王、ベネディクト4世が第3子、イザベッラにございます」

「こ、これは丁寧なご挨拶を、私は……」

大国の王女という国賓との遭遇に、慌ててベッドから身体を起こしかける善治郎を、イザベツラ王女は慣れた手つきでそっと制すると、

「そのままです。ゼンジロウ様のお体はまだ回復してはおりません」

そう言って、善治郎に身体を戻すように訴える。

言われて善治郎は気がついた。

「え？ あれ？ そう言えば、凄く身体が楽な気がする」

ずっと寝ていたため、身体全体に力が入りづらいような違和感が残っているが、寝る前まで全身を蝕んでいたけだるい疲れや、霧が掛かったような鈍い頭痛は綺麗さっぱり消え失せている。

イザベツラ王女はにこやかな笑みを浮かべたまま、身体を起こしかけていた善治郎の肩に片手をそえ、ベッドへと押し戻す。

「ゼンジロウ様、起きてはなりません。身体が楽になっているのは、私が先ほど施した『体力回復』と『精神疲労除去』の効果です。『病魔快癒』を使っても良いのですが、せっかくの『森の祝福』ですからね。自力で克服しなければ祝福の効果は得られませんから、あえてそのままにしておきました」

「は、はあ……なるほど」

言われてみれば、体力は回復しているものの、身体はまだ火照っ

ている。病氣から完全に回復したわけではないようだ。

（ああ、そう言えば、昨晚見舞いに来たとき、アウラが言ってたな。双王国の王女様がお見舞いに来るから、部屋を移ってくれって）

一通りの事情は、前もって聞かされていた善治郎であるが、なにせ昨日までは38度を超える熱を出していた身だ。細かな説明を覚えていないのも、無理はない。

（ええと、確か身分的にはこっちが上だけど、今回『治癒』の見舞いを受けた立場だから、下手に出ても問題はないんだっけ……？）

冷静になってみると、椅子に腰を掛けるイザベツラ王女の後ろに、アウラが立ってこちらを見守っていることに気づく。

こちらの視線に気づいたアウラは、こくりと小さく首を縦に振った。

（あれは、あまり細かい礼儀作法は気にしなくて良いって意味かな？）

何となく、アウラの意図を察した善治郎は少し気を楽しんで、ヘッドボードに頭を乗せ、上半身を少しだけ起き上がらせた体勢で、イザベツラ王女の方に首を向ける。

「ありがとうございます、イザベツラ殿下。おかげで随分と楽になりました」

「いえ。大したこともありません。後は、安静にして滋養のある物を取れば、明日には起きられるようになっていくと思いますよ」

「はい、ンッ」

まだ微熱があるのに、寝起きのまましゃべり続けてたせいか、返事を返す善治郎の語尾が擦れ、小さく咳を漏らす。

「ゼンジロウ、ほら水だ」

すかさず、後ろに立っていたアウラが小さな銀の吸い飲みを手に取ると、寝ているゼンジロウの口元に近づけてやる。

「ああ、すまん」

この数日で、アウラの世話になることになれてしまった善治郎は、特に恥ずかしがることもなく、アウラが手に持つ吸い飲みで口を付けて、水を飲ませてもらう。

ぬるい湯冷ましで喉を潤した善治郎は、全身から心地よく汗が噴き出す感触を覚える。

「ふう……」

「もうよいのか？」

「うん、楽になった。ありがとう」

ごく自然に、仲睦まじいところを見せつけられたイザベツラ王女は、口元を右手で覆い、小さな笑い声を上げる。

「お噂は聞いておりましたが、お二人は本当に仲がよろしいのですね」

「あ……これは失礼」

「まあ、仲が悪いよりは良いだろう？」

部外者の視線を意識した善治郎が少し恥じらうのとは対照的に、アウラはニヤリと笑い、胸を張ってそう言っている。

「確かに、それはその通りですわね」

アウラの返答に、イザベツラ王女は同意を示し、コロコロと笑った。

世間では誤解されがちだが、王族貴族の世界でも、「仲の良い夫婦」というのは決して珍しいものではない。王族の結婚は、当事者の感情よりも家のつながりや、権勢のパワーバランスが考慮されるというのは紛れもない事実だが、だからこそ当事者達は互いの関係を円満にするため、努力を重ねる。

利害が致命的にぶつかり合わず、互いに歩み寄る心構えがあれば、結婚後に愛情を育んでいくことも、決して不可能ではない。

だが、だからこそ、アウラと善治郎のように、婚姻から半年もしないうちに、このような息の合った仲睦まじさを見せるケースは非常に珍しい。

（よほど相性が良かったのかしら？）

イザベツラ王女は、穏やかな笑みの奥に鋭い観察眼を隠し、アウラと善治郎の様子を見守る。

「そういえば、ゼンジロウ様はアウラ陛下とご結婚するため、世界を超えてきたのでしたね。言ってみれば世界を超える愛、ということでしょうか？」

「えっ？ あ、ああ、そうですね」

イザベツラ王女の口から出た「世界を超えて来た」という言葉に一瞬驚いた善治郎であるが、ちよつと考えてすぐに落ち着く。

カープア王家の血統魔法が『時空魔法』であることは周知の事実だし、大国カープア王国の女王にして唯一の王族となったアウラの婚姻に関しては、各国の王侯貴族が目を皿のようにして注目していたはずだ。

そう考えれば、突如降ってわいた伴侶である善治郎の素性など、ばれていない方がおかしい。

そんな風に納得してしまったからだろうか。善治郎は、つい口を滑らせる。

「150年前、異世界へ愛の逃避行を果たした子孫が、こうして婚姻の為に戻ってきたのですからね。そう考えれば、感慨深いモノがあります」

「なるほど……150年前にそのような事が……」

感心したような口調でそう相づちをうつイザベツラ王女に、水差しをテーブルに戻したアウラが、冷静な口調で口を挟む。

「あくまで噂だ。150年前、記録より抹消された直系王族がいた

のは事実だが、その者が異世界に逃亡したという記録も、ましてやゼンジロウがその直系である証拠もない」

「……ええ、そうですわね。失礼しました。つい、年甲斐もなく、ロマンチックな恋物語に浮かれて軽率な発言をしてしまいました。そもそも、治りかけとはいえ、患者と長話をする事自体あまり褒められた行為ではありませんわね。」

ゼンジロウ様、アウラ陛下。私はこの辺りで失礼します」

「ああ、そうだな。我が夫のため、貴重な力を使って頂き、礼を言う。ありがとう」

席を立つイザベツラ王女を、アウラ自ら先導し、仮の寝室の外へと導く。

「ありがとうございました、イザベツラ殿下。おかげで楽になりました」

善治郎は言いつけ通り、ベッドに身体を横たえたまま、立ち去る女王と王女の背中に、そう礼の言葉を投げかけたのだった。



その日の夜。

アウラは、腹心である、ファビオ秘書官と、筆頭宮廷魔術師エスピリディオンを、王宮奥の王家の私室に招き、秘密の会談を設けていた。

王宮の中では狭い部類に入る、その部屋を照らし出すのは、燭台の上で燃える蠟燭の炎である。

赤い炎の灯りに照らし出されたアウラは、意匠を凝らした飾り椅子の上で足を組むと、左斜め前に立つ、ファビオ秘書官に話を振る。

「それでは、報告を聞こうか」

「はっ」

主の言葉に中年の秘書官は、一歩前に踏み出すと、いつも通りの抑揚の無い声で話し始めた。

「イザベッラ王女の『顧客』が判明しました。コブラゴ王国の前王、ルイス2世です」

秘書官の言葉に、女王は得心がいかないといった表情で首を傾げる。

「コブラゴ国の前王がか？ 妙だな。現国王ならばともかく、前王のためにイザベッラ殿下を呼ぶほど、あの国に余裕があるとは思えぬのだが」

コブラゴ王国は、カープア王国と国境を接する隣国であるが、国土面積も総人口もカープア王国の5分の1程度しかない。当然、財力もそれに比した貧弱なモノだ。

たまたま、立地条件に恵まれたため、先の大戦を生き延びた国であり、そのような小国が、すでに玉座を退いた老人のためにイザベツラ王女を呼ぶというのは、少々腑に落ちない。

「コブラゴ王国の規模ならば、ロベルト王子かトマーゾ王子、せいぜい奮発してマッテオ法王弟が相場ではないか？」

そう言ってアウラは、ジルベール法王家の人名を挙げる。いずれも、イザベツラ王女と比べれば、治癒魔法の魔力は一段も二段も劣る王族だが、その分彼等ならば依頼料も安くすむ。

アウラのもっともな意見に、中年の秘書官はその鉄面皮をピクリとも動かさないまま、反論する。

「しかし、陛下が今名前を挙げられた方々は皆男性です。後宮には入ることが出来ません」

「なぜ後宮が関係する？ 患者はルイス前王なのだろう？」

首を傾げるアウラに、ファビオ秘書官は淡々とした口調のまま答える。

「はい。ですから、問題はコブラゴ王国の後宮ではありません。我がカープア王国の後宮です」

ファビオ秘書官の言葉に、意図するところを悟ったアウラは、椅

子の上でガタリと身を動かした。

「つまり、イザベツラ殿下の狙いは、最初からうちだったと言うのか？」

「はい。これはまだ調査中ですが、どうもコブラゴ王国はアウラ陛下が推測されたように、ロベルト王子の派遣を依頼したようです。そこに、双王国の側が「料金はそのままよいから、ロベルト王子ではなく、イザベツラ王女を」という話をねじ込んだ、というのが真相ではないかと」

「まさか、婿殿が『森の祝福』で寝込んでいることも、双王国は察知していたのか？」

アウラの言葉に、中年の秘書官は首を横に振る。

「いいえ、それはただの偶然でしょう。むしろ、ゼンジロウ様が病床に付いている事を知っていれば、あえてイザベツラ王女を派遣する必要はありません」

ジルベール法王家の『治癒術士』達は、医者以上に特別な存在だ。患者の診察という名目があれば、男女の垣根を越えて男でも後宮に足を踏み入れることが許される。

「なるほど、確かに。だが、そうすると双王国は、我が婿殿を目見るただけに、イザベツラ殿下を安値で派遣したということになるぞ？」

「大国カープア王国に突如として現れた、女王の伴侶。その人となりを知るためならば、さほど不自然な一手ではないのでは？」

「ふむ……」

アウラは椅子に座って足を組んだまま、顎に手をやり考えた。

確かに、ファビオ秘書官の言うことももつともだ。アウラの意図を全面的にくんでくれている善治郎は、ほとんど我意を表に出すことなく陰に回ってくれているが、そんな現状を知らない諸外国の人間には、カープア王国の舵に手を添える人間が一人増えたように映ることだろう。

女王の伴侶が並外れた野心家であれば、カープア王国は再び南大陸に戦乱の嵐を巻き起こす可能性もある。

そう考えれば、確かに『善治郎の人となりを知る』のは、イザベツラ王女クラスが動くに十分な重要性を持つかも知れない。

「国内の顔見せが終わったと思えば、今度は国外か」

「以前の立食会は、ボロが出ても傷が最小限に治まるよう、諸外国の方は閉め出した場でしたから、その辺りは仕方がありますまい」

暗い天井を仰ぎ見て、溜息をつくアウラに、ファビオ秘書官は冷静な口調でそう言った。

この数ヶ月で、善治郎の「国政に極力口を出さない」という意思は、ある程度認知されているが、それはあくまでカープア王国国内の話だ。諸外国の人間にまで、正しい認識が広まるのには、まだまだ時間も努力も必要だろう。

この手の情報というのは、距離と時間が離れば離れるほど歪み

やすいという特徴もあるので、完全に正しい認識が広まる可能性は、最初から諦めた方が良くのかも知れない。

アウラは、一、二度首を横に振ると、その話を打ち切った。

アウラは視線を左斜め前に立つファビオ秘書官から、右斜め前に立つ紫のローブを羽織った老人へと移す。

「分かった。双王国の出方については、今後も注意しておこう。次に爺、話は聞いているな？」

唐突に話に向けられた、紫のローブを羽織った老人――宮廷筆頭魔術師エスピリディオンは、のんびりとした口調で口を開く。

「ふむ、ゼンジロウ様の私物であるあの宝玉のことじゃな？ 確かに、あれ一粒に双王国金貨50枚は破格じゃのう」

話は、イザベッラ王女の動向から、イザベッラ王女が不可解な高値を付けた、ビー玉へと移行する。

ファビオ秘書官に続き、エスピリディオンからも同意を得たアウラは、まずは一つ満足そうに頷くと話の続きを促す。

「あのイザベッラ王女が意味もなく、あれほど奇異な値を付けるとは考えがたい。爺、なにか心当たりは無いか？」

女王の問いに、王国随一の魔術師は白い上げ髭をしごき、しばし沈黙を保った後、「これはかなり眉唾な話なのじゃが」と断った上で口を開いた。

「陛下は、グプタ王国の『雷壁の杖』については、どの程度の知識をお持ちかの？」

「『雷壁の杖』というのとあの、『バランゴ峠の奇跡』だろう？
1本の魔道具が、敵軍5万を半年間足止めたという」

「はい、左様です。グプタ王国と、クシャル王国・ワルタナ王国
連合軍の戦い。先の大戦初期の話ですじゃ」

簡単に説明すれば、グプタ王国という国が、隣国二国の同時侵攻
をくらい、滅亡の岐路に立たされたとき、一方の国境を『雷壁の杖』
と呼ばれる魔道具一つで護りきり、その隙にもう一カ国を自力で撃
退し、国を護りきったという逸話だ。

恐らく南大陸でもっとも有名な魔道具の一つであろう。『雷』は
グプタ王家の血統魔法である。

つまり、『雷壁の杖』は、『雷』を操るグプタ王家の人間と、『
付与魔法』の使い手であるシャロワ王家の人間が手を携えて作った
魔道具ということになる。

グプタ王国は、シャロワ・ジルベール双王国の属国に近い友好国
なので、両王家が力を合わせて一つの魔道具を造る事自体は、特別
不自然ではない。

しかし、エスピリディオンは言う。

「問題は、杖の作製に費やされた時間ですじゃ。細かな話は今は省
きますが、杖が作製された場所は、双王国の王都で間違いはありま
せぬ」

「まあ、それはそうだろうな。シャロワ王家の人間は、ジルベール法王家の人間と違い、よほどのことがない限り、王都から動かん」

軽く頷き、同意を示すアウラに、エスピリディオンは大げさに頷き返し、話を続ける。

「となると、グプタ王家の人間が双王国の王都におもむき、そこで長い時間を掛けて杖を作製し、その後の杖を持ってグプタ王国へと戻ってきたと言うことになります。しかし、そうになると、どうしても時間が足りませぬのじゃ」

エスピリディオンの話を聞いていた、横に立つファビオ秘書官も何かを思い出したように口を挟む。

「ああ、その話は私も聞いたことがあります。たしか、往復の道のりをもっとも足の速い走竜で計算しても、滞在時間は10日に満たない計算になるとか」

「正確には9日じゃな。それも、全ての道のりが順調にいったとしての理想値じゃぞい。現実的な試算では、グプタ王家の人間が双王国の王都に滞在した期間は、3日前後じゃと言われておる」

腹心二人の話を聞きながら、アウラは自分の記憶を掘り起こす。

大戦初期となると、アウラにとってはまだ生まれていない時代の話だ。記憶になくてもおかしくはない。

だが、その話のおかしな所は分かる。通常、シャロワ王家の作る『魔道具』というのは、使い捨ての簡素な代物でも作製に最低一ヶ月はかかると言われている。ましてや、『雷壁の杖』ほどの大魔道具となると、年単位の時間が掛かるのが常識だ。

現に、アウラが善治郎に貸し出した、あの『結界の絨毯』を作製したときは、カープア王家の人間が双王国の王都に二年近く滞在するはめになったという記録が残っている。

簡単なモノで一ヶ月。国宝クラスなら二年。それと比べれば、『雷壁の杖』の実質三日という数値はあきらかな異常である。

信頼する爺の言葉とはいえ、流石にアウラも鵜呑みには出来ず、懷疑の念の籠もった言葉を返す。

「それは、ただ単にもっと前から密かにグプタ王家の人間が、双王国の王都に入り、秘密裏に作製を始めていただけではないのか？」

自分の意見を否定する女王の言葉に、老魔術師は気を悪くするわけではなく、大きく頷くと答えた。

「はい。グプタ王家、シャロワ王家双方とも公式発表では、そのように申しております。世間でも、その説が一番有力なのは間違いない事実ですじゃ。しかし、そうではない説も未だ根強く残りますのじゃ。」

すなわち、シャロワ王家には、いざという時、魔道具作製に費やす時間を大幅に短縮する『裏技』がある、と」

「ふん、なるほど、な」

やっと本題に入ったと感じたアウラは、鼻をならすように小さく息を吐いた。

この手の『王家秘伝の裏技、隠し魔法』の噂というのは、何時の世にも絶えない。

いわく、ハルカネン王家の『探心魔法』には、人を永続的に傀儡とする術がある。いわく、南大陸北部の砂漠は、デルンブルク王家が『操緑魔法』を暴走させた結果だ。いわく、この大地はマカロフ王家の『創造魔法』によって作られた、等々。

実際、アウラの使うカープア王家の『時空魔法』にもその手の、「勘弁してくれ」と苦笑を漏らすしかない類の、噂はある。

『時空魔法』の最奥秘術には、時間逆行による『死者蘇生』が存在するという噂だ。

（そんな魔法が存在していれば、異世界で平和に暮らしている媚殿に迷惑を掛ける前に、兄上か弟達の誰かを生き返らせているわ）

馬鹿馬鹿しい話ではあるが、同時にアウラには、一概に笑い飛ばすわけには行かない事情もある。噂の中に一抹の事実が含まれているという事実を、アウラは知っているからだ。

（死者蘇生か。その『死者』というのが、虫や貝の類ならばやってやれなくはないぞ）

実際、『時空魔法』には、限定的な時間逆行の魔法が存在しているのは事実である。

もっとも、『魔力を持つ対象にはかけられない』、『戻したい時間軸で、術者がその物体を目で見て、手で触れている必要がある』などという、厳しい制限があるため、使い道はほとんどないのだが。

この世に生きる物は、虫や小魚のようなごく一部の下等生物を除

き、皆大なり小なり魔力を有している。そのため、『時空魔法』で『死者蘇生』は事実上不可能なのである。

とはいえ、「虫しか生き返らせられない」しょぼいものでも、『時空魔法』に死者蘇生が存在しているのは事実だ。

その事実を踏まえて考えれば、各国の王家の噂にも、何らかの形で真実が紛れ込んでいる可能性はある。

アウラは、ペロリと舌で上唇を濡らし、問いかける。

「で、爺の知っている『裏技』の噂いうのはどのような代物だ？」

「はい。一つは、シャロワ王家の人間が命を費やすことで、魔道具作製の時間を大幅に短縮出来るというものですじゃ。事実、『雷壁の杖』作製に前後して、シャロワ王家の王族が1人、病没しております」

エスピリディオンの最初の噂を、アウラは一刀の下で切り捨てる。

「ありえんな。確かに、グプタ王国は双王国にとっても大切な友好国で、重要な北の護りではあるが、そのために王族を一人死に追いやるなど、あの王家の気性からは考えられん」

「はい。僕もそう思いますじゃ。ですから、それはただの偶然じゃろうて。そこで、浮上するのがもう一つの噂ですじゃ」

『付与魔法』は、一定の条件を満たした物質を用いると、極端に時間と労力を短縮できる。という噂ですじゃ」

回り回って、やっと最初の問いの答えが聞こえた気がしたアウラは、しばし沈黙を保った後、ゆっくりと低い声で問いかける。

「……で、『雷壁の杖』はどのような形状をしているのだ？」

「はい。仮にも王家の最秘奥魔道具ですので、あくまで又聞きの際に過ぎませぬが、なんでも、真っ直ぐな木作りの杖の先端に、『大きな丸い透明の水晶球』が飾られていた、と聞き及んでおります」

老魔術師の答えは、アウラが想像したとおりのものであった。

「……………」

蝋燭の明かりに照らし出されるアウラの顔に、ニヤリと大きな笑みが浮かぶ。その笑い顔は、猫科の肉食獣が牙を剥く様に似ていた。

第六章 1 【希望は無謀】

「ううっ、くう！」

開けはなった窓から差し込む朝日の下、8日ぶりにパジャマを脱ぎ、Tシャツとズボンに着替えた善治郎は、全身の凝りをほぐすように思い切り伸びをした。

まだ少し赤みを帯びている朝日と、窓から吹き込む清涼な風が、善治郎の身体を心地よく撫でる。

「はあ、健康が最大の財産、って月並みな言葉だけど真実だなあ」

差し込む朝日の下、コキコキと首をならした善治郎は、万感の思いを込めてそう呟く。

『森の祝福』とやらを発病したこの7日間。医者から完治のお墨付きをもらったのは、昨日の事。診察を受けたのが遅かったこともあり、昨晩は7日ぶりに本格的な入浴を堪能しただけで、そのまま大事を取って就寝した。

そのため、善治郎の感覚としては、今日のこの時より復帰という感覚が強い。

「そういえば、今日の気温は……お、まだ25℃だ。かなり下がってきてるな。道理で涼しいわけだ」

壁に掛けてある温度計に目をやった善治郎は、赤い液の上がつている目盛りを読み、ちよっと驚いたような声を上げた。

明け方のまだ涼しい時間帯とはいえ、25℃とは、随分と過ごし

やすくなったものだ。

この分ならば、今日は氷や扇風機を使わずに、一日過ごしてみても良いかも知れない。

気温が体温を上回るような日は、流石に四の五の言っていられないが、最高気温が30℃の前半くらいで留まってくれるのなら、少しは我慢して身体をこの国の陽気にならすことも必要だ。

「扇風機や冷蔵庫だって、いつまで持つか分からないんだからな」

考えたくはないが、電化製品の寿命というのは人間の寿命よりも短い。スベアがない以上、将来的にはいずれ、電化製品を手放すときは来るはずだ。

それ以前に、例え電化製品がまだ動いていたとしても、先の立食会のように後宮から一步外に出れば、そこは灼熱のカープア王国だし、イザベツラ王女の見舞いの時のように部外者が来れば、家電製品を隠す必要にかられるケースも十分に考えられる。

余裕のあるうちに、この国の気候に身体を慣らしておくのは、将来的に決して無駄にはなるまい。

「あー、当たり前だけど一気に身体が衰えた感じだな。筋トレとりフティングでもやっておくか？」

確か、大学時代買ったサッカーボールと空気入れは持ってきたはずだけど」

善治郎は、Tシャツとズボンの上から自分の身体をペタペタとさわり、そう独り言を呟く。

7日も寝込めば、身体は鈍るのを通り越し、衰え始めていてもおかしくはない。

このまま、元の引き籠もり生活に戻れば、色々と危険だ。この若

さで、起きたり歩いたりするだけで息が切れるような身体にはなりたくない。善治郎は、自主トレーニングの必要性を感じた。

「発電機を設置した中庭くらいなら出ても大丈夫かな？ やっぱ、ある程度は身体を動かしておく必要があるよな」

善治郎は、部屋の隅から探し出した白と黒のサッカーボールを絨毯の上でバウンドさせ、その空気の入り具合を確認しながら、そう漏らす。

今までは、「身体が鈍るなあ」と思いつつも、つい引き籠もり生活を満喫してきた善治郎であったが、こうして一度病床に付けば、体力を維持しておく事の大事さは身に染みた。

「リフティングは、流石にここじゃちょっと危ないか」

数回、左足の甲でリフティングをした後、空中でボールを掴まえた善治郎は室内を見渡し、リフティングを中断する。

善治郎が茶の間として使用しているこの部屋は、日本の庶民の感覚から見れば「馬鹿げて広い」と言えるが、その広い室内には、中庭から引いた電源コードと、そこからタコ足状に引かれた各種電化製品のコードがあちこちに伸びている。

足を引っかけたりすることがないように出来るだけ端に寄せてはあるのだが、家電の配置位置と電源コードの長さの関係上、何力所かは部屋を横切るようにコードが伸びているところもある。

万が一にも、そのコードを足で引っかけたりしたら、目も当てられない。

「後でどっか空いてる部屋を用意してもらうのが一番かな。どうせ、部屋は余ってるだろうし」

善治郎がそう呟いたその時だった。

「失礼します、ゼンジロウ様。ご所望のモノをお持ちしました」

コンコンと、入り口のドアをノックする音に続き、聞こえてきたその言葉に、善治郎は即座に反応する。

「はい、今開ける」

そう答えた善治郎は、脇に抱えていたサッカーボールをソファアの上に置くと、ドアへと向かう。

ドアを開けるのは本来侍女達の役割なのだが、「ご所望のモノをお持ちした」という言葉から、恐らく侍女の手が塞がっているだろうと察した善治郎は、こちらからドアを開けてやる。

すると、善治郎の予想通り、カープア王国では珍しい金髪の若い侍女が、大きな木皿を両手で持ち、姿勢良く背筋を伸ばして立っていた。

「厨房の者に頼み、ご指示通りに作らせました」

そう言う侍女が持つ木皿に盛られているのは、薄くスライスして油で揚げたバナナだ。味付けは上から振りかけた粗塩のみ。

『バナナチップス』という菓子は、現代日本にも存在するが、これはむしろポテトチップスの代用品として作ってもらったモノである。病床に付いているとき食べさせてもらった、マッシュバナナのあんかけがジャガイモに近い味わいだったため、試しにその料理用バナナをポテトチップスもどきに調理してもらったのである。

「どれどれ、一つもらうよ」

そう言って善治郎は、侍女が差し出す皿の上からバナナチップスを一枚取り、口の中に放り込んだ。パリパリと音を立てて、また暖かいバナナチップスをかみ砕く。

「んー……」

善治郎の口の中に、塩と良質な油の素朴な味が広がる。土台となっている素材が若干異なるため、ポテトチップスそのものとは言えないが、代用品としては十分な味わいだ。

「いかがですか、ゼンジロウ様？」

「うん、美味しい。ただちょっと分厚いかな。次作るときはもうちょっと薄く切るように言っておいてもらえるかな？」

「畏まりました、そのように伝えておきます」

「うん、お願い」

ペコリと小さく頭を下げる侍女の手から木皿を受け取った善治郎は、そのまま部屋へと戻っていた。

善治郎は、木皿をソファの前に設置してある足の短いテーブルの上に置くと、ソファに腰を下ろす。

「んー、ちょっと固いけど、十分ポテチの代わりになるな、これは。デザートバナナみたいな甘みもないし」

その味わいは、美味しいというより懐かしい。

善治郎がこの世界に転移してきて数ヶ月。日本を懐かしがるにはまだ早いとは思うのだが、昨日までベッドの上で日本の食べ物を何度とも思い出したのは、紛れもない事実だ。

善治郎は自分を食にあまり拘りのない人間だと思っていたし、事実日頃はこの世界の食事に不満を感じたこともない。しかし、心身が弱ったときは全く話が違ふことを今回の一件で痛感した。

すぎた贅沢や我が儘を言うつもりはないが、後宮で自分や料理長にお願いすれば実行可能な範囲でならば、日本の料理をこちらで再現するのも悪くはない。

善治郎は社会人になってからは、スナック菓子の類はほとんど口にしなくなっていた筈なのに、今はこのポテトチップスもどきが「美味しい」と感じるのだから、味覚に基づく望郷の念というのは、無視しがたいものがある。

「幸い、この国は砂糖が普通に使われているみたいだし、お菓子関係から色々やってみるかな？ あ、でも、卵はともかく乳製品が凄く高いんだっけか。ミルクやバターを一切使わないお菓子となると……うーん。そんなレシピ、持ってきてたかな？」

熱帯雨林気候に近いカープア王国の家畜の8割は、『竜』——爬虫類である。当然ながら、爬虫類は乳を出さない。卵は産むには産むが、鳥類の卵とはかなり異なった代物である。

もっとも、地球ではアフリカ赤道付近の国やインドなど、カープア王国より暑い季節を有しているながら、牛や豚を普通に飼育している国がある事からも分かるとおり、ほ乳類の飼育が根本的に不可能

という訳ではない

南大陸で、ほ乳類の家畜が一般的ではないのは、気温の問題よりも大陸の生態系の問題なのだろう。

だが、現実として、カープア王国に牛や山羊は少なく、乳製品は貴重だ。特に、遠心分離器など存在しないのだから、バターや生クリームは超がつく高級品である。

「ましてや、ハンドミキサーも、電気式のオーブンレンジもないんだからな。自前で作れるモノなんて無いに等しいか」

一人暮らしの経験があるとはいっても、所詮は若い男の一人暮らしだ。料理など、「カレー」「シチュー」「ハヤシライス」、あとはチャーハンだの野菜炒めだの、善治郎のレパートリーなどその程度である。

「あとは、果物関係かな？ 林檎に近いモノがあったらアップルパイくらいは作れそうだけど。林檎はかなり北の果物だからなあ」

ソファアに座り、バナナチップスを摘む善治郎は、暇つぶしにテレビの電源を入れてDVD観賞を初めながら、そう呟くのだった。



その日の夜、夕食と入浴を済ませたアウラと善治郎は、7日ぶりに後宮の一室で夫婦水入らずの時間を過ごしていた。

「つまり、鈍らない程度に身体を動かしたい、ということか？」

「うん、簡単に言えばそんなところかな。どうだろ、中庭か後宮の一室を俺の運動部屋にしちゃってもいい？」

一つのソファアに仲良く隣り合って座るアウラと善治郎は、互いの肩を抱けそうな至近距離で言葉を交わす。

話の内容は、善治郎が朝から一人で考えていた『健康のための身体作り』に関してだ。

本来後宮の主は善治郎なのだから、適当な一室を片付けさせてリフティングをするのも、中庭でドリブルをするのも、誰の許可もないのだが、こうしていちいちアウラにお伺いを立てる辺り、『後宮の主』であるという自覚の無さが表れている。

「そのサッカーとやらがどのような運動なのかは分からぬが、身体が鈍らないようにしたいというのであれば、武術を嗜む気はないのか？ 『十術』は身につけておいて損はないぞ」

アウラは、そう言ってテーブルの上の木皿から、バナナチップスを一枚口の中に入れる。

「十術？」

「うむ。カープア王国で、武人がたしなみとして身につけておくべ

き武術十種のことだ。走術、槍術、弓術、騎竜術、木登術、水術、野営術、投石術、剣術、徒手武術の十種だな。

とは言っても、全てを納めている者は騎士でもごく僅かだ。必須なのが、走術、槍術、弓術の三つで、騎兵を目指すならば、それに加えて騎竜術、残りは特技として一つ二つ身につけておけばつぶしが利く、と言ったところだな」

「へえ……」

善治郎は感心したような声を上げる。昔の日本で言うところの『武芸十八般』のようなものだろうか？ 20歳もとうに過ぎた身で、今更まともに身につくとも思えないが、興味はある。しかし、善治郎は少し考えて問い返す。

「面白そうだけど、その場合その十術ってのは、誰に習うことになるのかな？」

「ん？ それは無論、王軍の中から指導に長けたモノを選抜することになると思うが？」

バナナチップスを摘みながら答えるアウラの返答に、善治郎は「ああ、やっぱり」といった表情できっぱりと首を横に振る。

「ああ、それなら駄目だわ。王軍ってことは、その人男でしょ？ てことは、教えてもらうために俺が後宮から出ることになるよね。そうなると多分、面倒ごとが頻発すると思う。それに、例え武術という限られた範囲でも『師弟』という関係を持つのは色々やばそう」

中学、高校とサッカー部だった善治郎は、部活の顧問の顔を思い出しながらそう答えた。

高々部活の顧問程度でも、街中でばったり顔を合わせれば、つい反射的に背筋が伸びるものだ。それが、生き死にを教える武術の師となれば、善治郎にもっと強い影響力を持つことだろう。

その『師弟』の関係を糸口として、善治郎に何らかのアプローチを掛けようとする人間はまず間違いないと現れる。

そんな面倒くさい人間は、魔術と教養の師である、オクタビア一人で十分だ。

善治郎の返答に、バナナチップスを呑みこんだアウラは苦笑を隠さず答える。

「ゼンジロウ、そこまでいちいち配慮してくれなくても良いのだぞ？　もう少し自由に振る舞ってくれても、私はそれを許容出来る程度の度量は持ち合わせている」

妻の返答に、善治郎はポリポリと顔を掻き、

「いや、もちろんアウラに迷惑を掛けたくないって思いもあるけど、これはどっちかというと俺の都合だよ。ようは武術には興味があるけど、それをやることで面倒を増やすくらいならやらなくてもいい、って程度の興味なんだ」

そう言葉を返した。

善治郎の返答に偽りが無いことを理解したのか、アウラは「分かった」と首を縦に振る。

「そういうことならば、無理強いはせぬ。ああ、そうだ。後宮から出ずに武術をやってみたいというのであれば、暇を見て私が相手を

してやっても良いぞ」

「アウラが？」

問い返す夫に、アウラはバナナチップスを数枚纏めて口に放り込み、咀嚼しながら頷いた。

「ああ。私が身につけてるのは、基本の3術と、後は騎竜術と剣術だけだな」

「へー、すごいな。それなら、暇があったら頼もうかな」

「うむ、任せろ」

善治郎の返答に、アウラは満足げに頷くと、木皿からバナナチップスを数枚纏めてすくい上げた。

「……………」

「……………」

しばしの間、パリパリとアウラがバナナチップスを食べる音だけが後宮の一室に響き続ける。

口の中のバナナチップスを呑みこんだアウラが、もう一度木皿に手を伸ばしたところで、流石に見咎めた善治郎が声を上げる。

「なー、嫁さん、嫁さん」

「ん？　なんだ、婿さん？」

右手でバナナチップスを掴んだ体勢で、首だけこちらに向ける妻に、善治郎は一瞬躊躇した後、振り切るようにして口を開く。

「俺の故郷の菓子を気に入ってくれたのは嬉しいけど、その辺にしておいた方がいいんじゃないか。俺、嫁さんの体型がちょっと心配」

大皿にいっぱいあったバナナチップスが、夜の短い時間ですっかりアウラに食べ尽くされている。

「む？ 言われてみれば、ちょっと食べ過ぎたか」

言われてやっとバナナチップスに手を伸ばすのを止めたアウラを見て、ソファアールから立ち上がった善治郎は、冷蔵庫から冷やした濡れタオルを取り出すと、アウラに差し出す。

「ほら、これで手の油を拭いて」

「おお、すまん」

「やっぱり、夕食を残したのがきいてるんじゃないの？ こんなジヤンクなモノでお腹を膨らませると良いことないよ」

非常に珍しい夫のお叱りに近い言葉に、ソファアールの上で手を拭いていたアウラは殊勝に首をすくめる。

「うむ、そう言われると返す言葉もないのだが、どうも今晚の魚料理は泥臭くてな」

大国であるカープア王国には、海岸線も存在するが、王宮のある

王都は完全な内陸の都市だ。そのため、宮殿料理として食卓に並ぶ魚は、ほぼ例外なく皆川魚である。

一般的に川魚は、海の魚に比べると泥臭いものが多い。

「ええ、そうか？ 特に今日の魚だけ、特別泥臭かったとは思わなかったけどな」

善治郎は、そう言って首を傾げる。日本では海の魚しか食べたことなかった善治郎は、少し川魚を苦手としている。川魚になれているアウラが気になるほど泥臭いようならば、自分が先に気づくのではないか？ そう考えた善治郎であるが、味覚や嗅覚というのは、体調次第で変化するモノだ。

病気がりのせいで、自分の嗅覚が鈍っていたのだろう。善治郎は勝手にそう結論づけて、それ以上追求することはなかった。

「そもそも、私は揚げ物のような油をふんだんに使った味の濃い料理はあまり好んでいなかったはずなのだがな。今日はなぜか、手が止まらなかった」

右手に付いていたバナナチップスの油を丹念に、タオルで拭き取ったアウラがそう言い訳をするが、当然ながら善治郎は取り合わない。

「いや、木皿いっぱいあったバナナチップスをそれだけ食べておいで、実はあまり好きではない、って言われても全く説得力が無いんだけど」

苦笑を浮かべ、隣に座る夫にアウラは不満げに口をとがらせ、なおも言い訳を重ねる。

「まあ、我ながら説得力が無いとは思うが、本当なのだ。私はどちらかと言うと、こういう味の濃い油っぽいものは好まぬ。嫌いなわけではないが、積極的に食べるものではない……はずなのだ」

「はいはい、分かったから。残りは明日にしようね」

ソファアーに戻った善治郎は、あしらうようにそう言ってバナナチップスの入っている木皿に蓋をした。

「むう……」

異論はあるのだが、現状の形勢不利を理解したアウラは、それ以上抗弁に固執せず、話題の転換を図る。

「ああ、そう言えば、私とそなたの『結婚指輪』を魔道具にしてもらうため、イザベツラ殿下にお渡ししたのだ。あと、あの『ビー玉』と『ビーズ』とやらも殿下に見定めてもらってな、礼として『ビー玉』を一つ殿下に進呈したのだ。すまぬな、病床のそなたの断りもなく」

アウラには珍しい、かなりあからさまな話題転換であったが、これ以上妻をからかう悪癖のない善治郎は、素直にその話に乗る。

「ああ、別にいいよ、それは。元々転送に失敗したときの保険ぐらいにしか思っていなかったものだし。その辺りの取り扱いに関しては、アウラに任せるって言ってたでしょ？」

「ああ、確かにな。ただ、ビー玉にはちょっと予想外の高値が付いてな。その辺りの事情も、持ち主であるそなたにはしておく必要が

あるだろう」

少し真剣な面持ちを取り戻したアウラは、ソファアーの上で座り直す、とうとうと語り始めたのだった。

「ふーん、ビー玉1個が金貨50枚か」

話を聞き終えた善治郎の態度は、今一要領を得ないものであった。

「たしか金貨1枚が、大体銀貨100枚なんだっけ？ でも、この世界の物価が分からないから、金貨50枚と言われても、ちよっとピンと来ないな」

なにぶん、善治郎は異世界人である。その上、この世界に来てからは後宮に籠もりっぱなしで、買い物も外食も経験がない。各領地の税収をパソコンの表計算ソフトに打ち込む作業を行ったので、基本的な通貨ぐらいいは把握しているが、正直なところ全く実感がわかない。

「金貨50枚あれば、下級貴族ならばギリギリ恥ずかしくなくらいの家が買えるな。宝玉1個の値段としては、これは破格だぞ」

「家1軒？ 流石にそれはすごいな」

具体例を挙げられれば、善治郎にもそのすごさが少しは伝わる。

（家1軒って、日本円に直したら1千万円近いってことか？ あ、でも、この世界では、家や土地の価値が、現代日本ほどない可能性もあるか）

とりあえずは、自分の予想を遙かに超えた値が付いた、とだけ理解しておけばよい。善治郎は、そう自分に言い聞かせ、細かな疑問は纏めてほうり投げる。

「世界が変われば、ものの価値が変わるってことはある程度予想していたけど、ちょっと凄いな」

「その言い方からすると、あのビー玉とやらは、そなたの世界ではさほど高価なモノではないのだな？」

興味津々なアウラに、善治郎は何でもないような口調で答える。

「うん、安物もいいところだよ。はっきり言えばあれは子供のおもちゃ。1つ10円から高くても30円程度かな。ちなみにこの世界とは物価が違うから単純比較は出来ないだろうけど、新築の家はどんなに安くても1千万円はすると思って欲しい」

善治郎の言葉にアウラは素早く頭の中で計算し、唸るような声を上げた。

「その価値で計算すれば、銅貨1枚でそのビー玉が2つ買えてしまう計算になるな」

実際には、労働者の労働単価で比較した場合、主食となる米や麦の価格で比較した場合、一般的な食堂の一食の金額で比較した場合など、それぞれ別な計算結果が出るため、銅貨1枚イコール20円

とは言い切れないのだが、大ざっぱな比較にはなる。

向こうでは一粒10円ちょっとのビー玉が、こちらでは金貨50枚。単純計算では、百万倍だ。

「うん、だから流石にちょっと驚いている。この世界でビー玉をしたま作ったら、アツという間に億万長者になれるんじゃないの？ いや、だめか。こういうのは希少価値が重要なんだもんな。大量生産なんかしたら、アツという間に値崩れを起こすか」

なおも善治郎は、あーでもないこーでもないと話し続けているが、途中からその言葉はアウラの耳に届いていなかった。

途中で聞こえてきた、あまりに衝撃的な言葉に、アウラは半ば思考が停止したまま、隣に座る夫の腕を掴む。

「アウラ？」

「……待て、そなた、今、何と言った？ その『ビー玉』を作る、と言ったのか？」

「あ、うん、言ったけど」

腕を掴み、爛々と光る目でこちらを見る妻の迫力に押された善治郎は、ソファアーの上で仰け反りながらそう答える。

「それは、鉱物ではないのか？ 水晶や瑪瑙のように自然にあるモノを削り出すような……」

「ち、違うよ、ビー玉はガラス。砂とか石灰とかを混ぜて、人工的に作るモノだよ」

「砂に石灰……そなたは、その作り方を知ってるのか？」

ここまで言われれば、アウラが何を期待しているのか、善治郎にも分かる。

善治郎は苦笑を漏らすと、首を横に振った。

「無理無理。ガラス製造は紀元前からある技術だから、この世界でも再現は不可能ではないだろうけど、かなり専門的な知識と技術が必要だからね。俺みたいな素人が見よう見まねで再現できるモノじゃないよ」

善治郎の返答に、アウラは途端に勢いを失う。

「……そうか。流石にそこまで都合の良い話はない、か」

善治郎の右腕を両手で掴んだまま、アウラはしょぼんとソファアーの上で項垂れた。

嫁の心底がっかりした様子に、いらぬ罪悪感を感じた善治郎は、つい反射的に慰めの言葉を口にする。

「あ、でも、確か俺が取り溜めたDVDの中で、ガラス作りに挑戦している回があったはずだよ。どうせそれを見ても、再現は出来ないだろうけど、見るだけ見てみる？」

その言葉に対する、アウラの反応はまた劇的だった。

「見る！」

「分かった、用意する」

善治郎は、強く握っている妻の手の中から右腕を抜き取ると、ソファの向かいに設置してあるテレビとDVDの電源を入れるするため、ソファから立ち上がった。



数分後、善治郎とアウラは、仲良くソファの上で肩を並べ、テレビの画面に向かっていた。

テレビに映っているのは、善治郎が取り溜めた日曜の夜にやっていたとあるテレビ番組だ。アイドルグループが、村を一から作り、農業やら物作りに挑戦するというその番組の中で、ガラス工芸に挑戦した回を選び出し、再生している。

真剣な面持ちで食い入るように画面を凝視しているアウラの隣で、善治郎はリモコンを操作し、何度も一時停止を繰り返しながら、番組のナレーターや登場人物の言葉を通訳、解説する。

なにせ、機械の言葉には『言霊』が働かない。善治郎が通訳をしてやらないと、アウラには画面の向こうから聞こえてくる説明は一切理解できない。

「ええと、ガラスをとかすするには、千三百度以上の温度が必要なんだ。だから、まずはその高温に耐えられる炉を作るために、『耐火煉瓦』を組んでガラス竈を作る」

「ほほう、なるほど。その『耐火煉瓦』とやらだけでも、十分に価値があるな。ところで、千三百度というのはどれくらいの熱なのだろうか？」

「確か、前の回で鉄を打ったとき、鑄鉄の融解温度が千二百度って言ってたから、混ざりモノが多い固い鉄が溶ける温度より、もう百度高い温度かな」

「なんと。鉄を溶かす温度以上か。鉄を液状化できる炉は、南大陸にはないぞ」

「ってことは、南大陸以外にはある？」

「うむ、製鉄に関しては北大陸が先進国だ。向こうには、鉄を溶かして鑄造する技術が存在していると聞く」

「へえ、この世界でも技術格差はあるんだな」

真剣な面持ちで画面に見入るアウラであったが、善治郎の説明を聞くにつれて、段々とその顔は険しくなっていく。

「さて、今何と言った？」

「だから、普通の粘土をこねただけじゃ『耐火煉瓦』にはならないから、割れた『耐火煉瓦』を粉に砕いたモノを混ぜて、『耐火煉瓦』を作ったんだって」

「……では、割れた『耐火煉瓦』が手に入らないときには、どうやって『耐火煉瓦』を作るのだ？」

「さあ？」

アウラの機嫌が少し悪くなったまま、DVDは先へと進む。

「さて、どういう事だ？」

「いや、だから『耐火煉瓦』を焼き上げるのにはかなりの高温が必要だから、『耐火煉瓦』を焼くための竈を特別に作ったんだって」

「その竈は、なにで、作ったのだ？」

「余所からもらってきた『耐火煉瓦』で」

「……では、『耐火煉瓦』をもらうあてがないときは、どこで耐火煉瓦を焼きあげればよいのだ？」

「さあ？」

さらに不機嫌に嫁の横で、善治郎はちよつとビクビクしながら説明を続ける。

実際、そうやって怒られても困るのだ。これはあくまでテレビの娯楽番組を録画したものに過ぎず、本格的なガラス工芸の製造マニュアルなどではない。この映像を見ただけで、再現できるほどガラス製造という技は容易くはない、と事前に言っておいたはずなのだが、アウラには今一届いていなかったようだ。

やはり、ガラスは製造可能な物体である、という期待感が大きすぎたのだろうか。

まあ、確かにアウラの言いたいことも分かる。

『耐火煉瓦』の作り方の説明で、粉に砕いた『耐火煉瓦』を混ぜた粘土を型に詰め、『耐火煉瓦』で作られてた竈でじっくり焼き上げる、などと言われれば、善治郎でもちよつと突っ込みを入れたくなる。

『耐火煉瓦』の作り方の、用意するモノの欄に『耐火煉瓦』と書かれているようなものだ。流石にこれは、ちよつと理不尽だろう。

「だから、最初に作られた『耐火煉瓦』は、『耐火煉瓦』を使わずに作られたのだろうか？ その作り方はやっていないか？」

「ない」

「ううう……」

珍しく不機嫌を全快にするアウラの背中を、善治郎はリモコンを持っていない方の手でポンポンと叩く。

「落ち着け、嫁さん」

「無理だ、婿さん」

「どうどう」

「ガウガウ」

いちいち善治郎の軽口に付き合ってくれる辺り、アウラも本当に真から不機嫌になっているわけではないのだろう。

「で、どうする？　どのみち役に立たないのなら、この辺りで中断しておくか？」

横目で時計を確認した善治郎がそう提案するが、アウラはちよつと考えた後首を横に振った。

「……いや、せっかくだから最後まで見よう。ひょっとすると、どこかに突破口があるかもしれん」

「無いと思うけどなあ」

善治郎の呟きは極小さな声だったので、隣に座るアウラの耳にも届かなかった。

時計が指し示す時刻は、普段であればもうとくに仲良く寝室に入っている時間帯だ。

病床についていた関係上、この7日間ずっと独り寝が続いていた善治郎としては、今夜という時間は随分と楽しみにしていたのだが、どうやらまだお楽しみタイムには間があるようだ。

「では、続けてくれ、婿さん」

「了解、嫁さん」

アウラに見えないように死角で苦笑を漏らした善治郎は、愛妻の

背中に回していた手を肩へと移動させると、グッと妻の身体を抱き寄せながら、番組の通訳と説明を続けるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3406u/>

理想のヒモ生活

2011年10月9日16時55分発行